

……目次……

想い出の中のトム公	山根三枝子：1
雲南のピエロ	大和禎人：16
短歌 秋の大和路遊行	増川遼三：20
連載	
○町○丁目○番地（一）	山口健二：21
ハイラル挽歌（八）	金子正義：29
表紙・カット	岸田幸雄



想い出の中のトム公

山根 三枝子

「それはそうとねえ、あなた猫好き？」
「え、まあ好きだわ、でも何故？」
「猫飼ってみない？ 秀夫のところね、とってもかわいらしい小猫がいてね。でもアパートでは猫を飼ってはいけないことになっているのよ」
「ふうん、で？」

「どこか猫を貰ってくれるところないかしらあ。洋子ね、生れたてのミーミー鳴いているのを拾って来て飼っちゃあいけないこと知ってるのに飼いはじめちゃったのよ。だんだん大きくなるし、かわいくなって捨てるにも捨てられず困ってるの」

「ふーん」と私は電話越しに云った。私は子供の頃に猫が好きで飼っていたことがあるのを思い出した。小学生の頃、猫が大好きで夜もだいて布団に入れて寝たりした。家庭医でもあった山崎医院の先生がそんなことしたら不潔だからと注意して下さったことも覚えているし、

附属小学校の紺サージの制服の胸のあたりは猫の爪あとでピョコピョコと糸の輪がとび出していて友達から「これどうしたの？」など尋ねられたりしたこともあった。猫に御飯をやるのをさぼって母から小うるさく注意されたこともあったし。飼ってみたい気持と世話が大変そうだという気持と半半だった。

「とってもかわいらしくお利ここの猫よ。今度市川さんと遊びに行くからその時持っていくわ」受話器の向こうではもう決めてしまっているようだ。「そうおどうしようかな。飼ってみようかなー」物事を何んでもテキパキと片付けていく才能の特に優れている藤沢夫人は、何んとなく間際になるまで決めかねる癖のある私にもう猫を押しつけることに決めてしまったらしい。そういえば彼女は学生時代には企画部の委員で遠足とか見学会とかの世話をよくして呉れたっけ。彼女を委員に選んだ同輩達はやはりよくみて選挙していたんだなあと今頃

になって思った。

夕方になって我が家のあるじである壮夫が帰って来た。夕食を食べながら「猫飼おうかしら、飼ってもいいでしょ」と云うと、彼は「とんでもない!」と気持ほどではない大声で一言のもとに反対した。「でも、もう貰うってことにしたんだし」と私は云ったが、二人とも飲んだり食べたりの方に気が向いていてその会話はそれっ切りで終った。

それから間もなくの或る日、藤沢夫人は市川夫人を誘いバスケットに小猫を入れて荻窪からはるばる相模原の我が家にやって来た。大きな立派なかつおぶしを一本つけて。我家に着くとすぐに、そおとバスケットを開けた。猫は興奮した状態で飛び出すかと思ったが至って呑気そうにのっそりと出て来て洋間の中をあちこち探検でもするように匂いをかぎながら歩き始めた。生れて以来物心ついてからは一度も怖ろしい目にあったり、いじめられたりしたことのない猫に違いのない私はその時思った。それだけければ小さなバスケットにつめられ一時間以上も揺られたり、電車や人込みの騒音を聞いたりした挙句なのだから何か身に起こる危険を感じてパッと跳び出て夢中で逃げ出すかしらだろうに。かわいがられてばかりいたので人間様をすっかり信用していて、それでこんなのにのんびりした顔付で悠悠と出て来たのであろう。あらためて猫をみてみると、もう胴体が長くなり始め

ていて、私が想像していた小さくてかわいらしい小猫と是一寸違っていた。頭の頂点と耳のあたりから背中を通して尻尾の方までは黒味がかった虎色の毛で、四つ足の内側には真白な毛が生えている。

藤沢夫人はこの猫を運ぶ日になって息子のアパートに行つて猫を見たところ意外に成長していて「とってもかわいらしいのよ」と云った自分の言葉が一寸違つてしまっていることに気がついたに違ひなかった。彼女は私の顔色を伺いながら一寸ばつが悪いような済まないような気持も交じった笑い方をして私を見ていた。

藤沢夫人は妊娠したばかりの嫁の洋子のところから猫を連れ出して相模原の山野家に運び込んだことで一安心した様子だった。三人で昼食をすませ色々なお喋り——それは三人の心を十分にリフレッシュするものであったが——に時間は過ぎた。猫もごちそうを食べてもともとから此の家の住人だったような顔付をしていた。「あれっ、もう何時かしら、五時からレッスンがあるから帰らなくちゃあ」と藤沢夫人。「あたしもよ」と市川夫人。

彼女達は Basic English Method の割に沢山の小中学生に英会話の訓練をしてやり、週回かの夕方の時間を使つて結構な収入を得、又何かしら生きがいのようなものも感じていた。

彼女達が帰っていったから夕食の仕度に取りかかっていた私ははうれん草を茹でてまな板の上で切っていた。

台所の出入口のたゞきの上においた砂箱をかき廻わしていた猫はすぐ大便をした。する時の恰好は小猫といえども何んともおぞましい。みると一〇〇グラム位の大便からホカホカと湯気が昇っているではないか。臭いもだ。「こりゃかなわん!!」という困惑の気持が人並以上に汚ながら屋の私をドカンと襲った。でも不思議と猫がにくらしいとも追い出してしまいたいとも思わなかった。早速砂箱の置場所を変えなくては。この猫と顔を合わせてからわずか数時間の間に生れた私の気持の中味を洗い出して見たいところだ。この小動物に対する義務感? 責任感? 愛情? 一体何なのだろう。何だか分からないのだが私と猫の間にはしっかりと結びつきが出来てしまっているのだ。

さて夕食の出来上った頃壮夫も次男の章夫も帰宅した。私は壮夫が何んて云うかと思つて一寸だけ気にして顔色を窺っていたところ、もともと口数の少ない彼は何んとも云わなかった。息子の方も大して賛成もしていなかったのに猫が家族の一員のように加わっているのを見て悪い気はしていない様子だった。そうだと玩具、しかも生きた玩具が降つて来たのだから、悪い筈はない。

さて夜になって台所の後片付けもすませて居間に入つた時、我が家の男共は新聞をひろげたまゝテレビを見ていた。私は猫が外に一寸出たいのではないかと思つてガラス戸を少し開けてやった。するとすぐに猫はトントン

トンと軽ろやかな歩調で外へ出て行つた。しかしものの二、三分もしないうちに、何かに驚いたか或いは大事件に出会わした様子で猛烈な勢いで家の中にとび込むべくガラス戸にドカンとぶつかつて来た。大慌てでガラス戸を開けてやると、どぶ水やらどぶ泥のようなものを体中に付けてとび込んで来た。吃驚して誰かに助けを頼む叫び声でも出したところ必死で猫をつかまえてお風呂場に行つた。男共は至つて平静にテレビや新聞に気をとられていて私の立場など一向に気さえない様子。私は無我夢中で片手で猫をおさえ片手にホースを持ちこの汚い泥を洗い落とさねばと悪戦苦闘。半分ばかり汚れがとれたかと思つた時猫が大きく身震いした。私は猫の毛からとび散る冷たくそして多分汚いであろう水を髪の毛から顔から服やら一面にひっかけられた。しかしこの時私は猫に対する責任感といったようなものが自分の中に出てくるのを感じた。猫に対する愛情といつてよいのかも知れない。要するに今晩からこの猫は我が家でねるのだからこの得体の知れぬ泥水のついたまゝでは絶対困る。何がなんでもきれいに拭いてやらねば。そしてその仕事をするのは飼うことにした私以外に誰もいないんだ。世間知らずのこの猫がドブねずみでも見付けて、持つて生れた本能と才能でねずみを追つて溝にでも突進したのであろう。その途端にぬれたので驚いて追うのを止めて家に逃げ帰つて来たのかも知れないし、或いは大ねずみに

負けそうになって逃げ帰ったのかも。それにしても未だ我家に来たばかりだったのに何らかの大事件に会って汚水まみれになり、その時に何んのためらいもなく、又自分の出たガラス戸を覚えていて逃げ込んで来た猫の気持や行動を察して面白いものだと思った。運ばれて来て一、二度御飯をたべただけで、もうすっかりこの家を頼みにしているのだ。この猫の第一日は私に大変な手間をかけて夜は更けていった。

さて名前がなくては不便。どんな名前にしようかということになり嫁に行った娘に話のついでに意見を求めた。電話を通して彼女がいうには「トムとジェリー」という漫画がテレビであったけどそのトムにしたなら：：」ということであった。私はいつか見たその漫画のトムの姿がすぐ頭に浮かびその簡単で呼びやすいトムというのに決めた。さて猫に向って「あんたはトムよ」なんて言ったって通じる筈はない。おいしい物を食べさせたり喉の下をなでるなど彼がいゝ気持で満足している時に「トムトム」と優しい声を聞かせる。するとすぐに覚えて何もしない時でも名前を呼ぶと「ニャオン」とあまったれた声で返事をするようになった。

次に問題なのは便所の件でこれは最後まで私達に面倒をかけた問題であり、凡そペットを飼う時には何かと骨を折らねばならぬことの一つだ。昼間は自由にさせておけばよいのだが戸締りをしてしまう夜間が問題だ。玄関

チヴアス・トムということになる。そのうち毛並は艶やかになるし体はしなやかな美しさを出して来た。雄猫にグレイスフルは一寸おかしいがグレイスフル・トムという名になった。この名前は更に成長してすぐ獐犢性を發揮するようになった時フーリアス・トムに変わった。

或時沼津からのお土産だといって鰯の干物を戴いた。頭やコマゴマした、みのとりにくい所は皆トムの食料になるのでトムはつい食べ過ぎてしまった。塩気もあることだしきつと喉でも乾いて何処かで水を沢山飲んだのかも知れない。トムはお腹をこわしてしまった。食欲もだんだん無くなり体から力が抜けてしまったようなトムをみて心配になり干物を食べさせすぎた自分の不注意が悔まれた。そしてどうにかして治してあげねばと思った。わが家には人間様用に「わかもと」が常備してあり軽い胃腸の障害はこれで何時も治っていた。そうだ。これでやってみよう。錠剤のわかもとを水で練りつぶした。人差しゆびにたっぷりつけ、トムのそばに坐ってチャンス waited。トムがあくびだか何んだかで大きな口を開けた途端エイッとはかり舌の奥の方に指をつっ込んでなすりつけた。トムは吃驚して飛び上って逃げた。猫は人間と違ってつばと一緒に不快物を吐き出すことを知らない。あくまでも呑み込むことに依って妙な味のする口中の不快さを取りのぞこうとする。おかげでわかもととはたっ

のコンクリートの上に砂箱をおいてやったらすぐに其所で用便することは覚えた。しかし体が大きくなるにつれ砂もすぐビショビショになるし、ボール箱も次から次にぬれて駄目になっていく。或日のこと娘達がやって来て

「気がつかない？ 臭いわよ」という。又砂も箱にも限りがある。兎に角夜間玄関に砂箱を置くことは中止した。だんだん寒さも遠のいて春めいて来た。大学助手になつたの章夫もトムとすっかり仲良しになった。夕方彼が帰宅して玄関のドアが開くとトムはどんな積りか知らないが何んとなくひょこひょここと玄関に出ていく。セーターとうち着のズボンに服を替えた章夫はひょいとトムの肩にのせ片手で落ちないように支えトムも又高い肩の上に乗っかって運ばれることを楽しんでる様子。そして居間に入ってドッカー椅子に腰を下ろしトムを膝に置く。章夫は近視で黒っぽい太いふちの眼鏡を掛けている。髪がモッサリ沢山生えていて帰宅したては疲れているのかニコリともせず私の顔みても知らん顔の怖い顔をしているが、トムを見た途端大きな口元からまっ白な歯列を見せ尻尻を下げニコリして「トムトム」と見かけによらず高くて明かるい声を出す。これで私は一寸救われたような気持になるのである。

更に暖かさが増して来てトムも成長して来た。はじめのうちは小さくてじゃれ廻るのでトムという名に更にミスチヴアスという語をつけた。フルネームで呼ぶとミス

りお腹の中に入っていた。これだけのことでお腹の具合は快方に向かい翌日は食欲も出て来て少しは元気になって来た。

丁度雨あがりの気分まで晴ればれするような朝だった。我が家の東側にある職業訓練所の広々とした空地には春先の草が大分生いしげり雑草のたぐいではあるが黄色や白い花も沢山咲きみだれている。地面は整地してないせいかかなりな起伏があり花の群生を美しく見せる効果があった。モン白蝶もここに翔びかっている。我が家の庭との境はネットフェンスなので空地の様子はよく見える。昨日まで元気のなかったトムなのに一服のわかもとで体力を回復したらしいトムは、花の上に翔び交う蝶をつかまえようとして、じゃれている。軽ろやかに走ったり、ねらったり、かまえたり、後ろの二本足で立って前の二本足で蝶を掴まえようとしたり実に楽しそうだ。しかし未だ何んとなく病みあがりのような様子もある。親も兄弟も友達も何んにもないトム。荻窪の溝端で拾われこの見知らぬ相模原に連れて来られ病気になるったりで未だしっかり治っていないトム。だがそんな不幸やあわれさはみじんも感じていない。ただ目先にチラつく蝶を追いかけて同じ軽ろやかさで跳んだりねたりしている。仔猫の域は脱しているが行動は仔猫と同じようだ。無邪気で楽しそうで美しい。春の野原をバックにして何か軽快な音楽でも聞こえて来るような感じがする。私はあわ

れみといとはしきの交った気持でトムのじゃれまわる姿を洗濯物を干す手を休めてしばらく眺めていた。

トムは猫には珍しくゆてたほうれん草を食べた。又はんべんは魚を使ってあるので食べそうなものだが臭いを嗅いだだけで顔をそらせて食べない。屹度防腐剤の硼酸の臭いをかき分けているのだろう。いつかボラの塩焼を料理して人間様より先にトムにやっとなところ食べない。おかしいなと思っていよいよ人間様が食事を始めたところ塩焼が何んだか石油臭い。壮夫のも章夫のも石油臭いという。それで魚屋に電話をかけてきたところ「海で油っ気を呑み込んでいたりすることがあって、それで石油臭いこともあります」ということであつた。これは今から十年近くも前のことで公害はひどくはなつていたが未だ世間の人達があまり騒がなかった頃のことだ。この小動物のトムは、はんべんの硼酸や汚い海水中の油等の食品への混入をちゃんと感知して自分のお腹には入れなかったわけだ。

その頃、長男は未だ独身でS電工の大町工場に転任して行つていた。そして休日には時折相模原の自宅に帰つて来た。門の前に車の止る音がする。その車の止る音は真実「ヤレヤレ」くたびれた。フッーッ」という息子の溜息のように聞える。五、六時間前後の運転の後に感じる疲労感を息子が吐き出す音としか思えない音を車が出すから不思議なものだ。そしてその音は、もう結婚してい

た。勿論楽しみなわけなのだがいろいろな不安もつきまとう。とりわけ五体満足な子供が出来ることを切に願うことからしてそれに対する不安が一番強いようだ。娘の持つている「妊娠と出産」などといった類の本をあれこれ読んでみると、どの本にも奇型児の原因の一つとしてトキソプラズマの感染ということが書かれている。そしてトキソプラズマの感染源はおおむね猫などのふんや生肉などにあるので妊娠初期には、そういったものにはあまり近づかない方がよいと書いてあるのを見て吃驚してしまった。美紀は我が家に一緒に住んでいるわけではないがちょくちょく出掛けて来る。こんな猫を飼ったばかりに娘がトキソプラズマに汚染されて不完全な子供が生れたら……と思うと急に心配になつて来た。この猫を運んで来たのは藤沢夫人なのだから早速彼女に電話を掛けて私の心配を話した。「そんなこと心配するに足りないことよ」と云ってくれば私の心配も少しは薄らいだであらうが「そうね、若し飼いたくなかつたら保健所に電話すると取りに来て呉れるわよ」というのが彼女の返事であつた。

私は考えた。この猫がいる為に美紀のところの赤ん坊に悪い影響があるということは必ず起こることだとは考えられない。心配はするが確率は低い。それなのにこの美しくてかわいらしい生物、人間でいえば青年期に入りかけたこの猫を保健所に引きわたして処分して貰うなん

てもいゝ年だのに未だお嫁さんのいない息子、それ故休みには運転にエネルギーを消耗させて遠くから自宅に帰って来る息子に対する母親の気が重くなるような溜息みたいでもあつた。勿論息子は御機嫌が悪い。次男が私に忠告する。「デブラさん（これは子供達が私につけているあだ名。デブとゴジラのラをとってデブラとなつてゐる）ちゃんと兄貴の御機嫌とらないからおこつてるんだよ。遠くから帰ってくるんだし色々大変なんだから」ずっと私は若い時分から亭主の御機嫌取りの工夫をするなんてことはしないで済んで来たし、凡そ人の御機嫌をとるなんてことは不得手、どうやって優しい言葉をかけたらよいのか分からず、たゞ心を痛めるだけだつた。

長男の康夫は次男と違い猫嫌いだ。自分が寮生活で不自由なこともあるのにこの猫のヤツがうちでかわいがられてゐると思うと癪にさわるのかも知れない。トムにハム等食べさせてゐると「こいつ、おれよりずっと高級なハム食べてやがる」なんていうので困つてしまつた。彼は自分が坐ろうと思つた所にトムがねそべつてゐると追払つた。トムは時折現われるこの男の気持を理解するのにそんなに手間どらなかつた。彼の心を察して即刻よそよそしい素振りで逃げだしていく。

我家の娘の美紀も丁度トムが藤沢夫人達に連れられて来た頃に妊娠した。私達夫婦にとつては初めての孫が出来るということだ。娘の妊娠は大きな大きな関心事であつ

てことはどうしたつて出来ない。しかし一方ではたかかこんな猫一匹のせいで万一赤ん坊に具合の悪いことが起つたらそれこそ大変だどころではない。壮夫に相談したところで、私と同じ考え方しか出来ないことは分つてゐるし、何かいゝ考えで私を安心させて呉れるようなことはないかと一人で何度も繰り返して思い悩んだ。

娘婿は弁護士だ。私が弁護士というものはこんな風な人間だと勝手に想像してゐた人間とは違つた人間だ。いくつか色々なことを皆で話してゐる時だつた。私が「神のおきてが最高のものよ。人間の作つた法律からはみ出たもっと高い所に神の法律がある」と云つたところ彼は

「いや違う。人間の作つた法律こそ最高なんだ」と頑張つた。彼の人生観と私達のは根本的に違つてゐるなと感じた。権利を主張することの得意な彼に、先にいつてから「こんな猫なんか飼つておくから……」なんて文句を云われたら困るので彼にも同じ心配を今して貰わねばと私は思つた。或日、食堂でお茶を飲んでゐる彼と二人になつた時、私は云つた。「美紀には心配するからこんなこと云えないけど、お産の本みてると、どの本にもトキソプラズマのことが書いてあつてあたし一寸心配なの。浩之さんどう思う？ 若しなんだつたらトムのこと保健所に電話して下さらない？」「……」彼は何んにも云わないでニタツと笑いそうに笑ひにまではならない一寸ばかりフテフテしい顔をしてゐるだけだ。彼もトキソプ

ラズマに関することは知っているようであつた。私と同じ心配も一寸ばかりしたのではないかと思われた。しかしそれだからと云つてトムを亡きものにして安心しようとは思っていないようだ。沈黙のうちにトムを生きながらえさせる方に賛成しているように私は理解した。

お休みの日の朝などおね坊の私はいつまでも布団に入つていて余熱の心地よさを楽しむ。丈夫は「いゝかげんで起きろ！」と布団をめぐりかける。私は絶対にめくられないぞという勢いで布団を手や足で握りしめる。トムももう起きていてその辺をノソリノソリと歩いている。

息子は未だねているから大丈夫なのだ。私は毛布のわきから指を一本出してチヨコチヨコと茶目つ氣たように動かす。トムは耳をたて猛烈な勢いで指をめぐけてとびついて来る。トタンに私は指を毛布にかくす。毛布の防壁であきらめたトムは離れていく。又指を出して虫か何かにように動かしたり静止させたりする。トムは眼をらんらんときらめき耳をそばだて尻尾を低くしておしりを振り飛びつくチャンスをおらう。私は印度か何処かのジャングルの中、大木や灌木のしげみの中で虎に襲われる自分を空想する。そしてその空想を更に展開してそのスリル感を楽しむ。トムは私におそいかかる。私はパッと布団をかぶつて防ぐ。丈夫は自分の布団をたたみながら、この不作女房にも、もうすっかり諦めがついているといった顔付をしてトムと私の遊びをみるともなく見ている。

と思われるベツトが出来たのに、どうしてもその中で眠ろうとはしないで襖の外でニャーニャー啼いて室の中に入りたがる。私は布団を汚されるのが嫌なので断固として襖を開けてやらなかった。ところが息子の章夫の室の襖は下の部分が古くなって一寸やぶれかかっていた。そこを手がかりにして穴を明けてしまい章夫の室に入ってしまった。朝起きてみるとトムはお情深い章夫の室で彼の掛ぶとんの上でいゝ氣持そうに眠っている。掛布団は私が心配したように少し汚されてしまっている。私は少しばかり頭に来たが、章夫は平気な顔して大して気にかけていないようだった。

或日我家を訪れた娘夫婦が「もう砂箱を夜、家の中におくのやめなさいよ。なんだか臭いわよ」と忠告してくれた。私達の鼻が麻痺していたんだと思つて今後夜間だけとはいへ砂箱を玄関に置くことは中止することにした。夜ねる前にお庭に連れ出し用足しを済ませたのを確かめてから家に連れこんで戸締りをした。そうすると早朝までしなかった。しかし四時半頃になるとガリガリと私達の寢室の窓をかじつて外に出たがる。大急ぎで窓を明けないと家の中にたられしてしまう。だんだん夏も近づき夜も短くなって、うっかりすると就寝するのが十一時を過ぎてしまう。そして朝はようやく白みかけた頃にはトムは私達をガリガリ音で起こすので睡眠不足になりそうに困つて来た。私はまあ家に居るのでいいが外で働く壮

そして「腹がへったぞ」ともう一度怒鳴る。

夏が来た。或る時トムが足を怪我してしまった。どうも近所の猫嫌いの人に石を投げつけられたらしいということだった。すぐ気が付かなかったで、というより毛が生えているので傷が目につかなくて、ばいきんが入ったとみえて可成り腫れあがつてしまった。薬をぬればなめてしまふし細帯を巻いてもなめたり引っこいたりしてはずしてしまふので困った。しかしトムは利こうだ。庭先の隣家との境目に少し大きめの日光ひばの木があり、その木の下は夏でも何んとなく冷んやりした感じで土もブカブカして柔らかい。その土を少しはねのけて傷の個所を埋めるようにして冷やしている。そして眠そうな目付でハッハッと口を空けて息をついている。生れて半年そこそこの、こんなに小さい動物なのに生物の智慧って大したものだ。冷やすことに依つて傷はだんだん治っていくようであつた。時々マキキョロをぬつてやった。傷からは血やうみが少しずつ出るようになり、細帯をしてやってもすぐ嫌がつてはずしてしまふので夜間ねる時は困ってしまった。いつもは誰かの掛布団の足もとの辺りでねるのだが布団の上にねられてはうみで汚されてしまふ。考えた挙句に中廊下と玄関だけで行動出来るようにして、あとは戸を締めて部屋に入れないようにした。廊下にダンボール箱を置き小座布団や古セーター等を入れて心地よくねられるようにした。しかし猫にとって最高

夫が睡眠不足では困る。トムにはホトホト困つて来た。

それでもやっぱりトムはかわいらしい。章夫もよくトムを膝の上にのせてかわいがっているし丈夫は夜きまつてぞうきんでザッとトムの体を拭いてくれる。食事の時私達がテーブルの上のきれいな皿から好きなものを食べている時にトムだけは床においた皿から食べるのだ。その皿はガステーブルの下のお湯気であつた。そしてトムが食べながら見えるものはあまり行儀のよくない私達の大きな足だけなのだ。好き嫌いも云えないし、人間様とは食べものの趣味も吃度異っているに違いないのだが人間様が勝手に呉れるものだけを食べて満足してなければならぬのだ。そしてたまに私が急に立ち上つて何かしようとしたはずみにトムをうっかり蹴とばしたり尻尾を踏みつけたたりしたこともあつたのだ。一寸想像力をたくましくしてみろ。私が小さい時から象の仲間に入れられて育っているとしよう。食べ物はいつも、いもやバナナや木の葉っぱを象が用意してくれるのだがそれ等は大体象の食べ残りのもの。象達の大きな足元で時時上を見上げて鼻や牙や赤い口の中を見たりしながら食べ物に注意していいと何時象が足ふみでもして、ふみつけられたり蹴とばされたりしないとも限らないのだ。象達は楽しそうに鳴声を交わしているがそれははるか頭上なの

で何んのことかさっぱり理解出来ず誰とも語り得ない淋しさといったらないのだ。でもいゝんだ、お腹が満たされて夜が来れば小象のおなかを枕にするか、大象のまたぐらで暖かにそして象の寝息を子守うたにし、息づかいと共にゆれる肌に快感を覚えて眠ることが出来るんだ。自分と全く違う動物に養われるのはこんな具合なのかも知れないなとトムの無邪気な目をじっと見つめて考えたりするのだ。

とにかくトムを飼うことで我が家の人間が苦勞しなければならぬことが多く、又藤沢夫人に電話をかける。「トムのことで困ってるのよ。朝は早く起こされるし、夜は毎晩十一時前に私がトムを連れてお庭に出ておしっこをするのを確かめてから家に入れて戸締りをするのよ」とか布団に血うみをつけられたり、襪に貫通する穴を作られたりしたことをこぼした。すると又「保健所に電話したら……私がしてあげてもいゝわ」と云う。いくら藤沢夫人が電話をかけるにしても電話すれば保健所に連れていかれて処分されてしまう。今や青年期に達した毛並の美しい何んの罪もないこの動物の命を断ち切ることはどうしても出来ない。

八月になった。久しぶりに藤沢夫人から電話があった。「あのね、三育学院の先生で牧師さんでもある人のお嬢さんがね、短大にこの四月入ったんだけどね、英語が一寸おくれていて困っているの、八月中に週に二、三回で

らないけどたとえ一万や二万貰ったって私を救って呉れるわけではない。今、して貰って一番嬉しいことはトムを貰ってくれて飼ってくれることだ。「一寸お願いがあるんだけど」と私は云った。「うちに猫がいてね、とてもかわいがっているんだけどね、色々と飼うのに都合悪いことがあってね——、若し貰って下さるのならお月謝はいりませんけど。御両親に相談してみても下らないか？」と頼んだ。次回彼女がやって来た。そして駄目なことが分かった。両親はやはり今住んでいる所では猫を飼えないというのが理由であった。私はガッカリした。

トムが泥足であがって汚すので板の間など一日に二度も拭いたりすることもあったし丈夫は相変らず朝の四時半にガリガリ音で起こされ窓を明けてトムを外に出すといった有様で私は丈夫が又それから一眠り出来るのだからうかということが気になった。トムのことで余分な忙しさにあわされながらも日はたつて九月も半ばを過ぎた頃に自宅の近くの産院で娘のお産も無事に済んだ。あの一時心配したトキソプラズマのことなど忘れてしまうようなクリクリした丈夫そうな男の子が生まれた。丁度婿が産院から帰って来てヤレヤレと食堂の椅子に坐った時、トムが無心にノッソリと現われた。彼は「お前、保健所にやられなくてよかったな」とトムを足でなでながら云った。私も又彼に同じようなことを云った。神様のおきてにみじんも思いを至さない彼に不安を感じていた私は彼

もみてやって力をつけてくれるよう頼まれたのよ。彼女の家が丁度中央林間とかいってあなたの家の方なの。あなためあげてくれない？」という。私は平常は中、高生の英語の勉強を手伝ってやっていたが八月は暑いのでいつも休みにしていた。暑い時だし短大といっても一応大学生だしどうしようかと迷ったが藤沢夫人は「大丈夫よ、高校のことがちゃんと出来ていないから高校生と同じことをやればいいのよ」ということでとうとうみてあげることにした。その短大生は結局文型とか文の構造がしっかり理解出来ていなかったの主に文法をかためることに重きを置いた。なるべく涼しい朝のうちに来て貰ったがそれでも暑い時期なので一寸大変だった。しかし彼女は思っていたよりずっと出来のよい生徒で教えることにそんなに骨折らずに済んだ。セブンス・デイ・アドヴェンティストというキリスト教の一派があり、その教派は病院も学校も経営し、三育フードといって自然食の食べ物まで販売する事業をやっている。その教派の牧師先生の娘である彼女はお行儀はいいし頭脳も素直だし性質もよさそうであった。集中的な勉強の結果、それでもともと理解出来なかったのではなく理解したことに慣れていただけだったので八月の終りにはすっかり自信がつく位になった。そして九月からは又三育学院の寮に戻るのでもう勉強は終りとなった。さてお月謝の段になった時、私はよいことを思いついた。いくらくれるのか知

の生物に対する気持は私達のと変らないことが分かった。

きびしい暑さもやわらぎ何んとなく体から重荷がとれるような爽やかさを感じる秋らしい日がポツカリ急に訪れるような時があるものだ。そんな日に急に訓練所の原っぱで猫の大騒動が始まった。雄猫や雌猫が三匹か四位集まって色々な調子の鳴き声を出して、にらみ合ったり、おっかけたり「フウッ」とおどしたり「ギャーッ」と悲鳴をあげてガサガサガサと逃げたり、「アーオン」とか「うーうー」とか低い声、高い声甘い声悩ましい声をだしてそれは大騒ぎ。その物音に興奮させられたトムは訳も分からず自らも飛び出して行ってその大騒ぎの真只中に加わるうとしている。

やっと大人猫になったかならぬかの姿態をしているトムだ。自分では何も分らないまゝそれでも身のうちに何か火でもつけられたような衝動に駆られてトムは飛び出していった。章夫が「トム出したら駄目だよ」という私は「どうして?」「きたないだろう。野良猫共と一緒にになったら」と彼は云う。その時私は思った。二年間フランス南部のトゥールーズにある大学にいた彼は、その間に人間の性の秘密をどの位知ったのかなーと、そして彼はそれ故にこの美しいペットのトムを、うすぎたない野良のばあさん猫なんぞに触れさせたくない気持があるのかな。彼の顔をチャリ、としかし鋭く見たがその点はあまり私には分からなかった。

秋もだんだん深くなっていった。どうしたことか物すごく仲の悪い黒猫が時時現われるようになった。先頃の混戦の猫のうちの一匹であろうか。その仲の悪さといったら凄いのものだ。トムは喧嘩で耳の先のうすい肉を爪で裂かれたりした。鈴つきの首輪は喧嘩の時、黒猫にとって都合のよいことが分かりはずした。何故ならその首輪をひっかかりにトムを捉えてもう一方の前足でトムをかけるようなので。「フウフー」とにくにくしく息を吐く音をたてギヤオギヤオとトムに襲いかかる。トムは悲鳴に似た声をたて逃げ腰で防いでいる。私はころげるようにしてガラス戸を開けに走っていき、トムをかばって黒猫にその辺りの何んでもあるものを投げつけた。それでもギャーッといいながらトムに襲いかかることを暫くは止めなかった。トムに加勢する為に私が出て来たことが一層黒猫の怒りをジェラシーで燃えあがせたらしい。

そのうちに又喧嘩の傷あとが化膿した。その傷が治るまでは物置小屋のダンボール箱に古セーター等入れて暖かなねぐらを作り、夜私達がねる時に煮干を持ってそこに導きねかせるようにした。しかしトムにとっては何故か気に入らぬ寝床であつたらしい。ある晩自分で戸をあけて外に出て章夫の室の雨戸をかじって章夫を起こし室に入れて貰つたりしたし、又ある時は外に出たばかりに黒猫と出合つても凄いの喧嘩をはじめたりした。

「おかしいねえ」と私は章夫の室をのぞきに行った。彼はモッコリ大きく盛り上った布団の中でぐうぐうねいてトムはいない。壮夫や章夫が出かけたあと近所を探がしてみたがトムはいない。一寸離れたところに住んでいる長田夫人が以前猫を飼っていたことを思い出し彼女に電話してみた。彼女は「大丈夫よ。うちの猫だって二日も三日も帰って来ないことあったから」ということであつた。それにしてもこの寒さにトムは一体何所でどうしているのだろうか。

午後になった。暮もおしつまり忙しい。色々買物もあるので外出した。帰途バスの中でつり皮につかまってゆられていた時だった。すぐ横の後ろにいた近所の三木夫人が声をかけてくれた。そしてすぐ「たしかお宅の猫だと思ふけど訓練所のわきのフェンスの所で死んでいたわよ」という。「ああ、やっぱり——」とうとう決定的な事実が判明したのだ。バスの窓から暮れていく街並を眺めていると涙がこぼれそうになった。いやいやたかが猫一匹のことで涙なんか出したらみっともない。どうしても涙はストップさせねば。二人一緒にバス停で降りて家とは反対の方向に歩いて行った。「こっちの方よ」と彼女。私はトムの遺体を探し求めて彼女と一緒にネットフェンスぞいの道を歩いて行った。「あら、おかしいわ。さっきあたしが出かける時たしかにこの辺りにあつたのに……」「だれか処分したのかしら」二人でおかしい

十二月の二十八日のことであつた。夕食の仕度をしているとトムがやってきて台所のドアのところから外に出たがっている。私はああおしっこだなと思つたのでドアを開けてやると軽ろやかな足どりですぐに出て行った。夕食も出来上がり皆で食事済ませた。しかしだんだん時が過ぎていってもトムは帰って来ない。でも又テレビ等見ていてトムのことを忘れていた。そしていよいよねる段になつても帰って来ない。お庭に出て「トム、トームトム」と大声で呼んでもどこからも姿を現わさない。夏の頃など夜に「トムチン小坊主トームチンターン」とふしをつけて呼ぶと必らず「チンチンチン」という鈴の音が遠くからだんだん近づいて来てトムが姿を現わしたものだ。それがその晩はいくら呼んでも姿を現わさなかつた。ねまきに替えながら「トムどうしたのかしら？」と云つても壮夫は大して関心もないみたいで「帰つて来るだろう」と云つただけ。夜中に私達が寝込んでしまつてこの厳しい寒さにトムが家に入れなくてもと心配して私は寢室の出窓の雨戸を十センチ位あけておき更にガラス戸も鍵をかけずにおいた。そのガラス戸は今まで何度のもトムが外からひとりであけたことがあつたので下の方の木の部分には爪あとが一ぱいついていた。帰つて来たら屹度自分であけて入つて来るであろう。

次の朝つまり二十九日の朝、起きると先ず私は「トムいる？」と壮夫にきいた。「いないみたいだよ」と壮夫。

なあと思つていても遺体がないんだからと自宅に帰つた。玄関をあけて荷物をよいしょと置くと章夫がすぐ出て来た。「庭の方に回つてごらん。トムがいるから」という。彼は私がトムについては何んにも知らないと思つて私をおどろかしてやろうと思つていたはずらばい笑いを浮かべてそう云つた。庭に回る。褐色に冬枯れた芝生の上に剝製の動物のようになつたトムが目もパッチリ開け耳もシャンとたて四本足も丁度歩く時の形のまゝで横たわっている。ポンと活を入れたら一瞬にして動き出さんばかりで。二十九日は御用納めで早目に帰つて来た壮夫が道端で発見して抱いて帰り庭においたのであつた。つまり三木夫人が出かけぎわに見たすぐ後のことだったのだ。

私は半分何か悪い結果を予想していたのであまり驚きは大きくはなかったが悲しい思いでまじまじとトムを見ていた。一体あんなに元気に健やかにしていた若者のトムがどうして死んでしまったのだろうか。生きてる時のまゝの姿で怪我一つなく死んでいる。暮もおしつまつた頃で日没は早い。夕やみがおきて来たので明日穴を掘つて埋めてやることにした。やがて日はとっぷり暮れたが同時に空には半月が雲一つない空で鋭い光を放ち始めていた。「トムちゃん死んちゃったのね」と私は心の中で何度も何度もつぶやいた。体は硬直していてかたく、あんなにかわいがつていたトムとはいえず手をふれるのは何んともなく恐ろしかった。しんしんと冷え込んで来る寒さ、

脱々と照る月、暗いブルーからどんどん黒さを増して来る空、そして外界を単に映しているだけの硝子玉のような猫の目。私は感無量でトムの横にしばらくの間しゃがんでいた。一たん家の中に入ったが又ガラス戸越しにトムを眺めているとトムの大敵であったあの黒猫が現われてトムを前足でついたりさわったりして「おかしいなあ」といった様子をしている。「黒猫のヤツが来たあゝ！」と私が大声を出した。黒猫はあきらめた様に又空しい勝利感を味ったようにノッシノッシとどこかに消えていった。私が出して来たシーツのぼろ布に章夫がトムをくるみ芝生の上からテラスの下に運びこんだ。露天の下ではいくらなんでもかわいそうだから。

翌朝になった。「章夫、掘ってね」章夫はモクレンとモクセイの間の少しばかりの空いた所に穴を掘り始めた。此所に越して来た時に椿、梅、どうだん、山茶花、貝づか、つげ、あじさい、もみじ等、貴い物が多いのだがやたらと苗木を植えたのが数年のうちに大きくなり根も張ってやっと見付けた猫の墓地も掘り始めてみると根が多くて掘りにくいようであった。穴を掘り終えた章夫はトムを穴の底にねかせた。土をかぶせる前に台所にいる私を呼んだ。「これでいいね？」猫といえどもいいよその死体に土をかぶせる段になると母親にも来て貰いたかったのだろう。「ああ煮干持って来るから」私は煮干を片手に一ぱい持って来てトムの口のまわりに置いてや

った。一所懸命トムのことを考えないようにしないと涙がこぼれそう。章夫は土をかぶせ始めた。二十七才の大学助手の息子はポロリと涙と鼻水を落した。壮夫は二階の窓ガラスを拭きながら見ないふりしてトムの葬式をみていた。猫の体は目測より大きく穴の掘り方が浅かったせいか土をかぶせると土饅頭のように盛り上っていた。ありあわせの木片を目じるしに建てた。

私はお正月が来ないうちに藤沢夫人に電話した。「お正月早々悪いお話もどうかと思うのでこの忙しい暮にお電話したんだけどね。トムが死んだの。どうも交通事故らしいの」「ああそお。よかったじゃあないの。保健所に連れていくの何んとかないやだものね」ということだった。事実私はトムがいなくなったことでホッとした。世話が大変だったし、大体昨今のような住宅では猫は飼いにくい。しかしトムが死んで一週間位は何度も悲しみにおそわれた。しかしその悲しみは決してビターなものではなかった。苦しきものともなう悲しさでもなかった。それは心地よささえともなうかと思われるあまりいささであった。何かと私や家族を困らせることの多かったトムだが、又面白くて楽しいトムでもあったので私達は心からトムをかわいがって共に暮らし、トムの為にみんながいくらかの苦勞もしたので何んの悔みの気持も無かったからではなからうか。

お正月が来た。そして三ケ日も過ぎてボツボツお使い

にも出かけるようになって近所の人達にも道端で会うようになった。「ああお宅の猫だったの。かわいい猫が死んでるのを見たけど」これは心の温くて優しいA夫人の言。かわいいに特に力がいっていた。彼女はたとえ他家の猫でも本当にかわいらしいと感じる心の美しさを見せてくれた。「ああ、お宅の猫だったの。『大きな猫が死んでたぞ』と息子が言ってたけど」大きなを特に大声で力をいれていたのはB夫人。その息子は動物好きで獣医を志している彼女もトムの死にあたたかな同情を示してくれた。「ああ、お宅の猫だったの。おつかいの帰りにね、あれもうこんなにくらうなあってしもてと思つてね、トットと歩いて来たのよ。そしたら足もとに猫が死んでいたのもうビックリしたんすよ」ビックリを特に大声で驚いた様子で云った人のよいO夫人。「お宅の猫が死んでるけど——私の家の前で。もう暮で保健所も仕事じまいだから始末に来ては呉れないけど。ちゃんと片付けてくれなければお正月も来ることだし困るわよ」とはっきり言葉に出しては言わなかったけれどもその通りのことを私に感じさせるに充分なもの云い方をしたD夫人。たかが猫一匹の死ではあったが各人の人がらに對して私が懐いていた感じにピッタリした会話を聞かせてくれた。

O夫人の証言によりトムの最後の時の時刻が大体分かった。トムが台所から出て行ったのは二十八日の夕方五

時半。それははっきり覚えていたのだ。お料理しながらドアを開けてやる時に時計を見たのだから。そしてO夫人がもう暗くなつてと急ぎ足に帰って来た時にはもうトムは死んで横たわっていたのだ。次の二十九日には午後未だ陽のあるうちに壮夫が死骸を持ち帰ったのだから。屹度トムは家を出てどこかで用たしを済ませ道路に出た途端に走って来た車のライトに眼が眩み逃げ損って頭の急所でもガツンとやられたのに違いない。フラフラと反射的に歩いてすぐパタンと倒れたまま動けなくなつて死んだに違いない。怪我をして家に帰ろうとしても歩けない。そのうちひどい寒さでガタガタしたりなどという苦しさは全然しなかったことが分かった。O夫人の証言はトムの死に關しての謎を大部分解いてくれ私を安心させてくれたのであった。あの時から何年も経った。お墓の印の木片も腐って無くなり両側のものくれんともくせいのも木もすっかり大きくなり時季時季に立派に花をつけてくれる。もう何処がトムのお墓だったのか分からないうちでも平気で踏んだり出来るようになった。パリィから久しぶりて帰った章夫は彼の娘に「マキ、ここだよ。ここに埋めてあるんだよ」と教えていた。ポロリと涙を落して墓穴を掘った若者はもう立派にパパになっている。彼は屹度猫のおとき話でもした時に相模原のおうちにも猫がいたんだよと話したのであらう。



雲南のピエロ

大和禎人

一九二三年の十一月、関東大震災から二ヶ月を経て、震災遭難死亡者慰霊の行事が雲南の地で営まれた。水陸大会と称える大法会である。その模様は糟谷廉二領事から時の外務大臣伊集院彦吉あてに詳しく報告されている……。

遠く中国のしかも僻地でのことだから、なんともふしぎに思われることであった。

「日本国震災遭難各国人士之霊」と記した位牌が祭壇の中央に安置され、背後には各国々旗がはためいて見えた。同月二日から八日までの一週間、雲南の古利円通寺が祭場にあてられた。法会には省内各派の僧侶百六十七名が連日読経したというから、一大盛典であることを失わない、恐らくは省城始っていろいろの行事であったろう。日雲関係としては一九一八年（大正七）九月この地に領事館を置かれていたから、いろいろ数えて五年目の冬を迎えようとする季節であった。これより先の大正十年末

の調査によれば在雲の邦人は四十三人、うち省城に三十六人、地方に七人という記録があり、官公吏雇、外人傭聘のほか理髪、雜貨商、商店員、旅館、齒科医入歯師等の職種が記されて残っている。

また、当時雲南の軍界、官界等に重要な地位を占めるものは流暢な日本語を話すものが多く、彼等の大方は日本の士官学校その他の学校出身者という事情を見ていた。祭典の主宰はもちろん唐繼堯であった。彼はこの年雲貴連合軍司令官兼雲南省長となり、得意の絶頂にあった。年令的にもいまは四十一歳、日本陸軍士官学校第六期砲兵科卒業という経歴をもつ彼は次第に軍閥の性格を強めて、「連省自治」を唱えさらに兩広への進出を窺っていた。辛亥革命の一九一二年（明四四）から十一年、彼のとき野望の許される混沌期は一つの頂点に達していたと言える。「連省自治」は連邦共和の思想に相違ないが彼の野望はひそかにそれを超えるはずであった。

参詣者は絶えなかった。雲南、貴州一円の彼の威望をこの時にこそ計り知る好機であった。

「まずは成功であろう」

「そうかな」

冷雨の日もあったが、晴天五日を数えた。

「これでしめくくりをうまくつければ上乘であろう、手筈は良いかな」

「軍隊をくり出す、弔砲は発引と南門を通過するときにのおの九発を放つ、謀者が魂けて走るであらうよ」

「悪い趣味よのう」

繼堯のほくそ笑みを軍事顧問の山県初男が冷やかした。スパイの潜入は十分予想されることであった。弔砲はそういう見えぬ敵への示威である。この山県は日本陸軍大佐であった。四十日にわたる蒙古縦断を大正三年に果した勇者である。繼堯の兩広進出への秘策は彼とともに練られていたのである。

繼堯の政府は法会の期間、一般に刑の執行と屠殺を禁止し、放生の行事をおこない、貧民を救済し、死刑囚以外の囚人の大赦を一方に発令して、刑一等を減ずる措置をしている。功德の無量を示すためであった。

かつて袁世凱が名は共和制でも専制王国と選ぶところない北京政府に君臨しながらあきたらず、帝王の宝冠を夢みたとき、共和擁護の烽火をいちはやくあげたものは実に彼であった。帝制中止要求の電報を北京に送り、雲

南独立を宣言し、檄文を各省へ飛ばしている。彼時に若冠三十三歳、一九一五年（大正四）の暮れのことであった。帝政反対者の呼応は多く、動乱は各地に蔓延して、反袁の勢は燎原の火の広がりを見ることになる。広東・浙江・陝西・四川・湖南の諸省が相次いで独立し、内蒙古・滿洲も動揺するに至った。帝政取消宣言も及ばず、袁はやがて窮して懊悩の極、病を発し翌年六月には憤悶の中に五十八歳で没する。いまを溯る八年前のこれが第三革命の終息である。

八日夜はいよいよ放銃口と呼ぶ最後の挙式があり、繼堯をはじめ要路の官憲、在留邦人がこぞって参拝焼香した。

翌九日は送神の式が営まれ、位牌を円通寺から市外の得勝橋まで約四キロの道を見送った。その行列は長さ一キロに及ぶ盛大をきわめた。

「やはり弔砲を放ちますかな」

「放つとも、放たずにおかれまいて」

繼堯は昂然と山県の顔を見返えして言い放った。彼はこの軍事顧問の鼻を明かすことも十分に計算に入れていた。

（この男、白を切るつもりか、走狗め、いまは礼をもつて厚遇しているが、明日のことはわからぬ）
そういう腹であった。

（ふむ、豎子はどこまで図に乗るつもりか、身のほど

知らずめ)

山県の方も腹はそう思っている。彼が動乱を潜って蒙古を縦断した過去はいずれ祖国のために役立てる布石であったはずだ。胸に志を秘めて、鬱勃たるものがある。

継堯は予定どおり示威を決行した。行列の円通寺発引にあたって九発、砲口を中空に向けた砲列から殷々と砲声が轟いた。砲兵科出身らしい好みの発想であった。

(先輩であろうとも、ここは私の持場だ、容喙を許さぬ)

軍事顧問の山県は陸士の先輩だが、傭聘者にすぎない。継堯は眉宇にこの際は一切の進言をも拒否する決意を漂わせていた。山県はどちらかと言えばこの行事そのものにはじめから日和見の態度を示してきた。継堯が雌伏して着実な力を貯える自重をむしろ促してきた成行きがあった。

だから、

(まずは成功であろう)

と言う山県の言葉が継堯にはぐっと癪の虫にさわったのだ。

騎虎の勢い、このまま突っ走ること男の度胸ではないか、叩かねば扉は開かれないうことを彼はいつか信念として固めていた。継堯のこれまでの歩みがそうであった。一時は雲南を追われたこともある彼がここまで地歩を築

いたのも、彼自らの不屈によるのであった。

軍楽隊を先頭に儀仗部隊が続き、彼等の日焦けた顔が精鋭を誇示するかに見え、

(唐將軍こそ、やがて中原に覇を唱えるであろう) という印象を与えるに十分であった。歓呼の声さえ群衆の中に起っていた。

儀仗部隊に続いて、政府の高官、属吏の列が続いた。唐継堯だけが一人馬上に悠然とゆられ、やや反り身の、しかし精悍そのものの偉容を示して通りすぎた。彼の自覚にはなかったが、その光景は明かに武官を首長とする雲南政権が側面にもつ危うさを象徴するかに見える部分があった。

南門を通れば城外である。さらに九発の弔砲が天空を裂いた。その砲煙の中に文官の列ではひととき蒼白に顔をひきつらせている者もいたことが印象に残った。

戸毎に五色の国旗を掲げさせることは追悼会の場合と同様であった。送神式ではさらに官庁を休みとしたから、軍、官ともどもこの行列に加わっていたものであった。フィナーレの演出に総力を傾けた継堯の意気込みがわかる。

継堯は南門に拝跪して行列を見送った。彼の示そうとする威武はここまででよい。彼の乗馬は南門脇の馬繫場に手綱をひかれた。この日のやや寒冷な空気の中に馬の吐く息が白く見えた。日本人教師その他外人の招聘は各

方面にわたって当時の雲南は軍界、官界に限らず異邦人が城内にひしめていた。意図したドラマのエピローグは南門でクライマックスに達した。市外得勝橋へ残るは一キロ、主役の彼が下手の袖幕にかくれるまでの演技は必要でない。必要なことは舞台の中央で大見得を切るこ

とだけであった。

(日本震災各国人士之霊とは考えたものだ、雲南の現状は中国の縮図だ)

山県初男は心に思った。

(それにしても、雲南銀の五千元は惜しい、法会そのものにその他を加える支出としてもこの額は大きすぎる)

という思いがある。彼の手引で日本軍部に働きかけ、極秘裏に進めている大量の武器購入計画はすでにある日本の会社との間に仮契約まで締結している。その方の支払いに見込まれている巨額の数字が彼の頭にあった。

送神式に採用した軍楽隊の行進演奏曲は傭聘外人楽長英国人マクシローの編曲であった。といっても、なんのことはない、日本海軍軍楽隊の鼻祖田中穂積作曲の「美しき天然」「勇敢なる水兵」「黄海海戦」のメドレーで、苦心があるとすれば転調を要する間奏の部分だけのものだ。選曲にはやはり継堯の意志が大いに働いたことは確かであろう。

山県さえ、

(そこまで日本に媚びる必要があらうか) と、むしろ苦々しいことに思った。

(山県さんは多分そう思うでしょうな、民族感情から言っても、「勇敢なる水兵」や、「黄海海戦」は屈辱のメロディーですよ、あえてこれを選んだ理由はわかりません)

継堯のうそぶき顔がそう言っていた。

(逆手ですよ、これは、それがあなたはわかりますか、私を蔑むならそれも結構ですよ、ご勝手ですよ)

冷静に、冷静に政治家としての判断をしているつもりなのだ。

(私は軍人である前に政治家ですよ)

これは彼の自負であった。

(軍人さんのあなたにはご理解のとどこかぬことも知れぬ)

そう思った。

「ご盛儀のまずは成功をお祝い申し上げる、日本国政府も評価するであります、早速本国に報告いたします。」

糟谷領事が歩みよって、そう言った。山高帽子を胸に支える白手袋、慰撫をきわめる彼の挙措に継堯は満足気な笑みを返した。

軍楽隊の演奏はかなり速ざかっている。糟谷は遠慮がちに継堯と肩を並べ、南門の石畳の上に立った。行列を

見送るらしく見える。
煙火が得勝橋の方角に上った。行列が到着して、送神
の儀礼を無事終了したことを告げる合図であった。

内争紛々、孫文の死があり、それに遅れること二年、
二七年（昭和二）五月唐繼堯もまた蔣介石の国民革命軍
北伐の戦果を聞きつつ病没した。四十五歳であった。

短歌

秋の大和路遊行

増 川 遼 三

秋篠のみち踏みゆけばおのづから沸きくる胸のときめきはあり（秋篠寺）

しじませる二天妹背と相観てはなほ去りがたし秋篠の里（同右）

わらわべが遊びのこせし砂の碑に野菊挿されぬ山辺しずゆく（長岳寺近く）

三輪山のやさしきなりに神を見しいにしへ人の心愛しも（大神神社）

鎧坂きだ踏むごとにみ仏の影あるごとくなきがごとくに（室生寺）

室生寺坂ながけれど足軽ろく心なごむも故知らずかも（同右）

甘櫨の丘に見定む飛鳥路時雨にけぶる杜と豊と（甘櫨の丘）

石舞台きづきし人の声聴かな室の隙間にさやぐ秋風（明日香石舞台）

泡立草野路にはびこりおちこちにビル建つらしな大和路をゆく（いかるがの里）

石塔をめぐるコスモスイたいゆく咲き残る見ゆ秋逝くらしな（奈良坂般若寺）

連載

町〇丁目〇番地（一）

山 口 健 二

「廉作はその夕方「配給だよ」とメガホンで怒鳴って来た町内の世話役風の五十男の掛け声で、救世軍本営と刻みこまれた文字がようやく読みとれる練瓦の建物の向い側に並んで、ブラック市場の前で大豆を小俵に入れてもらった。それを電気コンロに乗せた焼けたフライパンの中でころがし、十数粒を小皿に入れて枕許においた。「あの豆の配給のあった市場の向いの建物も今じゃイギリス駐留兵の本部か」かれは間を置いて豆を一つづつ口に入れゆっくり噛るのである。間を置いてするのは噛った香ばしい豆の匂いが口中一杯に広がるのを味わっているのだ。その間をおいたあいだは目をとじた。これがその夜の夕食がわりになる。明日は何か食物らしいものがありつかなければ、命は間もなく終るであろう。数日前に、廉作と同姓の裁判所判事が、配給以外の食物に頑く手に手を出さずに、栄養失調で死亡したと新聞、ラジオが巷の美談悲歌風に脚色の色合いをつけて報じて

いた。同姓であったので印象が強い。軍隊に入る前、七十キロ近くあった体重が四十キロを割ろうとしているのを廉作は風呂屋の計りで知った。昼間職を探しに出て、打ち破られたガラス窓や入口に板を張りつけて修理してある黒々とした省線電車に乗っている間に、立っている力がスッとなくなり、しゃがみこむことも何度かあった。これは戦争の最中に南の島で、野草や名もわからぬ貝、魚、さては土人も食わぬ湿地に自然する電気芋で腹をつくった頃の足腰よりさらにひどい。南のその島では、米軍が上陸してくれば、あるだけの弾をうちつくしてしまっても、まだ、そういうことが出来る機会——たとえば、米兵がうっかり近づいたりすれば、洞窟から飛び出して、少なくとも一名の首、出来れば二、三ツの首をかき切って、それを戦闘報告がわりに腰につけて、更に山の奥の洞窟にひそんでいる直属大隊本部までミヤゲにして、その上さらに逃げのびてやろうぐらいの捨てばちな気分が

かれにはあった。今日は、大豆の配給をもらってから町の風呂屋の暖簾をくぐって、力のぬけきった身体に、せめてあたたかさをあたえてみようとしたのである。そのまちの風呂屋で、かれのまわりの裸形の旦那衆は湯の気をはしく脂ぎった胸、背、腹をしていた。廉作は、日本降服後上陸して来た米軍の視察士官群の前に裸形で整列した日本兵の胸は、腹部の皮は腰や背の皮にはりつき、肋骨の間は深い谷になり、全身に疥癬の瘰がもはや掻くこともゆるさぬまでにはびこっているのを、その視察士官群の中の新聞写真班風の米人が何度もシャッターを切った時の屈辱感を思い出していた。ライフとかスターズ・アンド・ストライプスとか云う向うの雑誌・新聞に色もあざやかに掲るのである。風呂屋の洗い場は、隣りに坐った男の毛脛に、かれの幼児の頭蓋の様に小さく枯れた膝小僧がふれるこみ方である。

此処〇町の古本屋街とその周辺には、東京にいくつも残らない焼夷の災をまぬがれた一握りの巷が息づいていた。風呂屋は焼け残った一角にあった。たとえ自家に風呂場があっても、自家で風呂をわかす贅は考えられない。燃えきった東京の瓦礫の中に更に燃えるものを手に入れることは出来ない。脂ぎった裸形を廉作に示して、かれを持ってゆき場のない憎しみと怒りに目を閉じさせた旦那衆は、そうした本屋街商店の主人たちであるらしい。新刊本は未だ花仙紙の森正蔵の「旋風二十年」が売れた

「日本が戦争に負けるなんて……夫森之助がそのことを知らずに死んだのはせめてものことであったのう……もし生きていたら……」

「夫の生前、長男貞一は自分のしたいことをさせてもらえないと無法に森之助と争って、とうとう妻のしき子の実家へ出て行って、それから近寄ろうとしないが……因果なことだ……」

「長女ラクの嫁いだ信州の町へ、狂気になった末子の利秋をつれて、疎開したのだが、小学校の教員をやり、女ひとり給金をとっているその家の孫娘に、教員と云う体裁と嫁入り前ということできらわれて、焼けた東京へ戻って来たのだが……」

「その家の男の孫たちはみな戦地へ出て行って、医者であった夫の死後五年、家を守っている恰好の娘ラクにも自分たちを引き留める気持はなかった……これは薄情といって仕方なかる……戦争はあんな山の中の町にもアメリカの飛行機が来る始末だったんだから……」

「家財道具は夫森之助が死んだ時に、次男貞之助が管理してやると言って養子先の横浜へ運んだが、あれも焼けて跡片もないとあの子は云う、……ホントだろうか、あれは夫の生前から品物を養子先へ運ぶひとだった。それ貞一との争いのもとなつたんだろう……」

「残ったものは下衣、着がえの入った行李ひとつと、当座の鍋釜と、ブリキの米櫃だけ……そのお櫃にももう

以外四、五の復刊雑誌を店頭に見るぐらいで紙がないから本屋の店先に出ないが古本は売れる。

廉作が大豆の入った皿を枕許に置いて横になった頃、階下の六畳の部屋では、加寿刀自が、宵越しの油揚げを煮べめた色に焼けて、ところどころに雑草や小さな毒茸が芽をふいている畳の片隅に、古びた長火鉢を前にして、背を丸め、両足首をきちんと小さく重ねて、土偶の様に火の気のない五徳に顔がふれるまで俯いて居眠っていた。襖ひとつへだてた隣の三畳程の部屋には畳はなく、既なみにしきつめた藁の上に、刀自のせがれの狂気の四十男が音もなく丸くした身体を毛のすり切れた軍隊毛布にくるまって横になつている。加寿刀自の頭上に小さくつられた棚には、稲荷のやしろと鳥居と茶褐色に埃焼けした御幣の板切れが三四枚のせられてゐる。もはや加寿刀自がついてこの間まで心の手頼りとした名門、名家とか位階勲等とかいう呪文は全く通じない。古本屋街の主人たちも面と向えば「ゴインキヨ様」と呼ぶが、その顔には昔のおそれは露程も見られぬ。うとうとと居眠りながら、刀自の頭の隅は「男と云うものは……強く、立派で美しいと教えられもし、そう感じもして仕えた自分の夫山上森之助を含めて、どれ程つまらぬ虚名と慾と垢によごれた生き物でしかなかったか」ときれぎれの回想の中を漂っていた。その回想は二千年も時間がたった遺物の破片をつなぎ合わす風に明滅しつづけていた。

お米はない筈……

「そうよ……合切袋に皇居出入りの門鑑があったのう……あれだけはアタシだけが使えるもの……でも皇居に参じて昔のひとに会うには、着るものがないワイ……」

隣の三畳から「ウオーツ」と云う寝言ともつかぬ叫び声がかえ、加寿刀自はゴツンと額を五徳にあててきれぎれの回想から引き戻された。部屋の隅や二畳程の水屋から頻りに啼く虫の声に、刀自は「未だ生きていたんだ」という思いをよみがえらせて行った。七十九才であった。

この〇町裏小路の二軒つづきの二階建て長屋は、昭和二十年五月の東京空襲まで表で通りの本屋街商店の倉庫に使われていたのを、刀自が信州から東京に戻るというので貞之助が昔の店子の差配を通じてあけてもらったのである。更に古いことを言えば、表で通りの本屋の大部分と、この長屋をはさんで裏通りになる鈴掛け通りに面する東山房書店まで、加寿刀自の夫山上森之助の父山上織之進の屋敷であった。駿河台一帯にわたる千石取りの旗本とちがい、百石台のお徒士組の分隊長程度の武家の暮らしはまずしく、きびしく、娘たちは富有な商家の嫁に出されたり、口べらしのため養女に貰われて行った。その様な幕末から明治へかけての混乱と革命の世相の中で、伴を明治拾年に成立した官費で学ばせることの出来る東

京大学の前身に入門させた織之進には、矢張り一種の目先のきき方と伴にかけた祈りとがあったことになる。その頃から屋敷の地価は急騰して行った。今日の大誠堂書店の祖は織之進を伯父とする者で「お前にあそこの隅をやるよ」と気軽に貰って、それが今ではあたりに聳える本屋になった。でも、もう二代、三代たって、加寿刀自とは親類のつき合いはない。一方は士族という虚名にかかずらい、一方は明治五年の華士族卒の農工商営業許可の実を採ったのであった。

昭和二十一年二月、金融緊急措置令で旧円紙幣は新円に切りかえられ、預貯金は封鎖された。札を吸い上げた役所、郵便局、銀行に働く者たちにも給料の遅配は目立ち、かれ等も栄養を充分とれない青い顔の眉間に立て筋を立てて、巷に横行する銭の動きに指をくわえた。でもかれらには、戦争にやぶれたけれど、かって「大日本帝国」と名乗った国の政府と政治は、形だけは残っていた。昭和二十年八月、天皇は「終戦の大詔」というものを録音放送し、鈴木貫太郎内閣は総辞職したあとに東久邇内閣というものが出来ていた。この東久邇稔彦という人は、明治天皇に近い筋なのだが、若い頃フランス国に遊び、巷の女と出来て、大正天皇死去の際に帰国を拒んだとかフランスの巷の女は、相手が東洋の一国の王族であることを知っていてあっさり男を手離さないもので、当時としてはトテツもない額の手切れ金を出先機関がその女に

の中に帰ってきて、米軍を海ひとつへだてた目の前にしていた先き頃、それ程はつきり感じなかった命への執着をありありと感じるのであった。「クソ生きて見せるぞ」三十を過ぎたばかりの若者の身体ごとく執念のようであった。

だが、生きるためには食物を食わねばならない。それがない。ある所にはあるのであろう。脂切った裸をまちの風呂屋の湯舟につける旦那衆もいるのだから。廉作には、その食物がどこにあるのか、米がどこにあるのか、野菜がどこにあるのか、魚がどこにあるのか、肉が脂がどこにあるのか見当がつかない。四年間太平洋の真中の小島で原始に近い生き方をしていて、なかなか世間の人間に立ちまじってのやりとりや、物の在り場所など、炒豆を噓ってじっと眼をつぶっても浮んで来る筈はない。

戦争前・戦争中・裁判と云う仕組の中で、刑事の犯罪人を報復刑論という学説の説く通りに、峻烈に求刑をしたり、判決をあたえた検事、判事の中で、公職追放に会った者のうちには、そのむかし自分が極刑をあたえた犯罪人で娑婆に出ている者当てに、せつせと手紙を書いて何とかしてかれらと縁を結びたいとあせる者もあった。他人のものを平然と自分のものにするに心の慣れている者が、いきいきと水を得た魚になる時であった。廉作たちを乗せて南の島から運んだ米軍の輸送船LSTから縄梯子を使って迎えに来てくれた元海軍の大発ほどの小

払って、辛うじて表をつくらったという青史にはない巷の噂を廉作は覚えていて、炒豆を噛りながら、「こう言う人を内閣の首班に立てて乗り越えようとする国家の坂とは一体どういう坂なのだろう」と先き頃までいた戦地では味わったことのない「孤独」を感じていた。戦地では、かれは決して「悠久の大義に生きる」とか、「護国の鬼になる」などという日本製哲理に殉ずる志などなかったが、それでも一蓮托生を黒黒と感じ合っている兵士仲間、雁字がらめの軍律と、すぐ目の先には、こちらが相手を倒さねば、こちらの命をいやおうなしに奪う米軍が近々とせまっている。そのようなところでは、祖国母国と称される国に復員して、焼け残ったこの〇町〇丁目〇番地の裏小路の長屋の二階で、煎餅布団にくるまって炒豆をかじりながら、「孤独」など感じている心のゆとりさえなかったのであらうか。陸、海軍は解体され、天皇は「神格否定宣言」ということをやり、政治の実際はGHQマクアーサーの日本管理方針の中……いや実際に明治生命ビルに本拠をおく米国進駐軍の出先機関の米將兵という人間とのふれ合いの中で、全く頼り所をなくした「孤独」であった。ついこの間まで一蓮托生を感じ合っていた日本人は、そろって自分が何とかして一人ひとり生きのびる工夫をせねばならなく、他の者が目の前で倒れても抱きおこす心を失っていた。廉作も、八方そっぽをむいて生存に血走った眼を据えている日本人

舟にうつって浦賀の岸に近づいて、舟頭の親分風の年輩の男に「ごくろう様でした」と労われ、一寸気分がやわらいだところを、すかさず、「その肩章とった方がいいですよ」と言われてきょと見やった陸地の山ふところに「共産党萬才」と書かれた大看板が立っていた。米軍のLSTすら廉作たち將校と称される者の肩章を認めて、兵士たちを船底に畳鰯のようにつめこんだが、陸海軍の將校には船側の細長い船室をあたえ、廉作が聯隊長土田大佐の通弁役で艦長の米軍大尉の船室へ行って「海路を長いことありがとう、おかげで故国にたどりつけた」と日本風に挨拶に及んだ時、その大尉は、自室から甲板まで見送って来て「ヨールエルカム（どういたしまして）……廉作は浦賀の岸に近づいて、全く見知らぬ国に上陸する寒さを感じたことであった。昭和二十年十月政治犯と称される者三〇〇〇人はGHQ指令によって出獄し、つい先き頃まで廉作たちの命を奪う敵であった米軍を、「恩人」としたのである。

廉作は五年前、帝国大学と云うところを終えて半年たらずで兵隊にとられることになったので、世の中には暗い、その上生半可に下級將校になっていたことと、加寿刀自のような祖母を持った者の一種の上層意識めいた敵が心の中によどんでいて、一息に莫座を路傍に引いて物を売る才覚や、他人の者に手を出すことがやすやすと心

に浮ばない。その物の在り場所、動き方についてもトント分らない始末であった。

巷では新聞が飛ぶ勢いで売れていた。売子は「一番安いぞ！新聞だぞ！何でもわかるぞ！」と叫んでいた。又売り場によってはその様な生きのいい売り声も出せず、ソフト帽に深く顔をかくして俯いて坐っている中老の男のまわりを、子供が二人「オジイチャンのバカ、オジイチャンのバカ！」と囃し立てて踊りはねて遊んでいた。この中老の男などは、未だ復員して来ない倅のかわりに漸く思い切つて新聞の売り子になったのである。「オジイチャンのバカ」とは働きがなく、倅の嫁やつれ合いに毎日言われつけている言葉を、そのまゝ守りにつれて行けと言われて連れている孫が真似して叫び遊んでいるのである。新聞の広告欄には、未だ動き出せない企業・工場の求人少なく、「命売ります、拾万円」とか「〇〇神社からオレの家まで這つて来て、オレの糞便をなめる日本人に拾万円を提供する」などと言う広告がどぎつい。前者は原子爆弾で肉身に全く死なれた復員日本兵の捨て鉢な広告であろうか。後者は戦争前、戦争中にひどい目に合つた隣国人の成金の報復の広告であろう。隣国の人は、この国の「神」の思想に痛められ、この国の銀行、金融機関などには信用をおかず、いつでも身体ごと移動出来る様に、長い年月をかけて、くず屋、ヨナゲぬすみなどで手に入れた貴金属・宝石類などをトランク

につめて、バラック様の小屋をつらねて生活していたのが、日本国の敗戦から自国の独立、自然戦勝と言つた立場の中で俄かにその生活は花開いたようであった。その行動は当然報復的であつて、若者は、「日本の女を全部強姦したい」と公然と囁いた。

敗戦の瓦礫の東京の巷にも朝はやはり来た。廉作は階下に降りて水屋に入り、油の脂にまみれた瓦斯コンロに火をつけ湯をわかす。炊くものはないけれど、粉味噌と田舎を出る時持つて来た母ラクが干しだめた大根の葉や芋の蔓が少しあつた。それで味噌汁を作ろうというのである。隣室の加寿刀自は未だ床の中の様子。さらにその隣の狂気の男は、もう家を出ていた。かれは七十九才の刀自が作ってくれる食物をあてがわれるのであるが、一日の大部分は家の外にあつた。かれには熱意をそそぐ仕事があつたのだ。それは……街の塵芥箱の蓋をあけると、野菜の屑、果物の皮、腐臭を帯びためん類の残物があることがある。又九段の森が焼けて丸裸になつた靖国神社の大鳥居の近くや、駿河台の高台に残つた洋館風の建物には米国進駐軍の将兵がつめており、それらの建物の塵芥箱には思いもよらぬ馳走、飽食している進駐軍兵士が煙草だけをぬきとつて、チョコレート、サンドイッチ、肉など入つたままポイと捨てられた携帯食

会つた。

「オイ」廉作は言つた。

戦争前、この国の〇首相やM伯爵の屋敷と塀を境して、格式を張つた暮し方をしていた山上森之助、加寿刀自の寵愛の中で、「トシさん」「利秋ヤ」といたわれ、少しづつ怪しくなつて来た言葉づかいや眼つきを、世間にはさらさずに済んで来たこの叔父の、ここまでになつた変貌を正面に見て、廉作は昨夜まち風呂の洗い場で感じた憎しみに似たやり場のない怒りがこみ上げて来て「オイ」と呼びとめたのであつた。叔父に当る十才以上年齢にもひらきのある者を「オイ」と呼びかけることは、加寿刀自や矢張り叔父になる貞之助のいるところでは憚られることである。

立ちどまつて、空の一点に目をやったままのこの狂気の男に廉作はさらに言つた。

「オイ、この俺がこわくはないか」

「コワクナイ」

「俺が誰だかわかるか」

「ワカラナイ」

「この野郎、俺の言葉はわかるんだな、全くの狂気ではなくて、敗戦の荒廃の中で狂気を装つて生存をはかろうとしているか」廉作の憎しみは、いきなり相手の頬筋に平手打ちを食わせたい衝動にまで高まつた。異形の狂人風の浮浪男と、敗戦軍人風の廉作のこの立ち話姿は、

料Kラッシュンに出会うことがある。そのような米軍将兵の宿舎の塵芥箱には、肉片、パン、野菜の屑、雑話の残物があつた。狂気の男には恐れ憚るものはなかつた。野犬もかれをおそれ避けた。かれは残物をゆっくり口に運んで噛んだ。狂気の腹は強い。かれの腹にはいささかの腐臭など香料と同じであつた。だが腹が強くても、歩きまわる労働は、かれの肉体を極度に刮ぎ、足は細い鉄棒のようになり、頬は深く窪み、皮は頭蓋に張りつき、垢の黒い壁からのぞく両眼には焦点はなかつた。その眼には、塵芥箱以外にも街路に散っている新聞紙類、布切れ、木片、何でも貴重な物に見え、拾つて懐にねじこみ袂に入れた。布袋腹にふくらんだ懐の重味、両袂の重味は、かれにズッシリした快感と満足感をあたえるのであつた。その朝も、九時をまわる頃にはかれの懐はふくれ切つていた。かれは駿河台の坂をキシカクと左右別形の下駄を鳴らして、下りて来たのである。

「レンさんお出かけかね」

「ハイ、行つてまいります」

床の中から声をかけて来た祖母の加寿刀自に、水屋のやぶれくちた板の間に手をついてする昔風な挨拶の姿勢を捨て切れないのが、空腹の廉作には腹立たしい。そのような心の小波を残しながら、かれは血の跡が大きく黒いしみになっている軍服のズボンに、軍靴を引きづつて坂を登つてゆく。同じ歩道であるから二人は正面から出

足早やに目をいからせて職場へ、駅へと急ぐ通行人の注意をひくには、この敗戦のまちでは未だ平凡な風景でしかなかった。狂気の男のふくれ上った懷から、小形の古い、集金人などが使う革製の袋の掛紐の端がのぞいて見える。狂気の男の今朝の拾い物のひとつであるにちがいない。廉作は今にも頬にのびかかった手で、相手の肩をつかみ引き寄せた、よろりと前にのめって来たところを懷から袋を引いた。肩をつかんだ手で狂気の男の向きを坂の下に向けなおして云った。

「行け！」

狂気の男は空の一点に目をやったまま、何事もなかったという足つきでキシカクと下駄を鳴らして坂を下りて行った。

廉作はその革袋をぶらさげて駅の便所に入った。中味をあらためようと云うのである。便所には、糞便の山が床にくづれ何年も手入れせずにごした壁にも壺の仕切りにも排泄物の滓が厚く積っている。

「そうだ、元の兵隊で田舎に復員した者たちに声をかけて上京させ、東京に焼け残った駅やその他の公共物、それにアメリカ兵の宿舎や、売る物がなからベニヤ板で間仕切りして貸し事務所になっているデパートなどの便所の清掃をやったらどうか、当るぞ、でもやはり資金はある。」

生きるみちを考えながら廉作は先き程の革の袋をあけ

連載

ハイラル挽歌（八） 第一章 海拉爾の白旗

（十一）

ハイラル防衛の中心である第二地区陣地は、ハイラル市街北西部に接する海拔八百米の河南台を中心とした二軒四方の堅固な要塞であった。要塞の北方五軒の安堡山には第一地区要塞を構え、南に十軒を経た松山に第三地区要塞を構築して河南台要塞の両翼を固め、国境の三河方面及び満州里より進攻するソ連軍に備えていた。要塞西側に砲塔が集中し、東側はハイラル市街に面した搦手で、山麓の内懷はハイラル駅より兵器彈薬を運ぶ中継地として重要な兵担基地となっていた。河南台中央の地下要塞は、旅団司令部戦闘指揮所、兵舎、病院、食糧彈薬庫があり、地下通路で四方の要塞砲塔に通じていた。各砲塔前面はトーチカ陣地となっていて、連絡地下道が網の目のように張り廻らされ迷路のようであった。だが、肝腎の火砲は貧弱で、十五センチ加農砲三門、十センチ加農砲二門、旧式野砲三門、迫撃砲三門、曲射砲三門で、

た。ほとんど読みとれない程癖のひどい文字と数字のかきこまれた手製の帳面と新円証紙がはられた拾円札が八枚それに十数枚の銅貨がそこにあった。

〔未完〕



金子正義

旧式野砲一門は観測用眼鏡が無く双眼鏡で見定めて撃つ前時代的な代物であった。迫撃砲は戦車に効力が無いので野砲用の瞬発雷管を取りつけ、至近に引きつけて撃つしかなかった。砲数が少ないのに砲種が多く、砲弾がまちまちなので、装填や補充に手間どり戦闘に支障が多かった。兵力だけは砲兵大隊、歩兵大隊、輜重隊、通信隊、衛生隊等約三千二百を数えていたが、砲兵大隊は四百九十野砲の残留で、歩兵大隊は独立五百八十三部隊、六百六部隊と憲兵隊、警察隊、開領引揚の二百五十五連隊残留の混成部隊で装備は貧弱であった。中核の独立五百八十三部隊が、重機三、軽機五を備えていたが、其の他は小銃すら三八式、四四式騎銃、新三八式の有様であった。食糧は相当備蓄されていたが、数十日間の籠城戦を予想して、主食は中蓋一杯と制限されていた。

八月十日河北山陣地を抜いたソ連軍は安堡山を攻撃す

る一方、一気にハイラル河を渡り、鉄道線路を突破して伊敏川を越えハイラル市に潜入し、駅を通り越して市街の北側に達した。別動隊は旧三河街道を南下して下ハイラル橋を抑え、第一地区と第二地区との間を切断し、地に入った機甲隊と合流して東台地分遣陣地を急襲し、地下兵担部の食糧弾薬を奪い、要塞搬入予定の旧式野砲を破壊した。東台を占拠したソ連軍は直ぐ砲兵陣地を構築し始めた。日本軍はソ連進攻が三河地区、満州里、ノモンハン方面と予想して、主力を要塞西北側に展開し砲塔を西北に向けていた。ソ連軍はまんまと其の裏手をかき第一地区と第二地区の間隙を抜けて侵入し砲兵陣を敷設したので、河南台要塞は最も弱い背面から攻撃される始末となった。

八月十一日朝、いつ迄も濃く漂っていた霧が晴れ間を見せた。原中佐が観測塔から東台付近の敵状を見ると、陣地の東端より精々千五百米程度の地点に、ソ連軍は何の防禦もせず盛んに砲兵陣地を構築していた。時がたつにつれて砲門は次第に増え、十センチ、十五センチ、二十センチの加農砲、榴弾砲、重砲等十三、四門が日本軍の方向を睨み始めた。要塞の東側には迫撃砲と旧式野砲が一門きりなので撃っても無駄であった。

原中佐は、此の方面を強化しようと兵器廠から東台迄運んで置いた野砲二門がソ連軍に奪われたのが惜しまれ

「余り無理して兵を損耗するな、一門や二門奪取しても大勢に変化が有るまい」と言ったが、岡田少佐は、

「然し参謀殿、手を拱いて奴等の勝手気構な行動を見ているのは我慢がなりません。具体的な作戦を東端第一線のは松少尉とたてて見ます」とトーチカの観測塔から降りて地下連絡路を廻って第一線の六百六大隊のは松少尉の処へ行った。

東側要塞前の草原に現地召集兵、憲兵隊で編成した六百六部隊が、肉迫攻撃の為に蝟壺に潜んでいた。岡田少佐は是松少尉を連れて要塞司令部へやって来て、野砲奪取計画を説明した。

「まず、東端第一線の前面に配置してある蝟壺の歩兵を匍匐前進により草原に潜入させ、昼寝中の敵砲兵陣地に接近し、合図と共に一斉に手榴弾攻撃をかける。その機を逸さず要塞入口の鉄扉を一気に開け、輜重隊トラック四台を全速力で砲兵陣地へ突入させる。混乱に乗じて敵野砲を奪取し、歩兵を收容して一気に帰って来る」と自信に満ちた態度で説明した。

原中佐は、

「どうも話が旨すぎるな、いくら敵さん昼寝中でも近づく前に発見されるぞ、草原はいくら下り斜面でも凹凸が激しくトラックで千五百米を一分以内で殺倒するのは無理だな。引揚げは積み込み作業を入れて十分以内で出来る

でならなかった。東砲塔の神田中尉が悔しがって、「参謀殿、撃たせて下さい、奴らの人を喰った態度に我慢がなりません」と部下に砲弾を充填させ砲撃を命じようとしたので、

「待て！無駄なことをするな」

と叱りつけたが無念なことは同じであった。

午後四時、悠々と布陣整備を終えたソ連軍は、一斉に十六門の火蓋を切った。何んとソ連軍は河南台東側を無視して要塞中央を越して西側を猛烈に叩き始めた。日本軍の砲塔が西側に集中していることを知って集中砲火を反対側に浴びせ壊滅する作戦である。砲弾は要塞中央の指揮塔の上を裂帛音をたてて飛越しては西側に炸裂した。猛烈な砲撃は夕刻迄執拗に繰返されたが、夜は静まり返って何の動きも無かった。

八月十二日、ソ連軍砲兵陣地は日曜日の朝寝なのか一弾も撃たず、将兵の姿も見えなかった。昼を過ぎると姿を現わした兵士達が、日本軍は撃って来ないと安心しきって、草原に上衣を脱いで寝転んだり砲身に馬乗りになって巫山戯っていた。中には午睡している者もいる。

原中佐と並んで双眼鏡で見ていた輜重隊の岡田中佐が憤然として、

「奴つら、驕り昂ぶって油断している様子です、腹に据えかねます、一つあの野砲を奪い取って見ましょう」と言った。原中佐は憤激している岡田少佐を抑えて、

かな、不可能じゃないか」

と危険が多いので許さなかった。岡田少佐は尚も、

「やれます。敵さんはアメさんと違って夜間でも攻めて来ますが、よく午睡します。奴ら鈍重ですから寝惚け眼でうろろしている内に奪って来ます」

原中佐は大砲は咽喉から手が出る程欲しいが、犠牲ばかり出て成功の薄い出撃は許し難いので旅団長に不可の決断を求めようと、黙念と座っている野村少将に、

「閣下、如何がでしょうか」

と訊くと、

「面白がるう、士気の昂揚になるう」

と平然としているので己むを得ず、

「では、此の出撃は岡田少佐に任す、第一線部隊の判断として戦機をよく見てやれ」

と成功性の希薄な出撃作戦を慎重に認めた。

屋過ぎ、岡田少佐が司令部にやって来て、

「只今からやります。見て居て下さい、手榴弾攻撃隊の指揮は是松少尉が執り既に地下壕を辿って第一線に入っています。自分はトラック隊に乗って全体指揮を執ります」

と童顔を綻ばせて悪戯っぽく笑った。

原中佐は岡田少佐を送り乍ら最前線に近い要塞塔に入って、銃眼から草原を見下して攻撃の始まるのを待った。此の方面も毎日頭越しに敵砲弾が要塞西側に落ちていて

が、陣地には毀損も無く直ぐ前方に見えるソ連軍砲兵陣地迄一望の草原であった。ソ連軍陣地は昨日より砲兵陣地が厚くなり、日頃鈍重に見えるソ連兵の動きが活発で、日本兵以上に機敏に動き廻っている。八月十日河北山陣地攻撃に始まったソ連軍の戦闘振りは、圧倒的な火砲や機動力ばかりでなく、夜間の大移動や払脱攻撃、夕刻より砲撃と共に夜間攻撃をかけて来る等、その勇敢さは日本軍のお株を奪った感があった。その上、午後二時頃には草原に暢気に昼寝する露人特有の大胆さであった。原中佐は露人を見直す思いで双眼鏡で見ていたが、どうも今日は昼寝をするように思えない、何にか右往左往と動き廻って異様に見えた。十一日夕刻、第三地区よりアムクロ警察隊が引揚げて来たと報告があった。追尾のソ連軍は第三地区陣地の包囲攻撃に加わったものと推測したが、此の方面の攻撃に廻ったので戦闘序列を変えているのかも知れないと思っていると、

「参謀中佐殿、そろそろ匍匐攻撃の歩兵隊が突込む頃であります」

と要塞塔守備の高瀬軍曹が、双眼鏡を見乍ら草原の彼方此方を指した。原中佐が双眼鏡を合わせると、鉄帽を抬げ敵陣に向って夏草の中を潜って行く日本兵が見える。原中佐の胸に熱い血が滾って来た、いつ閃光が走り爆発音が響くかと固唾を嚥んで見守った。

「やった！」

決行したいと思います。お許し下さい」

と告げると野村少将の答を待たずに司令部を飛び出し、生き残った憲兵隊を率いて後退する戦車の後を追って敵陣に突撃をかけ全員玉砕して果てた。

十三日朝、原中佐は、満州里方面よりそろそろソ連軍が進攻する頃と、要塞南側の砲塔に行つて前面の状況を展望していた。

満州里方面より伸びて来た満鉄浜洲線は、河南台地と南十軒の松山丘陵の中間を抜けてハイラルに入っていた。鉄道沿線に小丘陵が起伏して、草山や珍しく松林となっていた。嘗ては蒙古人の放牧の地であったが、第二地区、第三地区陣地の中間の要地なので北松山前衛陣地が構築され、国生大尉指揮の肉迫攻撃隊が守備していた。

予想の通り午前八時ソ連軍大部隊が戦車を先頭に出現し、北松山前衛陣地を無視して日本軍主力の河南台南側に進攻して来た。十一日米の猛砲撃で要塞砲は破壊し尽したと判断して、ハイラル守備要塞の最強方面に堂々と挑んで来たのだ。北松山前衛陣地の肉迫攻撃隊は松林に身を隠して巧妙な爆雷攻撃を反覆した。油断していたソ連軍は戦車十数台を擱坐され、慌てて松林を反撃したが、樹木に隠蔽された肉迫攻撃隊を危険と見て、一旦後退すると反転して第三地区陣地に向った。方面転換しているソ連軍に河南台要塞が一斉に火蓋を切った。距離

と見守る将兵が叫んだ。だが様子が変だ。閃光は手榴弾にしては強烈で幅広く砲兵陣地一帯にあがった。一寸と怪しいと、原中佐が双眼鏡を向け直すと同時に叩きつけるように要塞塔の至近に砲弾が撃ち込まれた。閃光は日本兵の手榴弾でなく、敵砲撃の閃光であった。苦しい匍匐前進で敵陣寸前に迫った攻撃隊は、砲門の奪取どころではなかった。砲弾の下を潜って駆け戻り蛸壺壕に転げ込むのが精一杯であった。トラック隊は全速力で要塞に走り込んで鉄扉を下すと同時に砲弾が入口に集中炸裂した。

ソ連兵の砲撃はその日初めて東側要塞に集中し、砲塔周辺に十字砲火を浴びせ、鉄条網、戦車壕を散々に叩いてから戦車を横隊に組んで艦隊のように迫って来た。壕に潜んで待ち構えていた六百六部隊の将兵が次々と爆雷を抱えて肉迫攻撃をかけた。壮烈に戦車に体当たりして、自からの生命を爆雷と共に散華させ、戦車を擱坐する痛ましい光景が硝烟の中あったが、多くは戦車砲に撃ち捲られ砲弾の炸裂の中に消えた。

日没と共に激しい砲撃は休み、戦車隊も黒煙をあげて足掻いている数台を残したまま引揚げていった。

安藤憲兵隊長が悲壮な顔をして司令部にやって来て、「旅団長閣下、安藤大尉以下の憲兵隊は本作戦に重要な東台陣地を敵に奪われ申訳無く居ります。その責任を果す為に敵戦車の後退に追尾して敵陣に斬り込みを

測定も砲撃訓練も繰返し猛訓練している方向なので、要塞砲はソ連軍戦車をよく捉えて数十台を破壊した。

観測塔から展望していた原中佐の眼鏡に此の戦果がよく見える。ソ連軍は退却して更に大きく迂回し三地区陣地の西山麓に攻め登って行った。二地区、三地区要塞から挟撃される最強力な火砲の下を平然と斜面を登って行くソ連軍の凶太さに原中佐はいささか呆れ乍ら、二地区陣地南側の砲塔に一斉砲撃を命じた。何回も測定済みの地点であるので、群がり登る戦車に砲弾は次々と命中し、さしもの重戦車も火煙を吹き上げて崖に転落し、断末魔の煙をあげていた。

日本軍将兵は戦車に砲弾が命中する度に躍り上って快哉を叫んだ。流石のソ連軍も一時間程で攻撃を中止して引揚げて行った。

原中佐は南側の戦果に気を良くして司令部に戻り、野村旅団長に、

「二地区、三地区間に侵入したソ連軍に壊滅的な打撃を与えて撃退しました。七十台程の敵戦車を破壊させた模様であります」

と明るい顔で報告した。野村少将は、

「うん、そうか、だが東側は大分やられているようだぞ」と静かに言った。原中佐は直ぐ東側の展望塔に行つて見ると、砲塔の直ぐ五百米程前方を敵戦車と自走砲が傍若無人に走り廻っていた。地上に突出したトーチカや、砲

塔周辺の防衛壕や鉄条網は完膚無き迄破壊し尽され、不齊な地表を砂塵をあげて走り廻る戦車は、トーチカの銃眼や砲塔入口を狙い撃ちしていた。

夕刻、第一地区陣地の連絡が遂に断たれた。此の方面の連日の猛烈な砲声から安堡山第一地区は全滅したものとされた。第三地区方面でも、アクロム警察隊に追尾して来たソ連軍が強烈な攻撃を反覆し、守備隊は地下に閉じ籠った模様であった。愈々本格的な籠城戦の様相を呈して来たので、戦闘司令部で作戦会議が召集された。

原中佐が全般の戦況を伝えて、

「防衛陣地西南方面の有利な戦闘の展開に比して、北部及び東部は地下要塞以外は概ね破壊され、外隔陣地は潰滅的打撃を受けた。第一地区安堡山の玉砕と東部市内に深く入った敵は、更にハイラルを無視して主力部隊はハイラル街道を東に大興安嶺へ向っている模様である。今後我が旅団は包囲攻撃を受けつつ孤立籠城戦の状況を呈すると思うが、基本作戦は随時出撃して敵の補給を断ち、ゲリラ戦を展開するにある。従って当面の出撃作戦について各隊長の意見を忌憚なく述べて貰いたい」

と言ったが、此の機に臨んでは誰も意見を述べる者はなかった。作戦通り夜襲と斬り込みによってソ連軍野砲陣地を爆破し、また敵の後続部隊を阻止し補給路切断の為にハイラル河の橋梁を爆破すると再確認した。斬り込み

橋梁を警戒しているので近付けず空しく帰って来た。

(十二)

第三地区陣地はハイラル防衛の一番南に在った。ノモンハン方面、アムクロ將軍廟方面より進攻する敵に対して備えた陣地であった。陣地の直ぐ東側はハイラル市街の南郊外で、市内を南北に貫通している街道の際にハイラル神社があり、更に市の西側を伊敏川が北流して河北山陣地辺りでハイラル河に合流していた。

十一日昼過ぎ満洲里方面より鉄道沿いに東進して来たソ連軍戦車隊と、ノモンハン、ガンジェル廟方面より北上した部隊が、安堡山北方で合流し、一部は市内へ侵入し、一部は第三地区陣地の南辺の攻撃に向った。その頃、アムクロ警察隊の家族が逃避の途中で合流した引揚邦人と共に飲まず食わずで第三地区陣地に辿りついた。

第三地区陣地守備隊長太田少佐は、家族達を要塞に入

れず、
「要塞内は狭く危険である。その上戦闘の邪魔になる、直ぐ安全な第二陣地へ行きなさい、今の内なら二地区三地区間の地隙を通過して河南台へ行ける」

と河南台要塞を指して厳しく言った。だが、家族達は、ソ連軍の戦車に追われて漸く到着した日本軍陣地なので坐り込んで動かうとしなかった。丸山警察隊長夫人が、
「後からアムクロ警察隊も来る筈です、一緒に戦います

隊は各隊より一個分隊の決死隊を選抜し、数個小隊を編成して毎夜方面を変えて出撃して敵に心理的な打撃を与えることに決して作戦会議は終った。

その夜、野村旅団長は要塞内の伝声管を通して全旅団の將兵に告ぐと悲痛な訴えをした。

「既に第一地区安堡山陣地は玉砕し、第二、第三陣地は敵の猛攻撃を受けているが、吾が旅団將兵は勇氣凛々攻めくる敵を撃滅している。だが戦闘はこれからであり、且つ日毎に苛烈になって来る。然れども例え重包囲に於て各隊孤立するとも堅忍不拔、不屈の軍人精神を以って各自の陣を守り、或いは出撃して敵を撃滅せんとする。今後、戦況不利となると最後の一兵に至る迄、克く闘い、護国の鬼とならんことを望む。……皆の命は私が預かる。いずれ靖国神社で逢わう。」

五尺三寸の小柄で童顔の將軍は好々爺然としていつもニコニコと微笑して、全てを原参謀に任せているので、「暢氣な父さん」と言われているが、その夜の要塞の闇に流れる声は將兵の胸をうつ悲愴なものであった。

払暁、早速斬り込み隊三個分隊が、敵砲兵陣地爆破に出撃したが、何の手応も無く一兵も戻らなかった。ハイラル河橋梁爆破に出撃した輜重隊選抜隊はトラックで夜陰に乗じて一気にハイラル橋に乗りつけ、迫撃砲弾の炸薬を抜き取った爆薬でトラック諸共橋梁を爆破しようとしたが、ソ連軍の戦車隊、砲兵隊が砲列を並べて嚴重に

から陣地の隅に入れて下さい」

と縋りついて頼んだ、他の婦女子も挺でも動くものかと腰を据えて仕舞った。太田少佐が処置に窮していると、副官の高橋中尉が飛んで来て、

「隊長殿、敵は三地区間の連絡路を切断しました」

と切迫した表情で報告した。太田少佐が急いで望楼に登って見ると、ソ連軍は機動力を駆って奔流のように二地区、三地区間の谷間を進行していた。太田少佐は己むを得ず引揚家族達を山の裏側斜面に壕を造って入れと命じた。家族達は元気づいて壕を掘り始めた、兵器は勿論、円匙も無い婦女子達は、有り合せの金具や、素手で荒い岩膚を夢中になって掘って潜り込んだ。

二時間程遅れてアムクロ警察隊のトラックが三地区外郭陣地に走り着くと、追尾して来たソ連軍が忽ち殺倒した。警察隊員は、家族の安否を確かめる余裕も無く肉迫攻撃隊に合流されてソ連軍戦車に立ち向って行った。

ソ連軍は歩兵を随伴した戦車で肉迫攻撃隊を薙ぎ倒し、戦車壕を轢き潰して、勇敢に喚声をあげて丘陵陣地を登って来た。此の方面のソ連軍歩兵は囚人部隊と言われたが、此れが盟邦ドイツを破ったソ連軍かと目を疑う様な雑然とした混成部隊であった。金髪碧眼の大男から、蒙古人か日本人とすら見える小柄のアジア系民族の將兵迄混っていた。将校、兵の区別すら識別できぬよれよれの破れ軍衣を着け、檻褌靴で駆け廻って壕内の日本兵に細

身の銃剣を振った、その勇猛振りは日本軍に劣らなかった。ソ連軍は幾度か攻撃と退却を繰返した後、五百米程降った地点に砲列を敷いて猛烈な砲撃を加え、再び戦車と共に歩兵が突撃して来た。その執拗な猛攻に要塞の地上に出た防衛陣地は次第に破壊され、日本軍は地下要塞に閉じ籠められた。

アムクロ警察隊員は遠く国境よりの退避行の末、家族と再会すること無く、次々と敵砲弾に壕諸共吹き飛ばされ、或いは蛸壺より跳び出して散って行った。山腹の蛸壺にいた婦女子は、激戦の間隙を縫って地下要塞に駆け込んだが、真暗な迷路のような地下道に迷って何処に行ったら良いのか分らず、暗闇の一隅に塊って不安に戦き乍ら凝って猛攻の下に耐えていた。闇の中で砲声と地響に脅え、飢渴も忘れて只、抱き合っていると、さしもの猛烈な戦いの狂音が静まったが、却って闇の静寂が不安と恐怖を募らせて、遂に耐え切れなくなって来た婦女子達は、「もう日本軍は全滅した。私達もソ連軍に捕えられないうちに死のう」

と叫び出すと、啜り泣く者や、大声をあげて、

「殺して下さい！」

と丸山夫人に縋りつく若い女も出て来た。

「日本軍が負ける筈は有りません。誰か連絡に來ます。最後迄生きるんです」

と丸山婦人は必死になって昂奮を鎮め宥めていた。

編集後記

○第八号は陽春号、「まんじ」は二度目の春を迎えた勘定になる。タイプ印書手作りで創刊号を出したのが五十六年三月であった。「作家群」を発行母体とする雑誌「まんじ」というスタイルになったのは第二号からである。旧守の考えはないが、血脈を大切にしたいという気持が働いたからだ。そうした流れをくむ同人が何人かあり、あらためて新顔も加っているが何ら違和感はない。アラベスクをスローガンとした過去の伝統も無理なく受け継がれている。

○某誌を出す某社から編集部あて私のところへ誘惑の手紙が届いた。手短かに言えば出版のすすめであり、販売から、映画化、テレビドラマ化への推薦などともかけの上、百万円だけ負担すればあとは広告費その他一切を会社が受持つという趣旨のもの。あ然とすると同時にこの種の呼びかけの資料に私たちの雑誌も流れていることに驚く。どういうルートから流されたものか察しがつくだけにこれは問題だと思ひ、腹の立つことであつた。そういう筋への雑誌の寄贈は今後と止めたい。

○同人としては参加しないが、掲載料を支払うから作品を載せて欲しいというお話があつた。もちろんお断りしたのだが、これまたあ然とすることであつた。微小とはいへ一つの同人雑誌の成立する根拠は生半可なものではないことを申し上げておきたいと思う。(禎)

社告

同人参加へのお誘ひ

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の(ひろば)として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

「まんじ」第八号

昭和五十八年三月十五日発行 (非売)

編集 大和禎人

印刷 (旬) 加藤清耕社

千代田区神田神保町三十一

2601-5743

発行 「作家群」編集部

(まんじ)

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二一九
〇三(一九三)〇〇九四 柴田方
郵便振替口座 東京二一九〇八一五

……目次……

黒いバス	三戸岡 道夫	1
七福雛	大 和 禎 人	25
失われた故郷ー台湾	山 根 三 枝 子	30
毛 皮	柴 田 富 佐 子	43
連載		
○町○丁目○番地 (二)	山 口 健 二	47
ハイラル挽歌 (九)	金 子 正 義	56

表紙・カット 岸 田 幸 雄

黒いバス

三戸岡 道 夫

(一)

あたり一面が妙に白っぽいのである。

晴れた霧の中に迷いこんでしまったような、あるいは曇りガラスの箱の中から外の明るさをうかがっているような、頼りなげに手ごたえのない、ぼっと拡がった花曇りの白っぽい明るさ。

公園いちめんに桜が咲いていて、白っぽい明るさは花群の拡りのせいなのだった。それにしてもどうしてこんなに沢山の桜が咲いているのだろう。誰も見ていないのに、なぜ桜はこんなに一生懸命咲くのだろう…。

彼は花群の方に鼻をひくひくさせた。しかし桜の花に匂いはない。

その花の白い輝きの中に、黒い点が見えた。

黒いバス。

彼は獲物を見つけた獣のように、それに向ってまっす

ぐ歩いていったが、だがバスにはまだ誰も乗っていないかった。

彼が黒いバスのことを知ったのは昨夜であった。

部屋の隅でレシーバーを耳に当て、ハムの機械にむかっていた。ハムは学生時代からの趣味で、小遣いに余裕ができると秋葉原の電気街から部品を買い集めては、受信装置の拡充に専念した。就職してもその趣味は継続されていたから、東亜商事の未来事業開発部という、たえず新しい情報が必要とするセクションに籍を置いている彼にとっては、ハムを通して得られる、世界の果て、宇宙の果ての情報は、いわば趣味と実益をかねた一石二鳥と言えた。

一日の仕事が終ってアパートに帰ると、いつもレシーバーを耳にセットし、孤独な触角を夜空の高みにアンテナのように伸ばして、暗く透明な宇宙のなかに情報の釣

糸を垂れるのであった。するといろんな信号がかかってくる。彼の聴覚はハムに乗って世界の果てを自由自在に飛翔し、宇宙の深く暗い神秘的な声をひそかに聞くのであった。

昨夜も同じようにハムに聞き入っていた。

すると、ガリガリ、突然凄惨な音がとびこんできた。鼓膜が破れるかと思った。機械の故障か？しかしガリガリはすぐ止んだ。だが少したつとまた、がなりたて、消えたかと思うとまたすぐ音をたてるのであった。その継続が規則的なので、ひよっとしてなにかの暗号ではあるまいかと思った。そこで早速そのガリガリの解読にとりかかった。すると総合商社の未来事業開発部に所属している彼にとっては、ただならぬ情報がそこに隠されていたのであった。

……ガリガリ……ガリガリ……『時間』

を製造する技術が開発され、テストプラントが完成した、その試運転が明日行われる。見学を欲するものは花咲公園から

黒いバスに乗るべし……ガリガリ……ガ

リガリ……ガリガリ……

彼は口笛のような悲鳴をあげた。

『時間！』

それはこの世における最大の商品である。

時間は誰もが欲しがっている。しかし製造はできない。

それがこれまでの常識だった。時間がない、もっと長生

きがしたい、だが誰にも時間は一日二十四時間しか与えられていない。乞食でも大富豪でも、子供でも大人でも、天才にも白痴にも、時間は誰にでも平等である。だから『時間』が製造できたら、『時間』が販売できたら、これこそ東亜商事の未来事業開発部が長いあいだ開発を夢みていた商品なのであった。もしも『時間』を製造できる会社が現われたとしたら、莫大な利益と永遠の繁栄が約束されること間違いのない。東亜商事がもしこの地球上最大にして最後の商品を開発し得るとしたら、一躍にして日本最大、いや世界最大の企業という栄光の座を獲得できるのではないか。

そこへ宇宙からのこの情報である。驚かない方がどうかしている。彼はまんじりともせず夜を明かした。

裏木戸の方から聞えてくる牛乳配達の声、新聞が郵便受けに落ちる音、庭先でチュンと鳴く小鳥の声に、ああ、もう朝だなあ、と思って顔を明けると、すっかり夜は明け放たれて窓の外には四月の空が光り、彼の周囲には寝乱れた蒲団、枕の灰皿、机、洋服ダンス、壁のカレンダーなどが、しらじらと見えた。戸外からは車の音や、朝早い出勤の人々の声がかん高く聞えてきた。

しかし突然のそんな光景は馬鹿に現実的に彼の眼には映るのだった。

そこには昨夜ハムを通して触れたあの宇宙の深い神秘

感はちっとも残っていないのである。

窓の外に光っている空も、さわやかすぎて、昨夜彼の触角が縦横にかけめぐったのと同じ空とはまったく思えない。そんな現実的な部屋の中で目覚めたためか、彼には昨夜の信号が果して本当だったのか、にわかに疑問に思われてきたのだった。夢を本当だと勘違いしているのではなからうか。だが嘘にしても情報はあまりにも魅力的でありすぎた。このまま、見逃がしてしまう手はない。とにかく行くだけ行ってみようと、彼はアパートを出た。

会社に出勤してからでは間にあわないと思い、公衆電話をかけた。課長は洗面中のところを電話に出て

「なんだい、朝早くから、びっくりするじゃないか……」

彼は手短かにハムの情報を話し、

「……今からその黒いバスを探します。このまま、まっすぐ花咲公園へ行かせていただきます……」

「へーっ？」

課長は歯ブラシを咽喉につまらせたような声をあげながら、盛んに、うん、うん、と聞いていたが、しかし最後の方になると少し馬鹿げた口調に変わって

「君のいつもの誇大妄想ではないのかな。でも、まあ、なにか掴めるかもしれない、とにかく行ってみてくれ……」

「黒いバスが見つかり次第電話いたします」

かねて花咲公園の名前は聞いていたが、そこへ行くのは始めてだった。かなり広い公園で、名前の通りおびただしい桜は折しも満開で、白っぽく中空にただよっていた。朝の公園は人通りもなく、桜は静まりかえって咲いているので、それはあたかも造花の森のように見えた。

こうして彼が公園の中をあちこち十分ばかり歩いてみると、突然黒いバスが姿を現わしたのであった。だが現実には『黒いバス』が眼の前に現われてみると、それは奇妙なものだった。黒い乗用車なら見慣れているが、黒いバスなどというものは見たことがない。珍らしいというよりも、なにか甚だ不気味な感じで、黒装束の忍者がバスの形に化けて桜の木の下にうずくまっているようにも見えたし、また巨大な昆虫の亡骸のようにも感じられた。

彼はバスの前方に廻ってみた。だが行先は書いてない。案内の紙片でも貼ってあるかとバスを一周してみたが、そうしたのも見あたらない。運転手も、車掌もいなければ、客も乗っていない。これでは考えようによっては、桜の木の下に捨てられた廃車ではないか。それを彼が勝手に本物の『黒いバス』と思いこんでいるだけで、どこかで本物の黒いバスには大勢の人間が群り集り、案内のパンフレットが声をはしゃがせた全員に配られ、バスはもうすぐ発車しようとしているのではないか……そんな心配が彼の頭をかすめた。

そう思うと急に自分の迂闊さにいたたまれなくなり、

彼は黒いバスを探しにもう一度、公園の中を走りはじめた。桜は中空を横にどこまでも拡って咲いていた。その花蔭の公衆便所の裏や、噴水を取囲む灌木の側、コカコーラやチョコレート売っている売店の横などを必死に探したが、しかしそれらしいバスはどこにも見当らなかった。するとやっぱりさっきの黒いバスが本物ということなのか。

ふたたび彼はもとの場所に戻った。

黒いバスはそのま々の姿で停っていたが、違っていることが一つあった。閉っていたドアがこんどは開いているのである。彼はバスの中を覗いた。車内の掃除はよく行き届いていて、ほのかな香水の匂いさえする。しかし人の姿はなかった。耳をすますとカーラジオの軽い音楽が流れていた。彼がバスを離れている間に誰かが来たのだらう。運転手だらうか、車掌だらうか。カーラジオは動物の呼吸のように人なつっこい音を立てていて、それを聞いていると、このバスが捨てられた廃車でないという実感が彼の中に湧いてくる。

彼は心強くなってバスに乗ってみた。いつも満員電車に乗り慣れている彼には、全部空席ということとはかえって席の選択にとまどった。運転席のすぐ後に坐ってみたが、前すぎて落着きが悪かった。そこで車の中央に席を移し、また思い返して前から三分の一ぐらいの場所に移動すると、そこが一番居心地がいいようだった。

カーラジオの音楽は絶え間なく流れていたが、しかし人の居ないバスでそんな音楽をボツンと聞いているのは妙な気分だった。ちやうど客入りの悪い映画館でガランとした天井を見上げながら、開演前の流行歌を聞いている白けた気分にとっくりだった。

彼はバスから降りた。

といって、別にすることがあるわけではない。仕方なく桜の根元に腰をおろし、バスの発車待つことにした。両腕で膝を抱えていると、ズボンの尻を通して土のしめった感じがひんやり伝ってきた。

周囲の明るさから察すると、太陽はだいぶ中天に昇ったらしい。らしいというのは、桜の積雲が厚く中空を覆っているので太陽が見えないためなのだが、その花雲の輝き工合から太陽の方角を推察すると、もうかなりの高さまで昇って、一日の活動が始まっている時間だった。

腕時計を見ると九時十五分前であった。

会社の始業の時間が近づいていた。

彼は朝の会社を頭に描いた。会社の入口や廊下にはひっきりなしに出勤の人間が詰めかけ、夫々の部屋へ足ばやに歩いていく。そして未来事業開発部の部屋も、ほゞメンバーが揃っている時刻である。彼と机を並べているSは、世界ニュースを一つも逃がすまいと七種類の朝刊に隅から隅まで眼を通しているであらうし、彼の前に坐っているNはすでにレポートのまとめ作業にとりかかっ

ているだらう、ななめ前のPはいつものことながら昨夜

の麻雀の戦果を隣の課の連中と大声に話しているにちがいない。彼も今朝会社に出勤していれば、同じように新聞を読んでいるか、駅で買った週刊誌のトピックスを周囲の人々と喋り散らしているだらう。早いデスクではそろそろ電話が鳴りはじめる。課長ももう出勤する頃だらう。

そろそろ課長へ二度目の電話を入れる必要があると思った。売店のコカコーラの自動販売器の横に赤電話があったのを思い出し、その方へ歩いていった。

電話をかけると運よく課長が出た。丁度いま出勤したばかりのようだった。出勤すると坐るなりまず一口お茶を飲むのが課長の日課になっていたが、お茶を飲みながら電話を応待しているのがピチャピチャいう声の調子でわかった。

「黒いバスは見つかりました。まだ行先はわかりません。発車時間もわかりません。ええ、運転手も車掌も居ないものですから……、でも、きっと、そのうち来ると思います。乗客もいまのところは私一人……、でも発車までに大勢くることは間違いありません。それはそうと、私の今日の出張のこと、部長へは話していただきました……？」

「いや、まだまだ、部長はまだ来ていない、来たらすぐ話す……」

「お願いします」
「よし、わかった」

しかし課長のこの「よし、わかった」というのが当てにならないのだった。返事だけはいいのだが、テキパキ物事が進んだためしがない。いつも上司の顔色ばかり伺っているから、へっぽり腰になる。その上さらに副部長がこれまた課長に輪をかけたへっぽり腰ときていたから、課長から無事副部長を通過して部長まで到達するには時間がかかるのだった。それにいまの電話の様子では、課長がどうも黒いバスにあまり乗気ではないらしいのも心配だった。

(二)

彼はバスに戻った。

電話をかけている間に一人ぐらいいは集ってきたかと期待していたが、依然としてバスの中に人影はなかった。彼は所在なげにバスに乗ったり降りたりしてみたが、落着かない気分だった。また桜の根もとに戻るしかない。彼はバスを降りると再び動物園の猿のような姿勢で地面に腰をおろし、ぼんやり前方を見つづけた。他人が見たら、完全に失業者か、フーテンと見えるだらう。

彼は会社に帰ってしまおうかと思いついて、あんな信号を本当だと思ふなんて、俺は本当に馬鹿か阿呆だ……。

だが、それでは帰ろうか、と腰をあげてみると、なんとなく心残りするのだった。折角いままで待ったのにと後髪を引かれる思いで、あと五分、もう十分とちびちび時間を延しているうちに、十時になってしまった。

桜の根もとに腰をおろしていたので尻がすっかり湿ってしまい、冷えこみが腰から背中にかけて這いのぼっていた。新聞も丹念に読んでしまった。煙草も吸いあきて、もうやることはなにもない。

彼はついに会社へ帰る決心をした。腰をあげ、仔犬のように小さく身震いをした。両手で尻を押えると、地面の湿りを吸いとったズボンはしっとり冷たかった。

だがその時、一人の男がバスに向かってくるのが眼にとまり、彼の足はブレーキをかけられた。逐に人が来た……、やっぱり自分の考えは正しかった。帰ろうと決心した時になって、やっと人が来た。待っていてよかった、彼の中に仕事への希望と自信とが急に盛り上って来た。向うから歩いてくる男は一直線にバスに向かい、そして躊躇なくバスに乗り、前から三列目に迷わず腰掛けた。たいした自信だと彼は思った。

だがその顔と背広のバッチを見た途端に、彼はその男を思い出した。

多少うる覚えの感があったが東亜商事とはライバルにあたる南海商事の情報副部長にまちがいがなかった。

『やっぱり企画力の南海商事といわれるだけあって、

こうしたビックニュースにはちゃんと副部長がやってくる……』

彼は感心した。

南海商事はその情報網の広さ、速さ、企画力の強さ、そして新製品の開発力に定評があり、あした仕事振りでなくてはこれからの激しい企業競争には勝てないと、同業者の間でも垂涎の的となっている総合商社であった。南海商事は同業者間の会合とか、ゴルフ大会とかのつまらない会合へは殆んど顔を出さない代りに、研究会とか講演会、実地見学、調査研究会といったものには実にまめに顔を出し、東亜商事が担当係員などですましているようなものでも、重要と判断すれば副部長クラスが参加した。

『時間の製造と販売』……、これまで誰もが望み、誰が研究しても絶対に成功しなかった『時間』という商品……、その『時間』を製造する技術が開発され、そのテストプラントの試運転が始まろうとしている、そのパテントを掴んだ企業が世界最大ビッグビジネスの座を獲得するのは間違いない。それなのに、わが社ときたら……、彼のような駆けだし社員が、しかもプライベートにキャッチした情報で走り廻っているにすぎないのだ。南海商事では副部長が出掛けてきているというのに、我が会社の副部長ときたらただ机に向って書類を丹念に読み、差支えないものだけにハンコを押し、ただただ部長、社長の

方にのみ神経をすりへらしている。どうしてあんな人間

で未来事業開発部の副部長がつとまるのだろう。開発部の副部長といえは会社の中でも最も積極的で、バイタリティに富み、企画力と実行力に富んだ人間でなくてはならない筈なのに……。

彼は南海商事の副部長の姿を、うらやましいような、まぶしいような、そして幾分憎悪の混った眼で見つめた。

(三)

人は、一人、二人、三人と集ってきた。

彼は誰かに声をかけようとした。しかし最初に来た男はあまりに若すぎた。せいぜい二十才ぐらいにしか見えない。若すぎて彼のブライドが許さなかった。二番目に来たのはその逆で、声をかけるのにはなんとなく気がひけた。それは五十がらみの恰幅のいい中小企業の社長だった。その点、三番目にきた男は気さくそうだった。年恰好も彼と同じの三十才前後に見えるのが親近感を呼んだ。酒が強いのか、血色のよい顔に鼻が赤く光っていた。その赤鼻が今やバスに乗らんとするのを彼は呼びとめて

「……このバス、たしかに時間テストプラント見学のバスなんですか……」

「……たしかに、その言ですわね……、でも、なぜ、そんなことを……」

「いえ、ちよっと心配だったものですから……」

「……そう言えば私だって、どこへ行くのか、はっきりは知りませんよ。たゞ時間製造テストプラント行きというだけで……、でも私は会社の命令で来ているのです、だからたゞ命令通りにこのバスに乗ればそれでいいんです」

赤鼻はそう言ったが、しかし無責任な態度というわけではない、逆にどこか自信に満ちていた。それはおそらく会社に対する信頼感が原因なのであろう。会社の命令に対する絶対的な信頼、その信頼感から生みだされた自信を赤鼻は身体から発散させながらためらわずにバスに乗り、窓際に坐った。

人は更に一人集り、二人集って、バスに乗りこんでいった。

次に来たのは女性であった。

女性といっても五十に近い年令。小肥りの身体を素晴らしい着物で包み、指には大型のサファイヤが光っていた。しかし外見は上流階級の奥さま風なのだが、中味はどうみても下町のおばさん、という感じ。この外見と中味のちぐはぐな女性はいったい何物なのか、どうしてこの黒いバスに乗りこんできたのだろうか、彼の好奇心はにわかにかき立てられるおもいがした。

人が集るのにも滞りというものがあるらしい。彼が花咲公園に一番乗りしてから、最初の人（あの南海商事の

副部長)が現われるまでにはずいぶん時間がかったが、しかし一人が現われるともうその後はまるで桜の花蔭で待機でもしていたかのように次々と現われ、バスの中にはもう二十名ぐらい集合していた。女性にはサファイヤの奥さまが一人で、他は全部男であった。年令は三十台、四十台の男が多く、中には二十台の若者や五十過ぎの年配者も混っていたが、職業も大企業の開発部員、技術者、研究所の人間、中小企業の経営者と、さまざまであった。そのバスの中を眺めていると、そろそろ発車するのではないかと彼は心配になってきた。もう課長は出張申請の手続きをすませてくれたであろうか、確認する必要がある……。

彼は再び赤電話へと、桜のトンネルの下を跳びはねるように走った。電話をかけている間にバスが発車してしまわないだろうかと、不安が霧のように湧いてくる。一台しかない赤電話は幸い空いていた。彼は獲物にとびかかるように受話器を手にとると、ダイヤルを廻した。ブルブーン、ブルブーン、信号は鳴るのだが、なかなか相手は出ない。電話交換手はなにをしているのだろう、カッカッしている彼の耳にやっとな

「もし、もし、東亜商事でございます……」
スローテンポの交換手の声。会社がのんびりしていると電話交換手までのんびりしてくる。いい加減にしてくれ。上ずった声で課長につないでくれと頼むと、

『時間』の製造、『時間』の販売、そのパテントをわが社が握る、そして一挙に総合商社のトップに躍り出る……、そのためには……」

「よし、よし、君の基本論はよくわかったよ。ところでね、その黒いバスの行先はどこなのか、まだわからないかね」

「わかりません。しかし南海商事の情報副部長さえ乗りこんでいるんですし、行先に間違いはないと思います……」

何を今頃言っているのかと彼の方は血液が逆流しそうになってくるのだが、課長の方はあくまで冷静で

「ところでね、君、そのバスには参加費が要るんだらう……?」

「エッ!」
虚を突かれた思いで、とび上りそうになった。

冗談じゃない。バスが発車するかしないかの瀬戸際に、金がかかるの、かからないの、そんな問題が今どうして必要なのだ……。思ってもいなかった課長の質問に、彼はすぐには返事が出来なかった。

「……………」

「ええ……? 君、どうなんだい……?」

黙っている彼を課長の言葉が追っかけてくる。しかし課長に面と向って、『そんな小さなこと、どうでもいいでしょう』というわけにもいかず

「かしこまりました……」

返事をしたものの、今度は電話がひっこんでしまって音沙汰ない。まったく連絡の悪い会社だと、自分の会社ながらうんざりする。いらいらする神経を少しでも静めようと、満開の桜の枝を見上げてみた。

待ちくたびた頃に課長が出た。

「もうだいぶ人が集まりました。かれこれ二十人ぐらい……、そろそろ発車も近いと思います。私も乗ってきます。よろしいですね……」

「よろしいですね……と言われたって、困るなあ、私一人で決めるわけにもいかないし……」

「……というところだが……」

課長の困惑した口調は、まだやっていない証拠である。口先だけで、ちっとも事を進めない課長に更めて腹がたってきた。そもそも考えてみれば、この黒いバスへの参加自体、当然に課長自身が率先してやるべき仕事ではないか。現に南海商事では情報副部長が乗りこんできている。『課長、この仕事は本来あなたの仕事なのです』と彼は電話口でそう叫んでやりたかった。彼は神経がいらだって、全身の皮膚がむづがゆくなってきた。

「課長、とにかく早くお願いします。バスはいつ発車するかわからないのです。乗りおくれたらもう終ります。」

「……………」

「そうだろう、情報が重大であればあるほど値段は高い。そんな貴重な情報が無料で得られるはずがないではないか。よく調べてくれ、予算の用途がつかなければ部長への申請も出しようがないよ。もっとも君がプライベイトに払うというなら、話は別だがね……」

なんとという厭味だ。五百円や千円なら話は別だが、もしも何万円もという参加費であれば……、ひよっとしたら何十万円になるかもしれない。もしそうだったら大変だ。そんな大金が自己負担……、彼はにわかに心配になりだした。

「うっかりしておりました。すぐ調べて電話いたします」

「ああ、そうしてくれ。情報、情報とさわぐのもいいけどね、まるでピクニックに行くみたいな調子では駄目だ。もっと足許を一步一步ふみ固めて……」

彼は急いでバスに戻った。

(四)

さて、誰に聞いたらいいものか。

こんなことが聞けるのは、あの赤鼻ぐらいしかいないだろう。人が好きそうで、適当におせっかいやき……、彼に恥をかかせないで教えてくれるだろう。

赤鼻はバスの窓際に腰掛けて新聞を読んでいた。彼は

腕を伸し窓ガラスを二、三回トントン叩くと

「……？」

「このバスの乗車賃、いくらなんですか？」

「……」

どうして今頃そんな質問が出るのか不思議だといった顔つきで、

「百万円。知らなかったんですか……」

「えっ！」

彼は軽く叫び、しばらくしてまた

「百万円！」

悲鳴とも溜息ともつかぬ声をあげた。

いくら劃期的な『時間』の製造だといっても百万円は高価すぎる。

「どうしたんですか？」

赤鼻は彼の顔を覗きこむようにした。

彼は何か言おうとしたが、うつ、うつ、うつ、とつまって、適当な言葉が出ない。目茶目茶に自分の頭を両手でひっぱたき、公園の中をわめきながら走り廻りたい気持である。

「お金を忘れたんですか、それとも、落した……？でも、身元がしっかりしていれば、後払いでもいいことになっておりますよ」

赤鼻はなぐさめ顔にそう言った。

だが、そんななぐさめが何になろう。彼にはまだ出張

の承認すら会社からおりていないのである。彼は、再び赤電話に向って狂ったように走ると

「課長、わかりました。参加費は百万円で……」

「……それみる、やっぱり俺が言った通りじゃないか……」

「おっしゃる通りで……、でも、情報が本当であるとしたら安いものです、」

この時を外したらもうオーケーをとるチャンスはないと、彼は一氣にそう言った。しかし返ってきたのは課長の怒声。

「馬鹿も休み休み言え！どこへ行くのかもわからぬバスに百万円も払えるか……！高い。高すぎる。ペラ棒に高い……！」

「でも、南海商事では情報副部長が来ているのですよ。北海商事だって、それに西海物産も……、総合商社は全部きております。あとで悔いても、とりかえしがつきませんよ。このチャンスを絶対逃がすべきではありません。課長、百万円は絶対投資すべきです……」

「いかん、高い。高すぎる……！」

課長はヒステリックに叫んだ。小心な課長は、怒り出すと始末におえなかった。彼は少し言いすぎたかなと思つたが、仕方がない。

「……高い、……高すぎる……！」

受話器の奥から聞えてくる声は、まさに彼が恐れてい

た方向に課長の感情が暴走し始めていることを裏書きしていた。

「……君は仕事のきびしさがわかっちゃいないからそんな呑気なことを言っているが、商社の薄い口銭で百万円儲けるのがどのくらい大変かわかっているのかね……」

課長の声が興奮で震えている。最悪の事態だ、もう少し冷静に話せないものかと思う。しかしなんとか課長の感情を冷却しなければならぬ。こんな時には黙っているに限る。彼はしばらく電話口で口をつぐんだ。すると今度は課長の方が気にしだして

「……おい、どうした……」

若干興奮を抑えた声で話しかけてきた。

「……はあ、……別に、……どおって……」

彼は少し言葉を濁して小声で言った。そしてしばらく間をおいてから

「課長、仕方がありません、やめましょうか……？」

一言、一言、はっきり区切ってそう言った。

「……」

やめましょうかーと言われると、今度は課長の方が困ってくる。課長は、うっと、言葉をつまらせた。『不確定な情報に百万円も……、高い……、リスクだ……』とわめいてはみたが、万が一情報が本当であったとしたら、その情報を取り逃がした責任を追究される危険がある。困惑した課長の顔が眼に見えるようだ。

「とにかく部長に相談してみよう……」

興奮のやゝ冷めた声で課長はそう言い

「……とにかく、もう少し様子を見てくれないか。それにしても、行先もわからないのに百万円は高いなあ……、とにかく判断が難かしい……」

もう少し様子をみると言つたつて、様子をみていて事態が進展するわけではない。いつもこれだから厭になつてしまうと、彼は両肩をガクンと落した。

(五)

部長や副部長の顔色を見ながらしか物を言えない課長、自分の責任になりそうなことは絶対イエスと言わない臆病な副部長、そして決断力の鈍い部長……、彼の上に三重にのしかかっている上司のことを思うと、百万円なんてとても無理かと悲観的になってくる。

バスに戻ると、赤鼻が隣の空席を指さして

「早く私の横へお乗んなさいよ」

「ありがとう。でも、僕はまだ坐ってられないんですよ」

「そろそろ坐らないと席がなくなりますよ、だいぶ混んできましたからね」

「でも、まだ会社からオーケーが出ないものですから……」

彼は赤鼻の方をなんとなく救いを求めるような眼で見

上げた。赤鼻は新聞紙をのせて席を確保すると、バスから降りてきて

「あなた、何回も電話で連絡、大変ですなあ……」

同情するような声でそう言った。

「……」

「とにかくバスに乗ってしまうことですよ、乗ってしまえば会社の方だって駄目だとは言わんでしよう、大丈夫ですよ」

「いや、それが駄目なんです。まず参加費が出ないんです。許可なしで出張したりすれば、うちの会社は費用を一切出してくれません。百万円もする参加費、個人ではとても負担できませんしね……。それにもっと困るのは許可のない出張は職場放棄ということで、すぐ減首になるのです。」

「へえ……?」

いまだき驚いた、と言わんばかりの顔で赤鼻は眼をみはり

「組合はないのですか、おたくの会社……」

「あることは、ありますよ、だが御用組合で何の役にも立ちません」

「でも、そうした場合の緊急の行動、急ぐ場合には仕方がないじゃありませんか……」

「でもうちの会社は駄目なんです。会社のためだと思ってやったら減首ではね、たまりませんよ。だから誰だってそんな危いことやりませんよ、そうまでして仕事を

しなくたって、給料はもらえるんですから……」
「情報部や開発部なんてのは一瞬を争う場合が多いのに……、それでは仕事にならんでしよう」

「たとえがんじがらめでも、決断力があつて、どんな決めてくれれば、それでもいいんですがね、ところが石橋を叩いても渡らないのが東亜商事さんだとお客から悪口言われて、いつも私達は口惜しがるんです……」

赤鼻は彼に共鳴し、うなずきながら

「あなた、そんなこと、われわれサラリーマンにとつてはお互いさですよ、私の場合だって、たまたま社長の息子がハム気狂いで、その息子がニュースをキャッチしたものですから社長命令がすぐ出たようなものですが、こんなこと滅多にあることではありませんよ。偶然です」
一生懸命なぐさめてくれるのだが、そんなことでは彼の気分は一向に治らず、

「同じ商社でも南海商事などではね……」

バスの中のライバルに視線を送りながら
「……あの会社では誰が情報をキャッチしようと実に機敏に反応しますね。部長がキャッチした情報だからよく動く、社員の情報だから軽視されるということがない。傍から見ていると羨ましいですね。それに情報処理が早い。たとえばこの黒いバスでもね、テストプラントを見て帰ってきて、あの情報副部長が良かったら右から左へすぐ決っちゃうんでしよう。だから商品にするの

が圧倒的に早い。かないませんよ。……そこへくるとわが社ときたら、まず私のような平社員がレポートをまとめ、課長から部長、部長から役員会へと回覧する。だが役員会へ廻したって、ハンコがべたべた押されて戻ってくるだけで、いいのか、悪いのか、さっぱりわからない。そこでもう一度課長のところへ持って行って、『どうなんでしょうか……』と聞くのだが、要領を得ない。『ハンコが押してあるからいいということなんだろう。まあ、よく検討してみるんだな……』とくるのが関の山。そうこうしているうちに時間ばかりがすぎて、気がついた時には敵さんが商品第一号を発売しているという工合……」

こうしたことは会社突然変異でも起きない限り、今後も変えることはないだろう。突然社長が死ぬとか……、いや、たとえ社長が死んだってあの優柔不断な部長や副部長、課長達が居るかぎり駄目だろう。彼はなんだか今日の花曇りの空のように、白々しくて空しい気持ちになった。

その時彼の眼にパッと華やかな色彩が飛びこんできた。サファイヤの奥さまがバスから降りて、二人の方に歩いてきたのであった。化粧と強い香水の匂いをまき散らしながら

「あのう……、オトイレは……、どちらに……」

と、生ま生ましい質問を發した。上品をよそおって着飾った着物の中で、彼女の動物的な肢体が生理現象を訴

えているのを二人は感じとった。トイレはたしか赤電話の裏にあった。彼が指さすと、彼女はその方向へちょこちょこ走っていった。

生理現象を処理してやがて晴れやかな顔で戻ってくる

「このバス、なかなか発車しそうで、しませんわねえ。いったい、どうなっているんでございしょ。そろそろお晝になっちゃいますわ。のんびりしておりますこと……」
彼女は街の発明家であり、同時に実業家でもあった。

すでに数種のパテントがあり、だまっていたも年間数千万円のパテント料が入ってくるというものであった。とりわけ彼女のヒット商品は、女性用のオルガパンティであった。女性のパンティはトイレでその都度ずりおろさなくてはならない。それは女性のパンティが男のパンツのように前が割れていないからである。それなら割れ目を作ればいい……、しかしその割れ目が平常も開きっぱなしでは工合が悪いのである。そこで彼女が発明したのが、平常は割れ目はないのだが、トイレにしゃがむと自然に割れ目が出来、終って立ち上ると自然に割れ目は消えてなくなるという劃期的なマジックパンティで、これをオルガパンティと名づけて某繊維メーカーとタイアップして売り出したところ、その人氣は爆発的、ために彼女はあつという間に数億の財産を作ってしまったのであった。

数億というパテント料をぬくぬくと吸収している小肥

りで色白の身体を、彼は眺めた。その錦紗の着物の下でむちっとした腰や腹がオルガバンティに包まれて汗ばみ息づいているさまや、つい先ほど彼女が赤電話の裏のトイレの中で不恰好にしゃがみ、オルガバンティの割れ目からピンク色の女性自身を覗かせていたことを想像すると、彼の身体は軽く身震いした。

オルガバンティの発明まで、彼女は夫と中華料理屋をやっていたのだが、金ができるとさっさと店をたたんで会社を設立した。夫が社長で、彼女が専務取締役。会社はいわば「なんでも屋」、土地の売買から情報の販売まで、儲けそうなことなら何でもやった。

「とにかく大きい組織はお金もうけにはむきませんわねえ……」

彼女は自分の体験から、自信たっぷりに言った。

「……その点、私のような個人企業はようございますわよ。自分一人が判断すればいいんですから、早い。あつという間にきめてしまいますわ。商売はスピードが肝心。大会社のようにもたもたしてチャンスを逃かすようなことは絶対いたしませんわ。今はスピードの時代、どんなことは絶対いたしませんわ。今はスピードの時代、どんなことでも一掃儲けたことといえば、そうですわねえ、東日本電鉄のときかしら……」

彼女は何回話してもそれを話すのは楽しみらしく、反芻するように話しはじめた。数年前のこと、A県に三万

坪ほどの土地の売物が出た。調べてみるとそこには東日本電鉄の延長計画があり、当然東日本電鉄からも買いが入った。しかし大企業というものは動作が鈍い。土地買収担当者が稟議書を書いてあっちこっちハンコをもらいに歩いているうちに、彼女は素早く手付金を打って契約を結んでしまい、東日本電鉄で社長の決裁がおりた時に、すでに土地は彼女の名義に変わってしまった。彼女は、その一部を東日本電鉄へ鉄道延長用として倍近い値段で売りつけ、また残りの土地も鉄道が延長されたために住宅地として開発されてびっくりするほど儲かった……、まったく大企業の鈍重な組織のおかげだと、彼女は酔ったように話した。女にしては意志の強い太い眉毛と鰹の張った顎の線は、たとえ大企業の社長になったとしても見事に経営手腕を発揮するであろうと想像された。

「そういうわけで、情報はどんなものにも興味深々ですのよ。『時間』製造プラントを女だてに……、などとお思いかもしれませんが、私には私なりの勝算がございますの……」

サファイヤの光る指先でハンカチをとり出し、鼻の頭の大粒の汗をたたきながら

「……でも私はね、『時間』といいますが『時間』そのものは売れませんのよ。私が売りたいのは『時間を売るシステム』。簡単に言えばケースですわね。容器。その方が頭脳的で、効力的でしょう。これからは頭脳ブ

レーでいかにくちや……、そう、そう、そのケースなんだけど、もう二十種類ばかりも考案しておりますの。ねえ、みなさんの会社でもしも『時間』をお売りになることがあれば、ぜひ私の考案したケースをお使いあそばせよ」

最後の方は急にあそばせ言葉になり、しなを作って、彼と赤鼻の方を流し目で見るのだった。

彼は『時間』というものはいったいどんなパッケージで売り出したら一番効果的だろうか、いろいろな空想をめぐらせてみた。

『時間』の罐詰を作って店頭に並べて売る方法は……、月並みなあ……、

生ビールのように樽詰め計り売りの方法はどうかだろう……、

そんなことをするくらいならいっそガソリンスタンドを真似て、『時間』貯蔵タンクとメーターを備えつけたらどうだろう……、

『時間』の自動販売器という奴は……？

あるいは電話の配線を利用して『時間』を各家庭に配達したらどうだろう。そのうえ電々公社とタイアップして、電話料金といっしょに『時間』代金も銀行の口座振替えて集金してもらえばなお効率的だ。

……などとあれこれ思いめぐらしているうちに、不意に、ああ俺はまだそんなことを考えている暇なんかないんだ……、俺にはまだバスに乗る出張許可さえおりてい

ないのだ……、それなのに『時間』をどうしたらよく売れるなんて、そんなことが何の足しになる……。

空想に翼をひろげている間はたのしいが、急に現実に取り戻されると、狭い箱に閉じこめられたようななじめな気持ちになった。そんな時いつも彼の心をよめるのは、ああ、俺はどうしてこんな会社で就職してしまったのだろう、という軽い後悔の念である。もし目の前のサファイヤの奥さまから、月給を二倍にしてやるから来いと言われたら、俺はすぐにでも転職してしまうだろう。

(六)

バスの乗客は着実にふえつづけ、誰もが発車の時間に全神経を集中させていた。バスの外にも、煙草を吸ったが、いずれもいざ発車となれば直ちにバスに駆けつけるに十分な身構で、バスの方を伺っていた。

サファイヤの奥さまも話が一段落すると、ハンカチで鼻の先を気ぜわしく煽ぎながらバスに乗った。赤鼻も腕時計をのぞきながら、バスへ戻っていった。

彼もバスに乗るのか乗らないのか、早くきめなければならぬ。

再び赤電話へと走った。

だが課長も副部長も会議中でデスクにいなかった。部長は……これも来客で席にいないという。まるで仕事にならない……、のんきすぎるにも程がある……、再び

腹がたってきた。しかし相手がいないのではどうしようもない。彼は興奮気味の声を辛うじて押えながら、電話口に出てくれた男に

「出張申請書はあがっているでしょうか……」

と聞いてみた。

「ええ、いま副部長の机の上のっていますね……」

「副部長のハンコは……？」

「まだです……、ただ書類が机ののっているだけで……」

「のっているだけ……？」

「ええ、そのまま……」

窓際にひっそりした副部長の机を想像した。その上に見放されたようにのっている申請書。彼はまるで自分が副部長の机の上に無視されながら横たわっている思いにかられた。いらだしきを通りこして、情なくなってくる。もしかしたら出張は駄目なのかもしれない……、悲観的な予測が頭をもたげてくる。

「……それでは副部長が戻りましたら早く決裁するように頼んでくれませんか。とにかく急ぐんです。もうあまり待てないんです……」

彼はせつなくなつて、いまにも小便をもらしそうに膝をもじもじさせた。

「会議はもうじき終ると思いますよ。あと十分ぐらいでは……」

「お願いします。本当に、もうあまり待てないんです。」

そのまま運転手はいま来た道を引返すと、桜の花群の中へ消えていってしまった。

彼はびたびたと内ももに触れて気持ちが悪い濡れたパンツを、気づかれないようにズボンの上からつまみあげながら、そろそろとバスに近づいていった。

バスは発車寸前の、あの期待にみちた雰囲気活気づいていた。「リモートコントロールバス」の掲示板が急にバスの中のムードを高めたことは否めない。どこか見えない場所にあるコンピューターのボタンがカチリと音をたてれば、バスはそのまま滑るように発車するのである。

赤鼻が窓から首を出し

「どうしたんですか、足、怪我でもしたんですか……」

「えっ！ いや……」

彼はギクリとし、あわててズボンから手を放した。とたんに濡れたパンツが太ももに密着する不快感で全身が震えた。

「どうですか、もう乗らないと間にあいせんよ」

「ええ……」

彼は生返事をしながら恨めしげにバスの窓を見上げた。俺だって早くバスに乗りたんだ……。彼は腕時計を見た。さっきの電話からもう十分以上はたっている。もう会議は終っているかもしれない。

やにわに再び彼は赤電話へ駆け出した。桜花の下を走りながら、『これが絶対最後の電話！』と心で叫びなが

また十分ぐらいしたら電話をしますから……」

電話をしている間にバスが発車してしまわないだろうか……。電話の度にこの不安にかられるのだった。心配でたまらず、バスが見える場所まで走って戻った。だがその時、彼の心臓はドッキリ波打った。

彼の前方を運転手が歩いていったからであった。とうとう運転手が来てしまった。

彼はあわてた。

発車だ！

バスに乗らないと間にあわない。

どうしよう！

彼はうろたえた、緊張し、身が棒のようになって、そこに立ちすくんだ。稲妻のように鋭い緊張が彼の下半身を走り抜けたかと思うと、彼は失禁した。

運転手は看板を持っていた。「リモートコントロールバス」と書いてある。運転手は単に看板を運んできただけらしい。運転手はだまって看板をバスの乗車口に立てかけただけだった。

「このバス、一体、いつ発車するの……？」

乗客の一人がたまりかねて聞いた。だが運転手は落着いたもので

「さあ、リモートコントロールバスですから、私たちにはわかりません。コンピューターが動き出せば自然にバスは発車するでしょう」

ら。

しかし会議はまだ終わっていなかった。

だがもうこれ以上待てないと、強引に電話を課長につないでもらった。だが会議中の課長の声は少し不気嫌で、

「……困っているんだよ、副部長がうんと言わないの

でね……」

向うから先手を打って話してきた。

彼は副部長の机の上に、誰も手をつけずに放置されている出張申請書を再び想像した。

「副部長はなんと言うんですか……？」

「百万円も出してバスに乗って、それだけのメリット

があるかどうか疑問だ、というんだね……」

「課長、もうバスは発車するんです。そんな基本論を議論している段階ではありません。」

副部長は水のように透明な人間だった。まったく自分の意見というものを持っていない。いつもひっそりと坐っていた。だが自分に責任が及んできそうなものが近寄ってくると、ぬめっとした蒼白い膚が敏感に感じとって、めったなことではハンコを押さないのであった。だからこみいった書類は次から次へと手許に溜まり、仕事をダムのように堰きとめていた。なんとかしてこの黒いバスには手をふれまいとしている副部長の顔が浮かんでくる。「副部長がだめなら直接部長に話しをつけてくれませんか。このままで待っていますから……」

最後の言葉は少し凄んだ口調になった。

課長はついに追いつめられて、会議室から戻ってきたばかりの副部長のところへ出掛けて行った。そして詰め寄るようにしてやっとハンコを押させるのに成功した。

しかしもう一つ難関がある。部長である。しかし部長もこれまた一度の説明だけでは簡単に承知する筈はなかった。やはり『本当かどうかからんものに百万円も出せるかね。』といった基本論のむし返しで

『でも、部長、バスはすぐ発車するらしいんです……、電話を切らないで返事を待っているものですから……』

すると部長は額にすさまじい縦皺を寄せて『待たせておけばいい！』

と怒鳴った。

「……ね、といった工合だから、もうちよっと待ってくれないかな、部長はもう少し様子を見ろと言うのだよ……」

彼の頭へは血液が脈打ってかけのぼっていくのがはっきりわかった。

「様子を見るって、どう見るんです。これ以上見るものなんて何もありませんよ。もう最後のチャンスです、課長、もうこれ以上……」

彼の唇は震えている。

「まあ、そう怒るなよ、部長がそう言っているのだから仕方ないじゃないか。僕だって一生懸命やっているん

だ、な、そう困らせるなよ……」

課長から『困らせるなよ……』と言われると彼の方も一瞬困ってしまった

「別に困らせているわけではありませんが……」言葉をつまらせる。

もうどうしていいのかわからない。彼の頭は混乱してきた。しかし課長の努力もいちはうは認めないわけにはいかないだろう……などと考えていると

「ではまた電話をかけてくれないか……」

彼がそれに答える暇も与えず

「ね、すまないがそうしてくれ、頼む、すこし冷却期間をおかないと……」

課長は素早く電話を切った。

彼は半分泣き顔になって電話口を離れた。

いったいどうなっちゃっているんだろう。なにも自分の利益のためにやっているのではない、好き好んでやっているのでもない、会社のためだ、会社のためと思えばこそ身をけずる思いで駆けずり廻っているのに……、それなのに……、そう思うと情なくなつて、涙があふれてきた。

彼は少しやけくそな気持でバスに戻った。もしバスが発車したら、もう発車した時のことだ……、出張が許可になろうが、なるまいが、どうでもいい、そのまま乗ってしまえばいい。

てバスの外にとび出した。それは列車の窓から急に狂人が飛び出したような唐突さであった。

だがその時、突然、予期しないことが起った。彼がバスから出た瞬間に、バスが走り出したのである。

「しまった！」

彼は素頓狂な声をあげて、その場に棒立ちになった。だがすぐ

「待ってくれ……！ 乗せてくれ……！」

全身で悲鳴をあげながらバスを追った。足がもつれてころびそうになった。夢の中で走っているようだった。頭ばかりが前へ出て、足が少しも前へ出ない。下半身に骨がないようだった。

しかしバスは五十メートルばかり走っただけだった。すぐに止った。正式の発車ではない、発車のテストだったらしい。

彼は全身から汗を吹き出し、呼吸を荒らませて、止ったバスにやっと追いついた。バスの窓から乗客がいっせいに首を出し、捨て犬を見つめるように彼を眺めた。

(七)

風もないのに、にわかに桜の花が散り出した。

あちらでキラッ、こちらでキラッ、と、光の切片のようには舞い落ちていたのが、あっという間にちようど歌舞伎の雪景色のおびただしい紙の雪片が、音もなく、舞台

に降りしきるように、桜は際限もなく地面をめがけて降りはじめた。低く垂れこめた雨雲がこれ以上自分自身の重さに堪えかねてにわかに雨となって降りしきるように、桜の花群も重さに堪えかねて、どっと梢から落ちかかってきたのにちがいない。

その散り工合があまりにおびたしかなかったので、桜はなにか空中の狂気を恐れて散り急いでいるのではないかとさえ思われた。地面は落花でたちまち真っ白になり、視界も花吹雪で白一色と化し、バスの黒い車体も白い花弁で飾られた。このままバスが動かなければ、バスは短時間で花弁の下に埋ってしまうだろう。

花卉の雪はなにか不吉な予兆を彼に感じさせた。不安の断片が花弁となって次々と空中から舞いおり、彼の上に降りかかってくるのではないかと思われた。

バスはそろそろ満員に近い。

彼のために席を確保してしてくれた赤鼻の努力ももう限界で、横でその席を狙っていた男——そう、さっき彼に鋭い非難の視線を送ったあの男——が、もう我慢しきれずに強引にその席に坐ってしまった。

バスに乗っていないのはもう彼一人だけだった。彼は支離滅裂な気持でおおおと、雪の中を駆け廻る犬のように、桜の花弁を蹴散らしながらバスの周囲を走りまわった。

その時、降りしきる花の雪の中から不意に湧いたよう

に一人の女性が現われた。白い洋服に白い帽子をかぶり、手袋まで白かったので、それはあたかも雪女郎を思わせた。バスガイドだった。片手に

××県××郡××町『時間』製造

テストプラント見学バス

と書かれた紙を持っていた。運転手は乗らないが、バスガイドは乗るらしい。彼は××町という東北の山の小さな町を頭に描いた。バスガイドがその紙をバスのフロントガラスに貼りつけた瞬間、いよいよバスが発車するという現実感で、彼の全身の血は凍りついたようになつた。彼ははじきとばされたようにバスを離れると、赤電話にむかって、落花を砂塵のようにまきあげて走っていった。

興奮した彼は弾丸のように赤電話にとびついた。ダイヤルを廻す指先がふるえる。電話に出た交換手に

「開発部の開発課長！」

と叱りつけるように叫んだ。

電話は開発部につながれた。しかし課長はなかなか出なかった。受話器を通して開発部のざわめきが潮騒のように聞えてくる。しばらくするとそのざわめきを背景にして断片的な声……

『……居ない、と言ってくれないか……』

課長の声だ！居留守を使っているな……、電話の向うの声に彼はカッとなった。

『そんなことできませんよ、彼、もう、ぎりぎりでかみつきそうな声ですよ』

『仕方がないな、じゃあ、出るか……』

気の進まない課長の声。しかし暫くは沈黙……。課長は呼吸をととのえているらしい。やがて

「はい、僕だ……」

と、無理に元気をかきたてた課長の声。

「課長ですか、もう、バス、発車するのですか……」

「困ったなあ、まだ書類、部長の机の上ののったままなんだ……」

「部長はその後どうなんです……？」

「部長も自分だけでは判断しかねる、担当常務に相談してみると言っているんだよ。ところが常務は外出、午後にならないと帰ってこない、だからそれまでは駄目……」

「冗談じゃありませんよ……」

彼は課長の言葉をさえぎった。

「……バスはもうすぐ発車するんです、どうして午後まで待っていられるんです……」

「それで困っているんだ……」

「困るのはこっちです、いったいどうすればいいんです」

彼は悲鳴のように叫んだ。

「理窟はもうどうでもいいのです。イエス、か、ノー、か、それだけ言ってください」

「イエス、か、ノー……？」

課長は追いつめられた獣のような声を出した。

「イエス、か、ノー、と言ったって……困った……」

「困った、困った、と言ったって、問題は解決しませんよ。部長の返事を早くもらってください……」

そこで話はプツリと切れた。切れたといっても電話が切れたのではない。電話の相手が突如真空状態になったという感じなのである。課長は受話器を置いたままどこかへ行ってしまったらしい。部長のところへ話をつけに行つたのだろうか、そうであってくれれば有難いが……。彼は受話器を耳にしたまま、じっと待った。バスは大丈夫だろうか、満員になって発車してしまわないだろうか。彼は腕時計を見た。秒針が猛烈なスピードで廻っていた。時間よ、ゆっくり走れ……。

課長はなかなか電話に戻ってこなかった。

『この電話かかっているのかしら？』

『あら、課長さんが使っているらしいわよ……』

机の上に放置された受話器を、奇妙な動物でも見るように取囲んでいる女子社員たちの声が、受話器の奥で耳鳴りのように聞えた。

彼はこのまま電話を待っているのが不安になった。課長はどこかに逃げてしまったのではなからうか。いったん電話を切ってもう一度かけ直してみた方がよくはないか……、そう思った時、洞窟の奥から返ってくる筈のよ

うな声が聞えてきた。

「……………」

「えっ……？ オーケーなんですか？」

興奮のあまり彼は大声で聞き返した。

「オーケーだ」

「オーケー……？ たしかにオーケー……、どうもありがとうございました……」

彼ははくらくらするような気持ちで電話を切った。こみあげてくる喜びで、電話の切り方が荒っぽくなった。

彼は興奮で泣きそうになりながら、花吹雪の中を走って戻った。もう何も考えることはない。ただやみくもにバスに乗ってしまえばいいのだ。地面の落花が走る彼の足許から、磯のしぶきのように散って舞いあがるのがわかった。

バスに戻ると、満員だった。

満員というよりも超満員といった方がいい。人々はバスに乗りきれず、バスから溢れて外にはみ出してた。発車寸前のわずかな間に、最後の人々がワッと押し付けてきたのにちがいない。バスの中には人間がソーセージの中味の肉のようにぎっしりと詰まり、扉はしがみついて乗ろうとする人間のために閉らない。バスのステップには身体を半分無理やり扉の間に押しこんでいる人が二人、その外側に更に片手と片足だけで辛うじてバスにつかまりながらなんとかバスに乗りこもうとしている人

間が、はみ出した内臓のようにぶらさがっていた。

「発車します……、危険ですからおやめください……」

雪女郎のバスガイドが必死に叫び、もみくちゃになりながら扉を内側から閉めようとしていた。しかしステップの三人の男は眼をむき、なんとかしてバスへもぐりこもうと形相すさまじく、全身を弓なりにして押しまくるのであるから、バスガイドが『おやめください』などと柔らかに扉を引っぱたぐらいでは、男達をバスから振落すことはできなかった。三人の男は閉らないように協力して扉を外側から押さえ、ヨイショ、ヨイショと声をかけながら、じりじり、じりじりと、バスの中へ侵入していった。

彼が戻ったのはそんな時で、事態はすでに絶望的であった。彼はパンク寸前のバスを啞然と見た。しかし次の瞬間

「乗せてください！ お願ひします！」

彼はバスの入口に向って突進した。

彼の眼の前で三人の男が、殺される寸前のいも虫のように身をよじつてもがいていた。彼はその三人に体当たりをくらわせ、男達の隙間に首を突っこもうとした。だがものの見事に人間の壁ではじき返されただけだった。

「危いですから……おやめください……！」

バスガイドの金切声。

「やめろって……っつこんだものが途中でやめられる

かい……親の死に目に逢えなくなつて……！」

ぶらさがった男の中の一人が真赤な顔で素頓狂な声をあげた。バスの中は爆笑した。

「そうだ、そうだ、その意気、頑張れ！」

バスの人いきれの中からませ返す声がした。すると一番奥の方から

「そんなに押しちゃ、イヤン、わたし、痛くって……」

卑猥な男の声に、また爆笑。

彼はもう一度扉にしがみつки、全身の力で男達の体を押した。彼は弓なりに身をそらせて伸びあがり、救いを求めるようにバスの奥を覗いた。しかし人垣の中に埋れて、赤鼻もサファイアの奥さまも姿は見当らない。

だがその時、窓の一つが内側からあいて、赤鼻が首を出して心配そうに彼の方を眺めているのが眼に入った。彼はステップからとびおると、藁でもつかむ気持ちで駆けより、窓の下から両手を伸して

「たのむ、乗せてくれ！」

赤鼻は窓から彼の両手を掴んで引っぱり上げてくれた。しかしバスのボディはつるつる滑るので、いたずらにバスの横腹でバタバタするだけで、とうてい窓からバスの中によじ登ることは無理だった。

彼はあきらめると再びバスの入口に走り、扉に手をかけてステップに片足をのせた。

その時

「ピーッ、ピーッ、ピーッ……」

コンピューターから出るリモートコントロールの発信音が、バスガイドの背後で静かに鳴った。発車をコンピューターが指示しているのだった。

「発車いたします。最後の方、手を放してください！」

バスガイドがキンキン声で、強く扉を引いた。

彼はバスから振り落された。眼の前で扉は無情に閉められ、半開きの隙間から三人の男達の尻や背中や脚をはみ出させたまま、バスは走り出したのである。

「あ、あ、あーッあ、あー……」

彼は絶望とも恐怖ともつかぬ奇妙な声をあげると、必死にバスの扉にとりすがり、バスといっしょに走った。しかしバスのスピードにはついていけない。あつというまに彼の足はもつれ、バスから抛り出されたように地面にたたきつけられた。

バスはそのまま走り去った。

地面から起きあがると、彼はしばらくバスの後姿を眺めていた。

バスは地面の落花を四方に散らしながら走り、やがてその影は黒い点となり、桜の花群の彼方に消えてしまった。

……彼はすこしばんやりしていた。

彼はいま自分のしていることの意味が十分理解できない

い感じだった。

彼は桜の梢を見上げた。

花びらが花の雲から湧き出るように散りつづけている。そのひっそりした花吹雪の中に彼はたゞ一人立っていた。

今朝この公園に来たのは彼が一番だった。だから乗ろうと思えばどの席にも自由に坐れた。彼ほど完全にバスに乗れて、彼ほど確実に坐ることのできる者は他にはないはずだった。ところがその彼が最後にバスから振り落されて、こうしてポツンと残っている……。

俺はいつたいたなんのために朝一番にこの公園へやってきたのだろう……？ なんのために、いらいらし、心配し、何回も赤電話まで走って往復したのだろうか……？

花雲りの空は依然として明るかった。

重ねあわせた桜の枝々には、花群が白く、ぼっと、とぼけたように咲いていた。

彼は再び桜の梢を見上げた。

そして腕時計を見た。

十二時三十分を指していた。急いで帰れば午後の勤務には間にあうだろう。

駅の近くでラーメンでも食べていこう。

彼は国電の駅へむかつてとぼと歩きはじめた。



七 福 雛

大 和 禎 人

「だいせいこう」

二才三ヶ月の四方子は片言が見違えるほど多くなり、童女なりの年輪を加えている。

「大成功だなんて知っているねえ」

と大人達は驚くばかりだ。しかし新生児の早季子のこととなると、

「ママの赤ちゃん」

と言ったりする。

「ヨモ子はお姉ちゃん！」

と教えて見ても本当のところはまだわかりようもないらしい。

「赤ちゃんが泣いてるようお」

と告げにき、おむつの替えを母親に手渡すなど怜悧に立ち回るのだが、

「おねえちゃん」

と早季子を呼ぶのだからおもしろい。

「お姉ちゃんは四方子なの、赤ちゃんはサ・キ・コちゃん、わかった」

「うん」

と素直にうなずくが、やはり一向にわかったようすではない。

早季子の方は一、九八〇円のプラスチック製の赤い衣裳箱に寝かされている。移動しやすいように、という若い母親の合理主義的な発想だが、定価をつけたままだけに、なおのこと微笑ましい。嬰兒期の早季子が呼吸する天地はこれでたくさんなのであった。

「この子は意外と早く臍の緒がとれてね、退院よりずっと早かったの、手のかからない子だわ、お嫁さんにも早くいくんじゃないかな」

これは母親の気楽なひとり言だ。

入院は国立の大蔵病院であった。この病院の産婦人科では嬰兒を新生室に預っても一夜だけ、あとは母親のベ

ツドに添わせ、母乳哺育を徹底指導している。そのため
に乳房をもむ献身を見習いの看護学生がしてくれた。彼
女は責任を超える良心を注ぎ、退院してからも院内から
公衆電話をかけて、余後を訊ねる熱心な人であった。嬰
児の吸引本能に慣らされると、出が悪いと思っていた乳
が出るようになるのだからふしぎであった。

「四方子の時の病院なら、人工乳も作ってくれたのに、
こは絶対だめ、お義姉さんのとこの男の児たちがここ
だから、聞かされてたけど、赤ん坊って意外と吸う力が
強いから痛くて、乳首がはれてしまったわ……」
などと言っている。

入院中、四方子は二度ほど面会に行った。母親の留守
中はお祖父ちゃん、お祖母ちゃんと寝て、幼いなりに堪
えていたものだから、もう大丈夫と思って病院へはパパ
が連れて行った。恥しがりやだから、モゾモゾして容易
に母親の膝にも近づかなかったそうだ。

昼間は義姉のところでは従兄弟たちに遊んでもらって、
淋しさをゴマかされ、疲れさせられていた。四方子にと
って大変な試練の時が流れていたものだ。二度目ともな
るとさすがに別れぎわを泣き叫んだ。病院のロビーであ
りつた泣いた。家へ帰り着いてからも、自動車から容
易には降りなかったそうである。

る機会がない。骨太な四方子はたくましい足をもって
いる。道端を四方子をかばいながら歩く。公園まではほ
ぼ三〇〇mもあろうか、大きくなったいまはバギーを押す
ほどの距離でない。

さて、公園を通りすぎたの用を足そうとする、区役所
の出張所まではさらに二〇〇mばかりなのだが、四方子
は足を止めてしまつて動こうとしない。その頑張りよう
は口をへの字に曲げて、全身の力をこめるものだ。

「ひとりぼっち、四方ちゃんはひとりぼっちなの」

これはひとり言だ。呟くように言う。

公園の中央に四方ににれる（すべり台）があり、その
頂上に立つ四方子はパパ好みの長い幼な髪を風になぶら
せ、口にくわえ、あたりを見まわしテコでも降りようと
しない。

「爺ちゃん、あっち」

ベンチの方を指さして去れと命令する。気づいてみる
と、他にももう一人爺ちゃんがいる。そして婆ちゃんも
いる。大方の若い母親たちはそれぞれの子供を遊ばせな
がら、四方山話に余念がない光景があるばかりだ。

（四方ちゃんひとりぼっち）

と言うのはそうした情景への淋しさでもあるらしい。

ブランコに乗せてやる。大きいお姉ちゃんが占領して
いる間は近づこうとしない。自分では乗れないし、まし

「赤ちゃんが泣いているよおー」
と伝えに走りながら転んだかして、
「おかあちゃんー、痛いよおー」
と叫び声が聞えてくる。

ころころと庭の方で遊んでいたのに、突然泣き叫ぶ声
が聞えた。

「おかあちゃんー、こわいよ、こわいよおー」

そのお母ちゃんが助けにくるまでは誰が行っても起き
ようとしなない。

「ネコちゃんがいたのかな、通ったのかな、どうなの
？」

「うん」

「ワンちゃんでも吠えたかな」

「うん」

どちらとも結局のところさっぱりわからない。甘えが
半分くらいあり、新生児に対抗して母親の愛をつなぎと
めようとする意識もあるようだ。こうした四方子の心証
は問うすべもない。まだママと呼ぶことが多いのだが、
母親はそれを止めさせようと思っている。（お母ちゃん）
と呼ばせる方が本能的と思われてのことらしい。そうだ、
（お母ちゃん）と呼ぶがよろしい。大いに四方子は（お
母ちゃん）と泣くに限る。

せっかくバギーも届けられていたが、押して散歩に出

てこぐすべを知らないからだ。大人に助けられることは
恥しいと考えるものらしい。要するに五分の負けじ魂な
のだ。人氣がなくなるのを見すまして、泥んこを払って
やり、ようやく乗せてやる。そして、そっと押してやる。
ギイコ、ギイコと鉄環のきしみが思わず大人に幼時を追
想させる。こうして乗せてもらったな。なにもかも順番
だなと思う。そう思うと、どうしてか熱い思いが胸にの
ぼる。

振動が止みそうになると、

「もっと！」

と叫ぶ。

「もういい？」

「もっと」

と頑張る。フリをゆるめ、どうやら満足のいったところ
で降ろそうとすると、よく停まらないうちに降りるもの
のだから、小さい躰がうつ伏せに転んでしまった。怪俄
をさせてはママに叱られる。

四方子はテレビを少々見すぎるようだ。（ひらけ！ポ
ンキッキ）、（おかあさんと一緒）とつづき、母親の勝
手仕事の時間をふさいでくれる。テレビ局も心得たもの
だ。（おかあさんと一緒）では幼児がパジャマを着る場
面がくると、
「きらい」

と、そっぽを向いてしまう。自分ではまだその真似が
できないからだ。

ポ、ポ、シュツ、シュツ、ポツ、ポーとなると、母親
も手があいて四方子の肩に手をおき、はしやぎまわる。

「ハイ、ポーズ」

で終りになる。

夕刻は六時、(ルパン三世)、(どらえもん)とつづ
いて、曜日によってP・T・Aのおかあさんたちからち
よびりエッチということで問題にされている(まいっ
ちんぐマチコ先生)にチャネルをかえる。日本語の
「参った」が進行形になるという複雑さだ。声優の同じ
番組に会おうと、

「あッルパン三世と同じよ」

ということになる。そして、ここには大人たちの立入
れぬ世界があつて、幼児をトリコにする。若い母親にも
覚えのない世界だ。

国電の「浅草橋駅」のガードをはさみ人形の町がつづ
いている。裏露路のまたその裏にも人形をひさぎ生業を
立てる店がひしめいている。四方子の初節句には(真多
呂)の段飾りを祝った。それというのも、母親の時は戦
後間もなくで品薄いころだから、ミニの三段ですませて
いた。

「四方子にはちゃんとした段飾りがほしい」

七福神は豆人形を豆巾着に入れ、女雛の裳裾の部分
をひらきおさめるという趣向で、品位も上乘だし、七福招
来の縁起も悪くない。

「これをいただこうかな、戸外は雨が降り出していま
すから、濡れないように包んでください」

「おや、雨が」

とウィンドーの方をすかし目に見て、

「お持ちかえりですね、かしこまりましてございます」
桃の造花を一對、それに羽はたきを景品に添えてくれ
た。

「七福招来、これでよし」

とひとり決めの微笑が浮んだ。四方子と早季子に七福
を、幼いものたちの幸せをと、熱い骨肉の情が燃え盛る
ようすであつた。

婚家から段飾りもわざわざ運ばれ、飾りつけを終えた。
七福神の立雛がこれに添えられた。

「……春をひた待つことのごとく、待ち請い、睦月の
晦日現れ出しより、花も長く咲き請い、若竹なしてすく
すくと育ち、御威をうれしみ……」

莊重な神官の祝詞が朗々御霊の前に奏上された。宮詣
りと節句の祝いを重ね、二月二十七日の日曜日、ささや
かに内祝いを行った。

そんなことがあつてからまた一週間が経ち、三月五日、

という成行きをもっともに思われての買物だった。
「吉徳」、「久月」、「秀月」などの大店はもちろん
表通りで、店を出ると客引きがよってきて、うるさくつ
きまとう。

「お客さん、お客さんは何を御探ですか、ああ、真
多呂。ええー真多呂のお好きなお客さん、どうぞっ」

それから先は別の人間が露路裏へ案内する勘定だ。両
の手をひろげるだけの間口の小店があり、ギリまで見き
わめる始末になり、あぐく、やはり表通りに戻ってくる。
「大店は宣伝費をかけてますから、その分お安くなり
ますよ」

と言われても安心はできないからだ。

「早季子には小さくてもいいから立雛がほしいわ」
ということ、今度は迷わず浅草橋へ出かけて行き、
まっすぐ大店の自動ドアに入る。エスカレータがあり、
季節のパートの女店員さんたちののんびりムードの人海
をくぐりぬける。すると、さすがベテランの女店員が追
ってくる。

「お客さま、何をお探ですか、あ、立雛でしたらこ
ちらへ」

百万円台のほればれする名品におどろき、さすが名品
と嘆声とも歓声ともつかぬ声を殺し、やっと一隅に、

(七福雛)

というのを見出す。値段も手ごろでほんとに安心する。

四方子と早季子は母親の実家を去って行った。まるで汐
の退いたような空しさがあとに残った。





失われた故郷——台湾

山 根 三 枝 子

「一寸、あなた知らない？ 大体八十年位前にね、中国の河南省辺りで発掘されたお墓があったそうだけど。」

それインショウ皇帝とかいう人の或いは人達のお墓なんだけどね、それインショウだったかインシンだったか——。何しろ今から三千五百年以上も昔のお墓なのよ。あなたかあなたのおむこ殿、このことに関して何か知っていない？ 台北の故宮博物院にその模型があったの——

「さあ知らないけど——。あ、でもね、そういったような事柄に関してはね、今はものすごく沢山の本が書かれているのよ。調べればなんだったって分かるようになっていくんだから。紀行文なんていかなかったって書ける位なんだってさ。」「ほんと？ ふうん。」受話器を通して娘にそう言いながら私は考えた。

「そうだ。今度の台湾旅行のことを書くとしたら調べあげねばならぬことは一杯あるけどそれはいつか又後日のことにしよう。私の見たそして感じたことを忘れない

うちに書きとめておこう。

「おつれがないので一緒にいかない？」という、いところの誘いで急に台湾旅行に出かけることになった。かつてはあんなに沢山の日本人が恰も日本本土にいるような無心の顔付で暮っていた台北市も今では日本人はすっかり追返されて異国になってしまっている。民族の引きあげなんてことあの当時はとても大変な事件であり又珍しい出来ごとと感じていたが今にして思えば過去何千年もの間、方々の歴史の中で繰返されて来たことで何も珍しい出来ごとではなかったのだ。我が故郷と言ってもよいような台北だがなつかしく語りかけるべき知り合いの顔は一つもない。しかしあの忘れられない山々——台北市の北部にある火山特有の丸みを帯びた大屯山や七星山、小学校四年生になると遠足で連れて行って貰えた子供供のあこがれだった大屯山（千二百メートル）——の姿から

始まって少女時代を過ごしたあの町角、この裏通り、学校やら公園、そして商店街など沢山の思い出のまつわりついている所を訪ねてみたい。そして忘却の彼方に消え去ろうとしているものを再確認したいという思いはかねがね持っていた。それで私は二つ返事で一緒に行くことにしたのだった。

成田を朝十時半に出発すると午後一時頃には台北上空に来る。時差は一時間なので時計を二時になおした。ずっと快晴の青空の中を飛んでいたのに台湾に近づくと雲が多くなり下界が少しも見えなくなってしまった。それで殆んど半世紀ぶりに台北市を空から眺めながら着陸する感激を期待していたがそれは叶わなかった。おまけに台北市よりかなり離れた、私にはなじみのない桃園に滑走路四キロという国際新空港が出来ていてそこに着陸した。それで空港ビルの中からソワソワと外を見廻しても全然見知らぬ風景であった。入国手続を済ませたのちバスで高速道路を走って台北に向う。三十分近くも走った頃左手に見えはじめた山々が大屯山らしいが頭の中にしっかりと覚えこんでいる山の形とはどうも違う。少し小さいしそれに何んとなく丸みのないトゲトゲしい感じに見える。おかしいなあ——あんな形だったかな？ 私の頭の中である思考が働いた。あゝそうか、この五十年の間にあの山が風雨に浸蝕されあんな風になったんだ。私はその途端、ぞっとする程の驚きにおそわれ愕然とした。あの大屯が

浸蝕に依って山形が変貌する程もそんなに長く私は生きて来たというんだらうか？!! そうだ、もう五十年近くもあれから経っているのだもの、そうかも知れない。否。理性が私を正しい判断に導いた。何百年も生きたわけでもあるまいし。バスが台北に近づくとつれて山はだんだん大きくなるし又視界も真北に山を見る位置に変わって来て大屯山も昔の形を見せはじめた。

「あれが大屯で、あっちが観音山でしょう？」と私は我慢し切れずガイドの張さんに大声で云った。「ええ、そうですよ」という返事より早く添乗員の早坂さんが「あ、昔住んでいたんですか？」と二三列前の席からふり返って云った。「そうなのよ！」台北に来た、四十三年ぶりで来たという思いで私はソワソワ、ワクワクするのであった。

台北市の観光は最後の二日間というスケジュールなので市内の松山にあるローカル空港からすぐに花蓮に行くことになっていたが、その前にすぐ近くにある忠烈祠だけは見物した。松山空港、それは昭和十三、四年の頃わが日本渡洋爆撃隊がそこから支那大陸の爆撃に発着していた飛行場なのだ。しかし今、すぐ近くに忠烈祠（日本での靖国神社に相当するもの）が建てられていて八年前亡くなった蒋介石をはじめ約十萬の忠勇なる支那の兵士達、そして我が同胞の敵でもあった兵士達の位牌が広々とした立派な殿堂に祀られてあった。

「とても素適よ」と北京出身のバスガイドの女の子が云ういでたちでハイティーンの衛兵が直立不動の姿勢で入口に立っていた。一寸抵抗のある気分だったが一応拝礼させられたのち空港から中型機で花蓮に向った。三十分足らずで花蓮着。

台湾は九州より幾分小さい島。Formosaと横文字ではいわれる。辞書を見ると「昔この辺りを通るポルトガル人がその美しさを感じて呼んだ名」とある。つまり「うるわしの島」とでもいったらよいのだろう。中央には三千米以上の山々が連なり、花蓮のある東海岸つまり太平洋側は海辺近くまで山がせまっている。西海岸は比較的平野が開けていて海を隔てて中国大陸がある。西部は昔から或程度の文化は入っていたが東海岸は地形のせいか離れ島が存在であったようだ。花蓮空港は空軍基地も兼ねているので写真は撮らないようにとの注意があったが、ろくざっぱ飛行機の姿も見えないような閑散としたところであった。ただ格納庫はコンクリート製のかまぼこ型の建物で、屋根にも傾斜している側面にも芝草が生い繁ってカムフラージュの役目を果たしていた。折柄サアツと来た小雨に、間近にせまってみえる山の姿も雲に見え隠れし、田舎風情のこの空港は遙か遠くに来たものだという淋しさを感じさせた。皆々傘をひろげて足早にバスに乗り込んだ。ホテルに向う途中、大理石工場の売店に立ち寄り円を元に換えてもらった。買物は円

その新しいものはお粗末なものであったので残念なことに思えた。途中で八代亜紀の持ちうた「雨雨ふれふれもつとふれ」を彼女と同じ位上手に歌って皆の喝采を浴びていた娘もいた。

話を五十年前前に戻してみよう。昭和八年位のことだったと思う。台北の第一高等女学校の四年生の時に夏休み中の行事の一つとして「ピアン越え」というのがあった。それは東北部の土場という材木集積所のある駅迄は汽車で行くが、それから先は毎日四泊か五泊するだけの距離を歩いて台湾中部にある日月潭まで行き台中に出て汽車で台北に戻るというコースであった。山中で宿泊する所は高砂族の部落、当時は蕃社といわれていた所であった。今は自動車も通れるのではないかと思われる位の道路が出来ていることは地図をみると分かるが、その当時は巾一米そこそこの道だった。多分何百年も前から或いは千年以上も前から山岳部族の部落を結ぶ道であったのかも知れない。彼等は約二千年前にポリネシアから移って来たと思われている。山の中腹位のところをうねうねと進む道は鞍部を登っては降りて、一番高い鞍部がピアンで、たしか二千メートル以上ではなかったかと思う。其所が一番の難所だったのかこのコースのことは「ピアン越え」と言われていた。まわりには三千米級の山々が聳え、うっそうとした木々の下、又

でも出来る由だがチップなどの小銭が必要なので張さんの云う通り二万円位を元に換えた。十元は六十三円、紙幣に一〇〇のマークを見たら六三〇円と考えればよいのだ。町はずれで空港寄りのところにある中信花蓮大飯店というホテルに着いた。この小さな町でもホテルだけはタロコを控えているだけに大きく近代設備が整っていた。夕食は団体一同三十人が三卓に分かれて、はじめて顔を合わせて中華料理をつついて食べた。私がいとこと二人で泊った五階の室の大窓からは暗くなりかけた太平洋とかなり整った小じんまりした花蓮の町がよく見渡せた。夕食後バスでアミ族文化村に出かけた。暗くて淋しい田舎道を通り「阿美族文化村入口」という看板のかかった門から中に入った。彼等高砂族の生産物を売る屋台の店が立ち並び、裸電球に照らし出された彼等特有のアクセサリーや原色の赤や緑の子供服が目についたが、せかされて奥の方の芝居小屋の様な建物の中に入った。暗くてよく判らなかつたが藁か茅のようなもので円形の屋根を葺き、内部は円形に観覧席の椅子が並べられ真中の低いところが舞台になっていた。そこでアミ族の若い娘達の歌や踊りが始まった。観光客目あての金かせぎなのだから何もこんなものを見る為に、はるばる来る必要なんかないという代物だった。高砂族は高砂族らしい素朴で原始的な雰囲気があつてこそ値打があるのだが生じっか交通が発達した為に新しい文化風俗が入りこみ、しかも

は灌木の間を通る道であつた。ピアン鞍部に近い部落で過ごした一夜のあの美しい星空は今だに忘れられない。一つ一つの星が平地で見るとより大きく、ピカピカという金属音を出すような感じで数限りなく満天に輝いていた。

今から五十年前のあの時点では台湾人、つまり鄭成功の平定のおと十七世紀頃に台湾の平野部に移って来た或る程度の文化を持った支那からの漢民族と山岳部族の間には殆んど同化というものはなかつたようだ。交通の非常に不便な険しい山地という地理的条件も大きな原因であろうが、どちらも縄ばりになるべく犯かさないようにして、亡ぼしたり亡ぼされたりすることもなく、したがって同化がなされなかつたわけだと思う。それで二つの民族は文化風俗は勿論、生活程度や様式はすべてはっきり区別出来た。山岳部族つまり高砂族は弓で狩猟をやったり粟や芋を作り、蕃布と呼ばれていた織物を生産し、細々としかし絶えることなく、それかといって発展することもなく承らえて来た部族であつた。日本の植民地になつてからは各蕃社毎に駐在所が置かれ巡査達が駐在して治安を計り同時に小さな学校の教師も兼ねていた。その上駐在所は宿泊所も兼ねていた。私達は、そういう宿屋に泊めて貰ったのであつた。或る部落では弓の名人が日本の弓とは違つたやり方で獲物を見事に射る達人ぶりをみせて呉れた。又或る部落では日本の踊りを乙女達に

教え私達も彼女達から盆踊り様のものや栗もち搗きの踊りなどを教えて貰った。満天の星の光の下、かがり火を燃やしている部落内の広場で歌った蕃歌——「イワソリン ムーカアエーバイ ムウカアエーバイ……」と単調な繰返えしの多い節まわしだが強弱あり高低あり輪唱のようにもなっていた。皆手を背で組合わせ輪になって左の方へそして又右の方へと動きながら踊るのであった。あの当時の高砂族は痩せていて、しかし精悍な感じで強そうであった。裸に近いような身なり、おしゃれの為のいれずみを女でもやっていた。彼等には幾世紀にもわたる厳しい生活のしみ付いた顔つき、体つきがあった。原始的な魅力だ。

今このアミ族文化村でみる彼等は何んと変ってしまっただことだろう。道路が出来、車、そしてテレビ、ラジオ、観光客の落とすお金などの恩恵？を受けてすっかり変ってしまっている。娘達は厚めの化粧、アイシャドウ、衣裳も形は伝統的なものだが材質も色合も変わりあざやかな美しい色合いだ。昔のあの単調な色合いの、辛じて身をかくす衣服、生々しい鳥の羽のささったヘヤバンド、木の実のアクセサリー、どぎつく又いたいたしい感じの耳輪など、といった様子はすっかり消え失せている。一般観光客はそれでも面白そうに写真を撮ったりしていった。私は芝居小屋内にいたアミ族少女の売子から栗モチ

とヘアバンド——それはビニールのはちまき様のものに緑に染めた羽が両脇にたれ下がり、ピンク、白、黄色に染めた羽のさゝったものを——を買った。孫達に蕃人の恰好を見せてやろうと思つて。

ショウを見終えてバスで暗い道をホテルに戻った。道路の両側は商店が並んでいたが、それ等は半世紀前の姿と殆んど変っていないのではないかと思われた。古びた家並の店、粗末な陳列ケイスの後ろや横には埃をかぶった南京袋につめた米か砂糖のようなものが積んであり、それ等の間で女や子供が何かしているのを暗い電灯がぼんやりと写し出しているのが見えた。ろくに品物もないような店にそれでも日立電視箱（テレビのことと想像出来る）とか日立冷気などという看板が出ていた。

翌朝は早目に出発してタロコ峡谷に出かけた。私は在台当時にタロコという地名は聞いていた。しかし交通の便のない所であったので冒険好きの屈強の若者が出かけるか、高砂族が山奥から商用で花蓮に出て来る時に歩いて来たと思われる峡谷沿いの細い危険な道であった。ガイドの張さん、彼は小学校三年位までは日本語で日本人としての教育を受けた、四十六、七才位の男性だ。彼は話した。

「私も若い頃にこゝ、タロコに来ました。花蓮からこのタツキリ溪が海にそぐ辺りまでの二十キロは自転車に乗って来ました。そして左に折れて溪谷沿いに更に二

十キロ歩いて川の源流にまでいきました。あの時は道中も一メートル位で川には吊り橋がたれさがるようにかゝっていました。しかしこの観光道路が今から二十数年前に出来上りました。今では誰でも大型バスでこの峡谷沿いのドライブを楽しみ、川の源流にまでいくことが出来るのです」

バスが進むにつれて川巾が狭くなり始めた頃だった。ふと左上方を見るとこんもりとした茂みのある山の中腹に十字架を掲げた教会があった。こんなに淋しい所で一体どんな牧師がどんな人達のどんな悩みと取組んで宣教の生活を送っているのだろうか。

進行するにつれ川巾はますますせばめられ大岩小岩のゴロつく川床を滔滔と水が流れている。この辺りの山は石灰質の岩が多いということで、その為か美しいブルーの水はいくらか白濁している。川の兩岸の高い岩山からは所々滝がさまざまな様相を呈して落ちて来ていた。道路は岩をくりぬいたトンネルを通ったりした。途中で一同バスから降りて谷川をのぞいたり写真を撮ったりした。遙か下方をうずまき泡立ちながら谷川は流れ又兩岸とも今にも倒れかかってきそうな岩石の絶壁がそそり立ち足もすくむ思いだ。「万丈の山、千尋の谷」という言葉はこんな情景にピタリの表現だなとうなずかれた。これでは何か事故でもあればそれっきりで救助作業なんて絶対に出来ない地形だ。張さんもそう言った。

途中断崖絶壁の中腹にまるで鳥が巣でもかけたように祠が建てられていた。

「この道路工事で死んだ人、千二百人がまつられてあります」と張さんは説明した。私は○が一つ多く百二十人ではないかと思った。何故って彼の言うことには時々誇張があったので。

張さんは特異なタロコの地学的説明をしたが私は少し聞きそびれて全部は聞くことが出来なかった。

「台湾は四十年位前は中国大陸の一部でありました。それは此所の地質を調べると分かるのです。くいちがう断層、そして又土地の隆起もありました。この辺りの岩石の上部は揚子江や黄河の流域にある黄土と同質のもので黄褐色の砂岩になっています。下の方は大理石で白っぽいもの、うす墨色の縞模様の入ったものから黒いものうすみどりのものがあります。緑の一段と濃くなっているところは翡翠になっています」昔から台湾翡翠といっていたのはこれだと思った。私も一つや二つアクセサリーに持っている。たゞみどりの色があまり鮮やかでないので宝石としての値打は低いと思う。

このタロコ峡谷を奥に控えた花蓮には大理石工場があり騒音と砂塵をたてて大岩石を切ったり磨いたりしていた。石材に仕立てられた大理石は箱につめられ、全部が横浜に陸揚げされているということであった。旅行から帰って先日京王デパートに行ったらハッとした。一階入

口の床はタロコの大理石が使ってあった。

工場の一部は土産物屋になっていて大理石の加工品や翡翠の細工物など大小さまざまなものがあつた。私はネックレスやネクタイピン等には心を惹かれなかった。しかしタロコの石には惹かれた。それで店の片隅にあつた白と、うすみどり色の大理石、そしてそれが翡翠に変わるあたりの緑色の石などを翡翠の魂りと一緒に買った。ところが翌々日に訪れた台北の故宮博物院に陳列されている出土物や宝物の中に私が手に入れた石と殆んど同質のものがあつた、よけいにこの石ころは魅力あるものとなつた。お土産にする積りだったのが、もう誰にもやりたくなかつた。

花蓮から四十分位飛ぶと高雄に着く。比所は平野が開けている為に最近特に近代工業化が進んだ町だそう。空港からは八車線の高速道路が港まで続いていた。昔は美しかったという愛河が町の中央を流れ、かつては恋人達が恋を語り合う川辺であつたそうだが今では公害の為にひどく汚されて正に墨汁そのものの色合の水がよどんでいた。「もうこの河には恋人同志はやって来ません」と張さんは言った。台北市のヨーロッパ風のホテルの中に右往左往していた白人種の人達、彼等は高雄をこんなに汚し安価な台湾人の労働力を利用して懐をこやしているのではないかなと思つた。

高雄は道路が立派な割には末だ乗用車の数は少いよう

した。私はかねがね一度此所に立つてみたいと願つていました。今度この旅行に参加したのもその為です」

私は五十年前も昔のこと修学旅行でこのガランビ灯台に來たことがあつた。当時は屏東までしか汽車がなくて、そこから百五十キロ位は二百人の生徒達が分乗した何台ものタクシーを連ねて埃をもうもうとたてながら來たものであつた。皆で写した女学生姿の写真のバックにある灯台と白ぬりの塀は昔のまゝ變つていなかった。變つてゐることは此所にも蒋介石の銅像が遙か中国を望み見て懐かしがっているように建てられてゐることだつた。バシー海峡の海は南国の陽に昔日と同じ美しい青色に輝いてゐた。灯台から少し離れた所にある猫鼻岬には展望台やさまざまな食べ物を売る屋台の店があり皆で西瓜をたべた。観光客も沢山いて賑つてゐた。近くにはサイザルの灌木が生い茂つてゐた。一寸ユツカランに似ていてこれから麻に似たせん維が採れる由だつた。

ガランビ灯台から五キロ程北に戻つた所に墾丁公園がある。領台当時は総督府に属する林業試験場であつた由で大尖山の裾野に広がる熱帯植物園になつてゐた。中を案内して色々な木の説明をして呉れる人は汪さんとかいう五十代も半ばを過ぎたかと思われる人で、日本人としての教育を受けもとはこの試験場の職員であつたそう。説明も中々上手でさもない日本語だが身ぶり手ぶりも面白く早口に喋ることが出来た。

でオートバイが景気よく走りまわつてゐた。相乗りも随分多いが警察も黙認してゐること。若いパパが前に子供を乗せ、後ろには妊婦のママが子供を背負つてパパにしがみついているなんて生々しい感じのオートバイが沢山走つてゐた。乗合バスの姿など殆んど見かけなかつたので、やむを得ずのことであるのだろう。

翌日は島の最南端であるガランビ灯台にバスで出かけた。途中枋寮という駅の近くまで來た時だつた。張さんは説明した。

「見て下さい。この辺りの海岸は砂地で遠浅です。大へん上陸し易い所です。日米戦も末期になつた頃、此所に米軍が上陸するという噂が流れました。それは彼等の謀略だったのですが日本軍はこゝに軍力を集中させました。私は子供の頃、此所からずっと奥地の山麓に住んでおりました。私のおじ達は此所に壕を作つたりする為にかり出されました。若し本当に此所で上陸がなされていたら私は今どこにいるか知りません。しかし比所に上陸するように見せかけた米軍は沖繩に上陸しました。それで私は今こうして喋つてゐることが出来るのです」

私の団体の中に六十才位の男が夫婦連れで來てゐた。昔の軍人のおもかげを幾分残している彼は言つた。

「私は昔久留米の士官学校を出ると間もなく此所、枋寮に來ました。あの海岸から上陸したのです。張さんの言うように当時此所にはかなりの軍力を結集したよう

で入口に近い所に竹の繁みがあつた。この竹は面白いことに丁度、有刺鉄線のような具合に刺があちこちから生えてゐた。その昔山岳部族が夜の間に山からおりて來て台湾人の畑から農作物を盗ろうとやつて來たそう。それでこの竹を倒して畑のまわりにめぐらし少し土をかぶせておいたそう。裸足で暮らしている彼等は足をさゝれ痛くてとび上がつて足早に山に逃げ歸つたそう。又むくろ樹という木があつてその木の実が石けんの役目をしたそう。汪さんは実際に実をつぶして手になすりつけその効果を見せてくれた。又香水の役目をする草がありよく揉んで体につけるとよい香りがした。汪さんは説明した。

「むかしはね、高砂族の花嫁さん、この石けんで体の垢、おとすネーとっても臭いからねー」と顔をくさそうにしかめて言いながら脇の下など一生懸命こする真似をする。「それからこれ取つて、もむねー、そしてこれつけるねー」と香水草を体につける真似をする。そしてふんどし一つを身につけ腰まわりには大きな葉っぱをつけて隠し、胸元にはハイビスカスの花をつけて乳房を隠し「ハイ、これできれいな花嫁さんねー」と自分の胸にハイビスカスの花をつける汪さん。皆はドツと笑つた。随分原始的なことだがあまりにもアーティフィシャルになり過ぎてゐる昨今の花嫁さんの装いより迫力があつて素適ぢやないかという氣もした。

十三色あるというブーゲンビリヤの花が咲き乱れ、ポインセチヤ等まるで雑草のように花共々生い茂り、その他ピアノの材料になる貝殻杉、マホガニーか黒檀になる毛柿という木、椰子もココヤシ、こん棒ヤシ、とっくりやしと沢山の種類があった。

高雄では国賓大飯店という立派なホテルに泊った。室の調度品など高級な材木の製品で日本で多く見かけるような、はり合わせの板のものではなかった。家具だけでも若し日本でいったら百万以下では買えぬ品物、やはり材木資源の豊富な台湾なればこそと思った。

夜は食べ物の屋台店がならぶ街に出かけた。おいしそうなもの——えび、かに、たこ、貝、いから、とり、ぶた、もつ類、その他得体の知れぬものが生のまゝか調理されたりして売られていた。果物も多かった。

翌日高雄から特急だという列車に乗って四時間かかって台北に戻って来た。台湾で一番台湾の人達が日本人に見せたいものは国立故宫博物院であるらしい。張さんはバスの中で説明をする。

「蒋介石が支那大陸から台湾に渡って来た時に彼は中国にあった沢山の宝物を軍艦二十隻に積んで運んで来たのです。そして士林に故宫博物院を建ててそれ等の品物を陳列しました。陳列しきれぬ沢山のものはあそここの山の洞穴に温度も湿度もよい具合に保てる建物を作りあの中に大切に保管されてあります。一年に四回陳列品は換

えられています。大英博物館やルーブル美術館に匹敵する程の博物館であるのです」又張さんは少しオーバーな言い方をした。軍艦二十隻だって？怪しいものだ。それに千年の昔の昔であった所から始まり何世紀にもわたってヨーロッパの富と権力に依って育てられて来たルーブル美術館などとは一寸比べ物にならないような気がするが。

博物院や忠烈祠のある丘陵地帯の山ふところには領台當時は台湾神社があった。当時教育の精神の拠り所とするものは万世一系の天皇であり天皇こそ絶対的なもの即ち神であった。台湾神社には北白川宮能久親王殿下をまつり年に一度台湾神社例大祭という日を決めていた。その日には学童生徒学生は皆服装を整えきびしい躰けのもとに神社参拝をやらされたものだった。台北の中心から四キロ程はある街道を延々と学生の列が続いた。御影石の大鳥居、洗い清められたような玉砂利の道、青銅で屋根を葺いた神殿造り——それ等のものは皆たたきつぶされてしまっているのだ。そして円山大飯店という支那風の外観を見せている立派なホテルとレストランになっている。近くを流れていたキールン川、その川辺には青々とした田園がひろがり、そこには竹やぶや台湾人の農家などもまばらにあったが今ではビルや橋梁の陰でバスで走ると見落してしまうような川になっていた。

国立故宫博物院の正面には蒋介石の銅像が立っていてそこで旅行社側が二人づつで写真を撮ってくれた。これは張さん側の趣味に叶った撮影場所なんだろう。私はいとこの君ちゃんと蔣さんの三人で写真にうつっている。蔣さんの顔は円満で完全なる人格を示すような表情をしている。その昔、日支事変の頃に「憎き蒋介石め」として子供心にきざまれた蔣介石とは大そう違った感じだ。彼は米国の援助があったとはいえよくあれだけ抗日戦争を続けることが出来たものだと思うし、又その抗日の理由にも正当性があったに違いない。それにしてもこの伯父ちゃんのような感じの彼とどうして互いに話し合いに依る譲歩が出来なかったのだろうか和蔣さんの顔を見て考へる。

博物院の中に入るとすぐの所に殷商皇帝の墓の模型があった。四方から傾斜した道路が中央で十文字に交差する。その一番低い中央の部分が棺置場になっている。

「棺のすぐ近くのこの場所に数十人の白骨が出ました。それは殉死者のものです。墓から大分離れたこっちの方からは首なし白骨が沢山出ました。それは墓を作ったモンゴリアン奴隷達のもので区別出来ぬように首を切った川に流したということです」張さんは説明する。「はい、次の室にいきます。此所にある沢山の銅製品はあの墓から掘り出されたものです。これは皆今から四千年近くも昔の殷の時代の文化を示す貴重なものです。これをみて

下さい。これは酒を呑む器です。こゝからシヤクが出ています。これがあごひげに引かかって酒が沢山飲めなように仕掛けられてあります。これから『癪にさわる』という言葉が出ました」張さんは更に続ける。

「はい、これみて下さい。これは亀の甲、こちらは獣骨です。皇帝が国政で決定すべき事柄に思い悩み迷った時に亀の甲で占ったのです。甲を火に焙ると先づ縦に一本び割れの線が出ます。①こうですね。次に横に一本出て、②こうなります。それを口で喋るので「一口」ということで占という字はこうして出来たということです」

「はい、みなさん、これ何んの形としますか？これは亀の形を翡翠で彫ったものです。これは棺のふたなのです」私は二日前にタロコで見た石、うすみどり色の大理石が色濃くなってひすいに変る辺りの石のことを思い出した。三千七百五十年前に、私がきょう見るこの石と同じ石で皇帝の棺のふたが彫られたということを知るとは大きな感動だった。次の室には清朝の頃の美しい色どりの数々の琺瑯器や少数であったが鉄器類、又世界的な宝物だというひすいの大屏風等があった。他に書、画等もあったが何しろかけ足見学だったので充分見ることは出来なかった。重くて困ると思ったが写真入りの英文の説明書を一冊買った。日本語のは無かったのだ。

総督府の建物は赤レンガでコマゴマと手のこんだ窓や

ペランダの作りは古めかしくて美しい。赤い色は昔と変らぬ美しい赤だったが隣りの少しだけ見えていた法院（裁判所）のうぐいす色の美しかった外側のタイルの色は黒ずんできたなく見えた。日本政府の權威を象徵する為の建物だったというこの総督府は明治の終り頃か大正始めに建てられたと思うが、十二階のルネッサンス風の塔もついでに其の頃としては立派なものと思われたことだろう。今では総統府と呼ばれ正面は大広場になっている。この広場に立ち総督府に向って左手の方を見るとクリム色をした四階建のなつかしの母校台北一高女が昔のまゝの姿で見える。何んとも云えぬ溜息まじりの気持で眺めていた私はふと気がついた。もうみんなは観光バスに戻り、一人で茫然としている私を窓越しに見ている。一高女の出身者であることを知っている張さんは

「いいから、いいからあ、写真撮りなさい、末だバス出ないからあ」と大声で言った。私は学校の方に走って行って校舎の柱にでも抱きつきたいような気がした。しかし道路巾は広く、学校までは二百メートル位はあるようだし、沢山の車が道路をふさぐように走っていた。そしてもう身軽く走ったり出来なくなっている年をとった自分の体の重みをもどかしくあらためて認識するのであった。総統府の真向いに、といつてもかなり離れた所だが中正記念堂がある。蒋介石の偉業を記念する為のものが中正記念堂には公園や音楽堂なども併設の予定という

こんな立派なお堂を持つ自分達の誇りに満ち満ちていた。ガイドの張さん、つまり東南旅行社外人旅行部係長、張達淳さんは観光の途中バスの中で口がすいた時に自己紹介をした。

「私は小学校三年生までは日本語で教育を受けました。父は屏東から奥に入った所の村の公学校（台湾人の児童が入学する小学校のこと）の先生、後に校長までやりました。ですから子供の時は台湾の南部で育ちました。高校を出てから台北にある師範大学に入学し卒業してから屏東に戻って女子高の教師を八年間やりました。今から十年位前に、貯めたお金で日本に自費留学しました。はじめ拓殖大学で一年日本語の勉強しました。その時は中曾根康弘が学長でした。それから教育大学の修士課程に入りましたが学力が足りないので一年で駄目になり台湾に帰りました。池袋や茗荷谷辺りのことはとてもよく覚えております。私がはじめて東京に出た時、国電の中でみんなが僕のことをみて勝手にいろんなことを考えてるのがよく分かりました」張さんは四十六、七才位のやせ型の男、ガイドの仕事が大好きなようであった。タロコ峡谷の地学的説明や故宮博物院の出土品の説明に至ってはもうすっかり自分が青銅器などに感激し切ったような名調子であった。女子高教師の経験もあったことで説明にも専門的知識の裏付けがあつて要を得ていた。ただ時々一寸誇張したことを喋るのはよくなかった。張さんは

ことだがそれ等は未だ出来上っていなかった。大きな大きな彼の全身像と、それを容れる為のお堂の役目をする建物は出来ていた。何しろその大きさは驚くばかり、高さは七、八十米ということでも内部の床面積は三百坪以上ではなかったかと思う。建物の壁すべてには、あのタロコの大理石がはりつけられている。銅像の両わきには衛兵が人形の様に直立不動で立っている。

「気を付け！ 礼！」と張さんに号令をかけられた私達は最敬礼をした。銅像の為にこんなにお金をかけて大きな建造物を造るアイディアがこの現代の世にもあるのかと、そのことが面白く感じられた。そしてローマ市内でみたパンテオンのことを思い出した。大きなドームのある二千年位前に建てられたその神殿の内部の高い所には丸い円にそって多神教時代のギリシャの神々の像を並べた棚が今では空っぽになっていた。そして少し下がった所の棚にはキリスト教の聖人の像が一つか二つあったようだが今では内部でデモ隊が集会を持ったりするということだった。二千年以上経っても立派に立っているパンテオン。そしてこの蔣さんのお堂も原爆など落ちなければ二千年以上もこの立派な姿を保つことであろう。しかしその中味の蔣さんの代わりにどんなものが次から次に祭られていくことだろうか。しかし張さんも衛兵もそんなことには露ほどの疑いも持っていないようであった。ただただ、蔣さん蔣さん、尊い蔣さんという思いと

続ける。彼は自分のことを説明するのに五胡之乱まで持出した。（歴史の教科書で調べたら五胡之乱は四世紀の頃の出来ごとだった）

「昔五胡之乱というのが中国北部でありました。その時、はみ出て追出された種族が広東省や福建省辺りに南下して来ました。そこでも嫌われて、はみ出てしまった客家族が僕の祖先です。山あいのよくない土地に住まわせられていた私の祖先達はやがて台湾に渡って来ました。しかし鄭成功の台湾平定後に渡って来ていた広東や福建の人達が既に勢力をひろげていましたので、我々の祖先は海の近い平野には住めず奥の方の、高砂族との間位の所に住むことになったのです」

私がはじめて張さんの顔をみた時、何かもの悲し気な暗い、しかし決して弱くない雰囲気のごとく漂っていることを感じた。鼻は高くて鉤鼻、悲しさに鋭さの交じったような目付、口元は意外と小さい。紺サージの背広は使い古されて少し光り気味、Yシャツを着て何んの印象にも残らないネクタイを締めていた。毎日のように揺れ動くバスの中で立ち通して説明したり皆の荷物の運搬の世話やらでガイドの仕事も容易ではなさそうだった。先生でもやっていた方が楽ではないかと思われるがガイドという仕事は割がいいのかと思った。それとも蒋介石と共にやって来た中国人達に圧迫されていて自分で願う程の職にありつけないのかなと思った。

台北の下町にある龍山寺、これは丁度東京の浅草寺に相当するような寺だ。その建物は赤や緑でキンキラに塗られ支那風の両端がそり返った屋根をしていた。中の仏像をみるとあゝ仏教だなとすぐ分かる。約三百年前に台湾に渡って来た人々に依って運ばれて来た仏像の由。その仏像の横には媽祖^{マツ}といって航海の神様もまつられてあった。私はそれを見て急に少女時代によく聞いた歌を思い出した。

野良の小道を水牛^{ウシ}の背で

* サマが来るぞえ 歌で来る

大屯霞が ホレ 春だ

* サマ=恋人

* ホエ=占いをする道具

椰子の並木がたそがれて

胸も真赤に夕焼ける

七夕星が ホレ 夏だ

媽祖の祠に香たいて

サマを占なや 何んと出る

* ホエが冷たい ホレ 秋だ

あたりは観光客で混雑し線香の煙がモウモウと立ちのぼり支那の音楽がやかましい位に鳴っていた。私は張さんの耳元でささやいた

毛 皮

見せたいものがあるから店の帰りに寄ってくれ、という姉からの電話で、私は早い目に店を閉めた。姉は茶の間の炬燵で待っていた。正面の長押に、黒いコートがかかっている。

(ああ、これだな)と私は直感した。

「家の方、大丈夫」

仏壇から下げた柿の皮を剥きながら姉が言った。

「うん、梢に電話しといた」

柿を頬張りながら私は答えた。

「帰ってから御飯作るんじゃ、大変ね」

「そう、それが一番辛い」

「遅くなっちゃうわね」

「うん、でもどうせ杉夫は遅いし、梢は晩御飯、殆んど食べないから」

「え、どうして」

「太るから夜は食べない方がいいんだって」

「張さんこの歌知っているでしょう?」と云って小さい声で歌いはじめた。

マソの祠に香たいて

サマを占なや何んと出る

.....

「ああ 知ってるよお、知ってる。なつかしいうた!」と云って嬉しそうな顔をした。その顔は台湾人のものでもないしそれかと云って日本人のでもなかった。

往復時間もいれて四泊五日という日程は短かすぎた。

おまけに最後の日の午前にあった自由時間は中正記念堂に行ったり張さんの側の都合で連れていかれた土産物屋での買物時間にとられてなくなってしまった。その自由時間こそ私が強く望んでいた思い出の場所訪問の時間であったので大へんな心残りがしたが致し方ないことであった。台北の街はあまりにも変っていた。人口三十万余りの街から二百万の街に生長していたので何所が何所であったのかさっぱり分からないのも無理ないことだ。しかし折があったら台北だけにもう一度行ってみたいと思っている。失われたふるさとに蘇る何ものかを摘みとって来たいものだと思っている。

柴 田 富佐子

「ちっとも太ってないじゃないの、あの人」

「あれでも太ってる方なんだって」

「若い人があんまりガリガリなの、魅力ないと思うけど」

「ねえ、あきれたもんよ。そのくせ結構お腹すくもんだから、ちょこちょこ食べたり飲んだりして、ちゃんと御飯食べるより却って食べてんじゃないのかしら」

「贅沢よね」

姉と二人で物を食べてると、私には決って想い出す光景がある。

終戦直後の春休みであった。母の実家に疎開していた私は、トラホームに感染し喉が腫れ上ってしまった。早く手当てしないと失明してしまうかもしれないと、姉は母を説得し、無理して私を自分の大学の病院へ入院させた。戦災をまぬがれた病院は医療活動こそ行っていたが、入院患者の食事を出せない状態であった。姉は田舎から

持って来た食糧を病院の隣りにある寄宿舎へ持って行き、二人分の食事を作った。

或る時、姉は嬉しそうな顔で飯盒を私の前に置いた。

「ホラ、いい匂いでしょ」

確かに蓋の隙間からはいくとも違う匂いがしていたが、それが何の匂いなのかは解らなかった。

「なに、なに」と手を伸す私を抑えて、姉はゆっくり蓋をとった。

「あ、イカ、イカの匂い」

胴体に横条を入れたイカの丸煮と同じ匂いがした。それは母の好物で、よく夕飯の膳に載った。

「ね——」

得意気に姉は飯盒の飯を私に見せた。薄茶色の飯の所々に小さく切ったイカがあった。おかずの材料が何もなくなつて、残っていたスルメを使ったのだという。

「だから、これはイカ飯じゃなくて、スルメ飯」

熱いスルメ飯は旨かった。

「想い出しちゃった」

「スルメ飯でしょう」

姉も同じ事を想っていた。私は自分に忘れられない事が、姉の心にも又忘れられずに残っていたと知って嬉しかった。矢張り姉妹なんだという実感が、姉に対する私の心をひどく素直にした。

「一寸これ着てみて」

思った通り、姉は長押のコートを手にして私の方へ差出した。

「気に入って買う積りで持って来て貰ったんだけど、私には長いよ。胸も少しきついし、あんたなら丁度いいんじゃないかと思って」

「でも、毛皮なんて、あたしいらぬわよ」

「いいから着てごらんさいよ」

「こんな高いもの、買えないわ」

「まあ、いいから着てみなさいってば」

何度も促されて、私は黒いそのコートに手を通した。

シルバーフォックスの大きな衿がついたスエードのコートは、まるでオーダーメイドのように私の体に合った。

「ホラネ、あんたならびつたりだわ。いい色でしょう。一目で気に入っちゃったのよ」

衿元の毛皮を撫ぜながら姉は言った。

「でも、コートは去年買ったばかりだから、あたしいらぬ」

私は脱いだコートを姉の方へ差出した。

「よく似合うわよ。買ってあげるから着なさい」

「いらぬ、こんな高いもの」

「あたしも一枚買ったの。どうせ月賦でいいんだから、一緒に払っとくわよ」

「でも」

脱いだコートをハンガーにかける時、私は11号という

コートのサイズを見た。小柄な姉に11号は長過ぎる事は初めから解っている筈だから、姉は私のために選んだのに違いないと思った。

母が亡くなった後、姉は何かにつけ私の母代りのように振舞おうとしている。

母は用もないのによく私に電話をくれた。

「何か用」と聞くと、

「うん、別に用はないけどさ、どうしてるかと思って」診療所にかかりきりで、殆んど会話らしい会話を交す暇もない姉と二人きりの生活で、母は淋しかったに違いない。しかもその姉とは、妻子のある男との事で気まずい言い争いを重ねていた。母が亡くなって、気がつくとな姉がよく電話をしてくるようになっていた。

「どう、お店の方、忙しい」

「まあね」

「あんまり無理しないで働きなさいよ」

医者だけに、電話口でうっかり咳でもしようものなら、「風邪ひいてんじゃないの、注射してあげるから今夜寄んなさい」

と言われる。それが何より怖い。

母の死後、私は姉の所へは行かないで済ませる算段ばかりしている。行けばあの男に会うかもしれない。

兄嫁の口から、母の死後、男は姉と同棲している事を聞いている。三人の子供を結婚させたら、必ず妻とは離

婚して姉と結婚する約束が、男と姉との間に交されているという。定年を過ぎた男は、母の代りにプライベートルな家事の一切を取り仕切っているという。元来が器用な男なのだろう。

「おとなしいいい人よ。会って見てごらんさい」

兄嫁は平気でそう言うが、家族ぐるみ姉に養われているという男に、まだ若い男でないだけかもしれないが、私は道義的な嫌悪だけでなく、生理的に馴染めないものを感じている。それは、兄にとっても同じようであった。兄嫁は男と交際しても、兄は避けて会おうとはしていない。それが血を分けた者の感情だろうと私は思う。

姉は何か男を兄弟の環の中に組み込んで男に正当な立場を与えたいとあせっているように見える。毛皮のコートも、私との距離を縮めようとする姉の意図に外ならないと私は勘繰っている。私には姉の切ない気持ちは理解出来ても、男の身勝手さ、不甲斐なさを許す気にはなれない。自分も主婦という立場にある以上、夫にもし男と同じ事情が生じたら、という気持ちの方が強く、私の気配りはどうしても男の妻の方へ傾いてしまう。面と向って姉にその非をただせない以上、私には逃げるしかないのだ。

「梢ちゃん、どう、ちゃんと勉強してる」

「うん、まあね。よくやってるようよ」

「セーターでも買ってあげるから、学校の帰りに寄る

ように言つてよ」

「そうね」

私はいつ男が現れるか、そればかりが気になって、早く立去りたい気持ちを抑えかねていた。

時計がゆるやかに九時を打った。

私は初めて時間を気にする風をして、

「あら、もうこんな時間、あんまり遅いと明日辛いから」

仏壇にもう一度手を合わせ、手早くコートを羽織った。

「もう帰っちゃうの、せわしないのね」

姉は黒い毛皮のコートを和紙製の袋に納め、私の方へ押してよこした。

「本当に、あたしはいらないんだけど」

受取りながら私は言った。

「そんな事言わないで、折角買つてあげるって言つてんだから、気持ちよく着てよ」

「そう、じゃ、ありがとう」

私には恩に着ないぞ、という気持ちがあつた。高いものを貰ったからと言って、男を許した訳ではないんだと、心の中で何度も呟いた。

連載

〇町〇丁目〇番地(二)

山口 健 二

初夏の日が暮れなやみ、涼しい風がようやく築山の樹木の葉を鳴らして、長廊下の軒から垂らした縁とりのある古風な簾を越して雪洞の灯をゆるがした。森之助は電灯を消して雪洞をつけさせ、涼味を味わおうという算段で、敷居際に手枕で横になっていた。かれの目は眼鏡の中で半眼に閉じられ、耳は長廊下のつき当りにある離れ部屋の一と廉作の会話をききとろうとしている。貞一が別棟になっている自分等の家から離れ部屋の廉作のところへ押しかけたらしい。別に職を持たず、四十を越した貞一の初夏の夕方は、独り息子の貞造を妻のき志子に占領されては充分手持無沙汰である。あるいは彼は廉作の母である姉のラクから「廉作に折があったら言いかけせておくれ」とでも頼まれたのかも知れない。

「お前、人生ってそんなもんじゃないぞ」

「イヤ叔父さん……ぼくにゃそんな風にしか考えられないんです……」

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。

「まんじ」は同人共有の(ひろば)として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になつて頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

「廉作の方が筋が通つてゐるワイ。あのバカ者!、廉作に人生談議やらかす資格があるか……」森之助の貞一に対する感情がぬきさしならない勢いでつづつて来るのであった。「まだ廉作の方がましじゃ」

今朝貞一は、字が乱れて読みとれぬ程鉛筆で書きなぐつた抗議文のようなものを森之助の居間の紫檀の大机の上に、森之助が冷水摩擦をやるため風呂場に入った留守の間に置いていったのだ。それは子供の頃、父山上織之進から直かに漢学と云われるものの素読をさせられたことのある森之助の眼には、文章とは受けとれない。

「あなたは、シユチニクリンの生活をほしいますに、既によわい八十になんなんとして猶今日若い私さえ用いぬ香水を髣髴あたまたにふりそいでいる、そもそも何たる所存であるや、何たる醜態であるか……」とその抗議文は始まっている。一ヶ月程前加寿刀自を通して新規に事業を起し度いから金を出してくれという貞一の申し出

を「あのバカ者メが！」と森之助に一蹴されたことに対する抗議の文であるらしい。「シユチニクリンが書けぬのか、なんなんも垂んと書けぬのだろう。俺が田舎の裁判所長やっていた間、フランス人の学校の寄宿舎に入れたおいたのが悪かったかな…… フランス語だってロクに出来ずじまいだ……」

山上森之助はC市の裁判所長になって段々東京に近く上って来た時、次男の貞之助に不良行為ありと土地の新聞にたたかれ、職業柄責任をとって辞職したのであった。元々それ程の不良非行という程ではなく、学生仲間のゆすりの見張りの番をしたぐらいのことであったが、何しろ刑事事件の被告たちが、今度の裁判長は山上森之助であると伝え聞くと、弁護士ともども観念したという程手酷しい判決をするので、土地の新聞記者に報復的に子供の非行を書き立てられた節があった。辞職する際は名誉昇進の意味で大審院判事と云うことにはなっていた。そして親類縁者には硬骨漢の意見が上役と合はなくて弊履のように長官の地位を捨てたとなっていた。^{かたがは}半眼を開いた山上森之助の夏の宵の思種はつづいた。^{いづ}「だが廉作にも困ったものだ……、兄の恵太より出来はよかったと聞いたが、十八、九で女に惚れて家出同然のヤツをラク夫婦に頼まれてあずかったが、M大学の予科に通うと言っているが鳥打帽かむって勝手な時間におらりと出て行きよる……ラク夫婦も子育ての最後の峠と

いう所だろう。亭主は百姓の出ながら俺が出た帝国大学を出ている。ラクを船大工の方へ嫁にやっていたらどうだったかな……、ラクの亭主は学位とかいうものをもって洋行などやらかしておるが、船大工の方だって帝国大学だった。今じゃ三ツ星造船の社長候補と云われているそうじゃが……、船大工よりや人間の修繕大工の方がまだましだと思っただんじやが……」

初夏の夕風になぶられた山上森之助のとりとめない思種は、自分の子供であった頃、明治の初年から十年までの江戸開城、会津落城、五稜郭の籠城、佐賀の乱、西南戦争といった内乱の中で、その折々にかかわった父織之進、母かつや縁者親族の動きの記憶が朧ろにもつれ合つてところどころいやという程鮮やかに、そして此処ぞと思うところで霧の中に解けこむように消えてゆくのであった。「あれもこれも死んでしまった、みなみな死んでゆくんじや。」

山上森之助は不図底知れない淵に立つ思いにつき当たつたがその時戸袋から雨戸を引き出す音の合間に加寿刀自の声があった。

「あなた、お床がとれましたよ」

隣りの寝室の欄間には山上織之進の油絵の胸像がかけられ、向い会った長押、鴨居には槍が一筋横たえられ、その上に、大正十二年の震災の折、家を焼かれて此処に集った親類縁者家族書生ら三十数名にかこまれて真中に

その槍を立てて鉢巻の姿で胸を張っている森之助の姿を大寫しに拡大した写真が飾ってある。廉作は祖父のいない時にその部屋に入って写真と槍を仰ぐと背中の手のとどこかぬ所がかゆく祖父をおそろしく遠い距離に感じるのであった。その頃は隣国朝鮮の人たちが暴動をおこすとか、浄水場に毒薬を投入したという噂が風に乗ってそれこそアツと言う間に全国に広まり、東京の混乱の中では顔つきが隣国人めいているというだけで殺された者の数は、大震災のどさくさの中で全く不明であった。朴烈と内妻金子文子の検挙は九月二日であり、亀戸事件は七日であり、甘粕大尉の大杉栄、伊藤野枝扼殺投棄は同じ月の十六日のことであった。

加寿刀自の声に森之助は手枕をはずした。離れ部屋の貞一はもう自分の別棟の家へ退きあげたらしい。床の間の違い棚におかれた大理石の置時計の針は何時の間ににか十時を示そうとしている。

家事は女たちの領分であるから加寿刀自を頭に、貞一の妻のき志子、女中のおきん、それに書生の玉井にも朝のうち五百坪を越える庭を掃く仕事があるのでかれらは一の食卓につくのであった。一の食卓の上には、新しい葉生姜の醤油漬けが強い匂いを放っている。他は昨夜の残物の煮返し物で質素である。ラジオのおかれた茶箆筒

を背にした長火鉢のわきは森之助の定席であるから貞一が屋近く森之助が自室に引きあげたあとに、豪然とそこに坐る以外は他の者は遠慮して坐らない。女中のおきんは箱膳である。その蓋をとって、茶碗と塗りのはげた椀と小皿を二枚出して裏返した蓋の上に並べて「いただきます」と一寸頭を下げた。加寿刀自が新しい生姜の醤油漬けを二本と、昨夜の煮返し物を小皿にのせてやる。離れ部屋から裏の小廊下を通って、廉作の兄でJ医科大学に通っている恵太が、「お早ようございます」と入って来て書生の玉井と並んで坐る。き志子は加寿刀自と並んで恵太の隣りになる。このような席は森之助の坐る長火鉢の前の定席を頂点にして自然に居流れる形になっている。き志子が給仕役である。

「お母さま、今日は暮の先生の見える日でございましたネ」

「そうでござんすよ、それに村田も貞之助も今朝は来るでしょう。お昼は用意しなけりゃね」

「ハイ」

「貞之助が来れば矢張りお酒になるだろうしね」

「ハイ」

き志子は嫁に来てもう十三年になるが加寿刀自とはよ・そよ・そい言葉のやりとりである。それはこの頃、き志子が料理学校へ通いたいと申し出たところで、加寿刀自の心をひどく損ねたことにもよる。「お父さまにおいし

いものを召し上って頂き度いと思つて……”という志子の料理学校通いの理由づけが、殊のほか加寿刀自をきずつけたのである。たしかに森之助は美食家で背が低いのに七十五キロもある体軀の持ち主ではあるが、加寿刀自にしてみれば、自分が指揮する台所に町人の娘がケチをつけるかという感じ方なのであった。その上大正十三年に新別棟を建ててもらつて志子と新婚生活に入つた貞一は、森之助と“Y市の大野”と世間から呼ばれてゐたそのまの開港にともない地価騰貴で大金持になつてゐた大野家へ政略的に養子に入つた貞之助との共同出資で始まつた勸工場の支配人格の地位を、生来の放蕩さがたつてしくじつて以来、職を持たずにいる。“お料理学校通いなんてシャレタことがよく言えるもんですね、いつときでもこの家の中から出て外の空気に当りたいんですよよ”加寿刀自の腹の中である。

加寿刀自の背後の柱にかかつた六角時計が七時を打つた。

“ごちそうさま”恵太はそそくさと立ち上る。つづいて玉井も“いただきます……”と立ち上つた。小さな口をあけて上品に箸を運ぶ女たちはどうしてもおくれる。廉作はまだ出て来ない。かれは床を並べている兄の恵太が朝食に出て行つたことも、学校へ出かけたことも床の

中で知つてはいたが、昨夜の遊びがまだ股間から脳天にむずかゆく残つてゐる。昨夜は九時近くまだ恵太が帰らぬということもあり、またその前に叔父の貞一と女談義らしいものをやつたあと味が、西の空にカッとネオンを反射した明るさがかれを誘ひ出したのであった。小門を開けると鈴がなる。そこで築山の奥にある稲荷の洞の裏の垣根を越えて小路に出るのである。丁度森之助が明治初年の追想にふけてゐる頃、かれは雪洞のあかりを左手に盗み見ながら垣根を越えて新宿の夜の人の群れの中に入つて行つたのである。山上森之助の屋敷から十分足らずで市電の大通りに出られた。真正面に新宿駅の入口が口をあけ、向いが食品勸工場二幸の建物であつた。右に行けばガードをくぐつて淀橋の浄水場から中野の方へ街道はまっ暗く走つてゐる。左に折れば街は未だ夏の夕方をたのしむ散策の人並が波になつてゐた。市電の両側の歩道には四谷にかけて夜店がみっしりと並び、人の群れはこれという当てもなく、走りの水瓜の叩き売りの前に、骨董市のあやしげな品物の前に、草花や植木市の前にしゃがんだ。二丁目を左に折れば、“不夜城”がある。廉作はそこで、身体がふるえる程つき上げて来る欲望を捨てることが出来るとは知つてはいても、三階建てのケバケバしい化粧練瓦で飾りたてた洋館の入口に女の写真が張り出され、カーテン越しにチラチラ洋髪の方がのぞく近代的に空々しい店や、古風な旅籠づくりの大

玄関のわきの格子づきの部屋に、大きな日本髷に結い上げた女がずらりと張り店してゐるところへ、妓夫太郎の呼び入れ声に乗つて気軽に“ホイ”と入つて行ける程の慣れはない。廉作はそのまのうすぐらい街角につましく出した屋台の暖簾をあげて、“泡盛!”と言つていた。泡盛は安くて強い。どんな勇気をかれにあたえるか見当がつかない。朝顔形のコップ一杯拾銭である。三十四、五才の女一人、浴衣の襟をぬいた額の安白粉が風に乘つて匂う。他に客はない。女のすぐわきの縁台の端に腰をおろした廉作の目には、やくざ亭主が博奕か出入ごとで刑務所入りしている女の屋台引きと見てとれて、素足のくびれあたりから裾をひるがえす風になりたい気分をそそられる。あずけられ先の祖父山上森之助の屋敷の垣根を乗り越えて巷の雑踏に出て来た解放感が若者の持つ捨て鉢な大胆さをつのらせていた。田舎の町で、旧制中学四年頃からカフェーで酒を呑むことを覚え、時には前夜の呑み代を女給が廉作の父親のやつてゐる医院の正面玄関から請求に現われて、“薬局”と張り札のある窓口に坐つた看護婦をまごつかせることもあつた廉作にしてみれば、初夏の夜の屋台の女主人独りとの対坐は心が浮く。他の客はいはいけない。何といつてもまだ十九才の田舎出である。不夜城に出入りする男たちとの世間話は持ち合せがない。野獣の肉を酎で甘く煮つめたような匂いが立ちこめる不夜城の一角である。

「旦那運転手さんかねえ」
「ウン」旦那と呼ばれて廉作は頬がゆるむ程満足である。

「もう遊んじやつたの……、それとも……」

「ウン、マア……」

「お客さん、今日屋にいい妓がいるわよ、丁度お客さんに年恰好も似合いよ」女主人は流し目で廉作ののぼしかけたばさばさ髪から検査終えたぐらいかなと見当をつけていた。

「ボク…… ほらその水瓜ひと切れくれない」先程夜店でみた水瓜売りの景気のいい口上が咄嗟に屋台の棚におかれた半切の水瓜を指ささせた。

「それから……」

「それから何にする……、冷や奴……、それとも……」二杯目の泡盛は水を割らないから喉を焼き腹にしみ、その不思議な臭みは廉作の目を女主人の顔が二重うつしになるまで据わらせてきた。

「それから……」

「それから何にする」

「……坊や、何言つてんのよ」

「旦那」が“お客さん”にそして“坊や”にかわつた。坊やまで落ちれば甘えられる。女主人の目はちらりと警戒の気をはらんで、“泡盛”とそめぬかれて屋台の腰ぐ

らいまでたれてゐる暖簾の切れ目から外を通る人の足に向けられていた。"この若者の目のような光った男の目を何度か見たことがある"

廉作の据わつて来た目には、女主人の言葉と顔は、ひどい拒絶を示しているようには見えないどころか、年若い田舎者めいた自分に好奇心さえ動いていると受けとれた。

廉作の左手がツとのびて女主人の腰をかかえて引き寄せた。

「何すんのよ、坊ヤッテバ」かの女は低い声でいいながら廉作が腰をおろしている縁台の端にどさりと倒れ込んだ。廉作の右手は先程まで初夏の夕風がたわむれていた裾を素早く這つて倒れ込んだ拍子に割れた股の奥にとどいていた。"他の客入つて来るなよ"金壱円の紙幣が空いている左手で女主人の目の前をかすめて懐にねじこまれていた。泡盛二杯と水瓜一切れでは三拾銭である。

十分後に廉作は市電の大通りの人の群れの中にいた。通りの店の明るさと商品の色や形がキラキラとちぎれ飛んでいる。歩道をゆっくりと往く人間の顔は、男女の区別なく人魂となつて廉作の左右に流れゆくかの様であつた。かれの指先は水瓜の水気を宿して青臭い匂いをのこしていた。

そのような昨夜のささやかな冒険の今朝である。かれは泡盛でただれた感じののこる喉に風呂場で水を流しこむと、二の食卓の始まらぬその間隙にすべりこみ、茶漬を葉生姜の醬油づけでかっこんでいた。勿論間隙をねらっているから食卓には誰もいない。おきんは台所に下り二の食卓の用意であらう。特に香の物の食卓への乗せ時は刀自の一番大切にすることである。

山上森之助は五時前に起きて、裸足で庭の土に下りていた。シタシタと裸足の裏に冷たい土と苔の感触を感じながら小一時間歩きまわる。かれの目はときどき貞一夫婦と孫の貞造、書生の玉井のまだ寝ている別棟の建物を睨んでいた。"怠け者共め！、玉井ももう九回も司法試験を落ちておる。田舎へ帰すより仕方あるまい"

森之助の朝の散歩の終りは築山の奥にある稲荷の洞の前の石段の上である。目をつむつて祈る。そのわずかに上下する唇がどのような言葉をつぶやいているのか聞きとれない。

この稲荷はもと森之助の父織之進の屋敷の隅にあって、○町内の信仰を集めていた。祭も町ぐるみで行われ、山上家からそのたびに金が出ていたので、まるで山上家がそこら町内一帯にお稲荷様のご利益をばらまいているかの様であつた。多分、森之助はお稲荷様の力で○町○丁目○番地の地価が上り、今日そこからの地代の上りで山上家を中心にして一族郎党が何かと集つて来るシアワセ

を感謝し、そのシアワセがこれからも子子孫孫まで続きますように……と祈っているのであらう。

かれは座敷に上ると安心して、熊の皮の敷物にあぐらをかき、これから風呂場で始まる冷水浴のための身じたくをするのである。

「おはようございます……、おトーサマ、お掃除させて頂きますワ」

き志子が姉さんかぶりに襟がけであらわれる。これは箒と叩きを右手に持つて立ったままの挨拶である。子供が一人だけのせいもあるう、若々しい嫁ぶりではあるが、森之助は「ウン」という気味で顎を引いただけである。

「町人の娘め、馬鹿貞一に裏で何をけしかけているやら」かれは加寿刀自の折にふれての告げ口にもよるが、立ったままの挨拶が気に入らぬのである。かれは寢室を通り、仏間と利秋がまだ掛布団から毛脛を出して寝ている六畳間の間を、心持、利秋の寝姿に顔をしかめて、今は丁度出したままの食卓についている者のいない居間をぬけて風呂場に降りる。たっぷり一時間はかかる冷水摩擦である。手足の指先から初まり、全身を万遍なくこすり、背中では裏庭を通つて焚き口の杉戸から入った女中のおきんの受け持ちである。かの女の手は、いそがしく老人の広い背中を上下しながら、目は折々投げ出された短い太い脚の根本のあたりに走る。"そうだワ、あん時玉井さんがうしろからふところに手を入れてきて、あたしが「イ

ヤヨ、イヤダー」ってからだをひねつて逃げようとした時、玉井さんが出しかけたものだワ、でも玉井さんのびっくりする程大きかったツケ"

もう半年程前になる。おきんが台所で、加寿刀自の前にその大柄な身体をちぢまるだけちぢめてしゃがみ込んで訴えたことがあつた。

「大奥様……、おなかへんなんです」

「どうしたの……、痛むんかい」

「イエ……、大奥様……、アタシ……おなか大きくなつてきたんです」

「何だつて！おなかが大きくだつて、おきんや……」
「あの……、ずっと前、朝早くご門の外を掃いてたら新聞配達する人がアタシのふところうしろからいきなり手入れたんで……、アタシ、キャッって逃げたんですけど……、それから……」

これは加寿刀自にしてみれば、ほおつておけない出来事である。知恵が普通の女より少しおくれているかに見える身体だけ大柄なおきんはもう二十を一ツ越えている。その言葉にはどんなウソがあるかわからない。朝早く門の外でと言っているが、門の中にだつて書生の玉井だつて、恵太だつて、廉作だつて、……それに結婚十三年でき志子に飽きがきている貞一にはよその女に子を持たせて四百円の手切金を出して仕末したこともある……

「利秋だつてもう……」

加寿刀自はあわてておきんを医者へやった。その結果は「想像妊娠」ということで、それから一ヶ月ばかりは、一体誰が本当におきんに「想像」をさせたかが加寿刀自と森之助の間の数少ない話題になった。

「もうよいぞ」

「ハイ」

森之助は乾布でうしろをふかせると着換え場に入り、ぬぎ捨てた下着類をひとまとめにかかえこんで越中もつげずに熊の皮の上にもどる。足はさすがに年齢並にその重い上体を支えかねている。

居間の六角柱時計が十時を打った。

森之助が食卓の正座にどかりと重味のある胡座をかいた。長火鉢を脇にはさんで加寿刀自が朝の新香のさわやかな糠の匂いを食卓に置いて給仕の座に落ちついた所である。おきんが台所と居間のあいだを忙しく往復して、森之助のための皿数が卓上にふえる。

「あなた、この頃村田は出がおいようでございますね、身体の具合が悪いとか申しておりますが、まさか仮病ではございませんでしょうね」

と、小門の鈴がなって村田が和服に袴と云う出で立ちで入って来る。成る程少し前かがみに身体をいたわる歩き方ではある。加寿刀自によれば門の外ではシャンと胸

森之助が朝食兼昼食を終って熊の皮の部屋に戻り、村田と裁判のことで打合せを始める頃、利秋が無言で食卓につく。かれは洗顔もせず、寝間着のままである。別棟から長男の貞一がやって来て森之助の座におさまる。今度は給仕の座にはき志子がつき加寿刀自は利秋の寝間の跡始末と仏間に仕事がある。

その頃小門の鈴が再びなって大野貞之助が和服に角帯という粋な風態で現われる。今朝は連れがある。紺がすりの和服に袴をつけた若者である。途中で同道になったのであろう、若者は暮の先生である。内玄関を入ると暮の先生はそのまゝ居間の食卓に向って軽く会釈するだけで熊の皮の部屋へ通る。貞之助は黙って小門の見える中庭を背にして食卓の前に坐る。第三番目の食卓に兄弟三人がそろったことになるがお互に無言であり、貞一と貞之助の間には無言に加えて、敵意めいた空気が漂っている。利秋は卑屈にうつむいて茶碗と箸を口へ運ぶだけであるが、時にその箸をポロリ取り落したりする。

「一寸利秋のことで相談があるんですがねえ」

大野貞之助が仕事を終えて居間に顔を出した加寿刀自に声をかけた。それは、貞一との無言の対立をそらすと同時に大野貞之助が利秋を口実にして加寿刀自を捕えて離さない恰好でもあった。

を張って歩いている筈だということであるが、かれは内玄関から入って食卓のある居間をのぞく恰好で「おはようございます。今朝はちょっと何でして……」と森之助と加寿刀自に挨拶して熊の皮の部屋へ通る。「ちょっと何でして」とは遅参の申し訳なのであろうが、その言葉の抑揚には、この山上森之助一家の暮し方に対する見縫りの気分がうかがえる。熊の皮の部屋へ入った村田は床の間側をちょっとずらして坐り、風呂敷包みを大机の上でとき、係争中の訴訟の経過について森之助の指示を仰ぐ用意をしている。

村田は貞一の学生時代の友達で、達者な才気と法律の知識を武器に、課長時代にその会社の乗っ取りを企て、仲間もろとも会社をつぶす破目になった所を貞一の口ききで森之助の家に出入りすることになり、そのままする。一ヶ月六拾円の月給で山上法律事務所に囲われている。それ以来毎年森之助から受験料をせしめて弁護士試験に落第しつづけているので、加寿刀自のおみおぼえがひどく悪い。でも、山上森之助の名前で裁判所に入入りしている間にその髭をたくわえた風彩のよさも手伝って結構弁護士としての「顔」になっており、代々木練兵場はなれの一握りの貸屋群の一角に、女房は「産婆」と云う赤い軒灯を門前にともし、かれは「山上森之助法律事務所」という大看板をその軒灯の下に掲げて一種の看板借りをやっているのである。



連載

ハイラル挽歌(九)

第一章 海拉爾の白旗

金子正義

(十三)

ソ連軍主力はハイラル要塞包囲の部隊を残し、新たな強力機甲部隊を加え鉄道に沿って大興安嶺へ向っていた。機動力に物を言わせ無人の原野を疾風枯葉を捲くように暴進していた。途中遭遇する日本軍があっても鉄甲部隊の奔流に触れない限り黙殺していった。

開嶺へ引揚げる中野大野指揮の六百余名の殿部隊は、ソ連機甲部隊の進行する鉄道沿線や、興安街道等の基幹道路を遠く南に避けて出発した。

中野隊は連隊砲中隊、連隊行李のような車輛隊と、多くの徒歩の歩兵中隊の混成なので、進行速度の上からも指揮統一が困難であった。然かも出発の八月九日二十三日はハイラル市街の戦火が最も熾烈で、赫々と空に映える火焰を背にした撤退は魔力を持った怪物に追われるような不安と焦りがあった。

中野隊は夜光時計と磁石ばかりを頼りの夜行軍で、飲

まず食わずに駆け続けて朝になった。日が高くなったので草原の窪地で大休止を取って落伍者を待った。漸く追いついた將兵に盲腸患者と下痢高熱病者等の四名が居た。中野大尉が容態を見ると迎も長途の撤退行軍は無理であったが、そのまま残置するに忍びず、医療隊の大崎軍曹を呼んで、

「札蘭屯迄はソ連軍は進攻してはいないと思う。今から四名を連れて札蘭屯に行き、最後の引揚列車に収容させよ」と命じた。

大崎軍曹が担送の衛生兵四名と患者輸送に出発後も、ソ連軍の姿を見ないので白昼の行軍を開始した。小休止も無い草原の駆足行軍なので昼近くになると落伍者が出始めた。初めはトラックに収容していたが、次第に増加して限界となった。夜となると倒れる者を見定めることも出来ず、そのまま草原に見捨てて部隊は直走りに駆け

続けた。

夜を徹しての急行軍で十一日朝、牙克石の南丘陵に到着したので大休止して落伍者を待った。各隊に多くの落伍者が出たが、特に六中隊では春日少尉以下十五名も欠けていた。中野大尉は各隊の疲労と食糧不足を考え、免渡河に出て見ようと思った。免渡河には先頃まで一個連隊が駐屯していた兵營が在り、倉庫には未だ相当の食糧が備蓄されている筈である。幸いソ連軍の進行も遅れているらしく、夜行軍中も何度か列車の進行を聞いている。鉄道線路に出ても安全と見られるので、連隊行李の平田少尉に、

「平田小隊は先発して免渡河連隊倉庫に行き糧秣を受領して、駅で本隊を待て、もし免渡河到着前にソ連軍が進攻していたならば、速やかに本隊に戻って来い」と命じて第二連隊行李をトラックで先発させた。

一時間程待ったが平田隊は戻らず、砲声も聞えないので中野大尉は、無事に第二連隊行李が免渡河に着いたものと思い、全部隊に出発を命じた。念のために友清中尉、以下五名の偵察隊を編成して、興安街道及び牙克石駅、免渡河方面の偵察に先行させた。

中野隊は万一に備え草原の茂みを利用して隠密行軍し、四時頃免渡河の町の屋根や疎らな樹木が望みされる地点迄辿りついた。偵察隊は戻らないが、町は平穩のようだった。中野大尉は双眼鏡で情況を見ると、ソ連軍は未だ

免渡河に入っていない模様である。ホッとして前進を命じた。続いて砲声が響き、中野隊の伏せている草原の左手前に銃声が響いた。直ぐ激しい戦車砲の砲声が続きさまに起きた。免渡河の方向ばかりに気を取られていた中野大尉は驚いて、町の左手前をずっと双眼鏡で見ると、友清中尉の先発偵察隊が、突如出現したソ連戦車隊に包囲されて集中砲火を浴びている。

中野大尉は部隊を急いで南の山際に後退させ、夏草の茂みの中に戦闘体形を取って展開させた。緊迫した時が流れたがソ連軍は進攻せず、砲声も休んだ。友清偵察隊は誰も帰らず全滅したものだと思われた。ソ連軍は中野隊の散開する地点迄進攻せず引揚げていった。中野大尉はそのまま部隊を伏せて平田隊の帰りを待ったが、夜になっても戻らず、友清隊同様ソ連軍と遭遇して全滅したのと思われた。中野大尉は各隊長を集めて、

「平田隊は戻らず、食糧入手も困難となった。今後どうするか」と悲痛に言った。狩野少尉が、

「腹が減っては戦にならぬ、夜蔭に乗じて免渡河を急襲し、食糧を獲得してから開嶺へ向うべきです。兵隊達も飢えて倒れるより戦って死のうと思っております」と強く歩兵の立場を代表して言ったが「もう行程の半ばを過ぎた。免渡河の兵担基地などに手間取っては、開嶺

の本隊復帰が益々遅くなる。安全な山中を通って一刻も早く開嶺へ行くべきだ」の意見が多かった。狩野少尉は「飢えているのは歩兵部隊だ、車輛隊には食糧が搭載されている筈だ、隠さずに分配すべきだ」と言い出した。

「何を言うか、車輛隊は初めから速度をあげる為に弾薬、医薬すら最少限度に積んだ、食糧なんか積み込む余地は無い。貴様等歩兵がいなければ、迎うに開嶺へ着いている」

と砲兵隊の国生中尉が怒鳴り返した。中野大尉は掴み合はんばかりの双方を制し、「目前の食糧をみすみす断念するのは惜しい、敵情を良く把握した上で決断する」と角田準尉等三名に免渡河方面の再度の偵察を命じた。

夜が明け、十二日六時となったが偵察隊は帰って来なかった。角田隊もまたソ連軍に捕促されたものと見える。免渡河にはソ連軍が溢れて到底近付けないと思った中野大尉は、街道を遠く離れて山中を潜行して興安嶺陣地に帰着しようと決断し、体力の消耗と行路の困難を考え、重火砲、車輛、馬具、被服等を地中に埋め、軽装で行軍するように命令した。

斯うして全部隊、饑えと疲労の山中行軍が始まった。磁石を頼りの山中行軍は、車輛、馬匹を捨てた全員徒歩なので、初めは蹣跚と歩き乍らも部隊として纏っていたが、食糧が全く絶えて灌木の実や僅かの草の根を掘って

食う飢餓行軍となると、統制も乱れて食物の争いが始まり、戦友同志が夜間の盗み合いを始め、餓鬼道が露き出しとなって来た。追っても追っても兵隊を慕って付いて来る荷馬すら倒して、その生肉を喰うようになった。水の無い興安嶺である。僅かの溜り水を吸って下痢患者が続出し、十三、十四日と日毎に落伍者が増えて行った。

もう軍隊の行進でなく、襤褸布集団の行列であった。先頭隊には比較的体力が残っている者が塊って歩いていて、衰弱の度合に従って遅れ、蹣跚と後に続く兵は単独者となって点々と間を置いて歩いていった。倒れては立ち五、六歩行ってはまた倒れる落伍者の後から、狼の群がその斃れるのを待って牙を露き出して迫って来るのだった。

時には先頭に行く部隊が方向を誤って草原に出て仕舞い、葦原の内をぐるぐる迷って落伍者の後に出たりしながら暗中模索の行進をしていると、先頭の前衛分隊の中山伍長は、免渡河とウノールの中間の草原に出て仕舞った。夏草の茂みを透して見ると、遠く鉄道が見え点々と満人の家も在った。飢えている兵隊達は沿線に出れば食物や水が得られると、三十名程が草原を出て駆けた。忽ちソ連軍と遭遇して銃撃戦となった。小銃のみの中山伍長達は脱出できず全員戦死を遂げた。

ソ連軍は鉄道沿線や、主幹道路に留まって付近の山野へ敢えて出撃しない方針と見えて、草原の中野隊を発見

し乍ら攻撃して来ない。中野隊も動かず、夜を待って鈴木準尉等三名の斥候隊をウノール方面に出して待った。十五日の朝となったが鈴木準尉等の斥候隊は戻らなかつた。中野大尉は草原を行く危険を厳に戒めて再び山中行進を命じた。

疎林の丘陵地帯を進む将兵の疲労は益々加わって、陥ち窪んだ眼窩の目ばかりが怪しく光り、行路病者のように蹣跚として歩いていた。全員が死の直前を彷徨っているようだった。飢えを感じなくなったが山林に飲料水が得られず、渴きの果てに蹲み込んで自分の僅かに滴たる血尿を掌で受けて飲む兵も出る有様となった。

開嶺を包む山々に展開する師団陣地の東方台地に二百五十五連隊第二大隊が陣地を構築していた。その山裾を流れるイレクテ川を越えて、東に十軒程の丘陵に第五中隊の守備陣地があり、更に五軒東に分遣隊陣地があった。

付近にソ連戦車隊の偵察隊が出没すると言うので、田村中隊長が中隊本部から直接指揮に来ていた。十七日午後三時、霧雨の中から中野隊の先頭挺団が現われた。ハイル殿部隊の中野隊と知らされて驚く内に、次々と跟めき乍ら痛ましい姿の引揚将兵が到着した。田村中尉は瘦せ衰えた姿に胸を打たれ、辿り着く一兵一兵に、「ご苦労だった。早く陣地へ入って休め」

と言うのが精一杯であった。

五中隊分遣隊は総出で炊爨して引揚兵の飢渴を癒そう

とした。遅れて到着した中野大尉は田村中尉の手を握って、五月にハイルで別れて以来の奇遇に暫くは言葉も無かった。漸く相互に情況を交換し、更に誰彼の消息を尋ね合った。引揚行軍の間に戦死した将兵を悼み乍ら、田村中尉は開戦の直前、特別任務を帯びてハイルに向った上田中尉や勝間田少尉を案じた。重大任務を遂行すると別れの挨拶に来た勝間田少尉に、田村中尉は愛用の軍刀を贈って武運を祈ってやったが、中野隊とは何処かで擦れ違いにハイルに向う戦野でソ連軍と遭遇して果てたであろうと、田村中尉は眼鏡の奥の小さな目を潤ませた。

中野大尉は何時迄も友情に漬ってはいられなかった。現分哨地点より連隊本部は僅か十五軒と云うので食事を摂ると、

「大分世話になった。一刻も早く原隊復帰が軍命である直ちに出發する」

と言った。田村中尉は驚いて、「もう原隊に着いたのも同様じゃないか、兵隊の体力も限界を超している。此処一兩日休養してから出發したらどうか」

と再三止めたが、「いや、戦況は急を告げている。一刻も早く原隊に行く。此処で大休止すれば兵は気を緩めて倒れて仕舞う。」

断呼出發する。夜間の方が敵に発見されずに行動できる」

ときかなかった。既に八月十五日、日本政府はボツダム宣言を受諾し、ソ連軍は大戦の終焉を祝っているとは田村中尉も、中野大尉も知らなかった。

中野隊は混成部隊なので、もともと五中隊出身の兵も居た。中野大尉は五中隊の者は此処に残って田村中尉の指揮下に入れと命じて出発した。

連隊本部に行く路地図を田村中尉から貰ったが、夜間行軍なので道に迷って夜通し山中を歩き廻ったが、連隊本部はおるか師団の管下に在る筈なのに前哨陣地すら発見出来ず、僅かに分哨らしい拠点を発見したが一兵も居なかった。

既に十七日夕刻、興安嶺各陣地の部隊は停戦命令を受けて博克図に向って集結中であつた。田村中尉の分哨陣地は、遊撃拠点であつて最前線に出過ぎていたので、中野隊が出発する時迄に命令が届いていなかった。中野隊はぐるぐると同じ経路を歩き廻っている内に夜が明け雨が降り出した。中野大尉は、原隊も近い筈であるから山を下りようと小休止して六時に出発した。二時間程で山を出ると湿地帯であつた。将兵は連隊本部に近いイレクテ川畔の湿地帯に出たものと生気を取り戻して急いだ。雨は休んだが朝霧が濃く立ち籠めていた。湿地帯の狭い道は方向を誤まる恐れがあるので一列に繋ぎ進んだ。進行は捗らずだらだらと行くうちに道は緩やかに競り上り、台地状の草原に伸びていた。地帯を行くと前方に草

原が見えて来た。中野大尉は湿地を脱してホッと前方を見渡すと、薄らぐ朝霧の中に彼我不明の大部隊が、中野隊の進行方向の左手より右手に向って移動していた。中野大尉は此の付近は日本軍の勢力圏と思つていたので、そのまま進むとソ連軍であつた。ソ連軍も無警戒のまま進行中、いきなり地帯より日本軍が出現したので、狼狽して一斉に軽機を乱射した。中野大尉は突然の攻撃に驚き、応戦し乍ら地帯の中に駆け戻った。

戦闘体制は草原を進行中のソ連軍にとって絶対有利であつた。進行隊形をそのまま横向きに変えて、狭い湿地の間隙に集中している日本軍を忽ち包囲して仕舞った。中野大尉は必死になつて地帯の縁に兵を配置し応戦したが、未だ延々と一列になつて続いて来た後続の将兵は事態が判らず、銃声に驚いて地帯の僅かな窪みに身を伏せるのが精一杯であつた。それは自ら進んで袋の鼠となる結果となつた。ソ連軍は火砲、重火機の集中砲火を浴びせたが、中野隊には僅かの重機・軽機が有つたが、突然のぶつかり合いの交戦なので重機を固定する迄に、もう大勢は決して仕舞つた。それでも軽機、小銃で頑強に抗戦し、戦闘は夕刻迄続いた。だが次第に弾薬を射ち尽して、生き残つた僅かの兵は銃剣突撃の機を狙っていたが、ソ連軍は絶対有利の斜面上より包囲の輪を縮めて重火機の雨を浴びせていた。生き残つた半島出身の初年兵数名は、包囲の圧縮に耐え切れず、小銃に三角布を付けて飛

び出して投降した。ソ連軍は壊滅した日本軍に接近し、虱潰しに自動小銃を浴びせた。

中野大尉は、身に数弾を受けて倒れた。薄れ行く意識で、硝煙の立ち籠る地帯の向うに青々と生い茂る笹山を見た。鮮やかな緑が瞳に拡がり脳髓の奥迄しみ透って行く意識が消えた。中野大尉の周辺には朱に染まって斃れた将兵が折り重なり、血潮はどす黒くなって地の色を変えていた。ハイラル出発時六百数十名の中野隊は遂に全滅したのである。

ソ連兵は自動小銃を構えて累々たる日本軍の死体を検かめ歩き、数名の重傷者を発見して担架に乗せて運び去つた。折り重なつた死体に潜んで夜を待って脱出した鳥塚軍曹・高森伍長等十数名は、ソ連軍の目を掠めて翌朝十九日連隊本部近くの日本軍陣地に辿り着いたが、武器弾薬が散乱した無人の壕ばかりであつた。



ときかなかった。既に八月十五日、日本政府はポツダム宣言を受諾し、ソ連軍は大戦の終焉を祝っているとは田村中尉も、中野大尉も知らなかった。

編集後記

○第九号をおくる。次号は当然ながら第十号として「まんじ」の誌歴は一つの年輪を限ることになる。記念してその第十号の巻末には創刊号いらいの掲載作品の総目次を付したいと思っている。私たちの努力のあとを省み、さらに営みの累積を誓うモニュメントとするためである。

○「まんじだより」の方に書いたことだが、ワープロという機器への関心からその説明を聞く機会があった。

原稿用紙のマスに一字一字を埋め込む、手作業に丹精をこめるわれわれ言わば一種の手工業者から見ると、これは恐るべき新兵器だ。力士高見山大五郎がコマリシヤルでおどけて見せるように、やがて普及の時代を迎えるかもしれない。文筆手工業者のペンダコのないなる時が来そうに思われる。もつとも機械を操作するものが人間であり、言葉を操る「文芸」の芸域まで、冒すものとは考えられないが……

○一方にはマイコンの中古品の市場がにぎわい、着眼した企業が急成長しているという。マイコン熱にかかれ、買ってはみたが使いこなせない、一ヶ月そこそこであきらめて売りに出される例もあるらしい。もちろん高度の性能のものであろうが、ユーザーの方でダンピングに拍車をかけているものらしい。機械に人間が使われるどころか、こうなると明白に人間敗北を意味する。
(楨)

原が見えて来た。中野大尉は湿地を脱してホッと前方を見渡すと、薄らぐ朝霧の中に彼我不月の……

「まんじ」第九号

昭和五十八年五月二十五日発行 (非売)

編集 大 和 禎 人

印刷 (有) 加藤清耕社
千代田区神田神保町三十一
番(261・5743)

発行 「作家群」 編集部
(まんじ)

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二一九
番〇三(二一九三)〇〇九四 柴田方
郵便振替口座 東京二一九〇八一五

目次

夏に狂う	三戸岡道夫	1
年寄りの冷ミステリー	山本儀一	37
狐狸村センセ VS 井中センセ	左老庵	56
三河島物語	茂里英介	66
短歌ふるさとに今	増川遼三	83
輝きの御国に	大和禎人	84
病室の窓(続)	井上二三夫	92
連載		
○町○丁目○番地(三)	山口健二	97
ハイラル挽歌(十)	金子正義	105
掲載作品総目次		111
編集後記		112

表紙：岸田幸雄 カット：大貫雄司郎



夏に狂う

三戸岡道夫

〔一〕

村は楠で覆われていた。

山にも森にも農家の庭にも、街道にも、そして田圃のほとりにも楠は鬱蒼と繁り、初夏が近づくと枝々はいっせいに芽吹いた。

田植えが終って田の面が遠目にうっすらみどりにかすみ、それが日ましに濃くなる頃になると、それに調子をあわせたように楠の葉群もにわかに濃密への速度を速めるのであった。楠の暗い下蔭を通るとき、鮮烈に青くさい若葉の香りが初夏の嵐のように人々を襲った。

亘たちは毎日ランドセルを背負って、楠の道を小学校へ通った。

とりわけ登校の途中にあるお代官さまの楠の森は見事であった。村でお代官さまと呼んでいるのは村長の家で、この村では何代かにわたって代官の子孫が次々と村長を勤めるのがならわしになっていた。その代官屋敷が昔の

まま今に伝わっているものであって、広い濠にかこまれたその屋敷はまるで楠の森のようであった。潑んだ水に覆いかぶさるように垂れさがった楠の、葉群の重さにたえかねた枝々の有様や、その下蔭の水面の暗さは、なにか無気味な感じを通学の子供たちに与えた。その隠沼のような濠の底には、きっとこの山村の主が棲んでいるにちがいないと、幼い亘はわけもなく思った。だが亘たちはその神秘の森を毎日眺めて通るだけで、代官屋敷の中へ一度でも入った者は誰もいなかった。

その若葉の香りがツンと鼻をつく楠の隧道を抜けると、視界がぱっと開けて青田がひろがり、小学校の建物が見えた。

小学校はもうすぐだった。

その小学校の運動場もおびただしい楠でとり囲まれ、また三棟ある校舎の間にも楠の巨木が枝をたわわにしながらわけていた。だから教室の中は楠の葉群に遮ぎられてはの暗く、代りに若葉の強い香りが見えない清流のように

窓からおびただしく流れこんでいた。

黒く汚れた机に亘は十蔵と並んで勉強していた。

十蔵は青白くのっぺりした顔に、いつも青鼻を二本た
らしている。喧嘩は強かったが勉強はできない。国語の
教科書の

サイタ

サイタ

サクラガ

サイタ

も満足に読めない。だから最初亘は十蔵を馬鹿にして
いたが、しかし人のよさそうな十蔵がなんだかわいそ
うになってきて、十蔵が先生に指されて教科書を両手に
持って立ちあがってまごついているとき、横からこっそ
り小声で教えてやったりするようになった。

また試験をやっても答案用紙はいつも0点だった。だ
から亘がときどき先生の眼をかすめて答をそっと見せて
やると、十蔵はすまなさそうに眼をにと細めて亘の答
案用紙を盗み見るのだが、その動作が鈍いのですぐ見つ
かってしまい

「おい、十蔵！」

いつの間に背後に廻ってきたのか、先生の大きな手が
十蔵の頭をわし握みにして、ぐいと前方に向けてしまっ
たのであった。

最初のころ亘は十蔵と同じ机で勉強するのが嫌だった。

母が

「仏野へ決して行っってはいけませんよ」

と、きつい調子で亘にむかって言ったことがあった。

「なぜ？」

「なぜでもいいから、いけません」

「だって、仏野の人、たくさん学校へ来ているよ」

「学校は仕方がないけれど、学校は学校。とにかく行
っってはいけません……」

仏野の子供をいじめると、代わりに大人たちが復讐に
くるといふ言い伝えを、亘は何度も聞いたことがあった。
たとえいじめたのが子供であったとしても、大人たちは
その子供を仏野へ連れ去ってしまい、縄でしばって極楽
寺という寺の本堂へ押しこめ、きつく折檻するというこ
とであった。本堂の壁に描かれた恐ろしい地獄絵の前で、
いたいけな子供が縄でしばられ、荒くれた大人たちから
折檻を受けているさまを想像すると、いつも亘の背中を
冷い恐怖が走った。うっかり仏野などへ行けば、そのま
ま帰ってこれないかもしれない。

しかしそう思う一方で、仏野と聞いただけで、亘の胸
はキューッと熱くなるのであった。息苦しくなってくる。
それは亘の胸の中に一人の少年の顔が浮かんでくるから
であった。仏野から通学してくる辰吉という上級生だっ
た。その辰吉のことを考えると、亘の頭の芯が急に朦朧
となってくる。

たくさんいる生徒の中から選りに選って青鼻たらしの十
蔵と、なぜいっしょに坐らなければならぬのだらう。
それに十蔵は耳も悪いらしくていつも変な臭いがあたり
に漂い、眼も赤くただれていた。

だが亘がいつのまにか十蔵をそれほど嫌だと思わな
くなったのは、十蔵が意外と亘に親切だったからであつた。
いつか書取りの時間に亘が下敷きを忘れてきて困ってい
ると、十蔵がだまって下敷きを貸してくれた。といって
十蔵が下敷きを二枚持っていたというわけではない。亘
がとまどっている

「おれは勉強出来ないから、無くたっていいんや」

亘のセルロイドの下敷きとちがって、十蔵の下敷きは
ボール紙のぼこぼこしたもので、あまり役には立たな
かったが、その時からなんとなく十蔵の青鼻の色も、耳だ
れの臭いも、亘はあまり気にならなくなったように思
う。またいつか中庭の掃除当番のとき、亘が汚い溝の中に手
をつっこんで塵芥を掻き出そうとしていると、十蔵は亘
を押しつけるようにして自分の両手を溝の中に突っこみ、
亘の手を汚すまいとしたこともあった。

しかし亘が十蔵に親近感を持ったのには他にもう一つ
の理由があった。それは十蔵が仏野から通学しているか
らであった。亘の中には一度でいいから仏野へ行ってみ
たいというひそかな願いがあった。しかし仏野へ行くこ
とはタブーになっていた。何時のことだったか、ある日

その辰吉の住んでいる仏野へ一度行ってみたい……、
それが亘のひそかな願いだつた。父にも母にも言ったこ
とのない、絶対の秘密。だから十蔵と友達になつていれ
ば、いつかその仏野へ行かれるかもしれないというひそ
かな期待が、幼い亘の中にあつたのである。

学校が終ると子供たちは解放感にかられ、わっとはし
やいで帰路につく。しかし決して仏野の子供たちとはい
っしょには帰らなかった。仏野の子供たちは子供たちで
三々五々と彼等同志で群をなし、学校から一番遠い仏野
へと帰っていった。だからたとえ亘がいくら十蔵と仲よ
くなったとしても、それはしよせん学校にいる間だけの
ことで、ランドセルを背負って校門を出れば

「じゃ、明日、またな……」

十蔵は青鼻をすすりあげて、仏野のグループの方へ走
っていつてしまうのであった。

亘たちは朝登校したのと同じ田圃道を帰路についた。
ふたたびお代官さまの横を通る。登校の時は集合場所に
集り、一年生を先頭に二列に並び、六年生が指揮をとっ
て学校まで行進するので勝手なまねはできなかったが、
下校時は授業が終り次第に帰途につくのでそうした制約
がなく、したがって勝手にふざけあひながらちりぢりに
帰っていった。その先頭を歩いている仏野の子供たちの
姿がお代官さまの楠の木蔭に見えがくれているのを指

さしながら、一人の友達が

「おい、亘、あんまり十蔵と仲よくすると、お前、オサキサーになってしまうぞ」と言った。

「オサキサーに？どうして？」

「だって、オサキサー、仏野の人だもの」

オサキサーというのは仏野に住む狂女であった。名前を咲という。「お咲さん」と呼んでいたのが、いつのまにか「お咲さあ」から「オサキサー」になり、この村でオサキサーと言えば気狂いの代名詞になっていた。だから「お前、オサキサーになるぞ」といえば、「お前は気狂いになるぞ」ということであつた。

「オサキサーなんかになるものか！」

亘は顔をまっ赤にして言い返すのだったが、しかしムキになって言い返せば、言い返すほど

「わーい、亘のオサキサー……」

「亘のオサキサー……」

はやしたてられるのが、いつものならいだった。一人の友達が

「わーい、俺はオサキサーだ……」

両手を前に垂らしてお化けの真似をして、隣の子供にとびかかると

「よせよ、こわい」

子供たちの脳裡には、髪を乱した狂女の凄惨な姿が稲妻

のように走って、悲鳴をあげて逃げ廻った。

「お前、オサキサー、何回見たことある？」

「俺はたった一回。だって、こわいから、オサキサーが来ると、俺、家の中にかくれてしまう……」

「ちえ！ 弱虫だ……。お前なんか亘の家へ修業に行ったらええんや……」

「そうだ！」

と子供たちは無責任に叫んだ。

亘の父は村の警察官である。オサキサーは夏になると毎晩のように警察署へ嘆願に現われるからであつた。

警察署の建物は村の街道の真中であつた。亘の父はS町の警察署からこの村へ転勤になってきたのであるが、毎日夕方になると父を悩ますのがこの狂女の嘆願であつた。オサキサーの言うことは支離滅裂で何を言っているのかわからないのだが、何回も繰り返して聞いているうちに、どうやら

「自分の夫を返してくれ」

ということを言っているらしい、ということがわかってきた。

聞くところによるとオサキサーは数年前に夫に捨てられ、それから気がふれたのであつた。日夜人に逢うごとに

「自分の夫をどこへ隠した……」

「自分の夫を返してくれ……」

と訴えつつけるので、言われる人々は困りはてて

「それは俺たちにくら頼んだって駄目だ。お前の亘那は警察につかまっているから、警察へ行って頼むのが一番ええ……」

誰かが言ったのを真に受けた狂女は、それからというもの、せっせと警察署に通ってくるのであつた。冬はあまり来ないが、夏になるとほとんど毎晩のように来た。冬は寒いから出てこないのか、それとも夏になると暑さでにわかに狂気が増すからなのか、その辺はいずれともわからないのであるが、とにかく村を覆う楠の若葉が樹精のような強い香りを噴出するところになると、それに触発されるようにして仏野から警察へと足を運んでくる回数にわかにふえた。

亘たち親子が住んでいる官舎は警察署の裏にすぐ続いて建っていたから、オサキサーが警察にやってくると、その泣くような、訴えるような、祈るような声が、電灯の下で勉強している亘の耳にも聞えてくるのであつた。最初のうち亘は好奇心にかられてオサキサーの姿を垣間見ていたが、しかしその狂気のすさまじさは次第にオサキサーを見ようとする興味を亘の中から砕いていった。もちろん夫に捨てられた女の悲しみや、その悲しみが女心を発狂させた傷の深さなどが、小学生の亘にわかるう苦はない。ただただ亘にはそのおどろな女の狂乱が恐ろしく、不気味であつたのだ。

「オサキサー見たけりや警察へ行って見りゃあ、ええなあ」

「警察の中に居れば、オサキサーが来たってこわくねえなあ」

子供たちは砂利道をばたばた歩きながら勝手に喋りあい、そして最後はきまって亘に対する

「亘、お前なんかオサキサー平気なんだろう、毎日見ているんだから……」

いくぶん嘲笑的な言葉になるのであつた。

亘はだんだん不気嫌になり、返事もしないで下を向いたまま歩きつづけた。オサキサーが警察署の電灯の下でくどくど同じことを父に訴えている姿が眼に浮んでくる。職業柄仕方なくその相手をしている父の姿。だから友達の間からあまりオサキサーのことが悪しげに言われ、嘲笑されると、亘はなんだか自分の父までがいつしよに馬鹿にされているような気持ちになってくるのであつた。

亘は急に顔をあげた。

「オサキサーだって可哀いそうだよ。自分が好きで気狂いになったんじゃないもの」

亘のきつとなつた表情に

「なに、亘、お前オサキサーの味方か？」

「亘はオサキサーにはれて……」

「わーい、やっぱり亘はオサキサーだ」

「亘のオサキサー……」

友達はいつせいにやしたてて、いちもくさんに逃げていった。後にとり残された亘は

『わーい、亘のオサキサー…』

という声を遠い筈のように聞きながら、道ばたの石ころを思いきり靴で蹴とばした。小石は亘の靴先から一直線に走って、草叢の間を鋭く縫って消えた。

と、見ると、草叢の中に、彼岸花が一輪、赤い花を咲かせていた。亘は一瞬ぎくりとして、蹴り上げた足をとめた。彼岸花の赤い色に、亘はいつか見たオサキサーの腰巻の赤い色を思い出したからであった。彼岸花はオサキサーの霊のように、ひっそりと、まっすぐに咲いていた。

亘は近寄って、靴の先で思いきり彼岸花を蹴散らすと、真昼の田圃道を走って帰った。

こうした昼間の話が夜へと延長されたわけでもあるまいが、その夜本当にオサキサーが警察署に姿を現わしたのであった。この夏に入ってから初めての嘆願であった。

暮れるにおそい夏の日も、その時刻ともなればとつぷりと暮れて、月のない夜はにわかに暗さを増していた。涼しい夜風が楠の香りにまじって漂った。街道とはいっても田圃のなかを一直線に走っている山道沿いに、数十軒の家がちまちまと並んでいるにすぎなかったから、電灯を煌煌とつけた二階建ての警察署の建物は、暗い街道

の中でそこだけが一きわ明かるかった。縁側に蚊やりのいぶしをたき、冷やっこで夕食をたべながら

「今年はまだ珍らしくオサキサーが現われんなあ、いい按配だ」

と父が言うと、母は眉を逆立てて

「あなた、縁起でもない。オサキサーの話などよしてください。桑原、桑原…、まったくあの声ときたら、こちらの身がちぢむ」

その時だった。警察署の建物の方から女の金切声のような声が聞えた。三人の視線はいつせいにその方に走った。

「あつ、オサキサーだ！」

亘は思わず興奮した声をあげた。亘の頭のなかで、赤い彼岸花が靴の先から空中に飛び散り、草叢のなかへゆっくり落ちていった。

「いやだわねえ、オサキサーのことなど話すものだから、本当に来てしまったじゃありませんか。本当にいやあなたがわざわざ呼び寄せたようなものですよ」

だが父は職業上の馴れからか、平然と夕食をとりつけていた。

警察署の門を入ると右側に鉄骨の火の見櫓がそそり立ち、左側には楠の巨木がある。楠の梢は夏の夜の闇のなかに繁っていたが、下枝は警察署の電灯で明るく照し出

されていた。オサキサーはその楠の下に立っていた。そして若い警官が玄関の戸を開けてくれないものだから、外から窓にしがみつこうにして明るい室内に向ってわめいていた。その姿が卓袱台にむかっている亘のところから、榎の垣根の暗い葉群をすかしてちらちら見えた。

「わしの旦那さん、どこへ行ったんかのう…」

闇が静かなので、オサキサーの奇妙な声はこちらの建物までよく聞えてくる。

「わしの旦那さん、いつ返してくれるのかのう。教えておくれ。のう、のう、いつかのう…」

しかし室内の若い巡査は知らぬ顔で、窓の方に顔も向けなかった。自分が相手にされていないことは狂人でもわかるのであろうか。やにわにオサキサーは激しく窓の縁をたたいて

「のう、のう、返しておくれったら、わしの旦那さん…」

亘はそのとき、いつか見たオサキサーの凄い姿を思い出していた。それは忘れようとしても執拗に頭の中にこびりついた光景だった。

昨年の冬のことだった。冬の夜は暮れるに早い。人家は雨戸を早や早やと閉めきって村は闇にとざされ、街道の中央にある警察署の電灯だけが寒空に異様に明るく輝いていた。冬にはめったに姿を現わさないオサキサーが、どうしたわけかその夜は姿を現わしたのであった。

黒ずんだ縞の着物から出た顔や手足には生気がなく、

冬の夜風に吹かれて着物はめくれ上り、油気のない髪が乱れてなびいたさまに、亘は怪談の挿絵の鬼女を想像して凜然とした。闇夜の楠から散った茶色の枯葉が、小さな龍巻風に吹かれてオサキサーの足許で舞っていた。そのときオサキサーのまかれた着物の裾から赤い腰巻が見えた。電灯に浮きあがったその赤は、異様な色であった。その突如として現われた、予想もしなかった腰巻の色は、亘に強いショックを与えたのだった。

幼い亘はその赤い色に、狂女の中に流れている命のあやかしのようなものを瞬間感じたのだった。気は狂っていても、赤い腰巻をすることだけは知っている、そんな女の奇異な生ま生ましが、強く亘の心を打った。だが、それは悲しい色だった。亘は本能的に眼をそらした…

オサキサーは窓縁をいつまでもゆすって嘆願していたが、最後にはさめざめと泣くような声になった。やがてぶつぶつと口の中で泡をふくような声になると、やっとな若い巡査は潮時が到来したと判断したのか、窓から首を突出し

「ああ、わかった、わかった、また明日おいで…、そのうち、きつと帰ってくるよ」

オサキサーは窓からずり落ちるように手を放すと

「きつとやな…、きつとやな…」

うめくように言うと、それで急に憑きものが落ちたようにケロリとなり、くるりと踵を返すと、すたすたと夜風のように帰っていつてしまった。警察署がまたものと静寂に帰ると、亘はふっと

「オサキサーって、かわいいそうだね」と言った。

「なに馬鹿なこと言っているの、しょうのない子だ、本当に。そんなに可愛いそうなら、オサキサーの子になつたらいい」

母は警察署の玄関が見える縁側の障子をピシャッと閉めた。

亘は心の中に仙野までのまっ暗な山道を思い浮かべていた。こんな夜更けの山道をオサキサーは一人でどうやって帰るのだろうか。気狂いだから、怖くはないのだろうか。まっ暗な田圃道、山道を、オサキサーが髪をふり乱し、草履の音をびたびたさせながら足早に歩いていく姿を想像しながら、いつか近くで見たオサキサーの顔の、人形のように無表情な中に、ひととき高い鼻筋が異様に美しかったのを鮮明に思い起した。

こうしてオサキサーは亘の心の襷に、徐々に屈折した影を落していった。

(二)

亘は父と母の本当の子供ではなかった。亘が三才のと

っていたこと、いたずらを叱られ暗い押入れの中で二人いっしょに大声で泣いたこと、夕方遊び疲れて家に帰る途中に見た真赤に焼けた西の空、そして最後はきまって亘が生家と別れを告げた日、玄関の暗がり立ってまん丸に眼を見開いてじっと亘を見つめていた兄の顔が亘の眼の裏にいつぱいにひろがって、兄への追憶は終るのであった。

亘は兄と逢うことはできなかったが、しかし父母と生家との間には蔭である程度の音信は続いていたようである。この四月亘が小学校に入学した時のことである。ある日郵便小包みが届けられた。それは亘が小学校に着ていく新しい洋服であった。紺のサージに白い襟のついたハイカラなデザイン。亘はそれを見た瞬間に、生家からの入学祝いの洋服にちがいないと直感した。しかしそれを口に出しては言わなかった。

それから何時のことであったか、母が留守のときであった。押入れにある母の手文庫の蓋があいていた。中には手紙や書き付けなどが乱雑につまっていたが、その間から一枚の写真がはみ出しているのを亘は発見した。それは写真屋が撮影したキャビネ版で、洋服を着た小学生の横にきちんと着物を着た母親が腰掛けていた。写真を持った亘の手はかすかに震えた。それは兄と生母の写真だった。それを母はアルバムに貼るのをはばかって手文庫の底にしまっていたのである。

き、今の父と母のところへ貰われてきたのである。

亘には兄が一人あった。

二人兄弟のうちの一人を養子に出した生家の複雑な事情や、亘の生家と今の父母との間のどのような関係からそのような話しあいのできたのか、難かしい事情は幼い亘にはいっさいわからなかったが、しかし兄と別れた辛さだけは異様に強く亘の幼な心を捉えて離さなかった。子供のなかった今の父母は亘を可愛いがってくれたから、生みの親に対する執着はそれほどに残らなかったが、なぜか兄に対する愛着だけは消えなかった。というよりも、むしろ日を追うにしたがって亘のなかで静かに高まり、強まっていったといっている。

父母は亘に生家との交際をいっさい許さなかった。向うから訪ねてくることもなければ、こちらから訪ねていくこともない。だから別れたきり、亘は兄と一度も逢ったことはなかった。自分は貰われてきた子だから兄に逢ってはいけないのだと、幼な心に自分で言い聞かせ、だからいくら願っても絶対兄には逢えないのだという気持ちが、かえって兄への愛着をかきたてた。

亘はときどき一人になると、ぼんやり兄のことを考えることがあった。しかし三才といえど物心がつき始めたばかりの頃であるから、そんなにたくさん兄の記憶が残っているわけではなかった。兄はメンコ遊びが上手で、押入れの箱の中に勝ったメンコがぎっしりとつま

兄は少年らしい凜凜しい顔を緊張させて写真に写っていた。不意に母が帰ってきて、亘のそんなところを見つかりはしまいかと心配しながらも、喰い入るように写真を見つめた。やや細面での顔に鼻筋が高く通り、描いたような眉の下につぶらな眼が光っていた。亘がこれまで何十回となく空想と追憶の中で、美化し、偶像化してきた兄のイメージが、少しも損われることなくその写真の中に定着していた。この時から兄は亘の中ではほとんど神に近い存在になった。兄の横で生母はたっぷりした髪を型よく結びあげて、きりっとした姿で写っていたが、しかし不思議と亘には生母のところへ戻っていききたいという気持はなくなっていた。

その日から亘には母の外出が待ち遠しくなった。母がいなくなると亘は吸い寄せられるように押入れの手文庫をあけ、その写真を取り出した。

だがそんなことが続いて一ヵ月ばかりたったある日、手文庫をあけた亘はぎくりとした。兄の写真がないのであった。亘は狂ったように手紙や書類を一枚一枚めくり、ばらばらにして写真を探した。しかしついに写真は出てこなかった。亘は背中に見えない母の視線を感じた。母に見つかったのに違いない。どこへ母は写真を隠してしまっただろう。もう兄の写真を見ることはできないのだと思うと、亘は絶望でまっ暗になった。

亘は呆けたようになり、下駄をつっかけると庭に出た。

庭には赤い鳳仙花が音もなく咲いていた。

「母ちゃんの意地悪！」

そう叫ぶと、母が丹精して咲かせた鳳仙花の花群を下駄で蹴飛ばした。つづいてその場に崩れるようにしゃがみこむと、地上に散った赤くつややかな薄い花弁に唾を吐きつけた。地上には蟻の群がせわしげに往き来していた。亘は手を伸して、蟻を一匹ずつつまむと、人さし指と親指で丹念に殺し、鳳仙花の花弁の上に積み上げた。ぼろぼろ涙をこぼして泣いた。蟻の屍が花弁の上からこぼれ落ちそうになったころ、亘はやっと顔をあげて、垣根の外に広がる田圃に虚ろな眼をむけた。そこには西の空が拡がっていた。その空の、ずっと西の、遠い彼方……。

亘は立ちあがり、空にむかって

「兄ちゃん……」

と叫んだ。

そして垣根の外に飛び出すと、西の空にむかって、どこまでも、どこまでも、田圃道を走っていった。

その日、亘は日がとっぷり暮れてから家に帰った。父と母はもう夕食を終えていた。そして母からひどく叱られた。

「どこへこんな遅くまで行っていたの」

亘はだまりこくって台所の隅に立っていた。

「あやまりなさい……」

それでも亘はだまって立っていた。

中心に向って走っていったのである。その時

「あっ」

と亘は小さな声をあげ、胸がかきむしられるような衝撃を受けた。亘の視線は一人の上級生の横顔にむけられていた。赤い体操帽子をかぶり、ランニングシャツの下からむき出しになった両腕が汗で光り、上級生は亘を無視して走りすぎていった。

運動場の中央は赤い体操帽子と白いランニングシャツの群で花が咲いたようになり、その上級生もあつという間にその群に呑みこまれて見えなくなってしまうた。

あの人はいったい誰だろう……

あの人は……

亘はしばらく立ちどまって、運動場の中央で始った上級生の体操を眺めていた。この学校の中にあんなに兄に似た上級生がいたなんてことを亘はこれまで考えてみたこともなかった。

それからの亘はなんとなくさぐるような眼つきで学校の中を眺めるようになった。運動場で遊んでいるとき、廊下を歩くとき、掃除の水汲みに行くとき、それとなく亘は気を配ってあの上級生を探していた。

亘たち下級生の教室は運動場に面した校舎の南端にあったが、五年生、六年生の教室は、職員室と中庭で隔てられた北側の独立した建物になっていた。だから亘が用事もないのに上級生の教室の方までわざわざ出掛けてい

「強情な子だね、この子は。今夜は晩ごはんをあげませんからね」

亘は冷い眼ざしで母を見つめた。心の中で兄が助けに来てくれるのをひそかに祈っていた。

兄の写真は亘の前から消えてしまった。だがあきらめられない亘の気持は、いつのまにか兄に似たものがあれば何でも探しまわるような眼つきになっていた。少年雑誌の口絵や写真に、兄に少しでも似た顔があれば、丁寧に切り取って机の抽出の奥にかくしておいた。街道の四ツ角に村に一軒しかない写真屋があった。申し訳程度のショーウインドがある。もしかしたらその中に消えたあの写真があるかもしれない、そんな幻想にしばしば亘はとりつかれた。現実になんかことがあり得ようはずはないとわかっていても、ある日、わざわざそのショーウインドを覗きに行った。しかしそこで見たのは、少し変色した花嫁さんの写真と、若い娘の気どったポーズの写真だけだった。

亘が仏野の辰吉と逢ったのは、ちょうどそんな頃であった。

いや逢ったというよりも、最初はすれ違ったといった方がいいかもしれない。午後の授業が終わって亘たちが帰ろうと校門の近くを歩いていたときであった。五時間目の体操の授業の始まる上級生が、仕度をして、運動場の

くことはできなかった。いつか職員室に用事があったの帰りみち、亘は勇気をふるい起して一、二度、上級生の教室の方を遠廻りして帰ってきたことがあった。しかしその上級生を探すことはできなかった。朝礼の時などにもそっと視線を上級生の方に走らせてみるのだが、整列した大勢の上級生の中から発見することはなかなかできなかった。

あの上級生はいったいどこへ行ってしまったのだろうか……

小学校の校庭はおびただしい楠で取り囲まれていた。楠のつややかな葉照りは夏の象徴のように輝き、その下枝の連鎖は校庭にたっぷりした日蔭を投げかけていた。

その日、亘は昼休みに友達と楠の枝から枝へと逃げる蟬を追いかけていた。そのとき一本の楠に一人の上級生がもたれかかるようにして立っていた。しかし亘は逃げる蟬に夢中でそれには気がつかず、蟬が

ジーッ

と一声高く鳴いて遠くに飛び去ってしまったとき、はじめて眼の前にあの上級生が立っているのに気がついたのであった。

あまりの突然で亘はどうしていいのかわからず、足が小刻みにふるえた。

友達が次の蟬を追って立ち去ってしまったも、亘はわざと靴をぬいで逆さに振り、靴に入った小石を取り出す

真似をして、しばらくその場所に立ちどまっていた。

その上級生はよれよれの黒いズボンをはいて、白いシャツは汚れていた。この前すれ違った時よりもうす汚れてみえた。

彼は淋しそうな顔で楠の幹にもたれかかり、喧嘩な運動場を眺めていた。親しい友達がいなのだろうか、ふと亘はそんなふう思った。

彼は色が白く、白というよりも青白いといった方がよかった。それはなにか病的な感じを与えた。だが顔の中の眉は思いついて濃く、鼻筋が鮮やかに通っていた。それは亘にふとオサキサーの鼻筋の高さを連想させた。

だがその顔はなにか全体にぼっと霞んだ感じで、唇をうすく開いた顔つきには、ちょうど十歳のように間の抜けたところがあった。

しかし亘にとっては、しまりがなくても、うすのろでも、何でもよかった。ただ兄に似ているだけで満足であった。

昼休みはそろそろ終ろうとしていた。

午後の始業のベルが鳴るまでに、亘はなんとか話のきっかけをつけようと一生懸命考えていた。しかしそんな口実を作ることには幼い亘には無理だった。相手は上級生である。めったなことを喋るわけにはいかない。

やがて亘の恐れていた始業のベルが鳴りひびいた。彼は楠から離れると、すたすたと運動場を横切っていた。

ったのである。

喧嘩はもう一段落すんだところらしく、二人は無言のまま強い太陽の下で睨みあっていた。二人の顔からは汗が流れていた。そしてあの上級生の口許からは血が流れていた。彼は撲られたのだ……。

彼は血を流したまゝ、力を入れた両手をまっすぐにのばして、怒りに耐えていた。なにかそれ以上の行動をさせてはいけない見えない力が、彼を金縛りにして、その怒りの限界に耐えているかにみえた。

澄さまの後には、色が黒くて背の高い、喧嘩の強そうな生徒が立っていた。

「これから澄さまに手を出したら承知せんぞ、ええか……」

それはドスのきいた声だった。

亘はその背の高い生徒を見上げながら、お代官さまのシェパードを思い出した。聞くところによるとお代官さまの屋敷には大きなシェパードが二匹番犬として飼っている。そのシェパードは恐ろしい犬で、知らない人間が無断でお代官さまの中に入ると、飛びかかってくるということであった。そのシェパードと同じようにこの背の高い生徒は澄さまの用心棒なのだった。

その用心棒は更に追つかぶせるようにして

「気狂いのくせして、なんや……」
と言った。

亘はその後を追った。そして五年三組の教室の中に消えていくのを眼でたしかめた。

午後の授業中、亘は時々窓外の五年生の教室の方角に視線をむけた。五年生の教室は職員室の建物に遮ぎられて見えなかった。しかしたとえ見えなくても、その方角にあの上級生がたしかに居るということが亘の心を安堵させた。がそうした亘の放心した授業ぶりは一、二度先生から注意された。

ある日学校で喧嘩があった。

そこは五年生の教室に近い水呑み場で、いつも蛇口をもれた水が地面を黒く濡らして、運動場の片隅に黒い図形を描いていた。そこに人垣が出来ていた。亘は十歳といっしょに喧嘩を見に走っていた。

喧嘩をしているのはお代官さまの澄さまだった。五年生になるお代官さまの一人息子の澄彦は、村の者から澄さまと呼ばれていた。小学校で彼だけが頭髪を伸している唯一の生徒であり、また皮靴をはいているのも彼一人であった。神経質で、肌が水蜜桃のうす皮のように美しい上品な顔だったが、人を見るその眼許にはいつも軽い軽蔑の色が浮んでいた。もちろん成績はこの山村の小学校の中では抜群で、卒業すると彼は県庁のあるT市の中学校に進学し、寄宿舎に入ることであった。

だが澄さまの相手はことあるうに、あの上級生であ

瞬間、あの上級生の顔には怒りともえあがった。

「まだやる気か……、てめえ……」

再び用心棒はあの上級生をなぐりつけた。彼は水呑場の濡れた土の上に鈍い音を立てて倒れた。

その時人垣の一角が崩れて、二、三人の生徒が駆けよった。そしてあの上級生を助け起した。その一群は仏野から登校する生徒たちだった。

「お代官さまだと思って威張ってやがる……、馬鹿にするな……」

「気狂いでなにが悪いかよ……」

「……」

彼等は口々に澄さまたちが立ち去った方向に向かってわめき散らした。

亘はたゞ呆然と立ちすくみ、一人の生徒があの上級生の口許の血を、手のひらで拭いてやっているのを白昼夢のように眺めていた。あの血を拭くのは自分でなくてはならない……亘はそう思った。だが亘の足は釘づけにされたように動かなかった。

喧嘩見物の人垣はすでに崩れていた。あの上級生も友達に取囲まれて教室の方へ歩いていった。亘と十歳は並んでのろろと歩いた。次の授業の始まるベルがけたたましく鳴っていた。

そのとき亘ははじめて十歳から、あの上級生が辰吉という名前、仏野から通っているということを聞いたの

である。

『仏野へ行つてはいけませんよ』

母の言葉が耳許でひびいた。だが

『仏野の人だつてかまやあせんわい。辰吉は僕の兄ちゃんだもの。』

亘の中へにわかに仏野がぬきさしならぬ切迫した感じで迫ってくるのを感じた。

仏野は村でも一番奥の、山深いところにあった。だから仏野の子供たちは学校へ、小一時間もかけて通わなければならなかった。

仏野には一つの伝説があった。

吉兆牡丹の伝説である。

仏野からは深い谷をへだてて北に吉兆が岳という山が見渡せたが、その切りたった崖に吉兆牡丹という花が咲くのであった。色はもえあがるような緋色。切りたった斜面の高みに大輪の花をつける。

しかし吉兆牡丹とは五十年に一度咲く幻の花であった。それは速くから眺めると、それと確かに咲いて見えるのだが、人が近寄ると消えてなくなり、かつて誰も花の正体を近くで見た者はないという、いわば伝説の花であった。

昔その花の正体を見届けようと、ある男が吉兆が岳に登ったことがあった。しかし仏野からあればどはつきり

見えた大輪の牡丹も、吉兆が岳の絶壁にたどりつく頃になるとすっかり道に迷って、花の存在を見失ってしまった。途中から引返して来ざるをえなかった。しかし男は帰って間もなく狂死したということであった。

また別の男の話がある。吉兆が岳を訪れると噂に聞いた大輪の花はそこにはなくて、懸崖いちめんに彼岸花が真っ赤に咲き乱れていたということであった。だから吉兆牡丹とは実は彼岸花の群生のことを言うのであって、それが速くから見るとちょうど大輪の緋牡丹のように見えるのだ、という説も伝わっているが、しかしさだかなことはわからなかった。この彼岸花の群生を見た男も、三日目には緋のような血を吐いて死んだという。

しかし吉兆牡丹が見えるのは、仏野のどこからでもというわけではなかった。仏野のちょうど真中あたりに極楽寺という寺がある。古い名刹で、青い葺の稜線が楠の大木の上に更に伸びあがって頂をのぞかせていた。吉兆牡丹が見られるのはこの寺の境内からに限られており、したがって極楽寺は別名を吉兆寺ともよばれていた。

吉兆牡丹は五十年に一度しか咲かないと言われているが、しかしいまだにその花を実際に見た者は実は一人もいないのであった。吉兆牡丹の咲く年は豊作だと言ひ伝えられている。しかし不幸にしてその花を見た者は必ず死ぬと言われているから、仏野の人々はむしろ豊年を恐れて暮す。

そうした意味からすれば吉兆牡丹はむしろ不吉な花で、不吉牡丹とか凶兆牡丹とかよばれて然るべきなのに、吉兆牡丹と名づけられているのはどういうわけなのであるうか。牡丹を見て死ぬ人は地獄に落ちるのではなく、極楽浄土に行けるのだから吉兆牡丹でいいのだというのが、仏野の古老の説明であった。

その証拠が極楽寺の本堂の壁画だという。その壁画は近隣にも有名なのであるが、極楽寺という名前なのに極楽浄土の絵は一枚もなく、うす暗い本堂の内陣はすさまじい地獄絵ばかりで埋っていた。そしてその理由は、谷を一つへだてた吉兆が岳に極楽があるのだから、谷の手前の寺には地獄絵だけがあればいいのだ、というのが寺の住職の説明であった。

こうしてみると仏野に咲く彼岸花は、あるいは死の花なのかもしれない。母が

『仏野へ決して行ってはいけませんよ』

と言ったのも、あるいはこの辺のことを言っているのかもしれない。

『彼岸花はお墓の花。』

と母がいつか言った言葉を、亘は暗く濡れた感じで思ひ起していた。

そうしてみると仏野にいちめんに咲く彼岸花は、花が本当に咲いているのではなくて、ちょうど空の青さが湖水に映って紺碧の深みに見えるように、吉兆が岳の崖の

牡丹の緋色が仏野の山野に反映して燃えあがっているのかもしれないのだ。

仏野はそうした恐ろしい所なのかもしれないのに、だが亘は仏野に憧れていた。ただ、辰吉が仏野の人間だという、ただそれだけの理由で。

だが、仏野は怖いところ。

一人では行けない。

十蔵ならばそんな亘をいつか仏野へ連れていってくれるかもしれないのであった。

(三)

夏休みが近づいていた。朝から蟬が猛暑の予告のようにけたたましく鳴き、垣根にはおしろい花が赤く咲いた。そんなある朝、亘は井戸端で倒れた。

井戸は裏庭の隅にあり、その上を楠の大木が覆っていた。そこからは横の垣根越しに警察署の留置場の窓が見えた。井戸の周辺は濡れて涼しく、白い花粉のような雪の下の花が咲き、井戸水がたえずしたたるあたりは緑の苔で覆われていた。

竹竿の先についた釣瓶を井戸の奥深く差し入れると、井戸の水底は暗く、森閑として、水底まで続く丸い井戸枠の内側は、水を含んだ苔でびっしり覆われ、ひやりとした冷気が亘の顔に当たった。釣瓶の水を洗面器にあげ、顔を洗おうとすると、急に眼まいがして亘は倒れたので

ていった。こうして熱は徐々にさがり、一週間ほどたつと、医者が耳の後を押さえてもほとんど痛みをもう感じなくなった。

だがそうした一週間のあいだというものの、亘は寝たままで兄が見舞いに来てくれることばかりをひそかに願っていた。

こんなに長い大病ともなれば、父や母が生家へ連絡しない筈はないと思った。そうすれば少くとも一度ぐらい見舞いに来るだろう。夏休みだから兄もいっしょに来るかもしれない。こうして亘は毎日毎日、玄関に現われるかもしれない空想の見舞客を頭の中で反芻したのだった。

……突然、玄関先に平常とちがったざわめきが起こる。

『すっかりご無沙汰しておりまして……、本当にどうも……』

『いや、こちらこそ、よく来てくれました』

『病気の方は……？』

『ええ、もう、だいぶ……、とにかく、まあ、どうぞ、お上りになって。本当に、まあ、このお暑いなかを……』

亘は心がときめく。だが、わざと眠ったふりをしている。よそ行きの洋服を着た人影が部屋に入ってくる。亘はうすく、そっと臉をあける。あの写

彼岸花の束を突き出した。

一瞬母はどきっとして、眼の前に出された花束を見たが、この前と同じように手早くなにかの駄菓子を紙にくるむと、追いたてるように十蔵に渡した。十蔵が菓子包みを受けとり、だまって裏木戸から帰っていくと、母は縁側に花束を投げすてた。

「あの子、お見舞いに来るふりをして、お菓子をもらいに来たんだよ、それに縁起でもない、こんな彼岸花なんか持ってきて……」

母の棘をふくんだ言葉は亘をキッとさせた。

「そうじゃないよ、母さん」

「そうにきまっていますよ。こすいんだから、あの子は……」

「そんなら、母さん、お菓子やらなきやいいじゃないか」

「やらないわけにはいきませんよ。そんなことしたら、警察の署長さんの奥さんが子供が行ったってお駄賃もくれないかったって、世間から笑われるからね」

縁側の上に母がまるで汚いものを投げるように捨てた花束を、亘は蒲団の中から眺めていた。それは咲き揃った彼岸花が二十本ばかりで、赤い花弁は重なりあってあたかも炎の塊のように見え、いつか十蔵が

「仏野には彼岸花がいっぱい咲くぜ」と言ったことを思い出していた。

真そっくりの兄の顔が見える。

亘は声をあげそうになる。だが、じっとしてなくてはいならない。自分は病気なのだ。

兄が歩いてきて亘の枕許に坐るまでの時間の長さに耐える、甘美な苦痛……

だがそうした期待は一日一日と裏切られていった。いつまで待っても兄は来ない。いつか亘は兄の見舞をあきらめていた。

『やっぱり母さん、僕の病気を知らせなかったんだなあ』

ほんやりそんなふうに考えていると

「亘ちゃん」

小さな声が裏庭でした。十蔵だなと直感した。

うすく眼をひらくと、十蔵が真赤なものを抱えて立っているのが見えた。十蔵が持っているのは赤い彼岸花の束だった。夏の日ざしに燃える炎のように見えた。

「亘ちゃん、まだ病気悪いんか……？」

十蔵はのろのろとした口調でそう言った。

そこへ顔を出した母が

「あっ、十蔵ちゃん……」

十蔵を見る眼が険しかった。十蔵は母に対しておじぎをする才覚もなく

「おばさん、これ……」

仏野ってどんな所だろう。噂に聞くだけで一度も行ったことがないだけに、かえって亘の空想をかきたてた。

十蔵が毎日通ってくるところ……

辰吉が住んでいるところ……、そしてオサキサの住んでいるところ……

亘は楠の巨木に覆われた奥深い山間を想像した。そこには古い寺があり、寺の境内にはこの村一番の古い楠があるという。その仏野を覆いつくさんばかりの老木の幹には、お代官さまの濠の底に水の主が棲んでいるのと同じように、楠の精が棲んでいるのかもしれない。そして仏野のいたる所には真赤な彼岸花が密生し、緋毛氈のようにどこまでもひろがっている。

その仏野の彼岸花を十蔵がわざわざ折り取って持ってきてくれたというのに、母は再び病室に入ってくると

「嫌だねえ、まだ彼岸花なんか見ているの……」

花束を裏庭に投げ棄てようとした。

「あっ、嫌だよう、棄てちゃあ、いやだ」

亘は叫んだ。はずに氷嚢が頭から外れ、ぶるんぶるんと不安定にゆれた。

「馬鹿だねえ、この子は。彼岸花ってお墓の花ですよ、縁起でもない、病気で寝ているっていうのにき……」

「僕、彼岸花が好きなんだよ……、差しておいてよ、花瓶へ……」

「気が進まないねえ、じゃあ、一日だけだよ、いいね」

亘は頭から外れた氷嚢を自分の手で直しながら、花瓶の彼岸花を眺めていた。病の峠を越した耳は、あまり長く氷嚢を当てがっているとかえって冷くなりすぎてしまうので、ときどき外したり、当てがったりしているのだった。草叢に密生しているときの印象と違って、日の当たらない部屋の中の赤い花群は、しんと静まり返った神秘的な花に見えた。

亘は十蔵がかわいそうで、涙がつーっと流れた。

十蔵は決してお菓子をもらいに來たのじゃない……。

だが、もしも花束を持ってきてくれたのが十蔵ではなくて、辰吉であつたならどんなによかつただろうと、亘はもう一方の頭の隅で別のことも考えていた。しかしいくら考えてみても辰吉がそんなことをしてくれる筈は絶体にならないのだった。二人は言葉を交わしたことがすらない、知らない同志なのである。亘の方では知っていても、辰吉の方で絶対知らない。しかし亘はいつかは辰吉が彼岸花を手にとって見舞いにきてくれるにちがいないと、勝手に空想の中で決めてしまっていた。いったんそう決めると空想の翼はどこまでも伸びていった。

空想の中の辰吉は仏野の草叢で彼岸花を一本一本つま取っている。つま終ると、白く長い茎を葉で束ねる。辰吉の額に汗が光る。うす汚れたランニングシャツでそれをぐいと拭く。

花の赤さが鮮明に残るのであつた。その幻の赤の色は、病気でしばらく遠ざかつていたオサキサーの腰巻の色を、亘の頭呼び起した。オサキサーは今でも毎晩警察署に來ているのだろうか。

「母さん、オサキサー、毎晩來ている？」

「なに言ってるの、突然オサキサーのことなんか言い出して、気味が悪いじゃないの。お前はそんなことばかり考えているから、病気がちつともよくならないんだよ。病人は病人らしく、寝ていればいいの」

(四)

夏は正確に一日一日すぎていった。

亘は病室で寝たり起きたりしていた。

今年も盆踊りがやってきた。昼間のうちから太鼓の音が、人の心をそるように稲田を渡って聞えてきた。

夕方になると十蔵が盆踊りにさそいに来たが、まだ亘は盆踊りに出掛けていくことはできなかった。十蔵は珍らしく小ざっぱりした浴衣を着て、みどり色のメリンスの兵児帯をしめていた。

いつも盆踊りの夜には不思議と月がない。とつぷりと日が暮れて、村が闇一色に塗りつぶされると、夜の海の中に盆踊りの櫓が仕掛花火のように輝いてみえた。大人も子供も浴衣がけて、団扇片手に、その祭の舞台に集っていく。

辰吉は花束を持って歩き出した。

山道を越え、稲の穂先が間もなく出揃う田圃道をずんずん歩く。夏の乾いた白い道を砂ぼこりを立てて歩く辰吉の足音が聞えてくるようであつた。街道まで出ると、警察署を指す、その真剣な顔は無表情に近い。

火の見櫓の下を曲ると、もう裏庭の入口である。

亘は眼をあげて裏木戸を見る……。

だが裏木戸にはいつまでたっても辰吉の姿は見えないのであつた。赤い鬼百合の花が森閑と、切絵のように咲いているばかりであつた。辰吉はやはり來なかつたのだ。でも亘は落胆しなかつた。

亘はもう一度空想の触手を仏野に引き戻すのだった。そして辰吉が再び草叢で彼岸花をつみ取り、亘の家の裏木戸まで歩いてくる道順を、丹念にやり直した。そして、その空想の繰り返しを何度も何度もやっているうちに、いつしかとうとうと眠りの世界に陥ってしまうのであつた。

翌日になると母は

「一日きりですよ……」

と言った通りに、大切な彼岸花をさっさと棄ててしまつた。

だが彼岸花がなくなると、かえって亘の脳裡には彼岸

花の赤さが鮮明に残るのであつた。その幻の赤の色は、病気でしばらく遠ざかつていたオサキサーの腰巻の色を、亘の頭呼び起した。オサキサーは今でも毎晩警察署に來ているのだろうか。

「母さん、オサキサー、毎晩來ている？」

「なに言ってるの、突然オサキサーのことなんか言い出して、気味が悪いじゃないの。お前はそんなことばかり考えているから、病気がちつともよくならないんだよ。病人は病人らしく、寝ていればいいの」

花の赤さが鮮明に残るのであつた。その幻の赤の色は、病気でしばらく遠ざかつていたオサキサーの腰巻の色を、亘の頭呼び起した。オサキサーは今でも毎晩警察署に來ているのだろうか。

「母さん、オサキサー、毎晩來ている？」

「なに言ってるの、突然オサキサーのことなんか言い出して、気味が悪いじゃないの。お前はそんなことばかり考えているから、病気がちつともよくならないんだよ。病人は病人らしく、寝ていればいいの」

「母さん、オサキサー、毎晩來ている？」

と声をあげた……。

者と三人ずつ交互に踊っているのであった。桃色の長袖が念仏囃子の音頭につれて上下左右にひらひら揺れるさまは、あたかも夢の中で水凧がゆれるようだった。

男衆は水色の法被に赤い袴をかけ、日焼けした両脚が鞭のようにしなびた。男衆は全員が小ぶりの太鼓をめいめいに持ち、細い竹の撥で小刻みにたたいて踊っていたので、太鼓の音は、ザンザ、ザンザ、と川の瀬音のように聞え、それはもの悲しい音色であった。

すると、そのザンザ、ザンザ、と太鼓をたたいて飛び跳ねるように踊っている男衆の一人が、よく見ると仙野の辰吉であることがわかった。いま舞台の上で念仏踊りを踊っているのは青年団の人達だとはかり思っていたのに、どうして小学生の辰吉が混っているのかと、亘は不思議に思ったが、しかし眼をこらしてよく見ても、それは辰吉にまちがいはなかった。辰吉はいつのまにか背丈がのび、豆しほりの鉢巻の下に太い眉がきりつとはね上った、大人びた顔になっていた。

次第にひろがる輪のなかで、亘も念仏踊りを踊った。そのとき前の踊り手が後をふり向き、そのひょうしに顔を見ると、亘の前で踊っているのは兄であった。亘は

「兄ちゃん……」

十蔵はこのことを亘に伝えようと、わざわざ亘のところへ寄ったのであろうか。十蔵の話によると、こうだった。

盆踊りの山場である大念仏踊りが終って、舞台は子供たちの踊りへと入れ代った。その時であった。

「キーン」

悲鳴が聞えて、踊りの輪が大きく崩れた。

「オサキサーだ！」

と誰かが叫ぶ。

見ると舞台の上へ黒い影が犬のように飛びあがっていた。髪をふり乱したオサキサーだった。子供たちは悲鳴をあげて舞台から逃げおきた。あわてて二、三人の男たちがオサキサーを取り押えようとしたが、狂女の馬鹿力はそれを振りはらって、二階の櫓へと梯子をよじ登ろうとした。

「降りろ！」

「気狂い！やめろ……」

人々が騒いだ。

オサキサーが梯子を半分ほど登りつめたときだった。二階で太鼓をたたいていた若者が階下の騒ぎに気づいて梯子を下りてきた。そして梯子の途中でその逞ましい足をオサキサーの肩にかけると、思いきり狂女を突きとばしたのであった。オサキサーはまるで檻の固りのように空中を舞って落ちた。そして動物的な悲鳴を残しながら

夢であった。

亘は眼をさました。耳を澄ますと遠い盆踊りの囃子が地鳴りのように聞えてきた。うとうと眠っているうちに、遠い祭囃子が亘のなかに侵入してきて、亘は盆踊りの夢を見ていたのであった。

盆踊りは今がたけなわらしい。

夜はだいぶ更けていた。

と、その時、闇のなかに声がして、十蔵が

「もう家に帰るんだ」

と言って亘のところへ立寄り、新聞紙にくるんだ鼈甲飴を半分割って亘にくれた。黄色で透明な飴は亘の口の中で甘くとけ、病人食にあきた亘の体内に、急に生き生きとした子供の世界を呼び戻した。

十蔵も鼈甲飴の残りを口に入れながら

「オサキサーがなあ……」

と言った。

「オサキサーが？」

「オサキサーが祭りの櫓から突き落されたんや……」

そう聞いたとき、亘の頭のなかに、華やかに輝く祭りの櫓の頂上からオサキサーがゆっくり孤を描いて闇の中に落下していく姿が、まるで夏の夜を流れる人魂のように浮かんだ。

ら、男達の手によって闇のなかへ連れ去られていった。

その翌日のことであった。

当番に当たった若い衆が祭りの後片付けにと広場へ出掛けた。歓楽の後の舞台には紙くずだけが散らかり、森閑として荒廃した姿を日光の下にさらしていた。

すると人のいない筈の櫓の二階に、オサキサーが死んだ猫のように寝ていたというのであった。

近所の人が来て母にひそひそ声で話しているのを、亘は全神経を耳に集めて聞いた。

〔五〕

そんな盆踊りもあつという間に過ぎて、夏は秋にむかって熟れていった。

村を覆う楠の上空には入道雲が起立するように湧きたち、二、三回激しい夕立があると、それを境にして急速に涼しさを増していった。夏休みはそろそろ終りに近づいていた。

亘はもう起きられるようになっていた。だがひそかに期待していた兄はついに見舞いに現われることもなく亘の病氣は回復し、そして夢の中で願った辰吉が彼岸花を持ってきてくれるということも実現しなかった。

空は日まじに青く澄んでいった。

日ざしの強い昼間のうちは家の中で静かにしていたが、

夕方の涼風が吹く頃になると亘は浴衣を着て裏庭に出た。銀河がくつきり浮かんでいた。

畦道にかがんで草の根もとを丹念に探すと、ゆっくり明滅する盛りをすぎた蛍が見つかった。

「長く外にいてはいけませんよ」

と母に言われていても、一匹が見つかる面白くなって、稲田の間を奥へ奥へと入っていった。稲の花は結実して穂先が甘い日なたの匂いを発し、闇の中で音もたてずに成熟を速めているのがわかった。

その時であった。暮れなずむ稲田の彼方を、裾を乱したオサキサーが風のように歩いていくのが眼にとまった。亘は思いなしか、どきりとした。オサキサーはこれからS町警察署へ嘆願に行くのになかった。父がオサキサーを追ひ払い口実に

「村の警察へばかり采んと、S町の本署の方へも頼んでおいで」

と言ったのにちがいがなかった。オサキサーは父のその言葉を真に受けて、どんなに夜おそくてもS町まで出掛けていくのだった。

今から行けば帰りは夜中をすぎてしまうだろう。父のいい加減な嘘を信じて、往復五時間の夜道をこれから歩きつづけるオサキサーが亘には哀れに思えた。と同時に、狂女の執念が恐ろしくもあった。

亘は蛍をとるのも忘れて、しばらく、影絵のように闇

に消えていくオサキサーの背中を見つづけていた。

それから一週間ほどしてからだった。

亘は父につれられて魚釣りにいった。川では鮎が釣れた。小砂利の川原を蛇行する透明な水の中で、影のようにす早く鮎は泳いだ。釣り上げると鮎は掌の中で水の精のように躍り、細いなめらかな肌からアイスキャンデーのような芳香を発した。

日暮れが近づいていた。

西の空が晴れやかに輝いていたかと思うと、山間の村は急速に日暮れの速度をはやめ、四辺はみるみる薄墨色に包まれていった。川の水面だけが銀色に光り、水に浸された魚藍の中で、釣り上げられた鮎が時々身をひるがえして水音を立てた。遠くの人家に灯がともり始めた。釣に夢中になっていた亘は、いつしか父と離れてしまった。夕闇が急に亘を心細くさせた。亘は釣竿を片手に父にむかって走っていった。

その時であった。

高く茂ったすすきの叢から不意に人影が現われると、亘の前に立ちどかっていたのである。髪が乱れ、皺が深く、眼が鋭く亘を睨んでいた。父と自分しか居ないと思っていた夕暮の川原に、突然現われた人影は亘を恐怖の底に突き落した。

「人攫い……」

亘の身体は凍りついたようになり、前につんのめるようにして、やっとその人影を駆け抜けた。そしてやっと父の姿が視界に大きくなったとき、

「あれはオサキサーだった」

という恐怖が改めて亘の背中を襲った。

亘は今きた方角を恐る恐るふり返って見た。だがそこにはすでにオサキサーの姿はなく、ただ日暮れの川原があるだけだった。

亘は初めて狂女の本当のこわさに触れた気がした。

しかし、それにしても、オサキサーはなぜこんな夕暮れに、川原の草叢などに居たのだらう……。そしてこれがオサキサーを見る最後にならうなどと、もちろん亘は夢にも思うことはできなかった。

(六)

明日から秋の新学期が始まるという日、母は朝から台所で一生懸命なにかを作っていた。亘が行ってみると、米の粉をまるめた団子だった。

「今日のお昼にたべるの？」

「違います、お地藏さまにあげるんですよ。亘の病気の治ったお礼に……。亘も行くんですよ……」

母は真剣な顔つきでそう言った。

お昼ごはんを早目にすますと、亘と母はいっしょに家を出た。

「母ちゃん、どこまで行くの？」

「だまってついてくればいいんだよ」

母は行く先を言わなかった。

罌の広い麦藁帽子をかぶっていたが、長いこと夏の日盛りに外出しなかった亘は、躍り狂うような夏の終りの光の中で、目まいがしそうだった。

二人は夏の花と夏の緑の中を、無言でどこまでも歩いていった。

農家の庭には輝くような向日葵が、コスモスの花の間から高々と首をもたげて咲き誇っていた。二人が歩く白く乾いた道の上には、あでやかに濃い竹藪の緑が、中空からおそいかるようにして揺れていた。

真黒に日焼けした子供達が道端で二人を眺めていた。病氣上りの二の腕の白さを恥ずる亘は、母の日傘の下に寄り添って、子供達の視線から身をよけた。

田圃の先に山が見えた。

楠のみどりがしたり落ちるその山道を登り切ると、眼下に次の田圃が続いていた。その稲田の中を母と亘は再び歩いた。だが、そこは亘が一度も来たことのない所だった。

「お地藏さまって、どこにあるのだろう？」

亘にはある予感がしていた。

この道はもしかしたら仙野へ行く道ではあるまいか……。しかし母のきびしい表情を見ると、それを口に

することは、はばかられた。

しばらく行くと道が二つに岐かれ、そこに彼岸花の群生があった。彼岸花のおびただしい群生は、そこがすでに仙野の一角であることを示していた。亘ははっと息をのんだ。

彼岸花の群生を背にして古びた石地蔵が立っていた。だがそれは水子地蔵で、亘たちがこれからお参りしようとする地蔵ではなかった。水子地蔵は赤いよだれ掛けを何枚も首に懸け、足許には雨ざらしになった人形とか、花、それにお供物などが、山のように積み上げられていた。

だが亘が息をのんだのは彼岸花のおびただしさだけにはなくて、その花の下に埋まっている無縁仏の群にであつた。亘が立っている場所から右の方角の山裾にかけての野原が、いちめんの無縁仏で埋まっているのであつた。それはほとんど数えることが出来ないくらいのおびただしさと、仙野の落人伝説を裏書するすさまじい光景であつた。

その昔、戦に敗れてこの地まで落ちのびてきた武者たちが、力つき果てて、この場所で集団自殺をしたのちがいがない。死体からは真赤な花が咲き、無縁仏の墓石の間を埋めつくし、咲き誇って墓を吞みこみ、今やあたかも血の海のように亘の前に咲き狂っているのだった。

赤い花を前にして、呆然となった亘の脳裡に、一つの

つも辰吉が歩き、十蔵が歩き、オサキサーが歩く道である……、その同じ土の上をいま自分の足が踏んでいるのだと思うと、その思いがにわかに恐ろしい感動となって亘を襲った。

亘はワッと泣き出した。

「どうしたの、こんなに遠くまで来たから怖いのかい？」

母が聞いた。

「ううん」

亘は首を横に振った。

「母さんがいっしょだもの、怖いことなんかあるものかね」

水子地蔵の曲り角から母は、裏道である細い道へと折れた。亘はしゃくり上げながらその後についていった。

暑い日ざしがふっと翳ったかと思うと、二人は山道を歩いていた。楠の木立が濃いかげを落していた。曲りくねった山道をどこまでも登っていくと、そろそろ頂上かと思われるところに石段が現われた。

その急勾配の石段を登ると、そこに地蔵菩薩が立っていた。

その場所から樹々の枝ごしにはるかな下方を見ると、寺の屋根が大きな曲線を描いているのが見え、その先に人家の屋根が夏の日にきらめいていた。仙野の人家にち

奇怪な歌がよみがえってきた。

これこれ 花よ 彼岸花

おまえなぜ咲く

赤い花

これは目じるし おつ母さん

捨て子殺して 埋めたぞな

亘がいつか父の本棚から引っぱり出して見た怪奇本の挿絵に添え書きしてあつた歌である。白いまっすぐな茎の頂上に人魂のように丸く咲いた赤い花は、死者を埋めた目じるしであるそう。捨て子を殺して埋めた彼岸花の赤い色も、落武者の死霊から咲いた怨念の花も、ともに同じ色の赤なのであろうか。この世の目の目も見ずに命を絶たれた水子や、殺されて埋められた捨て子、刃で咽喉をかき切って息絶えた落武者たちの、無念の蒼い顔が、彼岸花の群生の底から怨霊のように立ちのぼってくるような気がした。

仙野という地名がこの無縁仏の群集からきていることは、まちがいのないことだった。

それにしても、なぜ母は仙野などへ来たのだろうか。

『仙野へは決して行ってはいけませんよ』

そういうも言っているのは母ではないか。

亘は前方に一直線に伸びる夏の道を見た。この道はい

がないいと、亘は思った。亘たちはまっすぐ仙野に入らずに、裏道を廻って極楽寺の裏手に登ったのであつた。亘は木の間ごしに見える仙野を、まるで懐しいものにも出逢ったように一生懸命眺めていた。

「さあ、何をしているんです……、早く拝むですよ」

母は三角形に積みあげた団子を地蔵菩薩に供えた。

「さあ、よく拝んで……。亘はお地蔵さんに助けられ

たんだから……」

母は地蔵菩薩に向うと

「お地蔵さま、今日は約束通り亘の病気を治していただいたお礼にまいりました……」

小声で祈りながら、いつまでも地蔵菩薩の前にぬかづいていた。亘も母の横にひざまづくと

「お地蔵さま、僕の病気を治してくれてありがとうございますございました」

亘は眼の前の石の仏を見た。

石。固い石。生命のない石。生命のない石で作られた仏。それは人間の世界とは別の世界に、固く、そっけなく立っていた。この人の世とかかわりを持たない石の仏が、どうして人間の病を治す力を持っているのだろうか。だが仏は人間の世界とは無関係なるが故に、人間を救うことができるのかもしれない。石の仏の、平静な表情は、亘にある種の安堵感を与えた。

「……お地蔵さま、どうか、今後はもう病気になりま

せんように……。それから、いつかきつと兄さんに逢えますように……、そして仏野の辰吉と仲よくなれますように……」

母はすでに立ち上っていた。

「さあ、早く帰りましょう」

亘は仏野の彼方に連る山を眺めていた。

「母ちゃん、吉兆牡丹って、あの山の方に咲くんだねえ」

母は眉根に暗い表情を一瞬走らせ

「吉兆牡丹、そんなものはたゞの伝説ですよ……。さあ、早く行きましょう。仏野に来ているところを人に見つかったら大変だから……」

二人は石段を下りた。

この石段をずっと下までおりてしまえばそこは極楽寺の境内にちがいない。とすれば、そこは仏野なのだ、このまま、まっすぐに石段をおりてしまいたい……。だがそれは母の行動が許さなかった。母は石段の途中から草叢をかき分けるようにして、さっき登って来た裏道に入ってしまった。亘はだまってその後に従わざるをえなかった。

時々吹く夏の山風は肌に涼しかった。

「お礼まいりがすんで、やっとこれでひと安心したねえ」

母は山道を降りながら言った。

学校に行くよ

「オサキサーが死んだ」

という噂がひろまっていた。

それを聞いたとき、亘ははげしい空虚感のようなものに襲われた。亘は十蔵に

「オサキサーが死んだって、本当？」

「本当だ」

十蔵は無表情に答えた。

「いつ死んだ？」

「この前の暑い日、夕方、雷の鳴った日、極楽寺で首吊って死んだんや」

「首吊り……？」

首吊りという言葉は一瞬亘を恐怖に陥しいれた。

「なぜ、オサキサー、首吊ったんの？」

「そんなこと、狂女だもの、おれ、知らん……」

十蔵はけろっと言って、そのままだった。しかし毎晩のように警察へ来て

「わしの旦那さん、いつ帰ってくるかのう、のう、わしの旦那さん」

と訴えつづけていた姿を思い出すと、狂女のあわれさが子供心にも亘の胸を打った。亘はいつか父と鮎釣りに行って、夕暮れの川原でオサキサーに逢ったときの恐怖を思い出した。あれがオサキサーを見た最後になってしまった。いま思うとオサキサーはあの時自殺する場所を

「亘の病気を治してくださいって、母さんはお地蔵さまに日参して願をかけたんだよ」

「毎日？」

「そう、毎晩日が暮れると母さんはこのお地蔵さまを拝みにきたんですよ」

「夜……？」

「そう、人に見られないように……」

「怖くなかった？」

「怖くなんかあるものかね、亘の病気が治ると思えば一生懸命だったもの」

母の気持が亘の心を稲妻のようにさし貫いて過ぎた。

亘の病気を治すために母がそんなことまでしたなどと亘は考えたこともなかった。亘は母親というものの、不気味なまでに恐ろしい愛情を全身に感じた。亘の病気を治したのは医者ではなくて、本当はこの母の執念ではなかったかと、亘は本気でそう思った。

(七)

二学期が始った。

残暑はまだきびしかったが、油蟬に代って蜩が登みきった調子で鳴き、夕日を浴びた赤とんぼの群が目についた。

亘は病気があがりの蒼白い顔で、たつぷりと日焼けした友達に混って登校した。

探していたのかもしれないのだ。

それにしてもオサキサーはなぜ自殺したのだろう、結局それは誰にもわからなかった。ひどい夏の暑さが発作的に狂女を首吊りに追いやったのでもあろうか。それともいくら警察に訴えても帰ってこない夫に、狂女は狂女なりに絶望して、死を選んだのかもしれない。しかし結局は十蔵が言ったように

「狂女のやったことに理由などがあるものか」

ということが本当であったのかもしれない。

とにかくオサキサーは死んでしまったのである。

極楽寺で首を吊ったと聞いたときから、亘はその場所が本堂の中だと、一人で決めてしまっていた。本堂の地獄絵の恐ろしさは話に聞くだけで、一度も見ただけではないけれども、亘は自分なりに父の地獄絵草紙や絵巻物の写真などから想像した地獄絵の壁画を、心の中に作り上げていた。燃えあがるような赤と、金と、黒で彩られた閻魔大王の爛爛と光った恐ろしい眼玉、鬼のすさまじい形相、それらを嵐のように包む、炎、焰、猛火、血のすさまじさ。

その焦熱地獄の中にひっそりと、黒い袴縞の着物のオサキサーが天井から吊下っていた。裾からはみ出した赤い腰巻の色は、壁画の火炎がそこに燃え移ったかのようだった。

その日、亘は、友達から離れ、一人うつろな気持で学

校から帰ってきた。

川のほとりに彼岸花が一本、周囲から隔絶されたように、青白い茎の頂にふわっと一輪、丸く、赤く咲いていた。それはまるでオサキサの魂が草叢に咲いたようだった。いつか亘が学校の帰りに彼岸花の一輪を、靴で蹴飛ばして散らしてしまったことを罪のように思い起した。

しかし家に帰っても誰もオサキサのことは話してくれなかった。もちろん父も母も知っていたにちがいない。たまりかねて亘が

「オサキサが死んだんだってね」

夕食の卓袱台にむかったときそう言う

「どこでそんなこと聞いてきたの」

母はけわしい顔をした。

「学校でみんながそう言っていたよ」

「なんだって亘はそうオサキサのことばかり興味を持つ」

「だって、かわいそうなんだもん」

「死んで、ちょうどいいんですよ。これでもう警察へ来てわめくこともないし、やっとせいせいしたねえ。どうせ自殺するなら、もっと早くしてくれればよかったのに」

亘は、はっと蒼ざめて母の顔を見た。

亘が病気になるれば夜中の地蔵参りまでして必死になるのに、オサキサのことになるとどうしてこうも冷酷に

のになぜだろうかと、母の心がわからなかった。

オサキサが死んだという噂がたった頃から符牒を合わせたように、辰吉が学校に来なくなったことを亘は知った。

病気ののだろうか。それとも引越したのだろうか。あるいは学校を途中で止めて、どこかへ働きにでも出かけたのだろうか。それを知るにはやはり十蔵に聞くのが一番早道だった。

「辰吉、病気なんかねえ」

「病気じゃないよ」

「だって、学校へ来ないよ」

「家で泣いている」

「泣いている……どうして？」

「おっかあが、死んだからだろう」

「死んだ……？」

「オサキサだよ……」

「えっ！」

亘ははじけるように叫び声をあげた。

辰吉がオサキサの子だなんて……、亘は混乱した頭を抱えたまま、しばらくぼんやりしていた。

「辰吉はオサキサの子供だったのか」

眉毛が濃く、そして潔癖すぎるほどきわ立って鼻筋の高い辰吉の顔を、亘は思い浮かべていた。

「辰吉は狂女の子だったのか」

泣きたいような淋しさが亘の全身を襲ってきた。

「だが、気狂いの子だって、いいんや」

亘はつぶやくようにそう言った。

「辰吉は僕の兄ちゃんだもん」

(八)

どうしても仏野へ行かねばならないという気持が、一日一日と亘のなかで高まっていった。どうしてもオサキサの首を吊った極楽寺の本堂へ行って、自分の眼で地獄の壁画をはっきり見たいと思った。それと同時に辰吉のところへ行って、泣いている辰吉をなぐさめてやらねばならない。

亘はある日学校から帰ると、ランドセルをそっと置き、母に無断で家を出た。一人で仏野へ行くためだった。

早稲の田圃はそろそろ黄色に色づき始めて、稲穂を垂れはじめていた。

時刻は昼下りで、人の往来が一刻絶える時である。亘は人影のない田圃道を黙々と歩いた。かつて母と二人で地蔵菩薩へお礼参りに行った道である。だから裏道へ曲る水子地蔵のところまでは道を知っていた。

だがその水子地蔵のところまで来たとき、亘の足ははたと止った。その背後にひろがる無縁仏の海と、彼岸花の群生の狂気が、ふたたび亘をたじろがせたのであった。

これこれ 花よ 彼岸花
おまえなぜ咲く
赤い花
これは目じるし おっ母さん
捨て子殺して 埋めたぞな

右へ曲ればいつか母と歩いた裏道で、まっすぐ行けば仏野である。しかしまっすぐの道を亘がこれ以上進むのを、その無縁仏の集団が拒絶しているような気がしてならないのだった。

亘はしばらく立ちどまったまま、はるか彼方に見える仏野の森を見た。

「仏野へ行ってはいけませんよ」

母の声が耳許で鳴る。見知らぬ人間が仏野に入ると、縄で縛られて極楽寺の本堂に押しこめられ、帰ってくることでできないという話を思い出すと、亘の足はすくんだ。

だが、いつの間にか亘の足はその白い道を歩き始めていた。行ってはいけない、行ってはいけない……、聞えない声が亘を追いかけてくる。だが亘の足は止まらなかつた。亘は罪人のように歩いた。歩いていることが一歩、一歩、罪をおかしているようだった。

ふと気がつく、再び彼岸花がいちめんに咲き乱れた

あたりを歩いていた。

草叢に、田圃のあぜ道に、山の裾に、墓地の石垣に、楠や竹藪の下蔭の日当りに、それは猛然といった感じで咲いているのだった。彼岸花の密生は仏野の象徴なのだった。

亘が病床にあったとき、十蔵が病氣見舞いに持ってきてくれた彼岸花の束はこの花だったのかと、花の重層を更めて見た。

その時だった。

道の彼方から一人の男がこっちに向って歩いてくるのが眼にとまった。遅ましく日焼けした顔に、手拭いで鉢巻きをしている。それは明らかに仏野の男だった。しかも大人なのだ。亘の心はがくつと崩れた。

『あの男は僕を捕えに来たのだ…』

亘はわけもなく、そう思いこんだ。あの男に連れ去られれば、極楽寺の本堂の中へ縄で縛って押しこめられ、もう帰ってくることは出来ないのだ。、そう思うと恐怖が亘の足を止めた。一人ぼっちで、とんでもない所まで来てしまったという後悔が、亘の身体を突き抜けた。あの男に殺されるかもしれない…。

逃げなければならぬ。

亘は踵を返すと、いま来た道を急いで駆けもどった。背後から追いかけてくる大きな恐怖に亘はおののいて泣き出し、泣きながら息せき切って家まで帰った。

だが今度は十蔵の方が眉をちよつと曇らせて

「でも、おれの家、汚いからなあ」

「平気だよ」

「じゃあ、すぐ、おっ母あに言っとかなくちゃあ、うまい芋、亘にご馳走するよ」

亘はいつか十蔵と弁当のおかずを取りかえっこしたことを思い出した。ある日、亘の弁当に人参が入っていた。

「おれ、人参が嫌いなんだよ」

箸で人参を弁当箱の蓋の上につまみ出していると、十蔵が横からそれを見て

「おれが食っても、いいかい」

亘が弁当の蓋を十蔵の方に押しやった。すると十蔵の方も

「おれも、この芋、亘にやるぞ」

芋の醤油煮を亘にくれたのだった。それは芋の甘さと醤油の味がうまくとけあった、意外にうまい味であった。

授業が午前中で終ったある日、亘は十蔵について仏野へ行った。いったん家に帰ると母に見つかる危険があるので、ランドセルを背負ったままで直接行った。

仏野の方角に足を向けたのはこれで三回目になったわけである。だがやはり水子地蔵の岐れ道のところまで来ると、恐ろしさで身が震えた。仏野へ行ったことが見つかりと家に帰ってから母にひどく叱られるかもしれない

亘が仏野から逃げ帰ったその日から、仏野への漠然とした憧れは、一挙に現実の恐怖へと変った。しかしそれは仏野へ行ってみたいという願望を少しも弱めることにはならなかった。

辰吉は依然として学校に姿を現わさなかった。もうこのまま辰吉は学校に来ないのではあるまいか、あるいはひよっとして母の死のショックで気が狂ってしまったのではあるまいか、亘は心配になった。

「おれ、極楽寺まで行かんといけないうだけれど」
ある日十蔵にそう言った。

「何しにや？」

「病氣の治ったおれのお参りだ」

亘は嘘を言った。

「へーっ、亘、おまえ本当に仏野へ来るのかい？」

十蔵の顔には驚きの表情が流れた。

「よーし、おれ、連れていってやるわ」

十蔵の顔に明るいものが光った。そしてその場でビョンビョン飛び上る恰好をする

「おれの家へも来るんだな」

亘の顔をのぞき込んだ。一瞬、亘はとまどった。実はまだそこまでは考えていなかったのだが

「うん」

「ほんとだな」

と思った。その心配を振り切るように、十蔵の後を追ってずんずんと歩いた。

繁りに繁った楠の森を潜り、山の底辺を不器用に削り貫いた短い隧道を抜けると、そこがもう仏野の中心だった。山が迫り、稲田が風にそよぎ、人家が見え始めていた。どの家の周囲にも彼岸花がびっしりと這うように咲いていた。右側の山の中腹に寺の屋根が見えた。極楽寺にちがいない。

家並が密集し始めた。

向うから歩いてきた一人の女が十蔵へ

「今日はお客さんかえ？」

と声をかけた。女が黒い棒縞の着物を着て、暑さにはどけなく胸をはだけていたので、亘は一瞬オサキサーではないかと錯覚した。もちろんオサキサーである筈がない。狂女はもう死んでいる。

せまい道の両側にはびっしり小さな家が並び、どの軒先にもきれいに切り揃えた藁が丸い半円を描いて、日に乾いてあった。

「何にするの、この藁？」

「草履作るんや、おれの家だって作ってるさ」

十蔵は自慢げに言った。

「ふーん」

亘は日光を浴びてつややかに光った藁の美しい扇形を、珍らしげに見た。

藁を並べた軒下は明かるかったが、家の中はどこも暗かった。その暗い家の中から亘と十蔵をじっと見つめている人の眼があったが、しかしそれはみんな無言であった。辰吉の家はどこにあるのだろう、うす暗い家の中から眼を光らせている辰吉にひょっとしたら出逢うかもしれない、しかし亘のそんな期待もむなしく、まもなく十蔵の家に着いてしまった。

十蔵の家は道を曲った路地の奥にあった。

その路地の日当りにも藁は干されていて、上半身裸の父親が板の間で草履を作っていた。その父親も十蔵に似てしまりのない顔をしていたが、藁を操る指先は素早く器用に動いていた。

しかし暗い家の奥から出てきた母親は思ったよりきりっとした顔だちに、小ざっぱりした身なりをしていて「まあ、まあ、警察の坊ちゃんが、こんなむさくるしい所へよく来てくれましたのう」

ふかしたてのさつま芋を箆に入れて持ってきた。亘は作業場の上り框に腰をかけて芋を口に入れた。塩味のきいた甘美味であった。母親は箆の中から二つばかり芋を手にとると、父親へ差し出して

「あんたも一服して、坊ちゃんといっしょに芋たべたらどうかね」

父親は

「おう」

と返事をしたが、仕事が一区切りつくまで素早く指先を動かしてつづけていた。亘は父親の指の中で黄色の藁が風のように左右に揺れながら次第に草履の形に造られていくのを、手品でも見るように飽かずに眺めていた。そして仏野は恐ろしいところだと聞いていたのに、普通の所と少しも変らないではないかと思った。

家にはまるで窓がないようで、仕事場以外はすべてが暗く、残暑のむれるような熱気と生活の臭いとが、まざりあってむっと立ちこめていた。十蔵はこの狭い家の中のどの場所でも勉強するのだろう、いや十蔵は家に帰ってからは勉強などしないのかもしれない、そんなことを考えながら家の中を見廻していると、板壁にぽっと白い短冊型の紙が貼ってあるのが眼についた。それは極楽寺のお札であった。

亘は十蔵といっしょに勝手口から外に出た。急に外に出たまぶしさで、臉をしばたかせた。

裏長屋のような軒がびっしりと肩を寄せあっている迷路のような裏路地が、極楽寺への近道だった。

極楽寺は石垣で積まれた小高い山裾に建っていた。亘はこの村に不釣り合いなほど立派なその建物を見上げた。寺の周囲には彼岸花が燃えさかるように咲き乱れていた。極楽寺はあたかも真紅の彼岸花の海の中に建っている伽藍のように見えた。亘は衝動的にかがんで大輪

の花を摘みとった。一本、二本、三本と、挑みかかるように、白く、みずみずしい、細くて長い茎を摘みちぎっていくと、それはいくら摘んでも果てしなかった。両腕にこぼれるほど摘みとると、亘は胸にかかえたまま、石段をのぼっていった。

極楽寺の本堂は荘厳な姿の全貌を亘の前に現わした。境内には誰も人影はなく、森閑として、夏の終りの日光の中にただ本堂だけが立っていた。

亘は近寄ってはならないものに近づくように、足を進めていった。その本堂の中には燃える地獄絵の闇の世界があるはずだった。

二人は鐘撞堂の前を通り抜けると、本堂の前におそるおそる、立った。そしてゆっくりと扉を押した。

重い扉を細目にあげたとき、この本堂の闇の中でオサキサーが首吊りをしたという恐怖が、亘の首筋をわし掴みにした。しかし亘はかえってその恐怖に魅せられたかのように、本堂の闇に積極的に足を入れていった。

そこには巨大な闇が仏法によって閉じこめられているかのようにあった。そこには何の光もなく、何も動かず、何の音もなく、ただ扉の隙間からのわずかな光で柱の一角が鈍く光り、金色の仏像の頬が暗闇に光っていた。その闇はどこまで奥が深いのか、見当がつかなかった。闇に幼い身体が吸いこまれていくようだった。暗く、冷い、奥行きが知れない風穴に入っているような気がした。こ

の静謐な闇、やはりここほどオサキサーの死に場所にあつた。

だが闇に眼が慣れるにしたがって、まわりの地獄絵が次第に闇から浮き上るようになり、亘の前に立ちはだかてきた。

火の地獄

水の地獄

血の池地獄

針の地獄

それが延々と連がるさまは、闇に咲く彼岸花の、血みどろの狂花の連がりを連想させた。

彼岸花の花群のような大輪の焰

糸のような焰

狂ったような火焰

躍り狂う火

静止した炎

その火焰を溶かしこんだような血の池

その赤と、金と、蒼白の焰の海は、人間の苦悩の叫びであり、恐怖のおののきであり、瘦せ衰えた罪人の叫びであり、それを追いかけて廻す鬼の叫びにちがいはなかった。亘の心はすでにこの世にはなく、この焦熱地獄の虜になっていた。亘の中には父の顔もなく母の顔もなく、ただ焰ばかりがあった。焰だけが轟々と渦巻き、金色に輝いた。そのとき亘は焰の中にオサキサーの顔を一瞬見た

ような気がした。

焰の中から黒い人影が現われた。

亘ははっと現実に戻った。いつその人影はこの本堂に入ってきたのだろうか。それとも亘と十蔵が本堂に入る前から、本堂の暗闇に立ちつくしていたのだろうか。突然現われた人影への恐怖から、亘は二、三步、十蔵の方へ身を寄せたが

「あっ！」

と声をあげた。

それが辰吉であつたからであつた。

辰吉はただ人形のようにそこに立っていた。身動きもせず、声も立てず、闇の中から滲み出た黒い影のように立ちどまつて、ただただ、地獄絵を見上げているのだつた。

「やっぱり辰吉はここに居たのだ、やっぱりここに！」

亘は辰吉に近寄っていった。

暗がりのなかに辰吉の身体の汚れた臭いがした。

「あの……」

亘はおずおずと声をかけた。亘が初めて口にする辰吉への言葉だつた。だが辰吉はふり向きもせず、身動きもしなかった。すべてのものを拒絶するように、ただ地獄絵を見つづけていた。

「あの……」

もう一度亘は声をかけた。

年寄りの冷ミステリー

律儀すぎる精霊たち

夕方の散歩はわたしの日課であつた。散歩は早朝が多いという人もいるが、長い間病妻の看護をしてきたせいか、退職後は気がゆるんで朝はぐっすり寝こんでしまう。黄昏の色が次第に陰を濃くし、木立の奥が宵闇に浸りはじめる頃になると、わたしは心もそぞろになる。旧街道から墓地へ通じる曲りくねつたこの静かな道を歩くのが今のわたしには何よりの楽しみである。

ずっと以前、この辺りが学区の外れになっていた中學校に勤めていたことがある。授業を終えて教室を出ようとするとわたしを追って、その生徒は（名前をどうも思い出せないのだが）人なつっこいちょっと知恵おくれの子だつた。ゆうべヒトダマ街道で首くくりがあつたんだよ、と話しかけてきた。ヒトダマ街道、という呼び名が面白かつたので今も憶えている。「ほんとにヒトダマが出

やと辰吉がこちらを向いた。亘の身体を甘い戦慄が走つた。だが期待はすぐ裏切られた。亘の顔を見た辰吉のうつろな瞳に急に憎しみの光が宿つて

「どうして仏野へ来たんだい……」

辰吉は冷い口調で亘を詰問した。

「……………」

亘は呆然となつた。その辰吉の一言で、亘の中のすべてが音を立てて崩れていくのを感じた。

辰吉は両手をあげると、亘を目茶目茶になぐりつけた。亘は板敷きの床に激しい勢いで倒れて背中を打った。腕の中の彼岸花が火の粉のように四散した。

「おまえは警察のガキだ。おまえのお父のおかげで、おれのお母は死んだんだ」

辰吉はいつまでも亘をなぐりつづけた。

だが亘はなぐられた頭や頬の痛みを、遠い追憶のようにじっと大切に抱きしめていた。そして

「やつとお兄ちゃんに逢えたんだ」

とつぶやいた。そして固い板敷きの上に倒れたまま、闇に浮かぶ地獄絵をいつまでもぼんやりと眺めていた。

その日亘は、ひと抱えもある彼岸花の束を胸にかかえて、夕方おそく、家に帰つた。

山 本 儀 一

るのか」ときくと、「あゝ出る。おれ、見たことあるもん」ときっぱり言つた。その厳肅な面もちがおかしかつた。

当時この辺りは、寺や墓地、それに雑木林が多く、昔ながらの農家が散在するばかりで、通学する生徒もごく少なかった。今は宅地の開発や墓地の造成が進んで、小ぎれいな人家が大分ふえ道も広く舗装されてきたが、ちょっと横に入ると、まだ寂しいくらい静かな一郭もあちこちに残っている。

あれから二昔余りたつて、そのヒトダマ街道のほとりに居を構えるに至つたとは、これもおかしな因縁である。あの生徒も今では働き盛りの父親になって、どこかで生きていくことだろう。

風化した道祖神らしい石塔の立っている角を右に曲る

と、道は舗装のないだらだら坂にかゝる。わたしはいつもこの道を選んだ。

「あら、校長センセ、お久しぶり」

意外な人に出あった。吉田夫人である。相変らず肥りすぎた軀をもて余して、腰のあたりが小揺れしている。

「やあ、どうもどうも。思いもかけぬ方にお目にかゝりましたな。これからどちらへお出かけ……」

「それがね、センセにお話するのもお恥かしいんですけど」

昔のまゝの気さくな口調で、吉田夫人は一向に恥かしげもなく喋り出した。一人息子が泣き泣き訴えるには、好き合って一緒になったはずの嫁の素振りがおかしいので探ってみると、どうやら前々から知り合っていた男と燃りが戻ったらしく、ちょくちょく逢っているらしいという。これから出かけていって嫁をちょっとたしなめて来ようということだ。

「いつまで経っても世話のやけることですわ」

「まあ、お気をつけて」

この人の話は用心しないと際限なく長くなるので、わたしは程よいところで別れを告げた。PTAの役員をしていた頃は、しばしば的外れの長広告に悩まされたものである。しかしこの人の好いところは、太っ腹のお調子者で、金を出してほしい場面では真先にポンと出す。他の奥様連中に負けてはおれじという気分を醸し出す貴重

高木は走り去った。

あの頃はまだきょう日のように、闇雲に教師を殴る流行は少なかったが、結構悪ガキはいたのである。番長格の高木には教師たちも手を焼いていた。卒業してからも警察から度々ツケが回ってきたものだ。たゞ、高木の好いところは、クソ図々しいといえどもそれまでだが、カラッとして陰湿な面がないことだったかもしれない。

こゝに居を移してから五年近くになるが、夕方の散歩で旧知の人に出逢うことはそう度々はない。今となってみれば、こうして声をかけてくれる吉田夫人も高木も、それなりに懐かしい思い出を誘ってくれる。狭い部屋に閉じこもったまゝ、散歩もできない妻に、今日は土産話ができそうだなと、わたしの心は弾んでいた。

道祖神の角から入った道は旧道で、少し上るとまた下りにかゝり、もとの舗装道路と合流するようになる。そのすぐ手前に小さな社があった。狭い境内は墓の伸びた秋草で荒れているが、物日には土地の人の供物がお堂に上っていることもある。わたしは帰り途にはいつもこゝでひと休みすることにしていた。最近スタミナの衰えを痛切に感じているわたしは、このままでは夕方の散歩すらいつしか不如意になるのではないかと恐れている。静寂な木間の中に佇んで、樹木の精気を身の内いっぱい吸い取って家路につきたいのである。身に浸みついてしまった職業的偽善性のゆえに、つい綺麗ごとを言ってしまう

な存在でもあった。息子の方は、よくもあの母親から、と思わせるほどなよなよとした気弱な生徒だった。

吉田夫人に「たしなめ」られては、さすが当世風の嫁さんも恐毛を震うことだろう。わたしがひとり笑いながら藪の多い道を辿っていると、うしろからバイクの音が静かに近づいてきて、横にとまった。

「先生こんばんは……」

例のナナハンとでも言うやつか、いかつい大きなオートバイに面体の知れぬ大男がまたがっていた。

「高木です。いろいろとお世話になりました」

「やあ、君か。あんな事故を起しておいてまだ君は単車乗り回しているのか」

わたしは思わず声を荒げた。白バイに追いかけてられて逃げ回っているうち、乗用車と衝突したという話を、風のたよりに聞いたのは数ヶ月前のことであった。

「はい、こればかりは死んでも止められないということとして」

ヘルメットの中で繃帯の顔が痛そうに笑った。

「これからどこへ……」

「今夜改正道路で暴走族グループの出入りがあるという情報が入ったんで、少し早めに出かけていって、騒ぎにならねえうちに丸く納めたいと思ってね」

どんな世界にいても、若さというものはいいものだ。わたしが感に堪えているうちに、「ジャァネ」といって

うが、これは決して嘘ではない。嘘ではないが、わたしがこゝでひと休みする最大の理由は、お堂の蔭でピーピング・トムとなることである。しかし幸運はまれにしかやって来なかった。一昨年の春わたしが若いというより幼い男女のデートに出会って二人を脅えさせてしまったことがある。それはまさしく警察の少年係や謹厳な教師たちが「不純異性交遊」と呼ぶところの「純粋」なものであったから、わたしは自らを恥じ責めた。その時わたしは自分の胸のびのびと拡がり軀中に力が漲るのを覚えたのである。以来わたしは若い二人の喜びを損なわぬよう細心の注意をもって覗き見をするように心がけているが、わたしの軀をリフレッシュする機会に恵まれることは数えるほどしかなかった。今どきこんな時刻にこんな場所で何かを期待することは、世間知らずと笑われようが、わたしには希れな機会がほどいのである。吉田夫人や高木のように豊かなエネルギーをもて余して速出をするような気はない。

お堂の前で深々と夜気を吸いこんで立去りかけると、「こんばんは」と笑みを含んだ艶やかな声がわたしを引きとめた。振りかえると、思いもかけぬ人であった。

「どうもあなたらしいと思って、ずっと跡をつけてきたのよ」

「珍らしい方にお逢いしましたな」

「まだ憶えていてくださった。嬉しいわ」

わたしはしばらく言葉に詰っていた。さすがに老けは見えるが、肉付きも色つやもよく、往年の色香は燦し銀のように深まって、わたしの心のときめきを誘った。

「また秋になったのね。何度目かしら」

真山女史はわたしの内部に巻き立ったつむじ風に気づかぬげに呟いた。遠い街灯の光が木闇を洩れて、道端の尾花の若い穂むらをひとところ浮き立たせていた。

わたしが女史とめぐり逢ったのは、教育と関係のない小さなグループでのことである。それは東京の中の江戸を探るといふような趣旨の集りで、順番にレポートなどもまとめていた。月一回の会合には必ずどこかの探訪のあとに座談会をもち、わたしには単調の日々の中の楽しい潤いであった。ふだん周囲に見馴れた女性たちとはかけ離れて自由闊達な女史の言動は、わたしを眩しく魅了した。もちろん誰の目にも女史はこのグループのヒロインであったのである。「彼女の亭主はちょっとは名の通った評論家で愛人と共に別居中だそうだが、彼女の方も男出入りはかなりあるらしいから、気をつけた方がいいよ」とグループの一人が訳知り顔で、わたしの気持を讀んだような薄笑いをうかべて忠告したことがあった。その時わたしはむしろ彼の心情の賤しさを感じたことだった。四十台のわたしはすでに二児の父親であった。貸してあった古い絶版本を返しに、女史がわたしの家を訪ねたことがあった。その頃妻は寝たり起きたりの日

「ええ、憶えているわ。だから……」

「でも、今となつてはどうにも致し方ないですな」

「いゝえ、だから、あたし約束を果たすためにこうして経巡っているのよ」

わたしたちは連れ立ってお堂の裏手へ回った。暗闇の中で抱き合っていたらしい人影があわて、逃げて行った。妻にはなんの隠しごともないわたしだけれど、今日出逢った三人目の知人については黙っていよう。

それはかつて味わったこともない燃え上るように甘美な接吻であった。女史は豊満な裸身をしっかりと巻きつけて、激しくわたしの口を吸った。いつまでもいつまで

々を送っていた。

「奥様をお大事にね」と言つて女史が帰ると、疲れた妻はすぐ横になった。

「あの方のあなたを見る眼は、恋をしてる女の眼でしだね」

妻は穏やかな笑顔で言った。

「やだなあ。へんな言い懸りをつけちゃ」

「いゝのよ。あなたは自由になされば。でも最後にはあたしの側に戻ってきてね」

わたしに女史への恋情を意識させたのは、この時の妻の言葉だったかもしれない。しかし世馴れたインテリ女性か、場違いなグループに参加した野暮な男を恋するなどとは信じられなかった。「一度あなたに裸で抱かれてみたかったわ」とあのとき言った言葉は、女心の哀しみを知らぬ男への揶揄をこめた袂別の辞であったのだろうか、とにかく、やがて女史は会合に姿を見せなくなった。病気がちな妻と育ち盛りの子どもたちを抱えて、教師というお仕着せに包まれて、わたしはわたしなりにかけ替えない日々を送ってきた。今なんの悔いも残っていない。だがこうして女史と向き合つて佇っていると、胸がときめきふくらむのを抑えることは出来なかった。

「憶えていますか。お酉様の夜あなたがわたしの耳に囁いた言葉を」

冗談めかして言つてみて、わたしはゾクッとした。

も吸い続けた。

突然、木蔭から悲鳴に似た叫び声が、

「あつ、ヒトダマが二つひつついて……」

あとはきこえなかった。わたしは朦朧としていた。たゞ、自分が小さく小さく、夜道に捨てられた煙草の火のように小さくなつて行くのを感じていた。はぐれ螢のようにわたしは妻の待つ家へ戻ることはできるかもしれない。でももう夕方の散歩は無理だ。冷たい石のカロートの中で、永劫の眠りに入ることになるう。

お堂の蔭から、ひときわふくらとなったヒトダマが、ゆらゆらと青白い尾をひいて飛び去って行く。

仲直りには花より団子

私はこゝ何年か、五月になると念仏滝の山田屋という民宿へ出かけている。人知れない溪流の岩魚釣りの閑雅さもあることながら、隠居部屋の炬燵に入つて、おソメ婆さんの昔話をきくのも楽しみであった。

昨年はやっと電話が通じるようになったということ、主人から誘いの電話をかけてよこした。主人の山田芳太郎氏はまだ四十前の働き者で、年内にはイワナやニジマスの養殖池を完成したいと意気込んでいる。電話の終り

におふくろのおソメ婆さんが出て、「待ってるからのう」と嬉しそうな声をきかせてくれた。

大袈裟に旅というほどの距離ではないが、交通の便がよくないのである。山間の駅で下車してから、一時間一本しか出ない田舎のバスで溪流沿いの山道を一時間余り揺られると終点である。バス停の前の茶店兼ミニストアで一杯やりながらヒッチハイクの機会を待つということになる。昨年は茶店から電話すると、二十分ほどして

孫の陽吉君と軽トラックで迎えに来た。くねくねとした山坂を登りつめたところを「峠」と呼んでいるが、もともと山も低く谷も狭いから、たゞ杉林の中を走っているだけである。そこからはゆるい坂が単調にいつまでも続き、やがて樹林の切れ目から念仏滝の部落が見え、山道は溪流のほとりに下って行く。何度か眺めてはいるが、いつも取り残された村という印象であった。

七八軒の山家が念仏滝の周囲に高く低くごまっているが、これがこの谷の人家の行き止まりであった。上流は特に見るものとならない日陰谷で、季節になると岩魚釣りの客が途をたどるだけである。

夜が更けると、小さな滝の響きが地を伝って枕もとに届く。おソメさんの話のように、部落の人にはこの滝音が、古くからの淵で非業な死をとげた死霊たちへの念仏ときこえるのも、無理からぬことと思われた。

おソメさんは私を自分の客とでも思いこんでいるように、夜になると離れへ招いた。一別以来の部落の「文明開化」の模様や、私も多少顔見知りになった人々の消息を話してきかせたいのだ。おソメさんはまだ六十台で、山の生活では「現役」のはずだが、先年連れ合いの雄二爺さんを伐採事故で失っている。その人懐かしい気持ちは私にはよく分かった。

他所者には決して飲ませない芳醇な濁り酒の茶碗を、私が旨そうに傾けるのを、嬉しそうに眺めていたおソメ

婆さんは「今夜はおらが事を話して見べえかの」と言った。

峠下の茶屋で手伝い働いていたソメが、雄二に見染められてこの部落に上つてきたのは、かれこれ四十年も昔のことであった。おかね婆さんは長男が現役のまゝ北支へ連れて行かれ遺骨で戻ってきたからは、弟の雄二には早目に嫁を迎えて後嗣をつくらせとおかね婆と心せいでいたが、いかに女が余っていると云われた時節でもこの山奥にきてくれそうなお娘は見つからなかった。やっと雄二が惚れ込んで連れて来たのが、父無しの出戻り娘で、おまけに三つ年上だとなると、どうにも胸に納まらぬものが残った。世間知らずの倅が、うまく丸めこまれたいと思ひこんだ。

おかね婆さんが死ぬまでの数年間には、姑と嫁の間にありふれたかしどうにもならない確執葛藤が、当然あったはずだが、おソメさんはそれについて何も語りたがらない。

おかね婆さんが念仏滝の淵に落ちて死んだのは、雄二が復員した翌春である。

このあたりでは、桜は「天長節」の頃から見ごろとなる。といっても、桜は向う岸の平作伯父の小屋脇に枝ぶりのよい古木が一本あるだけで、その桜が咲きはじめる

はとりわけカタクリが多かった。茶褐色のシミのある葉の元からすっと細い花茎を伸し、俯向きかげんにピンクがかかった薄紫の花弁が反り返るさまは可憐であるが、これも季節の山の幸の一つにすぎない。もっとも根深い球根まで掘り取るとなると暇がかゝった。

おかね婆さんは復員して最初の春を迎えた倅のために今日はカタクリさんをうんと摘んで旨い酢味噌和えをたっぷり食わしてやるべえと張切っていた。滝の上手の丸太橋を渡って向う岸へ出た。帰りに平爺い家によって花見ですべえと、姑は珍らしく気嫌がよかった。姑の義兄である平作伯父について、ソメは悪口ばかりきかされていた。大酒食らしいの怠け者というのが口癖である。世帯も持てず小屋に住んでいる平作は、ソメにとっては優しい爺さんだった。おかねはきつい女だけれど腹は悪かねえだ、お前も辛抱してやってくれやと、嫁いで間もなく平作伯父に頭を下げられたのをソメは覚えていた。

身重になったソメは、だるい時でも怠けちゃいけないふだん通り身体を動かしてりゃいゝ子が生まれるだと、追い出られるままに働いてきた。しかし七ヶ月の腹を屈ませては摘草をするのがやっとなかった。さすがにそんなソメを見捨てゝ、下の方が根が浅いかもしんねえと、おかね婆さんは手籠を身近に移し移し、急な斜面を掴み下って行った。

滝音だけが高い静寂をソメはふと訝った。

疲れた腰を伸そうとした時、予感したような水音がした。立ち上ったソメは、岸辺の草を掴もうとして、片手をかざした姑と視線が合ったのを感じた。「ソメ……」という声と共に姑の姿は水中に消えた。ソメは咲き誇った桜の方へまるで逃げるように走った。

平作は竹竿をもって駆け出した。ソメはもうついて走れなかった。やっと追いついて見おろすと、淵辺の岩の上に平作は竿をついて立っていた。ソメを見上げて、もうだめだねえと言った。カタクリを詰めこんだ竹籠が、ゆっくり淵の中を回っていた。ソメは声をあげて泣いた。この淵で溺れた者は昔から死体が上らないものとされてきた。どこか底に穴があいていて吸い込まれるんだべえと、年寄りたちは言う。子どもたちもこの淵では泳がない。

ソメは自分の責任のように泣いたけれど、平作を呼びに引きつった顔で走りながら、心の中に拡がった安堵感のようなものを思い起して、後ろめたい気分を覚えた。沈む前の姑の眼ざしはいつまでも心に焼きついていて。翌年の秋、今度はソメが滝壺に落ちた。明朝の山仕事に急に交替ができたので、夜道を連絡に行ったのである。風邪を引いたらしいと言う平作は、起き上ってランブをつけた。黄色い光が皺の多い顔を隈どりして、孤独な老人をひどく惨めに見せた。額に手を当てるとなるほど熱っぽい。ソメは急いで立ち戻ろうとした。明日の段取が

あるから早く夫に知らせたいし、粥でも炊いて富山の薬袋から風邪薬を持って来ようと思った。

滝の上手の丸太橋で、心せいでいたソメは足を滑らしたのだ。長雨のあとの溪流は水かさを増し、滝の音も夜間に高く響いていた。

気がついた時は家の床の中にいた。息子の芳太郎を抱いた雄二の顔が見え、その脇から平作伯父の顔も覗いていた。

「おじさん、もういゝのかえ」

ソメが最初に口にした言葉をきいて、男たちは泣き笑いの表情を互に見合った。

「何を呑気なことを言ってるやがる。人をさんざ心配させといて」

「お前はな、三日三晩眠り続けたんさ。もう安心だ。あの滝壺から生きて戻ったのはお前がはじめてだんべな、きつと」

平作の言葉をきくと、ソメは急に寒気がして、頭がズキズキ疼きはじめた。

滑り落ちた時、ソメは岩に頭を打って失神したらしい。水を呑んでいなかったのが幸いしたようだ。男たちはそんなことを言ってきたが、

「気の優しい働きもんの嫁だもの、滝壺に沈んでいるおかねが助けてくれたんだべ」
と平作が言った。ソメはまた深い眠りに落ちた。

半月ばかり寝込んで起きると、ソメは再び逞しい山家の女房にたち戻った。

「好い話をきかせてもらいました」

姑の死んだ年をはるかに越しているおソメさんの表情は古陶のように美しく見えた。

「でもおらにゃ旦那にでも聞いてもらわにゃ、誰にも話せないことがあるん」

婆さんは私の茶碗に濁り酒をなみなみと注いで、不意にきつい顔色になった。

「あんときおらが底もしれねえ暗い深い滝壺に沈んで行ったらばな、耳もとおかね婆さんの怒鳴り声が聞こえただ。何しに来やがっただ、お前の面なんぞ見たくもねえ、とっとと出て失せろ」とな。水底からいやちゅううほど尻を叩かれて、急に身体が軽くなって浮き上っただ。旦那はきつと後で夢でも見たんだろと笑うかもしれねえが、こりゃ決して夢じゃねえて」

「……………」

「それ以来、おらもカタクリは摘まねえだ。たゞ、おかね婆さんの命日だけはな、一人で滝壺へ行ってカタクリの花を投げてお参りするだ。おかね婆さんに許してもらわねえと、おら、いつまでたっても、安心して雄さんのとこへ行けねえもの」

おソメ婆さんはこう言って、口もとをほころばした。

「うん、家の仏壇にいろいろなお供えはするがね。なるほど旦那に言われてみりゃ、その通りさ。おら、ほんとにこういう気働きの足りねえ女なんだ……………」

「おソメさんの年じゃ、まだ雄さんのとこへ行くのは早すぎるね。これからひと働きもふた働きもしてもらわにゃ。雄二爺さんはいつまでも待ってくれるさ。わたしだって念仏滝へ来る張り合いがなくなっちゃうもの」

私はおソメさんと顔を見合って笑った。

しかし、愚かな男ほど小賢しげなひと言を余分に口走りがるものだ。

「でもねえ、命日にカタクリの花を供えるというのは考えものだと思うよ。カタクリの花はおかね婆さんにとっちゃ怨めしい花じゃないかしら。それより心をこめた草ダンゴでも……………」

後腐れのありそうな見舞

このたびはとんだご災難いやご迷惑をお掛けいたしました。なんととも申訳けなく思っております。さっそくお見舞をと氣にかけつゝあたくし小さなお店をもっておりまして、なかなか手が離せず、たいへん失礼をいたしました。あ、申し後れましたが、あたくし鈴木正直の母でございます。これつまらぬ品でございますが、ほんのお見舞の氣持だけ……………どうぞそのまゝでいらして下さい

ませ。

全くなんという事でございましょう。中学生の暴力騒ぎについては、かねがね新聞やニュースなどで見聞きはしておりましたが、わが子がその仲間の一人だったと知らされた時は、目の前が真暗になるほどビックリいたしました。先生にお怪我をさせたことは、もちろんお詫びのしようもなく申訳けないことですが、あたく

しども母一人子の生活で、あの子だけが生きる望みでございましたのに、これから先どんな子に育っていくのやらと思うと、たゞ空恐ろしくて……

はい、そんなお言葉を頂きますと、穴があったら入りたい気分でございます。親の口から申すのもなんですけど、名前の通り正直な子で、あたくしにはどんな事でもつゝみ隠さず話しますから、信じきっておりますのに。「今日ね、ぼく先生を踏んづけちゃった」と申しますので、驚いて問いつめますと、何とか君という番長格の子が棒で先生の頭を殴りつけ、先生が頭をかくてかがみこむところを、だれそれ君が膝蹴りを食わしたら仰向けに倒れたので、ぼくが胸を踏んづけたんだと申します。それからあとの二人が腹を蹴とばして逃げたというではありませんか。それにしても先生、よく辛抱してくださいました。本当に頭がさがりますわ。

あたくしふだんからよく言いかせておりますの。どんな事でも、みんなで作る時、真先に調子づいて飛び出すやつは、オッチョコチョイの道化だよ。一番後からのそのそつて行くやつはウスノロの提灯もち。中ほどで目立たぬようにほどほどにやるのが、まっとうの知恵というものだ。父親に当る男が女をこさえて逃げてしまいましたので、あたくし父親がわりにお説教することもあるんでございます。あの子は素直な子ですから、ほどういところで先生を踏んづけたんだと思いますの。え、

いろいろな手を打って外部へいっさい洩れないようになさるなんて、本当に敬服いたします。まあその代り先生方は子どもたちのお遊びの相手をしてやって、しょっちゅう痛い目に遭っていなければなりませんけれど。

だいたい子どもって弱い者いじめが大好きなんじゃないかしら。身体だけ大人になりかけた中学生にとって、先生ほど適切な弱い目標はないんですね。強きを助け弱きを挫く、というのは真先にお偉い方々がたくさんお手本を示していращやることだし。やい先公、鰐首が恐くなかったら向って来な、といわれても、どうすることも出来ませんわね。横断歩道みんなで渡れば恐くない、という標語だけでなく、未成年者の特権というものをちゃんと心得ておりますのよ。

どこか歯車が食い違っているような歯がゆさを感じますわ。あたくし個人としては、あのような乱暴を働いた正直を、先生がたとえ手足の一本ぐらい折って懲らしめてくださっても、決して文句は言わぬつもりですけれど、教育者の信念とか理想とかが、それを許さぬとおっしゃりたいわけでしょう。それ、ご本心でしょうか。先生方もビクビクしていないで、昔のように「暴力反対」のプラカードを掲げてデモ行進や坐り込みをなさったらいいかしら。弱き者よ団結せよ、ですわ。

あら、お見舞に上ったのに、こんなお喋りをしてしまつて……え、お気づきになったの。ほほほ、この

もちろん、たいへんいけない事だと厳しく言ってきたせました。とにかく、先生が最後まで冷静でいらっしゃったことはご立派だと思います。

子どもたちのやり口を見ると、あたくし学校の頃を思い出します。あの頃の先生方はやれストだデモだ、やれ吊し上げだ坐り込みだと……いえ、一概に悪い事だなどとは申しません。強い無法な相手に対しては、団結しなければ歯向かえせんもの。でも先生方は結構楽しそうにやってらしたと子ども心に憶えております。何事も大勢集ってやってしまえば安全だという知恵を、あたくしたちに授けたことは確かです。あたくしそんな衆を頼んでというようなやり方は、女だからでしょうか、好みません。でもそれが世渡りの一つだとすれば、わが子にお説教したくなるのも無理ないことだと考えていただけないかしら。

え、まあそれはそうですけれど、子どもって意外に世間の動きに敏感なんですわね。これが流行りだとなると、アイドル歌手を追っかけ回すように飛びつくんじゃないかしら。お隣の中学ではもうやってんのに、うちの学校でもひと騒ぎ起さなけりゃ幅がきかねえ、なんちゃって。

え、おっしゃる通りだと思いますわ。でもテレビや新聞の記事差止めというわけにはいかないでしょうから、この学校のように校長先生がしっかりなさっていて、

お喋りではすぐばれてしまいますわね。でもあたし、正直の入学式の時から分っております。女ってそう簡単には忘れないものよ。だから懇談会も遠慮しましたし、家庭訪問の時には必ず急用を思いつきました。でも今度ばかりは……

え、え、え、献血のおばさん、て呼ばれてたわね。あの下宿に入るには、まず献血証書を見せなければいけなかったんだもの。でも学生さんから「おばさん」と呼ばれるの、あんまり嬉しくはなかった。このご面相だもの老けてみられても仕方なかったけれど、あの頃はまだ三十になるかならぬかだったのよ。

ほほほ、そりゃそうよ。こういう顔は年とらないの。苦勞が多かったあの頃よりかえて若くなったと思わな。い。やっぱり無理かな。とにかくあの頃は亭主が金策に奔走して、借金取の待ち構えている家に、ロクロク帰っても来られなかったし、あたしも下宿屋でもして自活体制を整えなきゃならなかった。思い出すわね。あなたと同じN大の森田君、男前だけど浮いた噂もなく糞マジメな人だった。司法試験もう受かったかしら。それにS大の何てったったけな、飲み助、眼鏡をかけたヒロ長い人、そうそう白石君。プレイボーイ気取りのA学院の吉村君。みんな懐しいわ。言っちゃ悪いけど、その中であなたが一番パツとしなかったわ。誠実そうなムツリすけベタイプでね。でも、お世辞じゃないけど、あたし

はそういうもっさりしたタイプが好きだった。おまけにあなたはB型だったし。今だから話すけど、あたしB型の人だけ入れたかったのよ。選べるから。でもそうもいかず、B型はあなただけだった。

なぜB型かって。それは亭主がB型だったからよ。分るでしょ。あたしは決して失敗のない、浮気の完全犯罪を考えていたわけ。

あの子が生まれてから何年かは仕事も順調になってきたし、亭主も結婚六年ぶりに授かった正直を可愛がって平安な日々だった。それがある日突然崩れてしまったの。それからの苦労話なんかあなたに関係ないわ。

ところであなたお子様いらっしゃるんでしょ。まあ、一姫二太郎の五つと三つじゃ可愛い盛りね。あら奥様も先生……え、え、三才保育といっても大へんねえ、年寄りがいなくちゃ。あたし住込みの子守兼家政婦に雇って頂こうかしら。冗談よ。顔色変えなくなっただけじゃなく。でも、お二人でいいサラリーとって、退職金も年金も間違いないし、辛いのは今のうちだけよ。家のローンなんか知らないうちに終っちゃうし、老後の心配もないわ。いゝえ、今から考えておかなければいけない事よ。大学紛争みたいに流行というものはやがてすたれるもの。少しぐらい痛い目に遭ったって、殺されるわけじゃないし、辛抱しなけりゃいけないわ。あなたを痛めつけた子どもたちだって、少し世間の風に当たったら、

に離婚して正直もあたしの旧姓に戻ったから、こうしてお目にさえかからなかったら、あなたは自分の血がどこかで息づいているなんてことを、夢にも思わなかったでしょうね。

正直には最後まで彼を母子を棄てて他の女に奔った父親として憎ませておきたいの。それは少くとも、あなたを父親だと教えるよりはよい事です。あなたのために、あたしのためにも。あたしはどんなことがあってもこれを守るつもりだけれど、正直をいつまであたしの手綱でひきとめて置くことが出来るか自信はないわ。いつかあの子が父親としての彼と対決する日が来るでしょう。その結果は彼の出方一つにかかっています。彼が思慮深くあの子の憎しみを一身にうけとめてくれるならば何も問題は起りません。でも彼が、自分が種なしカボチャであることを告白し、正直を新しい苦しみの中へ突き落すような男だったら……その時はわたしもあの子の怒りと憎しみの矢表に立つ覚悟はしていますが、あの子はどこかに涼しい顔して暮しているはずの父を、いっそうの怒りと憎しみをこめて探し出そうとするでしょう。

「先生あの節はどうも」なんて遊びに行きたくなるわ。あなたはそういう雰囲気をもっている人だもの。正直にもそのうちお説びに伺わせてちょうだいね。あの子はとも素直にあたしの言う事はきくの。でもオヤジだけは許せないって言うこともあるのよ。実の父親の肋骨を二本も折ったとは気づかないで。これは二人だけの秘密にしておきましょうね。

え、あなたがそう言いたいのは分ってるの。あたしつい気を許して口が滑ってしまったけれど、あなたに認知を求めているのではないのよ。かえって、最後までそう言っただけで頂きたいの。あなたの家庭の幸福を守るために。あたし自身それを望んでいるんですもの。でもそのためにも真実を知って置いた方がいゝんじゃないかしら。

あたしたち親子三人の平安が壊れてしまったのは、亭主の仕事が順調に行っていて浮気の虫が封じきれなかったのがきっかけだったけれど、ひよんな事から彼は自分が無精子症だということを知らされてしまったからなのです。遅くなって恵まれた正直を溺愛していただけに、彼の裏切られた思いの怒りや哀しみがどんなに大きかったかは想像できるけれど、あたしだって完全犯罪が崩れてしまったショックはひどかったわ。彼は糸の切れた風船玉のように飛んで行ってしまったの。あたしにも正直にも、もう彼を呼び戻す力はなくなっていました。正式

それはそんなに困難なことではないと思うの。そんな風にならないように祈ることしか出来ないのだけれど、あなたと正直とは、どんな場合でも、教師と教子という以外に何の関係もないのですよ。

あ、すっかりお喋りしちゃったわね。でも思い切ってお見舞にきてよかった。胸の中がさばさばしたわ。そろそろお暇しましょうね。まあ何よ。そんなものは頂けません。ユスリに來たんじゃないの。ほら、ムリに身体を動かすから痛むのよ。あたし遠慮なんかしてやしないわ。そんな事して、あたしが味をしめて毎月集金に上ったらどういふことになると思うの。全然分ってないんだから。もうこれからは赤の他人よ。自分に都合の悪いときは、目の前にだれが倒れていても、知らん顔して通りすぎるのが出来なくてダメ。そして紋切型の口上をいつでも格調高く、感動的に言えるようになってほしいわ。あたしあなたにお説教する柄でないことよく知ってるけど、あの子の父親が立派な人になってほしいからよ。あら、どなたかいらしたようね。どうぞお大事に。蔭ながらお伴せを祈ってますよ。

ダスビダーニヤ
さようならは言えないお別れ

「名取君。愛し合っている男と女が、ベッドの上で悦楽を共にしながら、互に相手の死を希^{ねが}っているというような心情を、君は想像できるかね」

柴田氏はボルシチの中の大きな肉塊を、スプーンの先でくりかえしくりかえし突ついていた。おれは突然妙なことを言い出されて、戸惑つてしまった。

「あまり小説の類を読んだことはないもので、そういう複雑な心情はよく分りませんね。ベッドの上の女は今のほくにとっちゃんさま仏さまです。相手の死を希^{ねが}うどころか、こっちが死んでもいいからというに近いかもな……」

柴田氏は穏かな笑みをうかべて頷いた。

敗戦の年も明けて三月も半ば、あとを東北人民自治軍に委ねてソ連軍の撤退完了も間近かという頃、旧満洲のF炭礦の街、将校食堂用に接収された豪華な飯店の一隅に、おれは柴田氏と向い合つて昼食をとっていた。

別れぎわに柴田氏は路上で足をとめた。

「さっきの君の話の、死んでもいい、という心意気の青年を二三人集めてもらえまいか。もちろん衣食住に不自由はさせないつもりだ。北上している国民政府軍はおそくも四月上旬までには入城するだろうが、それまでの半月ばかりの間だ」

「しかし、ほくは女に飢えた心境を譬えたまでで、命知らずに何でもやれる男と言われると、ちょっと」

「そう、その心境でいいんだ。たゞ、しばらくでも一緒に暮すわけだから、その点を考慮して君に選定を委ねたいのだが」

事情はともあれ、赤軍司令部一等通訳の柴田氏には恩義があった。開拓団で少々ロシア語を独修した程度のおれを、炭礦渉外部の臨時職員に押し込んで、厳冬の戸外労働から救い上げてくれたのは彼だった。時には、ロクなものを食っていないおれを、こうして将校食堂へ誘つてくれる。

三日後、おれは三人の青年を連れて柴田氏を訪ねた。いずれも少年義勇隊からの疎開者つまり脱出成功者で、おれなりにハタタリをきかせて面構えを調べたつもりだから、用心棒でも何でも身体を張って働く覚悟の朴訥な若者たちであった。義勇隊崩れのやくざなおれも、こんな時には役に立つ。

柴田氏の住居は知っていたが、立ちよったことはなかった。炭礦の高級幹部の社宅を接収した宏壮なものだった。ソ連軍将校の出入りが多かったせい、二戸建のテラスハウスをそのまゝ使っていた。周囲は凍て雪に埋もれた広い庭である。

柴田氏は白系の夫人と共におれたちを迎え入れた。先住者が運びかねた大きな家具や、後から調達した食卓や椅子など、チグハグな感じはあるが、室内は整っていた。夫人には以前一度だけ拝顔の榮に浴したことはあるが、

「牛肉のブロックだよ。置場に困ってね。こんどは口が増えたからすぐなくなるだろう。君にもご馳走しようと思つたのに」

柴田氏も北窓を振り返って笑った。

「この家には何でもある。ほとんどがソ連兵が日本軍や会社の倉庫から接収または略奪した物資だ。ぼくらがその上前をはねたというよりワルワラが身体を張って稼いだのだと言うべきだろう。避難民が飢えと寒さと病いでバタバタ倒れている時、ぼくらはこの城で敗戦貴族として優雅な生活をしていたのだ。大げさに言えば、この家は美しい貴夫人に花を捧げて集まる将校たちのサロンだったわけだ。君ならば、この貴族生活がいかに苦渋にみちたものだったかは分つてもらえるだろうね」

「……誰かがしなけりゃならない仕事だったでしょうね」

「何も弁明はしないけれどね。ソ連軍は去り優雅な生活が終った今、ぼくは疎開難民の一人にすぎないし、ワーニャだってしゅせん戦場での将校相手の高級慰安婦だったのだが、彼女の場合はぼくなんかより複雑な心境だろう。彼女は戦勝国民なのだ。彼女の父祖は国外に放逐されたといっても、同じ祖国の将校たちからは跪^{ひざまず}いて花を捧げられた。それは恐らく亡命貴族の孫娘の時おり夢みた一場面であつたろう。そしてそれ

「二階の窓の外にいくつもぶら下つてる包は何です」

がやっぱり一瞬の夢であったことも知っている。もちろん彼女は胸を張って祖国に帰れるが、将校相手に春をひさいだ功績を自分に許すことはできないのだ。ウィニャは多くのロシヤ語の誠実な先生だったが、愛し合って五年も苦楽を共にしてきた。もちろん二人ともそれぞれに過去はあったけれど、少くともぼくは真実の愛を掴んだと思った。そのぼくが彼女のヒモになったのだ。彼女はぼくのためにサロンの貴夫人を演じてくれた。

こんなことをくどくど言ったところで、君に何を理解してもらえらるだろう。端的に言えば、ひと冬の経験それは歓喜と汚辱、夢想と挫折の経験といえようが、彼女をすっかりリュボストラーストナヤな女に変身させてしまった。夜毎に官能の潮の中に身を委せずにはすまされなくなった。そういう自分自身を憎み呪いながら…… 多くの腕の中でウィニャは泣いて詫げるのだ。まるでよくとの愛の営みが、自分の汚れを落とすとても信じているかのように。彼女の今の絶望的な心境はぼくに理解している。逆療法にも似た姑息な思いつきを君に依頼したもの、はかない時間稼ぎと言えるだろう。ウィニャの心の奥の奥のぼくに対する怨念が、こういう貌^{かたち}でぼくを辱かしめ貶むことによつて露^はれれば、彼女の祖国への思慕は心の中で穏やかに所をしめるだろうと思つてみるが、あるいはぼくは彼女が

まっていた。

おれの姿を見ると、床に寝ころがっていたらしい若者がそのそと出迎えた。少々たるんだ空気を感したが、それも止むを得まい。

「君はNだったな。どうだ、この一週間の感想は」
「はい、快適なことは快適ですが、夫人のお相手は必ずしも楽ではありません。太陽が黄色く見えるという話を実感しました」

「仕事なんだから仕方ないだろう」

「不寝番の勤務要領の指導を、先輩からよく受けて置くべきでした。要領が分らず間がもてないのです。最初の勤務の夜は完全にグロッキーで……」

「もういゝよ、この野郎。勤務要領なんか自分で工夫しやがれ」

おれとNが笑っていると、風呂場で洗濯していたWが戻ってきて挨拶した。マジメな青年らしく、おれの問いかけには、何事も人生修業だと思つてガンバツていますと、言葉少なに答えた。柴田さんに直接言いにくい事があれば、おれから伝えておくと云つたが、顔を見合せて何も言わない。クソッ、当り前だ。今時こんな極楽浄土があるはずない。

ウィニャ夫人は二階でお休み、もう一人のSは買出し、柴田氏はお隣という。おれは廊下伝いに行つてみた。この社宅はもとは二戸建だが、廊下のつき当りの壁を

情痴の渦の中で亡び去つてくれる事を、ひそかに希っているのかもしれない。生身のまゝウィニャがぼくから去つて行くなどという事には、とても堪えられそうもない。

君には滑稽に見えることだろう。ぼくだって自分がひどく混乱しているのが分るのだから」

ひと回りも年上の柴田氏から、ひどく文学趣味的な告白をきかされて、おれは応^{こた}える言葉に窮した。柴田氏の正体については、おれはほとんど知らない。表面的には温厚で思いやりの深い、十数年の外地遍歴に疲れた中年紳士であった。豊満な白い素肌を抱くことを許される若者たちへのジェラシーは消えて、柴田氏の孤愁が胸にしまった。彼は恐らく敗戦荒廃した故国への帰還に何の夢もかけることのできない種類の一人らしい。白系たちに市民権が回復され、何十年も夢に見た祖国復帰がかなうことを知るだけに、その苦悩も深いのだろう。

それから一週間ほどして、おれは柴田氏を再び訪れた。別に大した用事があつたわけではない。柴田氏の告白をきいて以来、おれの心には難しいトラブルには関りたくない気持とうらはらに、そのまゝほうつても置けないというような不安も生れていた。それに、多少の好奇心があつたことも否めない。国共内戦が拡大して奉天陥落も間近いという噂で街はもろきつていた。政権が安定すれば日僑遣送も北支中支なみに日程に上るという期待が高

打抜いてドアをつけてある。とつっきの部屋に入ると畳が二枚あげて立てかけてあつた。床板が半畳分ほどはがされて、黒い土が見えていた。シャベルで土を掘る音をきゝながら、おれは黙つて佇^{たたず}っていた。不意にいやな予感がしたのだ。戸外は凍土だ。穴^{あな}を掘るならスチーム管の通っている床下しかあるまい。これ以上柴田氏の悲劇につき合うのは辛すぎる、とおれは思った。

「やあ来ていたの。失礼した。ちょっと待つてくれ給え」

床穴から上半身を見せた柴田氏が、おれを呼びとめた。汗の顔を指先でこすると、それは斜^{はな}交^かいに頬をよぎって無気味な創痕になった。

「近くを通りかかったので、ちょっと」

「まあゆっくりしてってくれ」

「でもねえ、柴田さん。そんな土方仕事は自分でやらなくてもいいでしょう。人手が余つてゐるんだから」

おれは厭味たらしく言つたのだが、柴田氏はにこやかに答えた。

「場所は自分で探さないとね。あとはみんなに手伝ってもらふ。実はもうこの生活も間もなく終りだから、親愛なるM兄弟たちに土産^{みやげ}を持って帰つてもらおうと思つて、缶詰類を掘り出していたのさ」

三月の末、市の西郊から間のびした砲声^{はうしやう}がきこえた日

多少気がかりだったから、柴田氏の社宅を見に行つた。
顔みしりの管轄係の主任が点検に来ていた。

「やあ、新しいお客様のお受入れ準備で」

「まあそんなところだな」

この老人には現在の役どころにはふさわしくない満洲浪人の風采が残っているのだ。

「こゝに住んでいたロシア語通訳はどこへ行ったか知りませんか。柴田っていう」

老人は不快げに首を振った。

「とんだ虎の威をかりた戦犯野郎だ。消えちまってせいせいしたよ」

四月も半ばとなると春は駆け足だ。柴田夫妻や三人の青年たちの消息もふつり途切れたままだった。Wに出会ったのはトーチカ作りの使役に駆り出されたときである。無傷で撤退した中共軍の反攻に備えて、国民政府軍は市内や周辺に、やたらにブロック煉瓦のチャチなトーチカを作りはじめていたのだ。各事務所事業所だけでなく、住宅の地区毎に割合てられた日本人が、この日も四十人だらしのない列を作つて、北郊の公園に向つた。何気なく振返つたとき、十米ほど後を歩いている青年と視線が合った。向うも気づかぬはずはない。列から離れて立止っているおれを無視して歩み去ろうとするWを見ると、おれは頭にきた。

「おい、もうおれは忘れられたのかな」

れていた。その中心には淫乱なロシア女の花顔があった。

「柴田さんは自殺したのです」

「自殺したと。じゃ夫人はどうした」

「夫人はNとSがつき添つて奉天に行きました。奉天が陥落しないうちに、北行きの列車に乗るためです。

これは柴田さんの指示でした。夫人を見送ってから、柴田さんは自殺したのです」

「その死体を君が一人で隣りの床下へ運んで埋めたとでもいゝたいのか」

おれはまだ信じきれなかった。家屋には異状なしという態の管轄主任の老人の顔を思ひうかべた。

「柴田さんはタオルで巻いた拳銃を構えてばくを連れて床下へ入りました。掘つてあつた穴に横たわり下半身を埋めよと命じました。自分が心臓を撃つたら直ちに穴を埋め、床板を並べて畳を敷き、出来るだけ速やかにこの家から立ち去れと命じました。最後に、君には大へん迷惑をかけたが許してくれ、一場の悪夢と思つて忘れてほしい。君のような立派な介添人を得てうれしい。言い終ると眼をとじて胸を撃ちました。ぼくは柴田さんの指示の通りにやりました」
おれはWと向き合つたまゝ、ずい分長い間黙りこくつて坐っていた。

柴田氏は恐らく畳の上では往生できない過去をもつた人間だったのである。彼の死には時代の荒波にもまれた

「あ、名取さん」

へたなとぼけ方をしやがると思うと同時に、柴田夫妻に何か異変がと、ピンときた。はみ出して並んで歩きながら、おれはわざと明かるい声できいた。

「その後みんな元気かい。柴田さんたちはどうしてるかな」

「ごぶさたしてすみませんでした」

「何かあつたのかと訊いてるんだ」

「柴田さんは亡くなりました。先輩が来られた翌々日だったと思います」

おれは自分の顔から血が引いていくのを、こんなにはつきり感じたことはない。

「誰が殺した」

側を歩いている連中が驚いておれたちを見つめた。そんな事は構っちゃられない。

「殺したなんて」

おれはWの襟首を掴んでねじ上げた。

「いゝか、お前は嘘なんかつけない男なんだ。さあ聞こう」

おれはWを列からひき抜いて、芽生え揃つた若草のスロープを下り、人けのない木蔭でつき放した。Wは腰をついたまゝ動かない。青ざめた顔がひきつっている。

「言え、誰が殺した。いや、誰に命令されたんだ」

その時おれの心の中には、犯行の構図が鮮やかに描か

一つの人生の完結という以上の意味はない。おれはそう思ひたかつた。

「事情を知らず乱暴な態度をとつて済まなかつた」

おれはWの前に頭を下げた。Wは無表情におれの姿を眺めているだけだ。

「たまたま君を引っぱつてきて、とんでもない経験をさせてしまった。申し訳なかつた」
おれはもう一度詫言ひた。

Wはそんなおれに、路ばたの土くれを見るような視線をなげて立上り、丘のスロープの青草を踏んでゆつくりと歩み去つた。その後姿は疲れはてた老人であつた。



狐狸村センセVS井中センセ

―日暮里界隈のうち―

左 老 庵

「どうしたんですか、ポリですか」
そばで観戦していた紳士が言った。
「いや医者とは舌根トモールって言いましたかね、何しろ痛くて……」

井中加和寿氏は小金為助席亭との碁の途中で手提袋からぬり薬のチューブを取り出し、妻揚子に巻きつけた脱脂綿の先につけて舌の根にぬった。形勢の悪い碁盤から気分の転換をはかる意味合もある。

「ちょっと見せてごらんない」その紳士は重ねて言った。碁の最中にこの様な口の挟み方は観戦者のエチケットを逸脱するものなんだが、何しろこの紳士は井中加和寿氏や席亭小金為助より三目方強い。

「ひどいもんですよ、見りゃ気分悪くなるでしょ。何しろ二年前にお茶の水でコバルト六十ってやつ針を十本もぶちこんで焼かれたんですから……」

井中加和寿氏は、この紳士の申し出にちょっとムッと

した建物で、二カ月でサッサと出来上ったのを思い出していた。地下一階は倉庫風にさえ作ってある。

「それでもありませんが、あたしの所へは全国から患者が来ますから、宿泊設備も必要なんですね……」

そこへ六段と称する客が入って来て、紳士はそちらへ向き直りがてら井中加和寿氏に重ねて言った。

「井中センセ、明日十二時此処でお会いしましょう、午前中往診の方をすませて此処に来ていますから……そして最初の治療をやりましょう」

それは氏が口の中の痛みにホトホト参っていなかったら押付けがましい一方的宣言とも受け取れたであろう程厳かであった。

この碁会所美籠堂はこれでセンセが三人になる。一人は素人八段を自称する金山センセこと金鳴鈴氏であり、かれは全日本素人名人選抜戦で惜敗したことがあると称しているが、此処二十年井中加和寿氏が美籠堂で五級ぐらいから碁を打ち初めて以来、金山内至金鳴鈴氏の名前を名人戦を報じる新聞面で見ることがない。或いはもう一ツ別の名前を持っているのかもしれない。かれは李朝の後裔であるとも称していたが、どこか顔面に決して高貴とは云えない影がただよっている。美籠堂席亭小金為助氏はある日井中加和寿氏と二人だけのときつぶやいたのである。

「あの人は碁会所地廻りっていうんだろね、デモウ

して言った。かれは実際おちこまれたものが十本であったかどうかは手術最中とそのあとが立ちくらみする程痛くてはつきりしないのであるが、誇張気味で云った。

「気持悪くなるって……あたしも医者です。まあ碁が終ったら一寸見せてごらんない。それにあたしは西洋医学にあきたらずに、西洋医学と東洋医学の接点という所で治療しています。ちょっと変った方法ですがネ」その紳士は低い声ながら自信たっぷり厳かに言った。

「医者さんなら忙しいでしょうに……又どうして昼間からこんな所に……」

「いや今病院改築中でしてね、半年から七カ月ぐらいかかるんです、ぎりぎりの手離せない患者を往診するぐらいで今一服という所ですよ」

「今時、半年かかるとすると大部大きい建物になりますな」

井中加和寿氏は自分の住居の近くの三階建ての一寸と

ちではタイグウしませんよ」

それから教員上りである井中センセであり、三番目が医者であって目下病院改築中の狐狸村センセと云うことになる。と云うことになる。とは狐狸村センセはほんの一週間前から連日此処へ来る新顔であるからである。

井中加和寿氏はこの奇様な紳士の申し出にいささか感激気味もあった。何しろ二年前に国立大学の附属病院放射線科という所に三ヶ月入院して放射線療法を受け、診察券の年齢の数字が六十五才のまま実のところ六十七才になるまで焼け跡の骨が露出したまま痛みつづけて、西洋医学の医師が「兎に角身体全体の力をつけてそっと宥めなだめるより方法がない、大体あなたは不摂生なんだ」と治らないのは井中加和寿氏の不摂生のせいになっている折も折、狐狸村センセの出現だったからである。たとえて言えば、金が壱千万円、どうしても欲しいと焦って、自殺さえ考えないことのない時に、ニコニコと近づいて来て、「お金ですか、あげますよ、え！利子？そんなものいりませんよ」とポンと肩をたたかれた感じである。

井中加和寿氏はその日柄になく浮きうきしていた。口の中の痛みがなくて沢庵ポリポリ煎餅パリパリかじれたら俺はどんなにシアワセだろうと思いつながら三年越し摺り

鉢でつぶした食物を流し込んで生きてきた挙句だからである。「いや、あたしが必らず西洋医学と東洋医学の接点において治して見せます。あたしは中国へ兩三回行って、向うの医師ともずっとカルテの交換をして来ました。向うの病院で腰の立たない患者が帰りに鼻歌うたって歩いて帰ってゆくのをこの目で見ておりますからねえ」と狐狸村センセはのたまわったのである。丁度中国の鍼麻酔手術の実況や、フイリッピンでの不思議な麻酔治療のことが新聞テレビに掲った頃であった。その翌日、丁度十二時、井中加和寿氏は基会所美籠堂へ入って行った。いつもかれが突いているかれ手製の桜のステッキの石突きの音も心なしにその日は力がこもるかのようであった。客は狐狸村センセ一人、ニンマリと微笑して井中加和寿氏を迎えた。

「じゃ他の人が来る前に治療してしまいましょう」
狐狸村センセはそう言って寿太袋のようにふくらんだ黒革の鞆の中からケースと聴診器をとり出した。金属ケースの中には鍼治療の諸道具らしいものがおさまっている。同じような金具のバックには消毒用と見える脱脂綿がアルコールの匂いを発散している。「ハハ、西洋医学と東洋医学の接点と云うのは、鍼のことかな」と井中加和寿氏は考えていた。鍼や灸や指圧マッサージには氏がずっと興味を持ちながら六十七才の今日まで近づく機会がなかったものであった。

「六十三です」狐狸村センセは別に年齢をうちあけることを気にせずに行った。

「それじゃ戦争中は軍医さんで……」

「ええ、ソビエットに抑留されましたね」

「じゃご苦労されましたな……大尉ぐらいで……」

「もうちょっと上でした」

井中加和寿氏は今六十三で、当時軍医でも佐官であったと云うかれの答えに、自分の年と、軍隊歴を重ね合せて、「はてな、少しうそがありそうだな、でも誰でも少しは見栄を張り度い気分はあるものだ」井中加和寿氏は此処でこの種類の露骨な会話を打ち切って、美籠堂席亭小金為助氏と碁盤をかこんだ。小金為助氏は井中加和寿氏と五分の腕前である。

美籠堂で碁客の来る前の治療が二日、都合二回すんだところで狐狸村センセは言った。

「これ以上の治療は全身に及びますから、お宅へ往診という形でいたしましょう」

その日、家へ帰った井中加和寿氏は女房に言った。

「おい、すごい医者に出会ったよ。西洋医学と東洋医学の接点で治療するんだぞ」

「それで痛みはどうなの」

「うん、たしかにカンゲしている。カンカイと言って

狐狸村センセは先ず脳の天辺のあたり「百合」という経絡点に鍼を打ちこみ井中加和寿氏の度胆をぬいた。それから頸をはだけさせて、肩井、承漿、地倉、迎香、扶突、頰車、天容、風池と入念に鍼を入れ、遂に井中加和寿氏が最もおそれている舌根患部の周辺を鍼でつつき廻した。そしてその途中に狐狸村センセは井中加和寿氏の手頸を骨太い掌でおさえ、「気分悪くありませんか」とやや暫らく脈を計るのであった。聴診器は胸にぶらさがっている。正に西洋医学と東洋医学の接点と見えた。

「さあ今日は此処までにしておきましょう。どうです、痛みは緩解している筈ですが」

お不思議に痛みがやわらいでいるのである。井中加和寿氏は尊敬をこめて言った。

「センセイ、只今カンゲという術語をお使いになりましたね。ゆるむと云う意味ですか」

「カンカイと言ってもいいんですがねえ」

「センセイは失礼ですがおいくつにおなりですか」

余り尊敬し過ぎては何となく井中加和寿氏の自尊心がゆるさぬのか、氏は自分の六十七才の年に重みをかけて露骨にきいた。ああ日本人はどうして年のことを気にして聞くのであろうか。昔は「何年兵ですか」と云う間接的なきき方があった。「十年兵です」と答えると、この人は昭和十年に兵隊検査をうける廿才であったと云うことになって見当がつく。

もいいんだ。要するに痛みがゆるんで来た」

「ホントに治るんですかね」女房は意地の悪い顔になって言った。大体毎日美籠堂に通って酒も呑んでいる不養生な暮らし方に女房は不賛成であり、その美籠堂で出会った東洋医学と西洋医学の接点を往く医者に信用をおかない。これは女一流の疑い深さと云うもので、井中加和寿氏のとらない所である。丁度当才の子供を連れて遊びに来ていた長女が、氏の女房すなわちかの女の母親に肩を持って言った。

「おとうさん、私の知ってる人で矢張り口の中に出来物の出来た人が鍼にかかったら、ほったががお多福風邪のように張れて結局病院ゆきになったんですよ。気をつけて下さいよ」

「そんなまちの鍼医とはちがうよ、西洋医学と東洋医学の接点でかれは治療するんだ」井中加和寿氏はキッとした頑固な顔になって言った。

その翌日狐狸村センセは指定の時間通りに十時丁度に井中加和寿の家へやって来た。

「センセイ、病院改築中と云うお話でしたが場所はどこですか」

井中加和寿氏はゆくゆくこのセンセにかかり度い、出来れば東洋医学と西洋医学の接点の秘術の一部でも勉強し度いと云う熱意で、かれ狐狸村センセが炬燵におさまるや露骨に聞いた。

「ヒガシオクです」

「改築中お住いの方は……」

「イヤ患者で世話する人があってオシアゲの方に假住居しています。こんなこと申し上げては何ですが、あたし五年前に家内に先立たれてねえ、考えて見れば悪妻でした……それで今、あたしんとこで元婦長やっていた女がアビコの方から通いであたしの身の廻りみてくれています……」

「考えて見れば悪妻でしたが」という所で狐狸村センセは一寸速くを見る目付きになって思い入れの顔を作った。

「センセイ、病院経営には事務長に気をつけなけりゃいけませんよ」井中加和寿氏は六十七才の重味で六十三才の狐狸村センセに言った。かれは自分の父親が開業医をやっていて、事務長兼医員として、赤十字病院にいた頃の部下で、陸軍の衛生兵上りの器用な若い人を引抜いて来て、結局死んだ時この若い人に病院の中を結構かきまわされていたことを思い出して居た。

「そうなんです、そこなんです、実は……」狐狸村センセはひと膝のり出す姿勢になった。

「あたしもその事務長に痛い目に会いましたよ」

「どうしたんです」

「イヤーあたし、事務長まかせなところがありませんね、何しろ全国から患者があつまって来ますから、病気のこともさることながら、その人達の生活相談にも段々

は入って行くでしょう、疲れますからねえ、ツイ経営は事務長まかせ、金庫の鍵を初め印鑑、小切手帳、諸帳簿みなあずけっぱなしでおりました。それである日、マエバシで自動車販売会社を経営していると云う人と事務長の紹介で知り合いになり、三人でハネダで一杯呑んだところで、事務長同席ですよ勿論、その人の会社経営資金を一ッ時千三百万円融通して呉れて頼まれてね、出来心、一杯気嫌でツイOKしたんですよ。ところがなかなか返してくれない、あたしマエバシ迄とうとう行きましたよ……。自動車会社って云うのはホラあの中古車の販売ですね、東京にも方々にあるでしょう。萬国旗などで飾り立てて、ずらり自動車並べてる販売方式、あれなんです、結構盛大に営業しているらしくて、あたしをマエバシ市議会議長に紹介したり、関連会社の案内をして呉れたりご馳走してくれて……まあ今から考えると表を張って見せたんでしょね、でも金は返してくれませんでした。東京へ帰って事務長を詰問して金銭出納簿やら諸帳簿出させて、薬品、医療器材の仕入れ具合など子細に説明求めたんですけれど……そのマエバシの自動車販売会社以外にも何やかやで九千万円に及ぶ使途不明の金があつてねえ……ええ結局あたし黙って皆かぶりましたよ……今あの事務長どうしているやら」

狐狸村センセはふたたび又遠くへ目をやって思い俣ぶ風情になった。

井中加和寿氏は九十万円もままならぬわが身に引き比べて、この西洋医学と東洋医学の接点を駆使する狐狸村センセの大人物ぶりと金の力にあきれて、甚が三目方ちがう尊敬どころか一種のおそれさえ抱いたのであった。

だからその日井中加和寿氏をかれが半裸にして、看井から初まって巨骨、看膠、陰俞、看貞、天井、少海、曲池、陽谷、神門、合谷、委中、陰谷、陰陸泉、三黒、丘墟、陰白、湧泉と手足に鍼を入れ、大椎から順次脊髄を123456789101112と下り、腰部八点、さて左右裏側が終ると表は俞府、中府、天池、大包、曲沢、尺沢、腹中、から上部に戻って、暮会所でやった経絡点をくり返し、口中腫瘍の周辺をつつき廻し、ツイに脳の天辺百合で最後のとどめをさすまで歯を食いしばって、むしろ唯唯諾諾として横たわっていたのであった。かれ狐狸村センセは前後二時間に亘る治療の間に、折々脈を握り「気分は悪くありませんか」とやさしい声で聞くのである。西洋医学の医者からは出ないやさしさである。胸には聴診器がぶらさがり、脈を見たあとで心音を確かめたりする。まさに西洋医学と東洋医学の接点をゆく気配である。

「おい、センセイにお手洗いの湯」

井中加和寿氏は電気ストープと石油ストープであつためている部屋の中でも鳥肌立ちかけた半裸を大急ぎ身づくろいしながら女房に怒鳴った。怒鳴りたくなるのは治

療の間一度も顔を出さずに、台所で狐狸村センセを供应する用意をする建前で、実は二人の会話に耳をすませている様子であつたからである。

「センセイは西洋医学のご専門何ですか」

「成人病です。若い時、終戦直後ですが、アメリカへも留学しました」

「それじゃ英語もお達者ですね」

井中加和寿氏は教員上りであるが教員になる前にその日の暮しにも困ってアメリカ進駐軍の通弁などやっていたことがあつて、日本人のおしゃべり英語力に興味を持っている。女房は隣の台所で、井中加和寿氏が南方の島でアメリカ軍の捕虜にまでなりながら、アメリカへ留学出来なかったのは余程能力がなかったのだらうと憶測をしながら餅をやけくそに何度もひっくりかえした。

「いやー只遊ぶことに専念しましたよ」

狐狸村センセは井中加和寿氏の露骨な質問を軽くかわした。

「センセイは大学は金沢医大とか美濃でございましたが、高校はどこですか」

「一高です」

狐狸村センセは軽く流す口調で言った。井中加和寿氏は五十年前、田舎の中学で、青白い身体のはっそりした抜群の勉強ずきの少年だけが毎年一人か二人一高に入つたことを思い出して、狐狸村センセのテラテラと陽焼け

した骨太な額や顎のあたりを睨んで更に露骨になった。

「センセイ一高から金沢医大を選んだのは……」

「ああ、あたし石川日出鶴丸と云う先生をしたって金沢へ行きました。あたしの今日あるのは矢張りこの先生との出会いですな」

此処で井中和寿氏は何度目かの「ハテナ」を感じたのであった。それは生きていれば百才になる開業医であった亡夫の書齋にたしか石川日出鶴丸と云う珍らしい名前の人の随筆の本か何かがあったのを思い出したのである。年令が亡夫より拾年は先の人であって明治三十四年に京都大学を出て、のちに京都大学の教授になった生理衛生学の専門家であった筈だ。東洋医学にも業績があったかも知れないが狐狸村先生の今日に影響を与えるには年齢の具合が噛み合わない。そこで金沢医大を出て丁度狐狸村センセと同じ年の知人の渋谷博士の名刺を、重ねてあった名刺の束の中から探し出して、

「丁度センセイと同じ頃に金沢医大に勉強していた内科婦人科の医者さんです。会合などでご存じ合いじゃありませんか」と言ってみて見た。狐狸村センセはその名刺を手にとろうともせず、目だけチラリと走らせて、

「そんな人もおりましたね」と申されたのであった。

狐狸村センセは毎日定刻十時に井中和寿氏の住居に

「ご主人、お宅でも奥さんが腰の痛みで狐狸村さんにかかっているようだが礼の方は……」

「今時、按摩治療でも一回三千五百円はかかりますからね、まああのセンセはうちへ基やりに来てくれる序でということ、一回五千円でやって貰っていますよ。何しろ立派な病院長なんだから往診となりゃそんなことじゃすまんでしょうがね」

「それじゃ一回五千円と、私もあんと共同戦線ちゅ恰好でいきましょう」

井中和寿氏は今までの回数に五千円をかけて五万円という答えを腹の中で出していた。何だかそろそろこの東洋医学と西洋医学の接点に対して不安と、身体のひとつい弱り方を感じていた。今迄四合痛み止めの意味で入っていたウイスキーが一合しか入らなくなったのである。その日井中和寿氏は女房に言った。

「おい、狐狸村センセに礼を包め。あの人の治療には保険も老人医療制度も通用しないからな、それに俺もこころでひと休みだ」

「それご覧なさい。よくならないでしょう」

「うるさい！」

女房は信用組合の勧誘員が正月の挨拶において行ったのしと赤い印のある袋に金を入れて井中和寿氏の机の上に投げる手つきで置いた。女房が台所に下りて、まだ狐狸村センセが現れない前に素早く袋の中を点検する

現われた。鍼というものはそう毎日猛烈に打込まれるものやら井中和寿氏は知らない。只二月の寒さの中で、電気ストーブに石油ストーブ一台ずつ部屋に入れても半裸で二時間の全力投球にも等しい治療には氏は三回目あたりから疲れのような気分を感じて来た。たしかに鍼の治療が終ると、身づくろいを大急ぎととのえながら、氏はボツ然と生気を感じ、口の中の痛みも狐狸村センセが「必らず治してあげます」とのたまわったご宣託の暗示のせいか緩解する気配であった。ある日狐狸村センセは言った。

「何だか今日はあなたの皮膚が鍼を受けつけなくなっていましたよ」

それは往診と云うことが始まって七日目であった。

「そうですか、わたしがかすると「イヤダ、イヤダ」とどこかで無意識に思っているせいでしょうかね」井中和寿氏は露骨である。そこで此処らで一区切り金について申入れておこうと思いつて言った。

「センセイ、こういう治療法は保険はきかないと承知していますがボク健康保険とは別に医療共済制度に入っていますからドシドシ請求して下さい」

「ハーマあそのうちにね」

狐狸村センセの目は又遠くを見る目つきになった。

その翌日井中和寿氏は美籠堂席亭小金為助氏に狐狸村センセの現れない前に忍び声で言った。

と金三万円が入っている。一回按摩、揉み療治並みの十分と計算してあるわけだ。氏はそっと自分の財布から二万円を袋の中に押しこんで、さてひとつ深呼吸をして、背後の書棚においてあるイギリス国の旅行から土産に貰った「アイリッシュ・ミスト」の瓶を思い切ってその金包みに並べた。アイリッシュ・ミストはアイルランドの霧Ⅱなんて井中和寿氏のなくなりかけている詩情をくすぐるし、ことに氏が若い頃興味を持った女がくれたのであるから、これを狐狸村センセに贈るには相当な決意が必要なわけである。

定刻に狐狸村センセが現われて先ず炬燵におさまった所で、井中和寿氏はその袋と、「アイリッシュ・ミスト」を狐狸村センセの方へ押しやる手つきで言った。

「センセイ、今日はひと先ずご挨拶がわりに……」

「何ですか……」

狐狸村センセは例の遠くを見る目つきになって、頃合をはかって

「それじゃまあ……」と無難作に包みを内ポケットに入れ、アイリッシュ・ミストの瓶を黒革の寿太袋様の鞆に押し込んだ。

だがその翌日、井中和寿氏は寢床から起きあがれない具合になっていた。大がいに夜中に口の中の痛みで三回は目を覚し、痛み止めのチューブの薬をぬったり、頓服をのんで浅い眠りでも五六時間は寝ている。ところがそ

の夜は失禁さえしかなない弱り方で、枕元に洗面器をどうにか運んで来たが、眠れば二度と此の世の風景が見られないぞと、うなり声を連発しながら朝方女房が二階から下りてくるのを待った。こちらから看護を女房に求めることは、そもそも東洋医学と西洋医学の接点に反対である女房に対して、井中加和寿氏のプライドが許さない。「おい救急車呼んでくれ。西洋医学の病院へ行く、明日は日曜で病院休みだろ」文字に書く程明瞭にはきき取れないあわれな声になっていた。

朝方早いから、さすがに物見高く、人情に厚い日暮里界隈の住民もチラホラとサイレンの音の行方が井中加和寿氏の住居であることを確かめるために通りへ馳け出したぐらいであった。

「年令六十才位、一見紳士風」

救急車員に両方からささえられて車内に横たわった耳元で無線連絡が叫んだ。

「一見紳士風は気に入ったぞ……それに六十才位とは若くみてくれたワイ、この若者に一杯吞ましてやり度いもんだ」

井中加和寿氏の眼はうつろになって、つきそっている女房の顔をぼんやり眺めていたが、心中は、「もうこれ

までか」と案外呑気になっていた。

どうせ井中加和寿氏のことであるから、この運びこまれたお茶水医科歯科大学附属病院内科の病棟に入院のあいだも決しておだやかではなかった。先ず一日五千円也と云う個室にぶちこまれたのが氏のカンにさわったのである。一日千円台の雑居病室は満員だと言うのである。二ツ目に、運びこまれた直後に、後ろから支えられながら撮られた胸部レントゲンで胸部が肺炎で真白になっている、「よくもまあこんなになるまではっておいだもん」だ。と当直の若僧の医者卵がつぶやいたのが氏を苛立たせたのである。それは井中加和寿氏の選んだ東洋医学と西洋医学の接点の治療を間接にあしざまに罵ったこととなる。女房と娘の忠告に軍配をあげたからである。三ツ目にその若い医者が「あなたは結核がある、当病棟は結核菌に弱い患者ばかりだから病室から出ないで下さい」と言い、看護婦もマスクで重装備して出入しただからである。この「結核がある」ということは氏にとって重大なことなのであった。氏は自分の命をそれ程惜しまない心境であるが、結核だとすると女房子供も法令によって検査をうけ、かれ自身も、それ専門の病院へ強制的に移されるからである。そこで氏はその若い医者に向って叫んだのである。

「センセイ、俺は結核なんてねえよ、結核だと言われてその筋の病院に半年もぶち込まれたことはあるよ、で

も菌は出ねえし、肺ガンの疑いありと散々ばらいじくり廻されたあとで入院生活の態度が悪いつて追い出されたんだ。胃の腑のレントゲン撮られた時だって、俺は医者さんに「俺の腹、腹黒いか」って聞いたら、「いやきれいですよ」って言われてるんだぞ、しっかり調べてくれよ、なあセンセ」

このよたよた運びこまれた老人に似合はない吠え方に、その医者は、氏の腕の皮下に何やら反応を調べる注射をして、首をかしげながら「結核じゃないらしい」と呟き、看護婦もマスクの重装備を止めて入って来るようになったのである。

東洋医学と西洋医学の接点をゆく狐狸村センセに一回五千円×十回で、降参した井中加和寿氏の貧乏根生は、一日五千円也の個室入院は矢張り一番こたえる。「それ程の命じゃねえや」と云う捨て鉢なものが心底にある。西洋医学と国立大学附属病院と云う肩書きに絶大な信頼をささげる女房と娘たちは「そのぐらいのお金は大丈夫ですから、完全に治るまで入院して下さいよ」と懇願、説得これつとめたが、「あなたは此処の医師団と看護婦たちをおこらせた」と云う若い医師の強迫めいた言い草に対し、「俺はまちがったことは一言も言っていないぞ、俺は一日無意味に五千円也を支払う入院が出来る身分じゃねえと言っているだけだ」

一週間で医者に無理押しして、女房子供の説得を蹴っ

て退院した井中加和寿氏は孫悟空の如意棒、沙悟浄の魔杖、猪八戒の熊手に擬している手製の桜のステッキによりかかりながら、もうその翌日美籠堂へ入って行った。

東洋医学と西洋医学の接点と肺炎との関係を狐狸村センセに対し文句をつける気は露程もなかったが井中加和寿氏はさっそく「狐狸村さんは来ますか」ときいた。

小金為助席亭を初め居合わせた基客は、慎重に顔を見合せていたが、暫らくして小金為助氏が言った。

「何でもフランスのパリーの学会へ招かれたとか言っ
て、センセが救急車で入院した翌々日から来なくなり
ましたよ」

基客の中で狐狸村センセに、中学へ行っている子供を休ませるために假の診断書をかいてくれと基客仲間の気安さで頼んでいて、ツイに書いて貰えなかったネクタイ会社の社長が言った。

「そのパリーの学会は東京の何処かの基会所じゃないかな。基会所にゃ大體老人が多いし、老人は腰とか脚とか兎角痛み持ちが多いからな」

他の基客は皆慎重に無言で基をうっていた。狐狸村センセは診断書のような証拠を残すことを好まなかったのである。

三河島物語

茂里英介

隅田川の底を斜めにぐぐっているの、北千住と町屋の間の地下鉄は時間がかかった。あゝ、いま隅田川の川底のはるか下の方を通過しているなあ、ということが感じられる。かすかな傾斜でくだっていき、また登っていくのがわかる。ずいぶん深いところにトンネルを掘ったらしい。

私は浅草から東武線で北千住へでて、地下鉄千代田線に乗り換え、一つ目の町屋で降りた。都電乗り換えの矢印をたどって狭いホームを歩いた。前方の人影は二つ、閑散とした地下ホームである。地上へ出るのにかなり階段を登るのかと覚悟していたが、意外に地上はすぐで、短かいエスカレーターと、それに続く階段をあがると、地上の明るさが見えてきた。突然、船の気笛のような、鋭く、短かい、ブーンという警笛がきこえた。階段を登りきって前方を見ると、いま都電が駅前の通りを横断したところだった。ゴットン、ゴットンという音を残し、

人家の間を縫うように遠ざかっていった。

三の輪行の停留所の周囲は自転車で完全に埋め尽くされ、人一人やっと通り抜けるすき間しか残ってない。都電の乗りかたがわからないので、掲示板を注意深く眺めてみた。バスと同じワンマンで、前乗り、うしろ降りで、料金は百二十円だった。だいぶ以前乗った記憶では、二つの口からそれぞれ乗り込んで、車内でキップを買ったはずだが。

ぼんやり立っていると、五十年輩のおばさんが、ちゃんと並んでくださいよ、と私に声をかけた。私はあわてて進行方向に向かって立っている人のうしろへついた。

発車合図は昔と同じ。チンチンという鐘の音がなつかしい。荒川区役所は乗って三つ目、終点三の輪の一つ手前であった。車内には新旧の車輛の写真とか、都電荒川線の歴史などがかかっていた。それらをゆっくり読むゆとりはなかった。ひっそりとした、小さい木造住宅の

手を、あの鋭い警笛を鳴すこともなく走った。

私は二十年前の三河島列車転覆事件のことを調べたくて荒川区役所を訪ねるところだった。警察へ行って当時の記録を閲覧させてもらうことにはためらいを覚えた。なんの関係もない、目的もはっきり説明できない人物に資料を公開するはずもなろうと思ったのである。適当な紹介者でもあって、野谷という巡査部長にでも会えたらという願いも頭の隅をかすめたのだが……。

最近はこの区でも区史を編さんしているので、荒川区役所で荒川区の歴史書、区のご案内書などに、三河島事件の全貌が整理されていれば手にいれたいと考えた。もし、ほう大な区史しかないようだったら、その部分だけコピーしてもらおうよう頼んでみるつもりだ。区役所から歩いて、三河島駅へで、周辺を歩いてみてから、国電常盤線で上野へ出ようと思った。

五十八年一月二十日のY新聞朝刊に、95分署というかこみ記事があり、概要次のようなことを紹介していた。

「あれから二十年、なお身元不明の遺体ひとつ」という見出しで、

「三河島警察署の野谷巡査部長（五五）は事故当時、原因の捜査に当たった専任捜査員の一人で、現在も同署に一人だけ残って身元不明者の調べに当たっている。去る四十九年、宮城県の家出人とそっくりとの情報に、色めきたったこともあった。だが結局、その家出人は別の所で生

きていることが判明、捜査員をがっかりさせた」

当時の現場写真一葉と、身元不明者のモニター写真がそえてあった。

私は身元不明の遺体がひとつあり、その捜査は今なお続行中という箇所を読み返した。当時の捜査本部員がたった一人だが、残されて遺体の身元調べが、こつこつ続けられている、しかも、二十年間、ということにおどろきを覚えた。そしてこの記事を切り抜いておいた。

私の仕事は喫茶店の経営だが、そっちは女房任せで、フリーライター兼カメラマン気取りで遊び歩いている人間だ。五十歳をいくつか超えたが、好奇心と色気は旺盛で、脚も丈夫である。

忘れかけていたこの切り抜きをさがし出し、丹念に読み直してみなければならなかった。野谷巡査部長と共に三河島事件を捜査した元警察官に引合せてやるといふ人物と知り合ったのである。

私は東京史跡探勝会のメンバーで、五月に品川宿探訪の会があり参加した。予定表に従って、妙国寺、品川寺、海雲寺と巡って、京浜急行青物横丁駅で解散することになった。この探勝会の浅草からの参加者は以外とすくなく、ひとりではんやりしている時間が多かった。過去何回か一緒になって顔だけは知っていた歴史に詳しい男性と親しくなり、彼のくれた名刺で荒川の住民であることがわかった。

「昔、三河島で列車が衝突してたくさんの方の死者を出した事件がありました、覚えていますか」

私のなに気ない問いに、彼はからだを乗り出すようにして、

「知っているどころじゃありませんよ。僕は三河島の駅の傍に住んでましたから」

高校教師の本島芳夫は四十歳位になるだろうか。二十年前のことだから大学生の頃の大事件だったのだろう。

「私の家は雑貨屋でしたが、父は消防団の副団長で、毎日商売を放つとらかして現場へ出掛けていましたよ。まあまあ、えらいこっちゃと口ぐせのように、家に帰ってはひとりごとを言っていました」

それから、今は三河島に住んでないが、西日暮里の高台のマンションを買って、そこから立川の方の高校に通動しているのとつけ加えた。二十年前に消防団員で活躍した父は数年前に亡くなり、それまではそばと続けていた駅前の雑貨屋も後継ぎがなく処分してしまったと語ってくれた。私は新聞の記事のことをたずねてみた。

「一月頃、新聞に、身元不明の遺体がひとつあって、野谷巡査部長という人が署に残っていて、その調べを続けているという記事が出ましたが読んでいますか」

海雲寺のお参りと参観をすませ、青物横丁駅へ向う道で私は本島芳夫にたずねてみた。本島は黒縁めがねの奥を一瞬キラリとさせたが、すぐ柔和な視線にもどり、

私は、その人に紹介してくれませんか、と本島芳夫に頼んでみた。

「え、いいですよ。でも、あなたのことは先方に何んといっておきましょうか」

「何んか適当にお願いします。荒川区の歴史を研究していて、三河島事件をまとめて記録しているとかなんとかいっておいてください」

「そうですね、東京歴史研究会のメンバーとでもいっておきましょう」

さきほど交換した私の名刺には、名前と住所しかなく、彼は私の正体をつかみ兼ねていたのだろう。私はありのままに、喫茶店のおやじで、フリーのライターを気取っている道楽者であると自己紹介をした。

本島は二三日中に電話しますと約束してくれた。

私は元警察官に会って話をきくにしては、全く予備知識がないのに気づいた。一月の新聞の切り抜きだけではいかにも心細い。図書館へでもいって新聞の縮刷版でも借り出して読んでみるか、荒川区史でも手にはいれれば、事件の概要が整理されているだろうか、いや、かえってなにも知らないで面会した方が、話が新鮮でいいかも知れないぞ、私のはんとくに知りたいのは、身元不明の遺体のことなんだ、列車転覆の原因などはどうでもいいのだ、などというろ迷った末に、三河島の駅とその周辺を歩いてみることに、すこし離れているが、荒川区役所へ

「え、僕も読んでいます。でも、なんであなたがいきなりあの事件を……」

本島はあの事件に関心をもち過ぎるのをいぶかっているようだ。彼にとって三河島事件は父の死と結びついていて、遠い過去の一頁に過ぎないのかも知れない。

「百六十名という死者を出したのですから、現場に慰霊塔かなにか立っているのでしょうか」

「現場にはありませんが、死体が運び込まれたあの近くの寺に、慰霊碑が立っています」

「この会で荒川区の探訪でもあったら、そのお寺にもお参りできますね」

「さあ、どうですか。小さな寺で、まわりはごみごみしたところですから。荒川区の地図にのっているかどうか」

私には慰霊碑の立つ寺があるというのは初耳で、いかお参りしたいものだと思った。

「身元不明の遺体がひとつあって、ご先輩の巡査部長が捜査に当たっていると新聞にありました」

「あ、確か野谷さんの方でしょ。僕はその人は知らないのですが、当時、よく夕方になるとうちの店に買い物にきた捜査本部長がいましたよ。僕はよく店番させられていましたから。今でも年賀状が来ます。警察をやめて製薬会社の警備員か守衛のような仕事をしているようです。きちょうめんというのでしょうか、すこし親切にしてくれたのを恩にきて、父の死後も便りをくれます」

行って、五十年史などという本でもできていれば、わけでもらう、ということにした。

本島芳夫は品川探訪から三日目に電話をくれた。こんどの日曜日、午前九時、自宅で待つ由。名前と住所、電話番号を覚えてくれた。家は千葉県松戸市、松戸の駅からすぐということであった。

私は現職のいかめしい肩書きの人じゃないし、気軽に会って世間話でもするつもりで、身元不明者の調査の苦心談でも聴いてこよう、と自分にいきかせた。

電話の話のなかで、その元警察官、竹越直太郎は、家出人の件で宮城県へ勇躍出掛けた本部長の一人で、退職後も、東北からの出稼ぎの人などつかまえては情報収集をやったり、現職時代の資料を洗い直したりして、身元不明者のことは念頭を去らないらしい、とのこと。

私は堅物で苦手なタイプの老人を連想し、すこし緊張していく自分を感じていた。そして、なに、ただの世間話さ、と再び自分にいきかせるのである。

荒川公園が明治通りに面してつくられていて、公園の中を通り抜けると区役所であった。三色すみれのような色どりの花壇にかまれて噴水があり、樺が豊かな緑を茂らせ、ベンチの上を覆っていた。左手の銀杏並木は役所へ通ずる車道であった。

受付で広報課へ行けといわれ、四階へエレベーターであがった。細長いカンターがあり、中の中年男性に声を

かけた。

「荒川区の最近の歴史を聞いた本はないですか」

「どの程度の歴史ですか」

「ここ三十年位の記録でいいのですが」

私は三河島事件を口にできなかった。こちらの目的や意図をたずねられても困るし、相手は警戒する姿勢になるだろうと思った。

「さあ、ありませんね。この向うに図書館がありますから、そちらできいてください」

彼は、もう、いいだろうという素振りですぐに席に戻ろうとしていた。私は慰霊碑のある寺のことを思い出し、

「荒川区の名所旧蹟を書いた案内書のようなものは」

彼はカウンターの上に並べてあるたぐさんのパンフレットの中から、小さく折りたたんだ印刷物を私に手渡ししながら、

「こんなものしかありませんよ」

それは「あらかわの史蹟・文化財」となっていて、ひろげると新聞紙大になった。よかったら差し上げますよというので、私は礼を述べてカウンターを離れた。一階において、窓際のベンチを選んで腰をかけ、史蹟一覧表を開けてみた。

(1)、奥州道（日本橋）の文化 (2)、上野（京都）の文化 (3)、川の文化 に分類し、地図上にそれぞれマークをつけ、一覧表がついている。番号に従って、史蹟の写

華かな駅ビルもなく、古めかしく、貧しげな、昔のままのような、年輪を偲ばせるホームであった。

私はこのまま、元警察官の竹腰直太郎に会うつもりになつていた……。

日曜日はよく晴れて、日射しが強く、私は身軽な服装で家を出た。中旬に、三社まつりがあり、百万人を越す人出でにぎわった浅草も、やっと静けさをとりもどしていた。私たちの経営する喫茶店で、私は帳簿と外廻りだけすればよく、この日も特にすることはなかった。

松戸の駅前で買った果物をさげて、番地をたずね当てるのに十分位かかったろうか。低い生垣の中に建つ、二戸の家の、奥の方が竹腰の住居だった。手前の家の表札は姓が異なり、長女の嫁ぎ先の家である。食事と洗濯の世話は隣家の長女がやってくれるという一人住いであつた。

元警察官、竹腰直太郎は長身で肩広く、柔道でもやっていたらしい体格である。細い眼が優しげであつた。

「お待ちしました」

自分でお茶をいれてくれた。小ざっぱりとした六畳間が玄關脇にあり、茶の間であらうか。

私は自己紹介をし、高校教師、本島芳夫との間柄も話した。

「一月に出た三河島事件の新聞を切り抜いていらつしやると聞きましたが、ずいぶんと関心をお持ちのようです

真と解説がついている。最後の一隅に、文学碑、碑文というコーナーがあり、「伊勢物語」隅田川の歌碑、芭蕉「奥の細道」旅立の碑、永井荷風詩碑、中村雨紅「夕やけ小やけ」の歌碑などがつけ加えてあつた。

三河島の慰霊碑はついに発見できず、どこにどんな形であるのか想像することも難しかった。

三河島の駅は地図でおおよその方角はつかんでいたが、区役所を出、公園を抜け、はじめての信号で立ち止った時、幼児を連れた女性に道をたずねた。

「さあ、わたしもよく分りません。あすこに立っている警察官の方におたずねになって」

私は、ケイサツカンという発音に、妙な新鮮さを覚えて婦人の顔を見直した。いまはお巡りさんとか巡査といういい方は日常会話からは姿を消したのだろうか。こっくんと会釈をすると、さわやかな感じをただよわせて、幼児の手を引き、横断歩道を渡っていった。

国電常盤線の三河島駅の切符売場には、それらしい掲示板は何も見えず、私は線路わきの道を南千住方面へ向って歩いた。線路沿いには資材置場のような雑然とした空地がずっと続いているが、事故現場の跡を示すような、静かなたたずまいの空間はどこにも見当らなかった。

空しく駅に戻り、電車のホームに立った。狭い、わびしい感じのホームで、沿線案内の立札もなく、近代的な

が」

私が予想した質問であつたが、竹腰の実直で、真剣なまなざしに接し、いいかげんな返事はできないぞ、という警戒心にもた緊張感を覚えた。現職時代の習性が抜けないのだろうか。順序立てて、自分が納得いくまで問いつめてくるかも知れないと思った。

私は変にかくしごとをせず、洗いざらい正直に話す方が得策と、とっさに判断をし、荒川区役所へ行ったことから話した。

「今日、竹越さんからお話が聴けるというので、事件の記録でもあれば手にいれようと思ったのです。しかし、何もありませんでした。百六十名の慰霊碑もどこにあるかわからず、まだ、お参りもしていません。荒川区は史跡としては扱っておりませんね」

私は荒川区の慰霊碑の取扱いが、いかにも不満であるようなニューアンスでいった。

「そうですね、今は訪ねる人もなくなつたでしょう。あの浄正寺は、駅にいちばん近いお寺ということで、遺体をつぎ込んだんです。あすこのすぐ隣りに、法界寺という寺があって、浄正寺で収容し切れない遺体運びこんだんです。寺が二つ偶然隣り合っていたっていうのも変な話ですね」

「慰霊碑のある寺は、じょうしょう寺というのですか」
「そうです。字は」

彼は畳に指で、淨と正を書いてみせた。
私はすっかりそれを頭に刻み込んでおいた。

竹越直太郎は私に背を向け押入れの中をかきまわして
いたが、古い風呂敷包みを出してきた。

「新聞の切り抜きがあります。どうぞ」

二十年前の事故当時の模様が生々しく報道されている
新聞の切抜帳を私の前に差し出した。私も二十年前には
この新聞は見ているはずだが、改めて、事故の悲惨さに
眼をみはった。

昭和三十七年五月四日から、前日の五月三日の大事
故を報じていた。田端発の下り貨物列車と国電常盤線の
上下電車が衝突し、死者百五十人、重傷者百四十八人、
軽傷者百九十二人の大惨事であった。時間は午後九時三
十五分。私は記事に眼を通しながらきいてみた。

「死者百五十人とありますが」

「重傷者の人が、その後十人なくなっています」

彼も切抜きから眼を離さず、ぼつりと呟いた。

事故発生時の状況は、田端発の下り貨物列車はポイン
トで、下り線路にはいることになっていたが、機関士の
信号の見まちがいで、そのまま直行し、線路ばたの車止
めに衝突、機関車と次の貨車一両が脱線して、下り電車
が走ってくる線路にかぶさるようなかたちで傾斜してし
まった。

そこへ定員の一・五倍の乗客千二百人を乗せた下り電

車がきて、脱線していた機関車に、横腹をこすり合うよ
うにぶつかり、六両のうち前の二両が脱線、こんどは上
り電車の線路をふさいでしまった。

下り電車の乗客は電車から降りて線路を歩きはじめた。
数分後、そこへ乗客七百人を乗せた九両編成の上り電車
が猛スピードで突進してきた。そして線路を歩いていた
乗客をひきながら突走り、九両のうち、前の四両が脱線
一両目は大破、二両目は土手下の倉庫の屋根に突込み、
無残な姿となり、多数の死者を出した。

事故の原因となった貨車の機関士は、前日が休みで、
過労のため信号を見まちがったとは考えられなかった。
また怪我もしていなかった。下り電車の運転士も怪我が
ないのに、上り電車がくるまで何んの処置もとってない
のは何故か。上り電車の運転士は死亡している。

五月七日に、三河島信号係、貨物駅運転係、駅助役、
機関助手などが逮捕された。事故の直接の関係者は、翌
日の夕刻に既に逮捕されていた。逮捕された者は九名
で、五月二十六日に東京地検に起訴された。

「田端発の貨物列車というのは、例の下山国鉄総裁を轢
断したのと同じじゃないですか」

「そうです。あれはたしか、昭和二十四年七月の真夜中
の貨車です」

「荒川区か東京の地図でもありましたら見せてください」
竹越直太郎は古ぼけた東京区内の地図を棚から抜き出

してくれた。

私は貨物列車の専用線路がどうなっているのかわから
ず、常盤線の線路を松戸の方から上野へかけて、眼でた
どってみた。

常盤線は松戸から金町、亀有、そして下山事件のあっ
た綾瀬駅を通過し、北千住、南千住、三河島の手前で線
路は二つに分れる。真直ぐ延びている先に田端があり、
客車の線路は左へ大きくカーブして、日暮里、上野へ向
っている。

田端発の貨車は三河島駅と南千住駅の間で客車線へ入
るのである。

私は地図を下におくと、新聞の切抜きの写真を眺めた。
「涙にくれる国鉄総裁」犠牲者の家族の前でただ涙にく
れる十河総裁とあり、正坐して、メガネに手をあて、白
いハンカチで涙をぬぐっている写真があった。

「二重衝突の惨事」というタイトルの写真は、かなり高
い所からの撮影で、事故現場の全景に近く、倒れたり、
崩れたり、折り重なったりした貨車、客車の写真。

「死者を求めて」遺族は荒川区浄正寺にかけつけ、遺体
と対面とあり、ずらりと並んだ棺のふたをあけて、のぞ
きこんでいる人々の写真。

その他、お寺に並べられた遺品、靴、鞆、衣類などか
ら見覚えのある物をさがし求める人の写真や、救助作業
や、電車内の惨状を伝える写真などがあった。

私は事故の重大さを改めて感じとりながら、記事を読
み返えし、写真を注意深く眺め直していた。

「じゃあ、出掛けましょうか」

竹越直太郎は突然、私に声をかけてきた。私を連れて
どこかへ行くつもりであるらしい。

「どこかへ一緒に行くのですか」

私は眼の前に展げたままの切抜き帳から眼を離して、
彼を見た。

「え、一緒に行ってもらいたいところがありました。
あなたが例の事件で話をききたいという本島先生からの
連絡をいただく前に、こんな葉書が、署から廻送され
てきたのです。偶然、時期が一緒になったのかも知れま
せんが、何か不思議なめぐり合せのようなものを感じま
すねえ」

私はこの元警察官の古い大学ノートを開いて、話を本
題に戻し、身元不明者の捜査の苦心談でも聞き出そうと
思っていた矢先だった。

どうぞ、といって、彼は一通の葉書を私の方へ押して
よこした。

「読ませてもらっていいのですか」

「え、いいですよ。これは三河島署の野谷巡査部長が
廻してくれたんです」

私は彼のことにうなづきながら葉書の宛名の方から
みた。警察の竹越宛になっていることは、この差

出人は三年前に彼が退職していることを知らなかった人であり、日頃の交際は絶えていた人であることがわかる。かなりの悪筆か、めったにペンを持つことのない人の筆蹟で、読みにくかった。

内容は、二十年前、三河島事件で大変お世話になった者で、もう記憶してないと思うが、是非一度お会いしてお話をしたいことがある。日曜日にでも、遊びがてら、勤め先の動物公園に出掛けてくれませんか。受付に自分の名をいってもらえばわかるようにしておきますから。ざっとこんな内容であった。差出人は高田良蔵とある。

「あの事故の犠牲者の遺族の一人じゃないんですか」

「そうかも知れません。当時のメモなど調べてみたのですが、高田という姓の死亡者はありません。それに、大変お世話になったというところがよくわからないので、とにかく会ってみようと思ったのです。そして、もしかしたら、未だ、身元不明の死者一人に関係があるかも知れないと思ひまして、ご一緒に、と考えたのですが」

私は竹越が、私の用件をよく理解しており、私の期待になんとか応えようとしているらしいように好感をもった。

「是非、お願いします。実は、身元不明者の調べを永い間やられて、未だに暇をみては続けていらっしゃると聞きました。そのあたりのお話を伺いたくて」

「続けているといっても、真剣さが違いますよ。最後に

戻ったようすである。

竹越は、あいつなにしに來たんだ、人の氣配で、ようすをさぐりに來たんだろう、と独りごとをいうと、私を見降し、にが笑いをした。

東武伊勢崎線の沿線にオープンした動物公園の話はきいていたし、広告などでも何回も見ていたが、行ったことはなかった。竹越直太郎も初めてであった。

松戸から常盤線か千代田線で柏まで行き、そこで、東武野田線に乗り換える。春日部で伊勢崎線に乗り換えると動物公園駅はすぐだった。浅草からは乗り換えなしで一直線であるが。

「上野からの常盤電車は三河島の次ぎが南千住、その三河島で客を降したすぐのところが事故現場でしょ。南千住は山谷が近いので、身元不明者の調べは山谷のドヤ街を抜きにしては考えられなかったですからねえ」

日曜日の朝の町はまだ静かで、駅へ向う人の影もまばらであった。

「年令は三十歳前後、身長一メートル六二、丸顔、頭は短い角刈り、がっしりした体格、あなただったらどう推理しますか」

私にはとても簡単に回答がだせない難問である。私は新聞のモニター写真を想起していた。眉毛太く、眼は細めで、大ぶりの鼻と口、ふっくらとした頬は、そして服装は背広にネクタイをきちっと締めている。

一つ遺体が残って、それは苦勞しましたが、今だにわからずじまい。みなさんは警察の無能を笑ってるんじゃないですか。まあ、そんな話は動物園へ行く途中にでも、お話ししましょう」

その時、玄関で、
「お父さん起きてるの、あら、お客さん、お早うございます」

若い女性の明るい声が響いた。

「隣りの長女です」

竹腰は立って、玄関へ顔を出し、彼女にいった。

「二十年前の例の三河島の話がききたいって、本島先生の紹介で見えた方。あつ、そうだ、これから、東武電車で、最近できたという動物公園に行ってくるよ。お客さんと一緒に。この前見せた葉書の男に会ってくる」

「大丈夫ですか、正体のよくわからない人になんか会って」

「心配するな、まあ、現職時代は多少、人の恨みもかっているが、この高田っていう人は、私に世話になったと書いているんだ」

「そうですねえ、午後にはお帰りですね。夕飯を一緒にする予定ですから。では、氣をつけて」

父と娘の交わす会話に聞き耳を立てていた私に、失礼します、と遠くから声をかけてくれた。私は腰を浮かして何かいおうとすると、くると背中を向けて、隣家へ

五月三日の夜、九時半頃、おそらく帰宅を急いでいた人の一人ではないのか。この日は祝日であるが、仕事で外出したのか、遊びの帰りなのか。

「あの百二十号は身元を証明するような物を何ひとつ持っていないのです。所持品もふっ飛んで確認できませんし、着ていた物もいたみがひどくて」

「百二十号と呼んでいるんですか」

「そうです。お寺へ運び込んだとき、お棺にナンバーが打たれました。百五十五人までは五日位で遺族が判明したんですがねえ」

さっき読んだ新聞の切抜きで、遺体の収容作業も難航を極めたらしいことは知っていた。本島の父のように、民間人も徹夜で作業にあたっていた。現場周辺の緊迫した状況が眼にみえるようだ。

「百二十号にはもちろん連れはなかったわけですねえ」

「断定は難しいんですが、わたしたちはひとりの線調べを続けました。もしかしたら、という人は数人現れましたが、確信がもてなかったり、消息が判明して生きていることがはっきりしたりで、わたしたちは毎日振出しに戻っていましたよ」

「雲をつかむような捜査でしたねえ」

話をきいているうちに私にもこの仕事の困難さが伝ってきた。

百二十号が発見上野駅を九時ちょっとすぎに乗ったと

して、それまでどこにいたか。上野公園は五月にはいつて花見ほどの賑わいはないにしても、相当な人出であつたろうし、寄席や映画館もハネる時間帯だ。

「わたしは地方からの出稼ぎの人だろうと思って、沿線のドヤ、民間アパート、その頃、姿を消したひとり暮らしの壮年男性などを中心に聞き込みに歩きました」

都内の家出入の搜索願については総べて照会したが、有力な情報は得られなかったとつけ加えた。

松戸から下り電車に乗り柏へ向った。車内は閑散としていた。家族連れの行楽客はもうすこし遅い時間に家を出るのだろうか。

車内は騒音が高く、竹越直太郎も沈黙を守った。ポケットの高田良蔵と名乗る人物からの葉書を出して、ゆっくり読み返していた。何か手がかりになることでも想い出そうとするのか、腕を組み眼を閉じたりしていた。

私は車内に貼ってある宣伝ポスターをぼんやり眺めていたが、それらの中に、これから出掛けようとしている動物公園のものを発見した。北山という上野の動物園に永年勤めていた人を園長に迎えて評判になった。カバと一緒に写った大きな写真は以前どこかで見た記憶がある。東武野田線は学生の姿が多く、日曜日、スポーツバッグをさげてどこかへ試合に行くところらしい。

沈黙がちだった竹腰直太郎は次の乗り換え駅の春日部の手前で、

「想い出しましたよ。遺体百二十号を見に来た人の中に高田という男がいました。上野動物園の臨時雇いで、動物の飼料の世話をしていた男、あいつだ」

彼はこれから会う男の記憶が戻って来たことで、顔を紅潮させ、あきらかに気持をたかぶらせていた。

「遺体をみて、その男はどうしたんですか」

「帰っていききましたよ。もしやと思って来てみたが人違いです、と確かいっぱはずだ」

「肉親か、友人かというあたりはどうなんですか」

「ちょっと待ってくださいよお」

竹腰は乗り換え駅に着いても、うつろな眼を車内にはわせていて動こうとしなかった。私はあわてて彼の太い腕をつかむとホームへ出た。案内板の文字を頼りに、古い木製の階段をのぼり、伊勢崎線のホームへ移った。

動物公園駅は、以前はこの町の名を駅名にしていたのを改めたのである。駅舎も新しく広々としていた。改札口の前にはきれいな店舗が並び、小さな駅ビルの観を呈していた。動物園へ行く子供連れの客はぼつりぼつりと姿を見せる程度であった。ふと、上野の山はどうだろうかと想像してみた。上野公園や、動物園の人出には毎回うんざりさせられているので、この駅の静けさはあるがたいと思った。人は多くの人ごみで疲労を深めてしまうのである。

大きなバッグをさげた家族連れが二組、前方を歩くの

で、あっちへ行けばいいですよ、と私は竹越に声をかけ、歩き始めた。

「そうだ、あの高田良蔵は、もしや弟ではないかといって遺体をみているんだ。しかも、百二十号をだ」

動物公園のためにつくったらしい新しい道路と、両側の新しい商店街には眼もくれようとせず、竹越は私に語りかけてきた。

竹越が古い記憶をたぐりながら話すとところによると、彼の弟は兄のあとを追うようにして秋田県をとり出し、亀有駅に近い小さなアパートに一人暮らした。五月三日の夜、アパートに帰ってないことが、翌日、わかって、三河島警察署に出頭し、遺体の置かれた浄正寺をきき、遺体の確認に寺へ出向いたのである。一時間程して署に立ち寄り、年格好や体つきは似ているが、あの百二十という番号の男性は弟ではありません。そう、はっきりいって立ち去ろうとしたので、竹越が呼びとめ、住所氏名、それに弟のこと、弟がアパートに戻ったらすぐ連絡すること、できたら弟を連れて来て、姿を確認させてもらいたいことを述べた。弟は高田二郎といつて三十歳、一週間前に上京し、五月三日の日は、品川の方で工場を経営する同県人の先輩を頼って、就職運動に出掛けたので、もしかしたら、酒でもご馳走になって、品川に泊めてもらったかも知れない。あとで電話してみるといって帰ろうとした。

「それで帰えしたんですか」

「いや、私は彼に、この電話を使っていいから、今すぐ品川に泊ったかどうか確認したらいいよ。そして、番号がわからない、というものですから、電話帳でさがしてみると、わたしが電話帳をとり立ち上ると、彼はあわてて、家にメモがありますから結構です、といつて帰りがけたんです。わたしは、弟さんが就職のための外出なら、履歴書をもって出たでしょう、ときいたんです。確めてはいないが持つて出たでしょう。明日でも弟を連れて、必ずご挨拶に伺いますから、とていねいに頭をさげると出て行きました。わたしも納得がいったわけじゃないんですが、署の中は未だごったがえしの状態です。それで、それ以上引き留めるのは無理だったですね」

「弟を連れて、挨拶に来ましたか」

「いや、いくら待ってもきません。遺品の中から履歴書らしい物もさがしたのですが、それも出てきませんでしたね」

「それっきりだったんですか」

「いいや、署へ来た兄の良蔵のアパートには電話がなく、わたしが亀有のアパートを訪ねたのです。その区域担当の交番の巡査と連れ立って行ってみました。彼が署へ姿をみせてから一週間位あつたでしょうね」

「それで、高田良蔵に会えましたか」

「とんでもない。彼の部屋は空っぽ、三日前に、秋田へ

帰るといって、夜逃げ同様に引払ってしまいました」

「それはまた変な話ですね。遺体百二十号と関係があるんですかねえ」

「わかりません。奥さんと小学六年生の男の子一人と三人の世帯でしたね。近所を交番の者と手分けして聞き込んで歩いたのですが、なにもわかりませんでしたね。弟がいたことも、兄を訪ねてくる姿をみた者もないし、この近くのアパートにいたはずだが、もちろん知っている者もなかったですね。管理人には向うで落着いたら住所を知らせるといったそうです」

動物公園駅を出て商店街が途切れると、公園や島のある見通しのいい場所へ出た。動物園らしい建物はどこにも見えず、やっと、駐車場らしい広場が見え、その向うに動物園があるらしかった。

「それっきり今日まで消息がわからなかった」

「そうです。上司にも報告し、八方手を尽したのですが、わかりませんでした。わたしたちは、三十歳前後の男性の家出人、もちろん、事件前ですが、行方不明の人の話をきけば全国どこへでも飛んでいきました。そして生存や死亡を確認すると、一人一人名前を消していくんです。署の幹部連中は、未だか未だかの矢の催促、たった一人の身元もつかめないのか、と、そりゃひどいことばで怒鳴りましたなあ。まるでバカ呼びわり。あの高田良蔵、第二郎の名は生存とも死亡とも確認できず、誰の手

ラを吊した風車のような観覧車が見えた。

「かなり歩くようだ、ひと休みしませんか」

駅からもう三十分位歩いているだろう。私は木の陰にベンチでもあれば小休止したかった。竹越は元刑事だけに脚には未だ自信をもっているようだ。私もそんなに弱い方とは思っていないのだが。

立ち止まることもなく歩き続ける竹越はかく口を閉じていた。私も黙って、真直ぐ観覧車を目指して歩いた。案内図を見ると、遊園地は東の正面入口に近く、途中には池以外になにもない。樹木は若くて細い。

遊園地には小学生や幼稚園児の団体が来ていて、わずかだが、動物公園らしい活気を呈していた。西のゲイト近くにバスの駐車場があるのだろう。

観覧車の下には人間が二人坐れるぐらいのボックスがあり、自動販売機で買ったチケットを受取るのである。ボックスには年輩の男女二名が坐っていたが、竹越と私の姿をみつけると、男の方が立って外へ出た。

竹越と高田良蔵がほとんど初対面のような挨拶を交わしている間、私は少し離れたところに立っていた。竹越は警察を定年でやめ、今は守衛のようなことをやっていると正直に話し、相手の気を楽にしてやろうとしていた。高田は私の方に背を向けてぼそぼそ喋り、何回も頭を下げていた。

高田は竹越の背中を押し、ゴンドラで遊園地を上の方

帳にも消えずに残っているでしょう」

広い敷地にロープを一本張ったような駐車場が五つ六つあるが、どこも未だガラガラであった。背中に赤ん坊をくくりつけた女が、通る車に手を振り、自分の駐車場へはいるよう合図を送っていた。たまに通る車は、そのままスピードをゆるめず通過して行った。

「いまになって、あにきが竹越さんに会って話したいということは、あの遺体百二十号は、実は弟であったが、事情があって真実は申し上げられなかった、という以外考えられませんかえ」

「そうです。その通りです。彼の用件はそれ以外には考えられません。そんな予感もして、わざわざご足労願ったわけです」

動物公園の広いゲイト前広場が現われてきた。

「今さらほんとうのことを打ち明けられても、もう、どうしようもないでしょう。竹越さんにしても、警察にとっても」

「いや、そんなことはありません。私も永い間の胸のつかいが降りてせいせいですよ」

入場券売場の女性に、高田良蔵の名を告げると、どうぞ、遊園地の観覧車のところにいますから、といい、案内の案内図を二枚くれた。

ゲイトを入って見渡しても、どこに動物がいるのかわからず、はるか前方に、ジェットコースターや、ゴンド

から眺めながら、二人だけで話したいといっているらしい。竹越はそれを拒み、私を仲間入りさせるよう説得してくれている。高田は私を振り向いて、くびをかしげていたが、私の同席を承知した。竹越は私を手招きした。

三人はゆっくりと降りてきたゴンドラに乗込んで、坐った。私と竹越が並んで坐り、高田と向き合った。彼は黄色のユニフォームらしい作業服を着ていた。六十歳をいくつか過ぎているのだろう。

「カバ園長の北山さんに無理をお願いして、ここに夫婦で拾ってもらったのです。女房は中央広場のレストランドで下働きをさせてもらってます」

下の掲示板によると、一番あがったところの高さが十七メートル、所要時間十五分とある。

ゴンドラが回転につれて高度をあげていくと、眺望が展げて、動物公園の全景が見えてくる。

高田は外を眺め、園の説明をやめようとしなかった。

竹越は私に語りかけた。

「ここへ来る途中で予想したことが的中しましたよ。あの百二十号はこちらの弟の二郎さんだったそうです」

このことばが、高田への催促になり、彼はそれを感じて説明を打ちきり、姿勢を正して、私たちにていねいに頭をさげた。

「二十年という永い間、ご迷惑をかけました。かいつまんで第二郎のことをお話しします」

高田は日焼けした黒い顔に、小心そうな怖れさえただよわせて語り始めた。私は、この人は実直に、貧しさに耐えて生きてきた人だと感じた。

「弟は秋田で人身事故を起し、東京へ逃げてきた人間です。露地から自転車で飛び出した十歳位の少年をはねたそうです。周囲に目撃者がいないのを確めると、少年を自分のトラックにのせ、近くの救急病院へ運び、でたらの住所、氏名を受付にいい残し逃げたそうです。その日の夜行で、わたしを頼って上京してきました。本人は東京でその病院の電話番号を調べました。少年の容態をたずねると、死んだという返事だったそうです。それ以来おれは殺人犯だ、死んでお詫びしなければと口癖のようにいっておりました。はい。自首もすすめましたが、遂に、うんとはいいませんでした。わたしは女房と子供には会わせませんでしたし、弟も結婚前で身軽だったので。駅の反対側に安いアパートをみつ、住わせました。秋田県警察や地元警察から数回、弟のことでたずねられました。逮捕されるのも時間の問題かなあと思いましたが、当分は弟の望む通りにしてやろうと、わたしは腹を決めていました。田舎の年寄りも、どこかで生きてくれていればそれで良いという心境だったのです。はい」

高田は二人の顔と、広々した下界の光景とを交互にみつめながら、ここまで、よどみなく喋った。頭の中で、反復していた内容だったのであろう。ゴンドラは頂上へ

さしかかっていた。

「あの日は品川の知人の工場で就職のことで、と確か、あんたはいったはずだが」

「あれは嘘です。新聞の求人を見て、二三ヶ所歩いてみるといったのです。古着屋で買った洋服をきて出掛けました。履歴書は訪ねたところへ置いてきたのでしょうか。私は遺体の確認に警察やお寺に顔を出すべきではなかったのです。もし弟だったら、と家族にも話せず、ひとりで覚悟を決め、いざという時のことも考えておいて、三河島へ出向きました」

ゴンドラはくだり始めていた。昇る時より、スピードがはいと感じるのは錯覚だが、どんどん地上へ向かって下っていくなあと思った。

「死亡者の遺族にはかなりの補償があつて、その亡くなった少年の方も何とかなったのではないかね」

竹越が近づいてくる地上の光景に視線をやりながら、最後の疑いを説明しようと思つたらしい。

「もちろん、そのことは考えましたが、わたしの結論は闇から闇へ葬ってしまった方がよい、そして郷里のおやじやおふくろには、いつまでも生きているという望みをもたせておく、ということでした。もう年寄りは二人とも亡くなりましたが、死ぬまで二郎はどこかで、罪の償いをしながら生きていると信じていました。はい」

「じゃあ、あなたがひとりで、なにかもひつかぶって

苦勞してきたわけだ」

竹越は、これまで、まるで取調べ官のように冷静な態度で耳を傾けていたが、はじめて高田をいたわるようなことを口にした。高田は竹越のその変化を敏感に感じとったのか、時効のことをいい出した。

自分の警察での虚偽の申し立て、弟のひき逃げ殺人、自分の犯人隠匿罪などはもう時効で、罪を問われることはないのだろうと、竹越に畳みかけるようないいかたで迫った。

「二十年経てばたいいはい時効だが、この件はどうかなあ、研究してみる価値があるねえ」

竹越は昔の職務を思い出したのか、慎重で、冷静な、突き放すような口調だった。

地上の騒音がみるみる近くなって、ゴンドラの扉があられた。

「それじゃ、ごゆっくり。西の方へ行くと、すこしだけれど、動物もいますから、見物してってください。ああ、そうだ、わたしは毎年、五月三日にはお寺へお参りさせてもらっています。年々減ってはいますが、未だ未だたくさんの方がお線香をあげに来てますね。わたしは、もちろん、女房に内緒で、ひとりでお参りしてますが」

高田は永年背負った荷物を降したような、明るい表情で、自分から、さよならをいい、小さいボックスの裏口へ廻った。

私は竹越の複雑な心境を思いやって、中途半端な慰めはいうまいと思った。遺体百二十号の身元調べにどれだけ苦勞したか、およその見当がつくだけに、あの別れ際の、いかにもせいせいしたという高田の素振りが許せなかった。おわりに時効のことを持ち出し、得々としているらしいところも気に入らなかった。

私は動物公園から帰ると、二日程、家にいた。紹介の勞をとってくれた本橋芳夫にお礼の電話をいれると、三河島の事件もとうとう終ったかという感慨に浸った。彼には何にも話さず、苦心談が聞けて楽しかったとだけ伝えた。竹越の判断を尊重し、私は余計な口出しは謹むべきだと思つたのである。

急に思い立つと、私は三河島の浄正寺を訪ねてみた。今度は上野へ出て、三河島駅で降り、浄正寺をお参りしたら、もう一度、あのチンチン電車に乗ってみようと予定を立てた。

竹越と私は、あの日、遊園地をあとにすると、動物舎を少しのぞいて帰路についた。だだっ広い公園にはろくに動物の姿はなく、広場でたわむれる子供たちの姿を眺めながら黙々と歩いた。竹越は、この話はしばらく伏せておいてもらいたいと私にいった。続けて、しばらく考える時間がほしい、と苦しい表情をみせた。

私は荒川区の地図で浄正寺の位置は頭に収めていたが、町並が雑然としていて、どこの露地をはいるのか迷って

しまった。交番を見つけると、中の警察官に声をかけた。
「あの、浄正寺はどう行ったらいいですか」

交番には三人の若い巡査がいて、一人が地図を手に、
「あの信号を右にはいると、道がふたまたに分れますから、それを右へ行ってください。右側です」

「たしか、昔、三河島の列車事故で亡くなった方の慰霊碑があると聞いているんですが、浄正寺に間違いありませんね」

若い巡査は奥にいた少し年輩の巡査を、どうなんですか、という感じで振り向いた。

「あなたはあの時の遺族の方ですか。あの浄正寺に碑がありますか」

「いいえ、遺族の者ではありません。一月頃、新聞に、身元不明の遺体が未だ一つあるという記事が出まして、一度お参りしたいと思っていましたのです」

年輩の巡査は、道路へ出てきて、私をじろりと観察してから、

「あの捜査は打ち切りましたよ。野谷部長が一人でこつこつやっていたんですがねえ。あなたは、あの遺体の方に何か心当りでもあるんですか」

「いいえ、全く関係のない者です。荒川区の歴史を調べている者です」

「それでは、高校か大学の先生……」

「いや、とんでもない、ただの物好きです」

「お名刺かなにかお持ちでしたら」
「今日は散歩ですので、あいにく」

私は礼を述べると、急いで交番の前を立ち去った。

浄正寺は人家にかこまれた小さい寺であった。はいると本堂の左手に「三河島事故慰霊碑」と正面に大きく書かれた石碑があり、左隅に「日本国有鉄道総裁 十河信二 謹書」とあった。タテ百五十センチ、ヨコ一メートルほどの石である。石の上には等身大の観音菩薩像が安置されている。碑の前には最近供えられたらしい線香と生花が、さき程まで降った雨にぬれていた。

私は碑のうしろへ廻ってみた。「三河島事故物故者氏名」五十音順とあり、百五十九名の氏名と年令が刻まれている。最後に一名分空けてあり、百六十名で、タテ、ヨコ揃うようになっていた。

近くの墓の前にしゃがみこんで、墓前の整備をしていた石屋ふうの職人に声をかけた。

「この慰霊碑にはたくさんお参りする人が今でも……」

「いやあ、ありませんねえ」

「昔のことですから、無理ありませんね、ところで、未だ、身元不明者が一人いると聞いていたんですが……、碑のうしろも、ちょうど一人分空けてあるようですが」
職人は怪しげな人物を見るように、身体を私の方へねじると、上から下へ私をみた。

「ありやあ、とうとう判らずじまいらしいですねえ」

「遺骨はこの寺があずかっているんですか」

「いや、警察が持っていたきり、どうなっているんですかね」

俄雨でも来そうな雲行きで、私はあわてて、慰霊碑に

合掌すると、寺をでた。来たときと反対の方へ行くと、明治通り、荒川区役所の前へ出る。私は都電の停留所へ急いだ。

ふるさとに今——大連にて——

増 川 遼 三

まなかいを掠める波止場並木路アカシヤ薫るふるさとぞいざ
傳家庄へかよう峠の切通し馬欽に揺られし少年の夏

潮溜りに稚魚掬ひにし黒石礁の岩黒ぐろと磯の香を立つ

夕映の和尚山背に息づける港のさまに飽かず立ちけり

玄海を渡りし昔を憶いつつ上海へ発つ客船をみる

同窓の宴うちとけ互替り海鮮の血頰ち合うかな

南山の麓さまより夢うつつ踏むこの温き土の親しさ

探ね来て黙しただずむりラの蔭君が旧居は賓館にして

昨夜の雨に散りしアカシヤ並木路花びら踏み明けをさまよう

ときめきを抑へかねつつ星が浦の渚に拾ひし石の艶めく

幼き日の記憶たどりて尋ねゆけば遊びし路地のかく狭しとは

你好と片言をもて訪へば探ね当てたり家婦ら出迎う

「浪速町」と胸弾ませし盛り場の店覗きゆく老いし吾はも
百貨店の人混みに華語よどみなく品撰びたし若き日のごと

輝きの御国に

——ある使途の昇天——

大 和 禎 人

前畑福直氏の葬儀次第とあるその二つ折の印刷物の頁
を眼で追うと、四面に故人の略歴が見える。

明治33年5月6日 鹿児島県与論島に出生。

大正9年 徴兵検査に合格、広島陸軍
被服廠に入隊。

大正10年 下士官候補者試験に合格、
東京陸軍被服廠に派遣され
る。

大正11年 下士官に任官、大阪部隊付
となる。

以後、和歌山・広島の部隊に勤務、昭
和十四年のノモンハン事件に出征する。

昭和11年11月11日 広島市千田町アライアンス
教会にて受洗。

昭和12年 東京陸軍被服本廠に転任。

昭和20年 陸軍主計大尉に昇進、終戦

となる。

ここまできて、奏楽が始った。楽士の常田さんは女性
である。足踏みのオルガンが古風なメロディ効果をかも
し、明治人の葬儀にふさわしいムードが期せずしてその
場を包みこむように見えた。司式は牧師高山慶喜氏、司
会は同じく牧師常田春男氏とある。してみると楽士の女
性は司会をつとめるこの教会の牧師の令嬢でもあるろう。
司式の牧師高山氏が厳かな奏楽裏に入場された。この十
五代將軍と同名の年輩牧師は多分日本キリスト教団から
派遣されてきた人であろう。次第の中では後に式辞と祈
禱の重要な役割を受持たれるはずであった。

奏楽が終ると、聖歌を一同で合唱する。292番、故
人の愛唱歌であると司会者から告げられた。

今日まで守られ 来たりし我が身

つゆだに憂えじ 行末などは

いかなる祈にも 愛なる神は

全てのことをば 良きにし給わん

か弱き者をも かえりみ給う

わが主の恵みは この身に足れり

にぎわう里にも さびしき野にも

主の手にすがりて 喜び進まん

主の日ぞいよいよ 間近にせまる

浮世の旅路も しばしの間のみ

まもなく栄えの 御国に行きて

ときわにたえせず わが主と住まん

昭和十一年の受洗とあるのだから、故人の信仰歴は長
い。そしてその死にいたる生涯をこのような聖歌を愛唱
することで救いを得ようとし、また悟りの境地に達しよ
うとしたものであるようだ。下積み軍人の道を生き
たこの人が、どうしたきっかけがあって入信したのであ
ろうか。故人の生きた世代から言えばまさにささやかな
がら一つの立志篇をなす生きざまである。そのまま軍国
の底辺にとりあげられるサンプルのようであるが、氏の
場合、敬虔なキリスト者である点にはなだ特異であっ
た。

(海)と雄渾の一字を刻んだ碑の除幕式に約五百の人
々が参列した。仁和寺に近いRという寺の寺域を選んで

海軍予備学生第〇期の建碑が成ったのは初秋であったが
準備に周到を期して、すでに晩秋の季節を迎えていた。
御室のR寺を選んだのは同寺の現任職が同期のサクラで
あるということから敷地を提供されたからだ。

脇門を入った本堂横に御所に似た築地風の塀に囲まれ、
軍艦旗を掲げる檣、錨をその前面に自然石の碑という配
置。兵科〇期全員の氏名を銅板に刻んで塀の一角に嵌め
こみ、碑の側面を地下へ階段があり、戦場に散華しま
たは今に至る物故者の位牌を納める霊安室が設けられ、
さらに今後の物故者をも慰霊の合祀するという構想であ
った。

集合、軍艦旗掲揚、開会の辞(N学生)、挨拶(S実
行委員長)、次いで碑文朗読とあり、T学生が朗々と次
のように読み上げた。

海軍第〇期兵科予備学生之碑

昭和十八年十二月、戦局不利を伝えられた大
平洋戦争に当たり、我々の多くは学窓から召さ
れて海軍に身を投じた。世にこれを学徒出陣と
いう。

歳余の激しい訓練を終え、若き士官として赴
任した戦場には、帝国海軍の艦艇はすでに無き
に等しく、同期の桜はみずから特攻を敢行し、
自決玉砕をもって滄溟に散り、あるいは焦土の
孤島に果てた。

顧みれば朔行南征した戦陣の間、同期たがい
に馳せ参じ、相寄り相助ける術もなく、狂瀾を
既倒に回らすことができなかったのは痛痕の極
みである。

爾来三十有余年、当時の学生もしだいに鬼籍
に入り、残る我らの多くも、頭髮とみに白きを
加えるにいたった。

いま、ここに古都を選んで碑石を建立し、舫
楼に擬して、いささか同期の深交の証とする。

昭和五十七（一九八二）年十一月

海軍第〇期兵科予備学生會

淡々の朗読ゆえに前畑老人の涙腺を刺激し滂沱の泪で、
碑銘の（海）の大字も霞むかに思え、落涙はふり落ち
るにまかせながら、この場の現実を直視し、網膜に焼き
つけておきたいとしきりに眼を見はつていた。碑文は多
分この碑の背面に刻まれているものと思う。来賓の祝辞
には俳優の鶴田浩二氏も臨席していて、（軍歌はすなわ
ち鎮魂の歌である）とする趣旨が印象的であった。彼は
同期ではないが、やはり海軍予備学生の一人であった。
同期では国会議員田英夫、楠正俊があり、日比谷病院長
深瀬邦雄、小松建設社長田村靖などがあって、彼らは有
力なスポンサーの役割を果しているはずであった。

前畑福直さんは膝の上に息子の文雄氏の位牌を両の手
で支え持っている、つまりは遺族の一人であった。名簿

によると、遺族としての出席者は妻、長男嫁、義妹、娘
妹、弟、姉、義兄、叔母などと記され、母となっている
ものも四、五あったが、前畑さんのごとく父として出席
しているものはただ一人であった。

（たった一人）

ということが氏を余計に悲しませている。愁嘆は見せ
まいという決意は参加を申込んだ時いらいかなり長い時
間をかけて鍛ませ、いまさらでもあるまいと、虚心の参
加を確信できるようになっていたはずだが、やはり膝の
上に置かれていた位牌のあたりから怪しげな感情がかけ
ろろのようにはい上ってきた。せきとめようもない激し
さでそれは襲ってきた。彼ははじめ狼狽したが、やがて
して逆らうまいと拳を固めながら思った。この拭きあ
えぬ涙こそ死者への聖らかな手向けではないか、というよ
うな心理であった。

除幕、黙禱と続いた。黙禱はラッパ吹奏によるもので
あった。自然石に刻まれた（海）の文字は考えぬかれた
末に選ばれたものに相違ない。これは忠魂碑というよう
な性質のものとは違うのだ。ラッパの吹奏のうち、三千
の同期の一人一人の魂魄が碑のもとに立ち帰る時が来た
のだ。戦死したのも、戦後に物故したものも、そして
今に生きてここに参列する同期のサクラたちも。さらに
萬斛の涙にくれる遺族たちも（海）の一字に集合するの
だ。

雲染む屍と果てし

若き学徒の御霊よ

いざ帰れたまえかし御身らの

守れる故国に

かけがえなき生をかけて

御身らの守れる故国に

あるいは今故国の姿

御身らの思いしごとくには

あらざるやも知れず

さらばわれら改めて誓わん

この平和を美しく清らかに

固めなし守りつがんことを

いざ若き学徒の御魂よ

もろともにつれ立ちて

今こそ帰れたまえかし

なつかしき故郷の空に

今こそ眠りたまえかし

なつかしき故郷の土に

参列者一同の献花があって、献辞として池田学生と司
会に促された人がマイクに進み出て、このような詩句の
朗読があった。艦艇の九三名がもっとも多く、対空の六
三名が次ぐとしても北洋、南溟の各戦線、戦域にわたっ

て散華したものは二七四柱。目前に予想された敵の上陸
作戦に備え速成された彼ら予備士官たちは本土決戦に備
えての特攻戦士以外のものではなく、すでに艦艇の潰滅
した状況の中であつたから、意外にも一割にも満たない
数であること改めて気づく。（職業軍人）ならざるもの
たちにとって、これはせめて幸いとすべき数字のようだ。
出番がなく生き残りの多かった出陣学徒のこれが実態な
のだ。しかし、この場合の生と死はまさに一髪之差でし
かない。そう思えばこそ、前畑老人の泪がある。碑文の
格調に比べれば献辞の方はかなり劣るように思えたが、
（あるいは今故国の姿、御身らの思いしごとくにはあら
ざるやも知れず）というくだりで老人は思わず嗚咽をも
らした。息子の戦死は一体どうなるのか、という思いが
胸を刺し、文雄の運命をそうした破目に追いやったもの
が実は外ならぬこの自分ではなかったか、金米糖と呼ば
れたもっとも下級の勲章とひきかえに己れをささげた自
分の一生は悔いがないもの、覚悟の上のものとしても、こ
の子こそはと期待をかけた一粒種の文雄までが、と思う
と矢も盾もたまらない想いにかられる。八武八、川棚・回
天Vと略号で記される彼が武山の海兵団に所属したとこ
ろまでは判明していても、川棚・回天となる前畑福直
氏にとっては皆目わからないベールに覆われ、謎の霧に
かくれてしまう。特攻基地の訓練中の事故死とだけ知ら
されているだけだ。軍籍にあった父親の後ろ姿を息子の

文雄は見えて、見習うものがあつた、はっきりした意識ではなくとも全くそうではないとは否定できない。学徒出陣という避けることのできない成り行きの中ではあつたが、文雄は馮河の勇に殉じたような気がしてならない。国の危急に臨んで赴こうとす決意を眉宇にあらわし、凜然としたわが子、若者を前にして、

「……………」

無言で、ただ深い慈愛の眼差しを注ぐ外なかった。自愛をのぞむ言葉すらなぜか憚られた。予備学生の何であるかを知りすぎ、速成の士官が軍刀を晴れがましく吊る幻影が息子文雄に重なり、先途を憂い暗然とする気持が先立った。なまじい自分が軍籍に身をおく悲哀にこのときほどさいなまれたことはない。兵隊上りの、老いらくの一中尉。不当な卑屈に甘んじ、そしてようやくポツダム大尉にすぎぬ軍人生涯であつた。多額の金に購われた一年志願の少尉どのから、軍事教練から生み出された幹部候補生の少尉どの、時代の推移はあつても、後塵を浴びつつけた軍歴であつた。ようやく兵隊と将校の間という特務曹長という階級、後の准尉に達したのが昭和十年忍従以外の軍歴ではない。そこで退役かと思う中に、戦雲ただならず、蕪しべの濁流に吞まれるような成り行きしかし、軍人にとっては時世時節、前畑さんにもいく分か反り身になって街を歩ける時代が到来した。第一次大戦後の恐慌の世相を反映する軍人志願は与論島出身の青

心にうけた 恋の鳥

泣いてのがれて さまよい行けば

夜の巷の 風かなし

三、命の限り 呼びかける

こだまのはてに 待つは誰

君によりそい 明るく仰ぐ

ここに幸あり 白い雲

まづかった。メロディはともかく何という歌詞であろう、あまりの泥くささとともにこの歌に対する解釈にも問題があつた。それでも遺族席にすすり泣く声がおこり、ハンカチーフをそっと眼にあてる夫人たちの姿が見えた。肌に染み、骨髓に徹して軍人精神を鍛ってきた前畑さんにとってはかような場面は苦手である。逃げだしたい衝動にさえ駆られる。

閉会に先だつては「同期の桜」の大合唱である。頭髮すでに霜をおく老年者が学生にかえって唱和する、異常なまでの熱気、それは前畑さんにとって一種驕慢ともうけとれる熱気であつた。

(そうだ、おれは陸軍だつた)

陸海軍宿命の軋轢というようなものでなく、単に出る幕ではなかったという思いが突然胸を占めた。旧制高校出身者が寮歌祭に酔う場面にも似て、稚氣まる出しの、

年にとって決して安易な道ではなかった。将来を悩んだ入信であり、受洗であつた。枯木に花の少尉任官、さらに中尉への果進。老らくの脚光は必ずしも喜べることはなかった。

謝辞、合唱「海ゆかば」、感謝状贈呈、と進行した時一人の臨席者がつかつかと司会者に近づき耳うちする姿があり、司会者が大きくうなづき返すようすが並いる出席者の眼に写つた。

「ここで、ご提案がございまして印刷物にも裏表紙に刷りこんでございますが、「ここに幸あり」を斉唱いたしたいと思ひます。ご出席のご婦人、とくに未亡人の方にささげる歌といいたしたいと思います」

万雷のような拍手が起つた。

「英霊の令夫人の皆さま、ご起立ください、皆さまに同期の私どもつつしみささげる歌をどうかおうけとりください」

司会者はこの場の空気に流されたようだ。

一、嵐も吹けば 雨も降る

女の道よ なせかわし

君を頼りに 私は生きる

ここに幸あり 青い空

二、誰にも云えぬ 爪のあと

いい気なものと言う外ない。生存者の中には復員復学してそうした学校の門を潜った者も少くない。優先入学の便宜を計られたはずである。彼らは寮歌祭で寮歌をうたい、そうした学歴で社会的にも地位を得、生活も安定した人々に違ひない。孤立無援、孤雁の人生を歩んできた前畑さんのごときは同列ではない。口惜しいことだ。

(おれは陸軍だつた)

という思いだけがこの場の彼らに向いあえるただ一つの意識であるとするれば、われながらあまりにも淋しすぎると思つた。

三時半からは懇親会がある予定だ。隣接のN寺御室会館が会場にあてられている。その方のプログラムを一瞥した前畑さんの眼に、

鎮魂歌

鶴田浩二とチェリーアンカーズ

乾杯

軍歌演習

という文字が並んで飛びこんできた。

その欄外には

☆受付にてネービーカップ・記念品等をお受けとり下さい。

☆お弁当は会場入口にてお渡しします。

など見える。

前畑さんはそこまでで会場を離れた。懇親会の出席を

とり止めにしたのである。かつては背筋を張っていた氏だが、近ごろはいくぶん前こごみに、老いを感じさせる姿である。タクシーをひろって、

「駅まで、そう新幹線」

いつに似けない無愛想さで行先を告げた。年の瀬をひかえて、会社の方をあまり明けてはいられないのであった。

前畑福直氏の事業は順調であった。終戦、復員した氏は当然手に職もなし、さしあたり徒食を余儀なくされるはずであったが、思いがけない幸運をひろった。

「君、ガソリンスタンドを経営してみる気はないかね、いまは不況としても、これからの商売の一つではないかな」

通産省の方に与論出身者がいて、認可制のこの商売の権利者の名簿を調べさせてもらったのがきっかけで、新橋の一等地にその権利を買った。戦争下の逼迫を久しくしていた業種だから、手とどく額で権利を手に入れることができた。軍隊時代に自動車運転は習い覚えていたので、万更無縁の商売というわけでもなかった。いまでは拡張して修理工場をかねる発展で、文京区と春日部にも支店をもつ会社組織に間口をひろげている。

「スタンドの親爺がゴルフをねえ」

と冷やかされながら、得意先の客に仲間入りする変身

ぶりは、かつてのお堅い軍人稼業からは想像もつかない。ホールインワンで近ごろ祝いのタオルを配ったほど腕をあげている。そのない社交性はなかなかのものだ。

「なにね、まぐれですよ」

と謙遜しながら、いまは会社の方でも会長に祭り上げられている。苦勞人が晩年に徳をひろったあんなばいの成り行きである。

戦後三十余年の風化の時間が流れて、長男文雄を英霊として国に捧げた痛恨を遠ざかっていた。海軍兵科第〇期予備学生会・一誠会として、麗々しく記念碑除幕式の案内をうけ、卒然として心の傷手に触れられる思いがしたことだ。

「出席するとするか、せっかく皆さんお骨折りのあったことだから……、文雄の霊も救われよう」

故人とは十歳ほど違う女婿があって、後継の社長にすえ楽隠居の身だが、律儀に後見の意欲をすてていない。極力参加を周囲がすすめたあげくだった。位牌をたずさえる出席は若いものの意見に従った。受洗までした前畑さんだが、信仰は自分一人のものとして、位牌は世間並に、仏式で質素な庫裏位牌だった。それを袱紗に包んでもらった。何かと世話をやかれることを常ならば好まない前畑さんだったが、いじらしいほど素直であった。

「会長どうかなさったみたいですが、元気を急になく

されて、大丈夫ですか」

会社の方で気づかうものがあつた。

前畑さん自身が少し以前から気づいていた自覚症状だった。地の底にひきずりこまれるような脱力感、それに手足のシビレ。酒を嗜まず、むしろ低血圧の前畑さんに兆したこの変調はこんどの旅行でにわかに症状の増悪を来したようだ。社長の椅子を明け渡したという心あたりもあとになって気づくことである。

「明日の朝はひょっとしたら、わしは起きんかもしれんよ」

老妻のラクが前畑さんの最後の言葉を聞いていた。眠るように氏は逝った。八十三歳であった。あの記念式を懇親会にも出ずにとんぼ帰りした往復の旅が悔いとして家族の話題に残された。しかし、ついに当の本人からはそのいきさつを物語られないで、前畑福直氏は一人の使徒として天に召された。

はるかに仰ぎ見る 輝きの御国に

父のそなえましし 楽しきすみかあり

(くりかえし)

我らついに 輝く御国にて

聖き民と共に 御前に会わん

輝く御国にて 憂きも悩みもなく

楽しき声あわせ たえず共に歌わん



そして

父の愛あふれて 幸い身にあまる

豊かなる恵みとしなえにたたえん

二節、三節がつづき、(くりかえし)の部分の印象が葬儀に参列するものの胸に迫った。前畑の家にとって恐らくは一代の異例となる葬送であつたろう。やがてくる一周忌には氏を識る人々によって同じ讃美歌が多分もう一度唱和されるに違いない。



病室の窓 (続)

井 上 二三夫

病院は、山裾の丘陵の上に建てられていた。丘陵の朝は早いのだろうか。病室の南に面した窓にぼんやりと明るさを感じた。

老人は、ここは病院なのだと漠然と思った。昨夜のことととりとめもなく浮かんで消えた。——暗くなりかけた病院の長い廊下、灰色の病室、白く動く影は看護婦だったろうか。ベッドの横に吊された点滴の薬液瓶の冷たい光——

老人は、小さな体を二つに折って布団にもぐっていたが、昨夜までの耐えがたい腹の膨満の苦しみが去っていることに気がついた。あれ程の苦しみが嘘のようであった。点滴を受けて、体に水分が補給され、薬の効能もあったものか、強烈な尿意を催したものを、腕に大きな注射針を差されているため身動きも耐えず耐えていたが、遂に、我慢がならず、自分で注射針を引き抜いて便所に駆け込んだのである。そして、小用にあわせて、それま

で溜っていた腹中のものをたんまりと排出できたのであった。老人は、自分の腹を撫でてみた。固く膨張していた腹は、今は凹んで腰骨の間にたたみ込まれてしまっていた。

日の光が病室内のカーテンに流れ込む時刻になると、同室の患者たちも目を覚まし、昨夜の老人の重篤な様子を氣遣って、それぞれのベッドを仕切ったカーテンの中で静かに動いていた。

老人は、体の向きを変えてみた。ベッドの右下の床にゴザを敷いて、病院から借りた布団に細君が仮寝しているのだが、老人からは見えない。

ベッドがきしんだ。老人が目を覚ましたらしい様子に、隣のベッドの情報屋が気づき、老人の細君に声をかけた。

「ばあさん、じいさんが起きたげだよ。」

「へえ、じいさん起きたかや。」

細君が睡眠不足の目をむいた。

「で、じいさん、どうだね。」

老人のしわがれた声が聞こえた。

「はら、へった！」

「なに、はらへったと。」

細君の素っぴんきょうな声に、それまで朝の洗面の動きを遠慮していた同室の患者の動きが一斉に大きくなった。ベッドを囲っていたカーテンが引き払われると、病室の白い壁に朝の光が差し込んだ。

朝食の粥を老人はうまそうにすすった。

老人が一夜の中に食事がとれる状態になって、細君は「病院」の驚くべき効能にすっかり感心して、昨日までの老人のどうにもならなかった容態を情報屋に語って聞かせた。

その口調は、誇らしげであった。

老人は、屋食のうどんの大半を食った。細君は、安心して、飼っている豚や鶏にも餌をくれねば、と家へ帰って行った。

細君が家へ帰ってしまうと、老人は、横の壁に向って横になって、殆ど物を言わなかった。便所に立つ時は、スリッパをつっかけるのを忘れて、足の裏を汚したが、そのままベッドに這いもぐった。

病院の夕食は早い。まだ日がある中に廊下に配膳車の

音がして、若い看護婦がそれぞれ患者に指定された食事を運ぶのである。情報屋がそれを手伝う。

「じいさん、普通の飯だよ。」

「こんなに、くえね。」

老人の呟きに、情報屋が飯を半分引き受けた。老人は総入れ歯を口に嵌め込んで、飯をうまそうに食った。

夕食を終え、日が落ち、西の空が赤くなって、病室に灯りがついてても老人の細君は戻って来なかった。

老人は心細くなって、廊下の音に耳をそば立て、首をもたげ、そのつど失望した。

細君が戻って来たのは、同室の患者は、自分のベッドの周りのカーテンを引こうとしていたときであった。

「ああ、つかれた。」

ペタ、ペタと音を立てて病室へ入って来た細君は、風呂敷包みをベッドの上に放り出すように置くと、ベッドに寄りかかるようにして、

「豚を売ったよ。」

老人は答えなかった。

「みんな売ったよ。」

これには、老人も声を立てた。

「なに、みんな。」

今、仔豚を売る時季ではない。それに親まで売ってしまったのは、次の仔取りはどうするのだ。

「めんどどうみるもんがいなけりゃ、しょうがなかんべ。」

それもそうだ。しょうがない。老人は諦めることに慣れている。

「で、いくらだ。」

老人は、しわがれた声を更に細めて言った。細君は、老人の耳に口を近づけてささやいた。

「な、なんだって。」

なんということだ。足元を見すかされての取引で、こりゃあばられた。娘婿が間に立っての話だとすると、またうまくやられたな。しかし、もうしょうがない。病院への支払いのこともあるし、この際、少しでも現金を持っていなければならぬだろう。老人は、自分に言い聞かせた。

病棟部長は、まだ四十前の色白のやゝ小柄ではっそりとしていた。一步一步確かめるような足取りで静かに病室に入ってくる。午前一回は患者一人一人に声をかけることを欠かさない。患者に近寄り、やさしく、

「どうですか。」

と声をかけ、患者の腕をとる。患者も部長が近寄ると黙って腕を差し出す。脈を計っている無言の間、患者の部長への信頼が通うように思え、患者は心の安らぎを覚えるのであった。

「どうですか。おじいさん。」

と、老人の顔をのぞき込む。老人は、伸びた無精ひげの中で照れる。

情報屋が調子を合わせる。

「何を言うだ。そんなこと。」

細君が真顔になって手を振った。老人も口元をくぼませて笑った。

その日、老人に入浴の許可が出た。

「おじいさん、今日はお風呂に入りましょう。」

看護婦に言われても、病院で風呂に入れるとは思ってもしなかった老人は、

「ふろ？」

と聞き返した。

「じいさん、今日は男が先の日だからきれいだよ。早く行くべえ。」

入浴を許されている情報屋に誘われて、老人はタオルを持ってついて行った。

同じ四階の看護婦室の廊下をへだてた前に浴室があった。うすいクリーム色をしたタイルの浴槽に肩を沈めて老人は大きな溜め息を吐いた。

若い看護婦が様子を見に来て、老人は恥ずかしかった。垢がきりもなく出て、体が軽くなったように思った。

「いい湯だった。」

「そりゃよかった。温泉へ行ったみたいだんべ。」

老人には本当にそう思えた。入院の夜以来痛いところも痒いところもなく、三度の食事が運ばれて、しかも家の食事よりうまい。風呂にまで入れる。

「食事がたべられるようになって、よかったわね。もう大きな注射はしませんよ。これはもう片付けましょう。」

点滴用のスタンドが担当の看護婦によって室外へ持ち去られた。

「元気になったらひげをそってもらいましょう。」

老人は、ひげの中の口をもぐもぐと動かしなが、声は出ない。

「おじいさん、入れ歯は？」

細君が、床頭台の引出しの中からビニールにくるまれた総入れ歯を出して見せ

「めしのときだけ使うんだがね。」

「いつもつけていた方がいいのよ。それに、しまう時は洗いましょうね。」

これにも細君が答えた。

八年程前、老人が餅を食っていて、総入れ歯をのどにつかえさせたことがあった。医者が入れ歯を二つに割って取り出したのを接着して今も使っている。ただ、少し小さくなったのか、洗うとゆるんでしまつてぐあいが悪い。それからずっと洗ったことがない——と。

今朝は、細君にひげを剃らせ、老人の小さなこやかな顔が出てきた。巡回の部長が

「男前になりましたね。」

と声をかけた。

「ばあさんが惚れなおすんでねえか。」

濡れたタオルをベッドの金枠に掛けると老人は、ベッドの縁に腰を掛けて部屋の中を見廻した。同室六人の患者は、片側が三人で、相對している。情報屋のほかは常にベッドにいて殆ど天井を見ている。やがて四時になろうとしている。窓の外から吹き寄せる風が心地よい。老人は風に誘われてそろそろと窓辺へ歩いて行った。四階から見る景色は、老人にとってまだ見たことのない世界だった。すぐ左手の看護学校の建物に続く芝生には、二、三人のリハビリの老人が若い看護婦の手を借りて歩く練習をしている。右手の植込みに囲まれた住宅の庭に五月の幟の竿が立っていて、風車だけがクルクル廻っている。その先に続く畑にはトラクターが入って動いている。村道を時々自動車や砂埃を立てて走って行く。

森の蔭からローカル電車が走り出て、ガタゴトと音を響かせて行く。その先は煙っているが、ずっと平野に続き、処々に林が散らばっている。窓の縁に手をかけて、老人はそこを離れようとしなかった。

一週間を経た日、老人は退院することになった。老人にとってこの一週間は恵まれた日々であり、夢のようであったが、山の中のぼろ家だに帰れることはうれしかった。早く帰りたいと思った。老人にせかされて、娘婿の都合がつきさえすればその日に帰ることとし、

「会計も済ましてくるから……」
と言いつつ残して細君は電話連絡に出て行った。

老人は、家へ帰れるうれしさと病院からどんなに請求されるかとの不安が交錯して落ち着かなかった。

ペタ、ペタ、ペタとスリッパを引きずって細君が戻る。

「今日夕方帰れると。」

「で、支払いは？」

「ただだと。」

「ひえっ、ただ！」

老人は悲鳴のような声を上げた。信じられないのである。

「老人いりょうとか言うんで、ただだと。」

「そうかつ。」

老人はベッドの上に座ったまま両手を高く差し上げて萬歳の仕草をした。

短かい期間の入院であつたし、持ち込んだ品物も殆どなかったから、荷物と言つても細君の手廻り品だけである。

夕方、仕事先から廻つて来た娘婿にうながされて、入院して来た時の着物のまま老人は、同室の患者に大きなおじぎをする。娘婿の大きな体の後から細君と並んで灯がつき始めた廊下に出て行つた。

老人が去つた後のベッドは、そこだけが忘れられた空間のように白々としていた。

「で、じいさん、どうだね。」

老人のしわがれた声が聞こえた。

「はら、へった！」

「なに、はらへったと。」

細君の素っぴんきょうな声に、それまで朝の洗面の動きを遠慮していた同室の患者の動きが一斉に大きくなった。ベッドを囲っていたカーテンが引き払われると、病室の白い壁に朝の光が差し込んだ。

朝食の粥を老人はうまそうにすすった。

老人が一夜の中に食事がとれる状態になつて、細君は、「病院」の驚くべき効能にすっかり感心して、昨日までの老人のどうにもならなかった容態を情報屋に語って聞かせた。

その口調は、誇らしげであつた。

老人は、昼食のうどんの大半を食つた。細君は、安心して、飼っている豚や鶏にも餌をくれねば、と家へ帰つて行つた。

細君が家へ帰つてしまうと、老人は、横の壁に向つて横になつて、殆ど物を言わなかつた。便所に立つ時は、スリッパをつっかけるのを忘れて、足の裏を汚したが、そのままベッドに這いもぐつた。

病院の夕食は早い。まだ日がある中に廊下に配膳車の

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になつて頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

音がして、若い看護婦がそれぞれ患者に指定された食事を運ぶのである。情報屋がそれを手伝う。

「じいさん、普通の飯だよ。」

「こんなに、くえね。」

老人の呟きに、情報屋が飯を半分引き受けた。老人は総入れ歯を口に嵌め込んで、飯をうまそうに食つた。

夕食を終え、日が落ち、西の空が赤くなつて、病室に灯りがついて老人の細君は戻つて来なかつた。

老人は心細くなつて、廊下の音に耳をそば立て、首をもたげ、そのつど失望した。

細君が戻つて来たのは、同室の患者は、自分のベッドの周りのカーテンを引こうとしていたときであつた。

「ああ、つかれた。」

ペタ、ペタと音を立てて病室へ入つて来た細君は、風呂敷包みをベッドの上に放り出すように置くと、ベッドに寄りかかるようにして、

「豚を売ったよ。」

老人は答えなかつた。

「みんな売ったよ。」

これには、老人も声を立てた。

「なに、みんな。」

今、仔豚を売る時季ではない。それに親まで売つてしまつては、次の仔取りはどうするのだ。

「めんどろみるもんがいなけりゃ、しょうがなかんべ。」

それもそうだ。しょうがない。老人は諦めることに慣れている。

「で、いくらだ。」

老人は、しわがれた声を更に細めて言った。細君は、老人の耳に口を近づけてささやいた。

「な、なんだって。」

なんということだ。足元を見すかされての取引で、こりゃあばられた。娘婿が間に立っての話だとすると、またうまくやられたな。しかし、もうしょうがない。病院への支払いのこともあるし、この際、少しでも現金を持っていなければならぬだろう。老人は、自分に言い聞かせた。

病棟婦長は、まだ四十前の色白のやゝ小柄ではっそりとしていた。一步一步確かめるような足取りで静かに病室に入ってくる。午前一回は患者一人一人に声をかけることを欠かさない。患者に近寄り、やさしく、

「どうですか。」

と声をかけ、患者の腕をとる。患者も婦長が近寄ると黙って腕を差し出す。脈を計っている無言の間、患者の婦長への信頼が通うように思え、患者は心の安らぎを覚えるのであった。

「どうですか。おじいさん。」

と、老人の顔をのぞき込む。老人は、伸びた無精ひげの中で照れる。

情報屋が調子を合わせる。

「何を言うだ。そんなこと。」

細君が真顔になって手を振った。老人も口元をくぼませて笑った。

その日、老人に入浴の許可が出た。

「おじいさん、今日はお風呂に入りましょう。」

看護婦に言われても、病院で風呂に入れるとは思ってもしなかった老人は、

「ふろ？」

と聞き返した。

「じいさん、今日は男が先の日だからきれいだよ。早く行くべえ。」

入浴を許されている情報屋に誘われて、老人はタオルを持ってついて行った。

同じ四階の看護婦室の廊下をへだてた前に浴室があった。うすいクリーム色をしたタイルの浴槽に肩を洗めて老人は大きな溜め息を吐いた。

若い看護婦が様子を見て来て、老人は恥ずかしかった。垢がきりもなく出て、体が軽くなったように思った。

「いい湯だった。」

「そりゃよかった。温泉へ行ったみたいだんべ。」

老人には本当にそう思えた。入院の夜以来痛いところも痒いところもなく、三度の食事が運ばれて、しかも家の食事よりうまい。風呂にまで入れる。

「食事がたべられるようになって、よかったわね。もう大きな注射はしませんよ。これはもう片付けましょう。」

点滴用のスタンドが担当の看護婦によって室外へ持ち去られた。

「元気になったらひげをそってもらいましょう。」

老人は、ひげの中の口をもぐもぐと動かしたが、声は出ない。

「おじいさん、入れ歯は？」

細君が、床頭台の引出しの中からビニールにくるまれた総入れ歯を出して見せ

「めしのときだけ使うんだがね。」

「いつもつけていた方がいいのよ。それに、しまう時は洗いましょうね。」

これにも細君が答えた。

八年程前、老人が餅を食っていて、総入れ歯をのどにつかえさせたことがあった。医者が入れ歯を二つに割って取り出したのを接着して今も使っている。ただ、少し小さくなったのか、洗うとゆるんでしまつてぐあいが悪い。それからずっと洗ったことがない。――と。

今朝は、細君にひげを剃らせ、老人の小さなこやかな顔が出てきた。巡回の婦長が

「男前になりましたね。」

と声をかけた。

「ばあさんが惚れなおすんでねえか。」

濡れたタオルをベッドの金枠に掛けると老人は、ベッドの縁に腰を掛けて部屋の中を見廻した。同室六人の患者は、片側が三人で、相對している。情報屋のほかは常にベッドにいて殆ど天井を見ている。やがて四時になろうとしている。窓の外から吹き寄せる風が心地よい。老人は風に誘われてそろそろと窓辺へ歩いて行った。四階から見る景色は、老人にとってまだ見たことのない世界だった。すぐ左手の看護学校の建物に続く芝生には、二、三人のリハビリの老人が若い看護婦の手を借りて歩く練習をしている。右手の植込みに囲まれた住宅の庭に五月の幟の竿が立っていて、風車だけがクルクル廻っている。その先に続く畑にはテラーが入って動いている。村道を時々自動車や砂埃を立てて走って行く。

森の蔭からローカル電車が走り出て、ガタゴトと音を響かせて行く。その先は煙っているが、ずっと平野に続き、処々に林が散らばっている。窓の縁に手をかけて、老人はそこを離れようとしなかった。

一週間を経た日、老人は退院することになった。老人にとってこの一週間は恵まれた日々であり、夢のようであったが、山の中のはろ家だが家に帰れることはうれしかった。早く帰りたいと思った。老人にせかされて、娘婿の都合がつきさえすればその日に帰ることとし、

「会計も済ましてくるから……」
と言いつつ残して細君は電話連絡に出て行った。

老人は、家へ帰れるうれしさと病院からどんなに請求されるかとの不安が交錯して落ち着かなかった。

ペタ、ペタ、ペタとスリッパを引きずって細君が戻る。

「今日夕方帰れると。」

「で、支払いは？」

「ただだと。」

「ひえっ、ただ！」

老人は悲鳴のような声を上げた。信じられないのである。

「老人いりょうとか言うんで、ただだと。」

「そうかっ。」

老人はベッドの上に座ったまま両手を高く差し上げて萬歳の仕草をした。

短かい期間の入院であつたし、持ち込んだ品物も殆どなかったから、荷物と言つても細君の手廻り品だけである。

夕方、仕事先から廻つて来た娘婿にうながされて、入院して来た時の着物のまま老人は、同室の患者に大きなおじぎをすると娘婿の大きな体の後から細君と並んで灯がつき始めた廊下に出て行った。

老人が去った後のベッドは、そこだけが忘れられた空間のように白々としていた。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になつて頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載 ○町○丁目○番地 (三)

十三年という歳月が流れていた。

時間はもとと全く無感動で、植物も動物たちも、この無感動な時間にきわめて柔順であるが、人間だけは肩をいからして足掻き、わめき、祈り、祭り、儀式し、工夫画策するかのようである。

十三年の間に、この国は明治以来の強兵富国の国是のようなものにそつて、欧米諸国に追いつけ追いこせと、外に打って出る勢力で国の貧しさを解決しようと、国際的に孤立する危険をもとせず（昭六・九・一八・満州事変、日本軍奉天北大営占領、全六・一二・一・陸軍、他国の干涉拒否を声明、全七・三・一・満州国建国宣言、全八・二・二四・国際連盟脱退、全九・三・一・満州国帝政実施、華北工作、内蒙古工作進む）国内では、五・一五事件（昭七・五・一五）十一月事件（全九・一一・二〇）二・二六事件（全一一・二・二六）という山場を経て、ついに隣国中国と事をかまえ、（昭七・一・二八第

山口健 二

一次上海事変、全一一・一一・二五緩遠事件、全一一・一二・二四西安事件、全一二・七・七日華事変、満州・北支・上海の舞台から大陸全土にわたる泥沼戦争へと移り、（昭一二・一一・九・大原陥落、大上海包囲、全一二・一・三南京城占領、全一三・五・一九徐州占領、全一三・一〇・一二南支バイアス河上陸、全一三・一〇・二四広東占領、全一三・一〇・二七武漢三鎮占領、全一四・二・一〇海南島上陸、全一四・三・二七南昌占領、全一四・六・二七温州福州占領、全一四・一一・二四南寧占領、全一五・九・二二・北部仏印・南部仏印上陸、全一六・二・二七長沙占領）そして遂にファシズムの頭領ヒトラー、ムッソリニーに率いられる独・伊と組んで（昭一五・九・二七・日独伊三国同盟）昭和十六年十二月八日太平洋戦争に入り、初めは世界の支配勢力の図をぬりかえるかと思わせる勢いを示していた。（昭一六・一二・二五香港占領、全一七・一・二マニラ占領、全

二・一シンガポール攻略、全三・一ジャワ島上陸、全三・二七スマトラ全島占領、全三・三・一クリスマス島占領、全五・七コレヒドール島占領。その頃廉作はこの野望の元兇と考えられる大日本帝国陸軍という組織の中へ、徴兵延期停止によりおずおずと組み込まれたのである。

十三年という時間を、このようにひと跨ぎに記せば、それは人間の匂いのない年代記に了るのであるが、その裏には、人間の哀れさ、悲しみ、喜び、憎しみの悲鳴が、幽界に当てどなく吹く風の音にも似て、鬼哭啾々とも云へる趣きで吹き荒んでいた。

山上森之助も、娘ラクの夫で廉作、恵太らの父である医師も、「船大工」と山上森之助に軽んぜられた三ツ星造船社長候補も、田村看板借弁護士も相前後して病死し、貞一はひとり息子貞造と妻のき志子の実家に移り、相続した〇町〇丁目〇番地の地所を「坪売り」という方式で換金して徒食して来た様子であった。大正十二年の大震災の折に山上森之助の屋敷に群れ集った親類縁者も敗戦の荒廃の中に散りじりになり〇町〇丁目〇番地に住む加寿刀自を訪れる者はなかった。只、山上森之助の屋敷の庭の隅の洞に祭ってあった稲荷のご本体だけが二匹の狐に守られて加寿刀自の頭上の棚に鎮座していた。

廉作は、祖父森之助の許での居候生活は一ケ年とはもたずに生家へ帰されたが、その翌年、日本最北端の高等学校と云う所に入り、どうやら森之助やラクが気に入っ

ていた帝国大学というところを出てすぐ軍隊にとられ、敗戦の挙句、乗る者があふれて蒸気機関車の外側にまでぶら下る混乱状態の列車に乗って信州の田舎の町に、町全体が長い戦争の疲れで横たわっている朝方「復員」したのであった。昭和二十一年の冬であった。

「帰って来ました」

長いつららが軒下から垂れ下っている窓をたいた廉作には、矢張り命を拾って帰って来たと云う甘えが心の隅にあった。さぞかし母ラクも妹も、驚きと感動を示してむかえてくれるであろうという期待であった。

「おや、お帰りかえ」

だが、窓の向う側に現われたラクの顔は能面のように静かに無感動であった。五十才の半ばを越した女の全身には必死に命と家を守って来た日本人の疲れが張りついていていた。

「サクラは昨夜宿直で学校どまりだし、カヤ子は実家へ行ったまだしあたし独りなんだよ」

普段口に出して言ったことはなかったが、武士の祖父を持ち、娘時代をその祖父に育てられ、明治天皇にそば近く仕えたことのある加寿刀自を母に持った誇りのようなものを心の底にひそめているラクの、これが精一杯の廉作を迎える感動の言葉であった。

廉作は背負って来た手製のリュック・サックを広げて、中から衣類、アメリカ国の煙草、黒砂糖のかたまり、魚

の干物やアメリカ兵から輸送艦内で「トレード」した品々を出して並べていた。又リュック・サックの背中側にそれとなく縫いつけた皮と布の間から壱万円をぬき出して畳の上に投げ出した。「これだけあれば大丈夫、あたしが帰って来たからにゃ心配はいりませんよ」と言い度いのであった。日本降伏後南の島でアメリカ兵と日本側との通弁をやった廉作は、輸送艦LSTに積み込まれる時にされ、身体検査を受ける屈辱の関門を、「ヘイ、ヤマ、レッツゴー」と云う顔見知りのアメリカ兵の手の合図ひとつで通ることが出来たからそんなものを持ち帰ることが出来たのであった。だが彼は、戦争前にそれだけあれば利子食いで暮せた金壱万円が、もう、とるに足らぬ金高になるまで物価は跳ね上り、その上、旧円封鎖が二月の二十五日から実施されることになっているのを知らなかったのである。ラクは無表情にその品々や札を眺めていて云った。

「お前のいた会社、解散とかで九百円の手当が出たが預金してあるよ」

宿直で留守になっている妹サクラの部屋となっている隣の四畳程の部屋へ入ると、机の上に、見覚えのある葉がきがのっている。それは廉作が丁度一年前、「もうこれが最後の日本との連絡潜水艦になるから全員手紙なり何なり書け」という命令が出た時書いた一枚の葉がきで

あった。かれは独り身であり、言い残すこともないまま葉がきに自画像風に自分の首だけ書いた。そしてその絵の上に「天の翔り水潜り行け悟空の首」とかき、島での食い物のことを内地と比べてどうであろうかと少し書き足したものの、その書き足した部分が丹念に消しゴムで消してあった。ちらりと中隊の長であった青白い小男の大尉の顔が浮んだ。妹サクラがどんな気持でこの廉作の最後の通信を机の上に置いておいたのであるうか、それは廉作にはわからぬところであったが、かれはその葉がきを微塵に破って窓から投げ捨てた。戦争に負けて帰って来たと云う思いと、何の甲斐もなく死んでいった者たちに対する後ろめたさが背筋を吹きぬけて通った。

二月と言っても時にはうらうらとした陽差しが、女世帯だけに小まめに張りかえられた障子一杯に広がり、家に帰りつくまで命のことを忘れていた廉作を「俺は生きているんだ」と云う不思議な感懐に包むことがあった。

「恵太も幸太もどうやら生きて帰れそうだし、表の病院の建物、配給会社に借りられちゃってるのを返してくれるように交渉してるんだが……仲々はかどらなくてネ」

ラクが零した。そんなある日、和服の着流しでふらりと近くの産婦人科医で廉作と同じ島にいた軍医のNが訪

ねて来た。かれは廉作の兄の恵太より五、六年年上で、応召の軍尉太尉であったから多分所謂ボツダム少佐になつていたのであらう。大尉であっても謂われなく廉作に敬礼を強制する身分であつた。「謂われなく」と言えば廉作が下級将校になつて、本当に戦闘という修羅場で命を捨てて働く兵、下士官に敬礼をさせる身になつていたことも「謂われなく」ことであつて、廉作に、生きて帰つて、身のちぢむ思いをさせたことであつた。血が流れ肉が飛ぶ戦闘のぎりぎりの場では、たたかいと云うことに身も心も向いている人間が、とどのつまりは指揮者になり、敬礼を受けるものである筈だからである。

Nは、戦場を知らぬラクに向つて、自分がどんなに勇敢に振舞つたか、飢え、餓えに苦しむ兵を何人、どの様にして死から守つてやつたかと得々と物語るのであつた。そして折々廉作の方をむいてキョロリとめがねごしに眼をむいて「なあ廉作さん」と相槌をもとめるのであつた。廉作は宇品港を四年前に船団を組んで出た八杯の日本の陸兵、物資、兵器を運ぶ輸送船が、エンダビーの沖でアメリカの艦爆の攻撃をうけてごとく沈没させられ、かれも海につかつて辛うじて輸送船内の便所のドアと思える木片にしがみつき、さて命はどうなるかなと冬眠から覚めかかつた亀のように、あたりに漂い泳ぐ人間を首を掻け眺めまわした時に、「おい少尉助けてくれ、つかまらせてくれ」とかれが乗っている丈余の木片に泳いで

こうして食べられるがネ」

実際に、雑穀類に更に野草の干したものを炊き込んで食べている始末であつた。食物を生産することとかかり合ひのない世帯は、廉作に戦地の原始生活の疲れを癒させるゆとりはなかつた。

「こんなものを作っているんだよ、講習会ってえのがあつてネ」ラクは下駄の鼻緒を取り出して見せた。芯の麻は既製品らしく、それに小切れを縫つて袋を着せるのが手内職であるらしい。

「お父さんが死んだ時、うちには八百円しかお金が残つていなかったんだよ」とラクは言つた。「俺は兵士だつた時月給三円何拾銭だつた。その頃百五十円の月給取りは高給とりだつた筈だ。高給とりの月給の五倍も金が残つてりゃ葬式だつて苦勞はなかつたらう」廉作は腹の中で計算していた。

「何しろお前がお父さんを殺したようなもんだよ。大出する迄の学資だつて、私立大学へ行つた恵太よりお前の方がかかつているし、お父さんが炬燵で急に具合が悪くなつた時、兵営のお前からの葉書き読んで「廉作のヤツ」って心配していたそのすぐあとだつたからね、呼吸が苦しくなつたのは……」

こう云うラクの折にふれての繰り言の中には、廉作の兵士になるまでの勝手三昧な学生生活がまだ尾を引いているだらうという母親らしい不信任感が漂っている。それ

来たNの真青くゆがんだ顔を思い出していた。未だ三十才前の若さであり、独り身である廉作には、「タスケテクレ」と云うその時のかれの言葉が、ひどく未練、卑怯な印象となつてぐざりと脳底につきささつて残っていた。「よくもまあこんな空々しいことが云えるもんだ、多分復員して来て開業を続ける前に亡父が同じ開業医だった此処の様子をうかがいがてら寄つたんだらうが、母の前だけなら兎も角、同じ島にいた俺を前にしてこの自慢話は一体どういう神経から出てくるんだ」廉作には坊主を憎む気持ちが袈裟にまで及んで、同じ軍医でやがて帰つて来るであらう兄の恵太や弟の幸太と、しばらくでも同じ屋根の下に住むことを許さない焦りを感じさせるのであつた。

「俺東京へ行く、山上の家はどうなっていますか」廉作はある日母のラクに聞いた。

「何でも〇町〇丁目〇番地の本屋の倉庫になつている二階屋を大野の口ききであげさせて、利秋と一緒にいるらしいよ。利秋がああなっちゃお祖母様も大変だらう、まあ大野が見てくれるらしいけれど……。貞一夫婦はぜんぜん近よらないんだから……」ラクは言つた。

「じゃー俺が行くと言つても駄目かな」

「手紙出しては見るが何しろもう七十九だし、利秋の面倒見るんで手一杯だらうネ、それに東京にはお米がないよ、此処はまあ昔からのつながりで何とかお粥ぐらい

やこれやは、廉作に長くこの家について、この田舎のまちで生きる糧を稼いで暮す気持を殺ぎとつたようであつた。それは見方によつては進んで苦に立ち向う姿勢であつたが、かれはまだ三十才を越したばかりの若さと、兵士から下級将校に成り上つた戦斗的な荒々しさを留めていた。

「何ですって……廉作が出て来たなんて？」

大野貞之助が加寿刀自を見舞つて、長火鉢で向い合うや言つた。かれは殆んど一日おきぐらいに、焼酎のこつた一張羅のモーニングをテラテラとアイロンの跡を光らせて一着し、象牙の首のついたステッキをついて加寿刀自の前に現われるのである。だがその風采は、十三年前の和服に角帯と云う瀟洒な面影はなく、笑いのないチャップリンと云うところであつた。

「あたしももう年だし、それに利秋があんな始末だから……とても昔のように面倒みられないって返事出したんやけど……」

「いいじゃないですか、あれももう三十越している筈です。昔のようなことはないでしょう……それに若いんだから何かの役に立ちますよ、ホラあれの親爺の出た家は百姓だ、この際米がありますよ」

大野貞之助には計算があつた。

大野貞之助も、確かに十三年前の豪勢な家敷は空爆で

焼き払われていた。焼け残った高さ一間に及ぶ大金庫の中味の桐箆子を背後に据えて、○町○丁目○番地の狂気の弟利秋の寝起きしている四畳から運んだ畳を、自分の坐るところと来客用に二枚ずつ重ね、妻のうしを薄縁を敷いた板の間に坐らせる掘立小屋暮しであった。「お前らのところへ俺は養子に来てやったんだ、百姓共、文句はあるまい」かれには謂われない武士の末裔の誇りが、蝦蟇のように心底に居坐っていた。その上長女には空爆下に遺体すらわからぬ死に方をされ、後継ぎの独り息子が未だ支那の戦線から果して帰れるものやらもわからぬ状況の中で、かれの神経は營養失調で瘦せこけた持国天の持つ剣のようにとがっていた。子供の頃から金の重味を全く知らずに育ち、港町Y市の開港土地成金大野家に政略的に養子に入り、大金を思いのままに左右し、当時漸く流行に入った勸工場（デパート）の経営に失敗、そして最後に朝鮮半島で手に入れた広大な土地をこの戦争で根こそぎ失っては、次から次へと養家の財を細らせて来たという分家筋の陰口の前に、最後の拠点とも云える○町○丁目○番地の利秋名儀になっている加寿刀自が住む本屋の倉庫長屋と鈴掛け通りに面する店一軒、大凡そ百坪の土地を、どうしてもこの際、加寿刀自の面倒を見たことを大義名分として、加寿刀自の存命中に自分の名義に書き換えさせようと云う下心があった。金の重味を知らなかった者が、敗戦の惨状の中で金に目覚めた時、

ようと、何と呼ばれようと、この仕組みは変わらないもののである。だから人間は敗戦の焼け跡に銭を求めて、或いは何かを求めて群がった。その何かと云うものは、自分の個体の生存が先き行き見込みがつかぬ状況の中では、せめて次のものを生み残そうとする本能が、一瞬の快楽を求める慾望に化相して、男たちは女を求め、女は身体を売って金にするために街に立ち並んだ。かれらの目は闇の中でありありと光っていた。

駅々には、どこから集めてくるやら品物の闇市場がみし・みしと建ち並び、家、両親、兄弟姉妹を失った子供たちは鼠のようにすばしい動物に化して、品物があれば片はしから盗み、人の群れの間を走り片手だけの手袋などつき出して「オジサン一コでいいよ、チェッ！一コもねえのか」と立ち売り、走り売りしていた。一コとは百円のことであった。

上野の山は焼け残った。その公園の隅を飾る西郷隆盛の銅像の前の広場は不思議な集会場になっていた。無精髭をのびし放題のやせた小男が闇に立って敗戦の原因と日本再建の方策らしいことについて絶叫調で演説をしていた。暗闇のあちこちには、家を焼かれ寄りかかる所のある者、無いもの、見別けるすべもなくしゃがみ込んで、こんな小男の狂人めいた絶叫からでも何か生きるための曙光を、情報を得たいと、異様な静けさを保って聞入っていた。銅像下の道路の石垣によりかかって女が立ち並

それが晩年であればある程鬼気を帯びた執念になってゆくようであった。

「月々千円部屋代をとりますよ、それにあれのおやじの出た家から米を運ばせましょ」貞之助は加寿刀自に言った。

「そうかねえ……：：：そう言うものかね」

加寿刀自には孫の廉作から部屋代をとることなど考えて見たことがなかった。十三年前恵太、廉作だけでなく集って来る一族郎党をみなみな寄食させて来た記憶が老女の頭にあざやかであった。

月々預金の中から一世帯四百円しか引出せない旧円封鎖の制限の中で千円の部屋代は重荷である。廉作の食をあまり職を求める毎日は段々にきびしさを加えて来るのは当然のことであった。耕して作物をつくることの出来る土地とか、あきない品物を持たぬ者たちは、闇雲に人間の集るところに群がるものである。人間の集る所には、何か仕事がある。仕事をすれば金銭にありつくことが出来ると云う仕組みは、人間の世の中に何千年と云う時間の経過の中で段々出来上った仕組みであるから一つの国が戦争に負けた勝ったぐらいのいさかい事ではガラリ変ることはない。いっそやはり天変地異という言葉で言われる出来事、それが根こそぎ人間と云うかしこげな生き物を洗い流すか、干し上げるか、焼きつくすまでは、資本主義社会と呼ばれようと、共産制社会と呼ばれ

び、立ち並ぶことをはばかる女は、多分それだけとは身につけて焼夷火の下を逃げのびたと思える毛皮の外套に身をつつんで闇の中を広小路にかけて蛾のようにヒラヒラと飛んだ、アキレス腱の細身の切れ方は昨日までの上流の暮しを物語っているようである。狂気の利秋の懐から新円証紙をはった八枚の拾円札をとりあげた廉作は、明日は米を手に入れるために、二十数年も訪れたことのない亡父の生家へ行かねばと心を決めて、その夜は、闇に飛び舞う蛾を一匹つかまえてやろうと、南の島でアメリカの空爆艦爆の中で海岸の岸壁にトーチカを造り続けた時の血走った眼つきになっていたのであった。

その翌朝廉作が階下におりると、加寿刀自は狂気の伴の傍に小さく坐り、しきりと伴の背中や腕をなでている。「お祖母さま、ボク、おやじの出た袖が谷の田舎へ米を貰いに行つて来ます」

「そうかい……：：：トシさんがね、今朝急に変になつてネ……：：：」

「どうしました、医者呼んで来ましょうか」

「そうしておくれかね、お医者さまって言えば、ホラあの救世軍の建物の小路に一軒あったようだよ」加寿刀自はさする手を休めずに言った。

狂気の男はうす目をあけて廉作を見た。そしてヌタリ

と笑った。苦しいのか布匠がわりにくるまってきた毛のはげた軍隊毛布も、着ていたものも全部足許に蹴飛ばして、丸出してしている貧頭盧の頭部のように、肉のこけた尻を三度たたいて、今度はあきらかに渴いた声をあげて笑った。

「ハッハッハッハッハッ」

その笑いは、かれが拾得した革袋を奪いとり、その中の金で闇の蛾を買い、今父祖の家へ米麦を貰いに旅立とうとする廉作の生存への盲目的な意志をあざ笑うかのやうに低い天井に響いた。加寿刀自の手は、狂気の倅の背から腕へと、ほかにてだてなく、衝動にかられたやうに動いていた。

廉作が呼んで来た医者とは、狂気の男の脈を計っただけで、廉作の部屋になつて二階に上り、すすめられるままに窓際の藤椅子に腰かけ、その顔には、朝からの急患は「あの男」だったのか、さてどのように処理しようかという職業意識と、余り金はとれそうもないなと云う疲れを見せていた。

「こちらさんでしたか……あの人の家は……」医者

者は言った。
「ええ、でも戦争前には相当な暮してたんですよ。あのばあさまの亭主は此処ら一带の本屋街の地主だったんですよ」廉作はあれは私の叔父ですとは言えず、全くの他人に仕立てる気持が動いていた。

「一財のシ……」
「そうですか、薬は出しておきますから取りに来て下さい」医者は早々と腰をあげた。「どうせ何かの粉に塩味か砂糖味つけたものであろう。今時まちの開業医が効きめのある薬を持っている筈がないや」廉作はせせら笑う気分で医者勿体振った口のあたりを眺めていた。敗戦のショックで「とは廉作も体裁をつけたものだ。その実は、十三年前から少しづつ、少しづつ身体の弱い部分の細胞に、何物かが働きかけて来たのであった。階下では、加寿刀自のひからびた唇から子守唱がもれる筈はなかったが、背中から腕の上半身をさすってやる最後の倅へのいたわりは続いていた。」

そしてヒタヒタと肉のこけた自れの尻をはたき「ハッハッハッ」と云う乾き切った狂気の男の笑いは二階への朽ちかけた階段を這い登る気配であった。(未完)



連載

ハイラル挽歌(十)

第一章 海拉爾の白旗

金子正義

曠野の彼方に文子が消え去っても暫く茫然としていた益子軍曹は、師団司令部も開嶺へ移って仕舞ったので、思い直して所属中隊へ復帰しようとして第四地区陣地向った。漸く地下要塞入口を探し当てたが、既に厚い鉄扉が降りて入れなかった。銃眼に向かって何度か叫んだが応答すらなかった。他の入口を尋ね廻ったが外部からの連絡路は全て遮断されていた。陣地に繋がる地下連絡路を発見して辿って行くと、梅丘南方より進攻するソ連軍に備えた肉迫攻撃隊陣地に出た。幸い分隊長が乙幹同期の川村軍曹だったのでそのまま留まった。益子軍曹にとっては、堅固な要塞に入れようが、真先に散る肉迫攻撃隊に居ようがどうでもよかった。生命の全ては文子と過した司令部の一室で燃焼し尽したと思った。もう何処で果てようかと構わなかった。

遠近の砲声は日毎に激しくなったが、第四地区陣地はさしたる攻撃も受けず取り残されたやうで無気味だった。

十三日仏暁、近くを隠密行進する部隊があった。川村軍曹が飛び出て確認すると、十二日夜半伊東台陣地を脱出した山岡隊で、興安嶺の開嶺に向って撤退と分った。益子軍曹は、地下要塞が牡蠣のように門を閉ざしている以上中隊に帰る必要はない、むしろ山岡隊に追尾して師団司令部へ戻ろうと思いついた。川村軍曹に別れを告げ、朝食を摂って壕を出ようとすると突然近くで砲声があった。川村分隊は素破ソ連軍の来襲と壕にへばり付いて様子を窺った。砲声は一層激しくなったが砲弾は陣地へ落ちず、砲声に交じって小銃や日本軍の軽機の音が交錯する。山岡隊がソ連軍と遭遇して交戦の模様であった。激しい戦闘は一時間程で休み散発的に銃声がするが、山岡隊はソ連軍を振り切って脱出した様であった。益子軍曹は、川村軍曹が未だ危険であると引き留めたが、戦闘の方面を迂回して行けば、単独行動だから却って発見されないと強気に言って壕を出た。

益子軍曹は、ひたすらに荒野を走り草叢に伏して開嶺をめざした。十日朝の曠野に消えた文子の後姿を思い、今、同じ方向を行くなら何故あの時一緒に行ってやらなかったのか、と悔恨の念に胸が熱くなったが、あの時は敵前逃亡の汚名を懼れた訳ではない、兵として当然のことだったのだと自慰し、愛に全てを賭けて共に脱出した。とて安全地帯に辿り着ける筈がないと諦めるのだった。そして、今独り曠野を歩いて開嶺に辿り着く自信は無かったが、何処迄行けるか確かめるだけだと思った。生命は既に無いものと疾うに覚悟はついている、運命とやらを試して見ようと思った。ソ連軍の銃火に無惨に斃れるか、荒野に彷徨い飢えて果てるか、狼の咆哮する草原に倒れて野獣の餌食となるか自己を見定めようと思った。夜通し歩いて丘に立つと鉄道が朝の光に眩しく見え隠れしていた。興安街道も鉄道に沿って伸びていた。日が高くなるとソ連軍戦車隊が土煙をあげて轟々と去っていった。蓋を上げた展望塔にソ連兵の姿が見えた。益子軍曹はソ連軍の通過する度に草叢に伏せて凝っと動かなかったが、先を急ぐソ連軍にとっては彼一人は物の数ではなく続々と行くばかりであった。だが展望の利く草原は危険なので街道を外れて、灌木林や夏草の茂みの中を潜行すると、日本軍の無人の連絡拠点を発見した。

兼てから関東軍は国境辺境の地に軍司令部との連絡拠点を設けていた。拠点は林の中に樹木や夏草で擬装した

広大な北満の山野を独りゆくと、自分が一塊の泥土や一茎の野草よりも卑小に思えた。行く手に聳える山岳や野面を渡る風の音や、時には小霧のように降る雨の中に自分が融け込んで仕舞ったように思えた。死線を越えた訳でも無いのに自分が生きていようが死んでいようが構わなかった。だが倒れ眠った夜半、狼の遠吠えがすると身震いして起き上るのだった。心臓が早鐘をうち原始的な恐怖が背筋を走ると、未だ生の未練が残っていたと気が付き、恐怖や苦痛は生の証しと思い直して、遠近に飢する狼の遠吠えを耳にし乍ら自分の運命や、戦争の終末を眺めてやろうと不逞な意欲を燃やすのだった。

草原に飢えた狼群がいた。彼等は常に飢え、それが生本能を強烈なものにしていた。狼達は執拗に益子軍曹に追尾し、一定の間隔を取って走ったり止ったりして襲いかかる機会を狙っていた。益子軍曹は狼の唸りを至近に感ずるとマッヂを折り煙草をふかして歩いた。時には背に殺気を感じて振り向くと、今、正に襲いかかる直前で腰を沈めて眼が爛と爛と。益子軍曹は身震いし乍ら凝っと睨み返した。彼の死を恐れぬ怪しく光る双眸にうたれた狼は、後摺去りして後肢で踏張り、頭を低く下げ顎を地に折りつけ鋭い牙を剥き出して唸った。睨み合ったまま横田軍曹が緩くりと煙草を銜えてマッヂを摺ると、狼はサッと横に跳んで、一寸と振り向いてそのまま白樺の林に消えた。狼が去ると脚の辺りがガタガタと震え出

半地下の小陣地であった。一個小隊は起居できる壕内には備蓄の食糧弾薬から衣服まであった。益子軍曹は壕に入ると気が緩んで倒れたまま眠り込んだ。寒さで目覚めると既に夜であった。急に空腹を覚えたので直ぐ飯を焚いた。壕舎はよく工夫され外からは火が見えないように竈が作られ、煙は地中の煙道を抜けて遠くへ出るようになっていた。

翌朝、安全な連絡拠点で二、三日睡り続け度い欲望もあったが、雑糞に米、味噌、缶詰類を詰め込んで出発した。それから夜も昼も南東をめざして歩き続けた。疲労し切って動けなくなると何処でも睡った。食糧は充分持っていたが、草原や乾燥した山野では湧水が無く渴きに苦しんだ。初め昼夜兼行で先を急いだので、次第に体力を消耗して歩くより休む方が多くなり、背負った食糧も炊く気力を失なって草原に行き倒れると死んだように睡った。泥酔のような睡りは苦しみを忘れさせ、単独行の不安も消した。自由と解放の幻夢する漂わせる眠りには生の苦しみより死の安らぎへの誘惑があった。彼は睡ったまま永遠に醒めなくとも良いとすら思った。だがソ連軍の車輛の地響に目覚めると、ふらふらと立ち上って歩き出すのだった。饑渴や疲労感も鈍って枯草や灌木に触れる感覚が快よかった。無駄なものも脱落し切ったように、軀は軽く、脚は自然に動いて軍靴のカツカツと鳴る音が、生命の証しを刻むように思えた。

した。全身の力が一挙に抜け落ちて行くようであった。

十日程山中を行くうちに煙草は既に尽き、マッヂも残り少なくなった。寒さと狼よけの焚火にマッヂは無駄に出来なかった。小銃も拳銃も捨て自決用の手榴弾一個だけ持っているが、狼の群に襲われたら防ぎようが無い、彼は身体の一部のようになっていて帯剣に気付いた。牛蒡剣を抜いてカチカチと鞘に打ちつけて山中を歩いた。彼は日数を確かめていなかったが、感覚の無くなった重い脚を曳き摺って、もう何日も山中を迷い歩いているように思った。朝夕は寒く吐く息が白く見えた。風も無いのに白樺の葉がハラハラと落ち、見廻すと山々は落葉し始めて、禿山に変わりつつあった。大陸の夏は短かく既に初冬の気配であった。雨がよく降ったが、晴れると太陽は南へ傾き、歩む己れの影が長く伸びていた。夜は狼よけの焚火に当たり乍ら見上げる夜空に寒々と欠けた月が昇った。ハイラルを脱出して半月を経たのであった。

もう日本軍の勢力圏に來た筈と草原へ出ると、緩やかに起伏する丘の彼方に道路が見え、戦場とは思えない伸びやかな風景であった。気を許して道路に出て乾燥した土埃の立つ道を進むと部落が見え出した。点々と間隔を置いて土造りの蒙古家屋が数軒あった。人の棲家を長い間見なかった人恋しさで、足は自然と部落に向って速くなった。土壁を廻ぐらせた大きな家の陰から蒙古犬が二匹低く唸り乍ら迫って來た。益子軍曹は後摺去りして土

壁に寄ると、牙を露き出した蒙古犬が左右から激しく吠え立てて跳びかかって来た。彼は土壁沿いに逃げ潜り戸を見付けて激しく叩いた。暫くすると扉を軋しませて僅かの透き間から、五十前後の男が顔を覗かせた。男は犬を制し乍ら不審な顔で凝つと益子軍曹を見たが、「どうぞ」

と日本語で言うと言ひを聞いた。益子軍曹は救われた思いで転げ込むように建物に入った。明るい戸外から入った室内は真暗で見当がつかず、闇に手を泳がせて摺り足で進んだ。突き当たった上り框に倒れ乍ら腰を下した。昏さに馴れると屈み込んだ自分の脚が見えた。編上靴の底が破れ、血み泥の靴下が靴底のように固くなっている。靴を脱ぐと脚全体が干乾びたカラスミのようになっていた。此の脚で良く歩いたものと摩っていると、意識が薄らいでコロリと床に転がった。

泥酔者のように昏睡して夢か現実か定かでなかった。彼は分隊の先頭となつて堤防の上を歩いてゐた。堤防は自然の丘陵のように幅広く豊かな盛土で、黄緑の芝に美しく被われ、豊満な女の胸のようであつた。百米程もある高い堤防の上は幅広い坦らな道となつて、うねうねと気が遠くなる程の彼方まで続いていた。二条の堤防に挟まれた河原の真中を褐色の水を豊かに盛り上げて流れる河があつた。河は古き唐の時代より知られた河川らしく悠々と流れていた。堤防の上の幅広い道の両側には楊柳

始めた。

胸苦しく両腕を差し上げて呻いた。自分の叫ぶ声に意識を取り戻すと、心配そうに覗き込んでゐる老人夫婦の顔があつた。

取り戻した意識が次第に判つきりして来ると、益子軍曹を看病して呉れるのは此の家の主人夫婦で日本語が解かり、老人に見えるが二十数軒の蒙古人部落の長であることが分つた。食物を運んで来る息子夫婦や、物珍らしげに覗きに来る孫達もいて大家族であつた。

主人は何にやら若草と灰を混ぜて割り抜き鉢で練り上げた塗布剤を、益子軍曹の身体に塗ると言つた。腕を捲くると白く乾いた皮膚が魚鱗のようになっていた。爪で搔くとポロポロと剥れ落ちる。山中を迷い歩き、岩角や固い樹皮に當つて全身に打撲傷や裂傷があつた。特に脚は浮腫み上つて足首から下は腐つた干肉のようになっていた。老主人は塗布剤を厚く塗ると動いてはならんと言つた。

身動きの不自由なまま二日程睡り続けた。塗布剤が乾き落ちると老主人は、若夫婦に土間に砂を運び込ませて益子軍曹の半身を砂に埋めた。砂は冷たかつたが、次第に体熱で暖くなり湿つとりと彼の身体を包み、心地良く痛みや疲労が消えていった。彼は陶然として一日中砂の内で睡つた。

何時も影のように憑き纏つて彼の息の絶えるのを待つ

の並木が続いていた。季節は早春か、柳は未だ黄色く蕾のように芽吹いたばかりであつた。昔、唐全盛の頃、此の柳並木の下を馬に乗った日本の遣唐使や、留学僧が都に登ったり、帰国の途に着いたりする度に多くの友人や官人達に見送られて往還したのであろう。

戦争を忘れて盛唐の頃の文化に想いを馳せ人々を偲んで、伸びやかな気持で静かな堤防の上を歩いて行つた。対岸の堤防の稜線に人影が動いた。其処よりずっと後方の堤防上に日本兵が現われ、動いた人影を銃撃した。銃声は二条の堤防に包まれた河原に飴して打ち上げ火花のように静寂を破つた。続いてパチパチと銃声がしたがいつもの激しい戦鬨の銃声とは違って、焚火の生木が爆ぜるような和らいだ響きがあつた。

楊柳の間を縫うように隠れたり現われたりして中国兵が逃げて行く。益子分隊も向う側の日本兵に合せて駆ける。日本兵が追跡して行くと二条の堤防が次第に接近して川幅も狭くなり、褐色の水は薄墨色に濁つて堤防の岸には青泡を吹いた水藻が浮いていた。水藻の内に白い衣を圓く脹らませた中国人の屍が揃み漂つていた。対岸の水際には数体の中国兵のカキ色の死体が浮いていた。益子軍曹は水際に下りて浮んでゐる中国人の屍を覗いた。何んとそこには自分の顔が浮いてゐる。惘然と身を縮めると、ぶくぶく漂つてゐた中国人の屍や青衣の中国兵の死体が一斉に立ち上つて彼を取り囲んでガヤガヤと喚き

ていた死神が消え、昏昏と睡るうちに全てが浄化され、救済されるようであつた。安らかな眠りの中で既往を思ふと、過ぎし二十余年は全て良しと思えた。数か月のハイルはそれなりに怡しかつた。戦火に映える師団司令部酒保で過した松原文子との最後の夜は青春を濃縮した一刻であつた。片鎌月の投影する室での抱擁は深海の底か浄土世界での出来事のように思えた。彼女の姿は遠く曠野に消えたが永遠に脳裏に残るであらう。それだけで此の世に生を享けた甲斐があつたと思つた。彼は何にか大きな愛に包まれてゐるように頬に微笑を浮かべて睡り続けていた。

砂療法と、家庭全体の手厚い看護で数日で起き上り、日増に体力を回復していった。益子軍曹は深く感謝し乍らも蒙古人家族の厚意が理解できなかった。異民族の言わば侵略軍の兵士を手厚く看護する心の深さに戸惑ひした。人類愛とか博愛心と云う気張つたものでなく、傷ついたものは誰でも助ける、例え野獣でも手当てして放つてやる習慣のように、平然と家業に励んでいた。其の頃、部落は煙草の収穫で多忙となつた。家族総出で煙草の葉を摘み取り糸を通して物置小屋に吊して乾燥していた。益子軍曹が感謝の気持から手助しようとする老主人が、

「外へ出ては危ぶない、危ぶない」

と大声で制止し畑へ出てはならん叱つて、蒙古服や蒙古靴を出して、すっかり蒙古人並みにしてから、部落内

や屋敷の仕事を手助させた。一日の仕事が済むと家族全部で食卓を囲んだ。主食は玉蜀黍で時には粟を炊き肉や野菜スープが副食であった。食事をし乍ら老主人は微笑を浮かべて満軍に入った頃の思出話をした。日本語は当時憶えたものだった。息子も片語の日本語が通じ何にかと益子軍曹に話しかけた。二人の孫の上の男子は、父親が益子軍曹に話しかける片言を直ぐ真似て家中を笑わせた。息子夫婦は顔を見合せ乍ら、

「日本、負ケタ、モウ、ユクコトナイ、ココデル、スグコロサレル、コノマイルヨロシ」

と毎食後引き留め、老主人は

「私の養子にならなさい、私の息子になればもう安心です」と夕食後の団欒で真剣になって勧めるのだった。本気になって益子の身を案じ、自分達の危険すら省みず部落に置いて呉れるばかりか、民族の違いなど少しも気にせず、養子になれと言う素朴な心にうたれた。此の博い人間愛はどこで身につけたのだろうか、民族や国家を超えて誰とも友人となつて信頼する人類愛は知識や教養でなく、人間本来、誰でも持っているもので、却って先進国や文明社会では喪失して仕舞つたのではなからうかと、苛酷な労働に刻み込まれた敏だらけの老主人の顔を尊く思うのだった。そしてただ、

「有難とう、だが自分は日本の兵隊です、どうしても原隊に帰らなければなりません、身体が直つたら行かせて

下さい」
と懇願するばかりであった。煙草の作業も終つた日の夕食の後、益子軍曹は思い切つて、
「いつ迄も迷惑をかけてはいられません、明日は行かせて下さい」

と強く頼んだ。家中が残念がったが、益子軍曹の決意が固いと思つた老主人は、貴重な紙の皺を伸ばして部落付近の地図を書いて呉れた。女達は、粟や乾肉などを袋に詰めて持つて行けと言つた。

出立ちの朝、益子軍曹が麻袋の蒙古服を脱ぎ、破れ軍衣を着ていると、

「軍服はいけない、見つかるよと殺される」

と老主人は強く言つて蒙古服を押しつけた。益子軍曹は

「未だ日本の兵隊です、蒙古服では原隊に帰れない」と無理に返すと、編上靴はとも履いて行けない、蒙古靴だけは履いて行けと言つた。彼は何度も頭を下げて丁寧な礼を述べ戸外に出た。

風も無く良く晴れた北満の秋だった。地平線の彼方へ続く道の両側の高梁畑も刈取られ、煙草の畑は葉を摘み取つて茎だけ棒立の姿であった。日本の冬のような寒気が破れ軍衣を通して迫つて来るが、彼は修行を了えた禅僧のように清静しかった。頭を東に向けて歩き出すと背に熱い視線を感じた。振り返ると二組の夫婦は未だ戸口に立って見送つていた。彼は隻手を挙げて大きく振つた。

掲載作品総目次(一—十号)

第一号(昭和五十六年三月)

- 下町風俗資料館 森本 俊正
忘れられぬ「リオ」 神原 拓生
やきとりの夢 井上 二三男
天明七年 三戸岡 道夫
男運 柴田 富佐子
「うん」 岸田 幸雄
鉄舟の行方 山口 健二
母ひで 大和 禎人
ハイラル挽歌(一) 金子 正義
第二号(昭和五十六年六月)
もの憂い小島 山口 健二
まり子さんと子どもたち 岸田 幸雄
病室の窓 井上 二三男
両殖人間 三戸岡 道夫
あるフィナーレ 大和 禎人
町までの道 柴田 富佐子
ハイラル挽歌(二) 金子 正義
第三号(昭和五十六年九月)
呪縛の語り部 大和 禎人
ソクラテス 三戸岡 道夫
めぐむは走る 山口 健二
可愛い登美 岸田 幸雄
メガルさんの夏休み 柴田 富佐子
遅すぎた春 柴田 正義
ハイラル挽歌(三) 金子 正義
第四号(昭和五十七年一月)
セールスマンA&B 三戸岡 道夫

浅草そだち 筆だより 臨界期 朱の珠数 むうさん つまみ食い 赤い腕章 ハイラル挽歌(四)

- 第五号(昭和五十七年四月)
キャネ火 山口 健一
陽の当らない風景 山口 健二
漬物兵士馬のラブソディ 大和 禎人
志功頌 岸田 幸雄
汗をかいた壕 ツッパリ君 柴田 富佐子
ハイラル挽歌(五) 三戸岡 道夫
第六号(昭和五十七年八月)
小さな銀色の十字架 山本 儀一
日暮里界限 山口 健二
旅に拾ふ 増川 遼三
一日違い 三戸岡 道夫
敷章はなし 大和 禎人
扇子 柴田 保
ハイビスカスの島と 山根 三枝子
ハイラル挽歌(六) 金子 正義
第七号(昭和五十七年十一月)
浅草の子ら 柴田 富佐子
脳軟化症候群 山本 儀一
李朝の壺 大和 禎人

別の世界 さいたま屋風土記 暗黒時代の虹色の ハイラル挽歌(七)

- 第八号(昭和五十八年三月)
想い出の中のトム公 山根 三枝子
雲南のピエロ 大和 禎人
秋の大和路遊行 増川 遼三
〇町〇丁目〇番地 山口 健二
ハイラル挽歌(八) 金子 正義
第九号(昭和五十八年五月)
黒いパス 三戸岡 道夫
七福雛 大和 禎人
失われた故郷—台湾 山根 三枝子
毛皮 柴田 富佐子
〇町〇丁目〇番地(二) 山口 健二
ハイラル挽歌(九) 金子 正義
第十号(昭和五十八年十月)
夏に狂う 三戸岡 道夫
年寄の冷ミステリー 山本 儀一
狐狸村センセVS井中センセ 左 庵
三河島物語 茂里 英介
ふるさとに今 増川 遼三
輝きの御園に 大和 禎人
病室の窓(続) 井上 二三男
〇町〇丁目〇番地(三) 山口 健二
ハイラル挽歌(十) 金子 正義

編集後記

○第十号は予定の発行サイクルを遅らせ、調整の期間を少しくおくことにした。記念号としてなるべく顔をそろえたいと考えてのことだった。ほぼ所期の目的を達している。三戸岡道夫の一〇四枚、山本儀一、茂里英介もまた五〇余枚の力作を寄せている。まさに記念号にふさわしい大部となった。「作家群」はじまっていろいろの盛況をともに喜びたい。

○人間を愛し、人間を見つめる、なんと大それたことか、その大それたことに取組み、たとえ凡作、愚作、はたまた駄作であろうとも積み重ねていま第十号に至ったことは貴重である。この号の巻末には作品総目次を付した。結構壮観を呈していると自賛の言葉を書きとめておきたい。

○わずか十号と余人は思われるかも知れないが、少数でこれを支えるのだから大変なのである。経費の上ではもちろんだが、作品を書き続ける上でも同じことが言える。仲間の雑誌を持つ効用は励まされ、書き続けさせるといふところにある。だから、刊行は定期を極力維持しなければならぬ。妥協があつてはならない。

○今号からカットの方に新鋭大貫雄司郎氏を迎えた。バックナンバーを合本として一冊にする計画をもっている。ご希望があれば実費をもつて愛蔵に供したい。編集部まで問い合わせられたい。

(楨)

「まんじ」第十号

昭和五十八年十月二十日発行 (非売)

編集 大 和 楨 人

印刷 (有) 加藤清耕社
千代田区神田神保町三十一
二(261・5743)

発行 「作家群」 編集部
(まんじ)

〒一〇一東京・千代田区神田駿河台二一九
〇三(二一九三)〇〇九四 柴田方
郵便振替口座 東京二一九〇八一五